

とある科学のベストマッチ

茶の出がらし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球外生命体エボルトとの激闘を制した仮面ライダービルドこと桐生戦兔は、白いパンドラパネルとエボルト自身の力を利用してスカイウォールのない世界⇨新世界の創造に成功した。

しかし、目覚めたのは科学技術の目覚ましい進歩により人間の脳を開発する形で「超能力」が実在する世界だった。能力開発の中心「学園都市」で新たな戦いが始まる。

「地球外生命体の次は超能力とか、オカルトに偏ってねえか？」

「この世界の超能力は科学に基づいているからオカルトじゃないんだよ。大体パンドラパネルやエボルトだって実在してたんだからオカルトとは言えないでしょうが」

「念力が科学で出来るようになるのか!? だったら俺も!!」

「あー無理無理。超能力使うには膨大な演算が必要になるらしいからな。全身筋肉馬鹿のお前には不可能ってわけだ」

「全身筋肉馬鹿ってなんだよ!! せめてプロテインつけろよ!!」

「プロテインは貴公子でしょうが…。あーもう話が始まらない!! さっさと本編行くぞ!!」

※この小説は仮面ライダービルドととある科学の超電磁砲のクロスオーバーになります。

時系列は超電磁砲一話、ビルドは最終話以降、ファイナルステージ後になります。なお、美琴と佐天さんが多めになるかと思えます。

初投稿なので至らぬ点もありますが、見ていただけたら嬉しいで

す。

なお、本小説はpixivでも同時に投稿しています。pixivアカウントはこちら↓<https://www.pixiv.net/novel/series/1054121> アカウント名はガムシロップです。

ツイッターもやっています↓@KING97411481

目次

第1章 学園都市

第一話 学園都市 | 1

第二話 探し物と合流と | 9

第三話 超電磁砲 | 17

第四話 降り立つムーンサルト | 27

第2章 再会のベストマッチ

第五話 身の上話 | 35

第六話 護る拳 | 47

第三章 幻想御手

第七話 いままでと、これからと | 60

第八話 誰だって戸惑いますわ | 67

第九話 力の意味 | 81

第十話 都市伝説 | 92

第十一話 飛翔する銃口 | 110

第十二話 グラビトン事件(前編) | 126

第十三話 グラビトン事件(後編) | 137

第十四話 噂とうわさ 1 | 154

第十五話 噂とうわさ 2 | 169

第十六話 噂とうわさ 3 | 177

第十七話 噂とうわさ 4 | 183

第十八話 レベルアップ | 190

第十九話 レベルアップ2 | 206

第二十話 大丈夫です | 213

第二十一話 多才能力 | 226

第二十二話	木山せんせい	235
第二十三話	A I Mバースト	250
第二十五話	「おかえり」	265
第二十六話	プールサイドのひと時	275

第1章 学園都市

第一話 学園都市

『お前は、俺に作られた偽りのヒーローだったんだよお!!』

『誰がなんと言おうと、お前は俺たちのヒーローだ…!』

『みんなが桐生戦兔を、仮面ライダービルドを創ってくれたんだ!!』

『愛と平和を胸に生きていける世界を創る!そのために、この力を使
う!!』

『破壊こそが力だ!!お前の正義など、俺が壊してやるツ!!』

『俺と万丈は…最高の…!コンビなんだよオツ!!』

『勝利の法則は、決まった!!』

.....

.....

.....

「……は……?」

草の柔らかい感触が頬をなでる。顔を向けると整地されていない
雑草の緑が目に入った。

痛む身体を起こした俺——桐生戦兔は改めて辺りを見回す。視界に
入るのは青く澄んだ空と白い雲。そう、ここには

「スカイウォールが…ない…」

10年間、日本を3つに分断していた忌まわしい壁が、まるで最初
から存在しなかったかのようになくなっている。

「そうか…上手くいったんだ」

思わず安堵の息が漏れた。

火星を滅ぼし、ついには地球をも破壊しようとした地球外生命体、
エボルト。戦兔をはじめ多くの者が奴に翻弄され、倒れていった。

仮面ライダーローグ…氷室幻徳

仮面ライダーマッドローグ…内海成彰

仮面ライダーグリス…猿渡一海

そして唯一無二の相棒、仮面ライダークローズ…万丈龍我

「ツそうだ万丈!!」

慌てて周囲を探すが、見慣れたスカジャンの姿はない。ここにいないだけなのか、それとも、

「ここは…新世界なんだよな…」

改めて見直すと元の世界とは違う場所だとわかる。

今いるのは公園だろう。少し離れた場所に滑り台などの遊具があることから容易に想像ができる。公園を囲むように舗装された道路とやたら背が高く、近代的なビルが建っていた。

「東都にあんなビルあったっけ？」

あるいは新世界創造に伴ってできたのか。いずれにしてもここは先ほどまでいた世界とは違う世界だ。

「上手く…いったんだな…」

—そうみたいだね—

改めて呟いた俺の内側から、その声は答えた。

葛城巧。

桐生戦兔の元になった悪魔の科学者の精神は新世界でも健在のようだった。

「ああ…俺や、父さんが望んだ世界になったんだ」

—しかし、いいのかい？この新世界では君は完全なイレギュラーだ。誰も君を覚えていない。—

そう、この世界において桐生戦兔は何よりイレギュラーな存在だ。

「葛城巧の頭脳と佐藤太郎の顔を持つ桐生戦兔は、本来いない人間だからな」

新世界はエボルトが存在しない世界。即ち元の世界で10年前に起きたスカイウォールの惨劇が起こらず、日本が分断されなかった世界なのだ。

—エボルトがいなければ佐藤太郎は襲われることはないし、僕も一科学者として普通に生きていた。つまり君という人間は生まれなかったことになる。

君はこれからこの世界の創造主として、世界でただ一人、前の世界

の記憶を持ったまま生き続けなければならぬ。わかってたはずだ
ろう？―

「そうだな。わかっていた」

―わかっていてなぜ、その道を選んだ？―

「当たり前だろう？愛と平和を胸に生きていく世界の為だ」

俺は笑う。

「確かに俺の居場所は这个世界にはないかもしれない。でも、この平
和な世界を創れたんだ。後悔はないよ」

そんな俺に苦笑しながら葛城は言う。

―まったく、君の性分にはとことん呆れるな…、でも…―

「葛城？」

精神世界、額縁の向こうの葛城の身体が薄まっていく。

―どうやら、僕もイレギュラーとして扱われるみたいだ…―

「葛城…消えるのか」

―この世界にいるだろう僕になるだけだ。消えるわけじゃない―

「そつか…。父さんと仲良く、な」

―ああ…さようなら。楽しかったよ。桐生、戦兎…―

それを最後に俺の身体から葛城巧の精神は消えた。

「これで本当に一人か…」

くじけそうになるが、くよくよしてもしょうがない。折角俺たちが
創った新世界だ。どんな世界なのか確認したい。

そう思い、手近な建物に向けて足を運んだ。

※

「最っ悪だ…」

2時間後。俺は目を覚ました公園に戻ってきていた。

「どうなってんだこの世界は…」

ベンチに腰を下ろし、思わず独り言が出るが、それを気にする気力
も残っていない。隣の学生二人が訝し気に視線を送ってくるが、同じ
く気にする気力はない。

顔を上げると小学生なのか、公園で和気あいあいと遊ぶ姿が見え

る。その向こうでは下校中の中学生グループ、クレープを食べる高校生カップル…

「本当に学生しかないんだなあ」

そう言っ手元のビルドフォンを見ると、そこには先ほどまで閲覧していたwebページが表示されていた。

『学園都市第7学区HP』

学園都市とは日本中の学術機関、学問機関が終結した都市であり、同時にある分野の研究開発の為人口の8割強が学生—つまり子どもという街だ。そしてそのある分野とは

「超能力ねえ」

時間割(カリキュラム)というものでこの街の学生は大なり小なり脳をいじくり回されており、それによって発現する力が超能力、らしい。正直唾ものな話だが、ついこの前まで都市伝説と言われた仮面ライダー、その張本人であり、ライダーシステムを含めありとあらゆる発明をしてきた戦兔も同じようなものだと思う。

「とりあえず、わかったことは二つだな」

一つ、この世界は俺たちが創った新世界ではないこと

二つ、元いた世界よりもかなり科学技術が発展していることだ

この街—学園都市ができたのは少なくとも10年以上前で、しかもあらゆる学術機関の集合体として機能している。ここまでの規模で世界中の研究機関を招聘するのであれば、設立前から噂レベルでも話が出ないと不自然だ。しかし俺、というか葛城の記憶にはそのようなものが一切残っていない。

「そもそも新世界を創った時点で10年前という基準地点に起きなかったことは起こらないはずだし、天才物理学者の俺ならいざ知らず、俺やエボルトの関与がない歴史ではありえない技術がいくつも存在してるし…」

道行くドラム缶式のガードロボットや樹形図ツリーダイアグラムの設計者など、ライダーシステムに匹敵する技術は、本来の世界の10年間では到底達成しえないものだ。

つまり

「エニグマの事件でエグゼイド達の世界に行つたみたいに、並行世界に来てしまった、つてことか。あるいはパンドラボックスの知られざる力か…」

いずれにしてもここが望んでいた新世界でないとすると、本来の世界に行く必要がある。ここが並行世界で、ここに来たメカニズムを解明できれば、同じ方法を使って並行世界を移動することができる。エニグマがネビュラバグスターという特別なウイルスを必要とする以上、同じシステムを使うのは不可能だが、これだけの科学技術、加えて「超能力」なる未知の技術があるのなら必ず突破口があるはずだ。「そういえば、ここが新世界じゃないならひよつとすると万丈も…」

と離れ離れの相棒のことを考えていた時だった。

「あの一」

突然少女に声をかけられた。

※

「あの一」

その少女―初春飾利は不審な男に声をかけた。

20代くらいだろうか。緑色サマーパーカーにジーンズ、左右で色の異なるスニーカーという出で立ちではよくある服装なのだろうが、何故か所々焦げ付いたりしている。中性的な柔らかい顔にも生傷が見受けられる。

なによりこの人物、先ほどから新世界がどうだ、並行世界がなんだと明らかに怪しい独り言を発しているのだ。学園都市を守る生徒主体の自警組織「風紀委員」のジャッジメント一員として不審人物を放つてはおけない。「風紀委員です。先ほどからここで何をしているんですか？」

「ん？俺？」

男は今気づいたのかのように自身を指さす。

「はい。見たところ服も体もボロボロだし、ずっと独り言を言っていたので周りの人から怪しまれてますよ？」

「あー、まあ怪しいよなそりゃ」

うんうんと一人で納得してるようだがこちらはまったく納得していない。

「えつと、お名前と身分を証明できるものを見せてもらえますか？」
いかにも職質みたいな形になってしまいが、これも風紀委員ジャッジメントの仕事。私、今すごい仕事してる気がします！と一人で燃えていると

「名前は桐生戦兎、身分証はー、えーつと」

男―桐生戦兎はポケットの中身を出し始める。セントつてどんな漢字を書くのかなーなんて思っている

「一応、これで」

といって首かけ式のカードホルダーを差し出した

『東都先端物質学研究所 研究員 桐生戦兎』聞いたことのない研究所ですね。どこの学区にあるのかな…」

と首を傾げていると。

「おーい、うーいーはーるー」

と後ろからこちらを呼ぶ声があった

「あ、佐天さん、ちょうどいいところに」ジャッジメント「おりやつ」

バサツという音共に布地―正確にはスカートが視界に入る。

「今日は水色かー」

「キヤー!!!何するんですか佐天さん!!!」

反射的にスカートを抑えつけ眼前で笑う親友に叫ぶ。

佐天涙子。同じ柵川中学校に通うクラスメートで、中学入学以来の親友である彼女は、時候の挨拶のように初春のスカートをめくるのだ。

「なについて、いつもやってることじゃーん。いい加減慣れなつて」

「なつ、慣れるわけないじゃないですか!!大体、今は風紀委員ジャッジメントの仕事中なんですよ!?!これじゃ立場が…」

と、そこまで言ったところで自分が何をしていたか思い出す。

「もしかして…見ましたか…?」

顔を真っ赤にして戦兎の方へ振りむく。

「風紀委員ジャッジメント…自警団みたいなもんか。超能力を持つてる学生が同じ学生を取り締まってる…。ん?警備員アンチスキルつていうのもいるのか…セキユリテイは万全だな…」

件の不審人物はやたらゴツイ携帯端末に向かってさらにぶつぶつ

独り言を言っていた。

変な人だ…と若干面倒を感じながらも風紀委員としての責任感から続けて声をかける。

「えっと、桐生…さんは教員なんですか？」

この街の大人は大体が教員や研究者などの学校機関の人間、残りは都市内施設に就労しているかのどちらかだ。まだ完全下校時刻には早い時間帯のため、一般労働者という線は薄いだらうと思ったのだが…

「教員？違うおれは天つ才物理学者だ」

妙に自己主張の強い肩書を提示された。

「え、天才…物理学者、ですか？」

「ちがーう！天つ才物理学者!!」

「どこが違うんですか…」

よくわからないがとりあえず譲れない部分らしい。

「初春、だれ？この人」

と後ろにいた涙子が話に入ってきた。

「桐生戦兎さんという方です。ちよつと独り言が激しいのでお話を聞いてたんですが…」

それを聞いた涙子は小声で

「えー、めっちゃ怪しいじゃん…」

「本人の前でそういうこと言っちゃだめですよ…、あ、佐天さん。東都先端物質研究所って聞いたことありますか？」

「初春が知らないのに私知っているわけないじゃん」

ですよねー、と肩を落とす。

「ていうか初春、その桐生？って人いないんだけど」

「えっ？」

と振り向くと、つい先ほどまでベンチに座っていた戦兎が、いつの間にかいなくなっていた。

「あれー!？」

急いで辺りを見回してもそこにあの青年の姿はなく…

「に、逃げられた…」

その場で思わず膝をつく初春を見て、やれやれと思いつながら例の桐生という男がいたベンチを見ると

「なんだろう、これ」

手のひらにすっぽり収まる、青い、形状から言うと化学薬品を保管するボトルのようなものがベンチに落ちていた。

「初春、これってさっきの人のじゃない？」

立ち上がった友人に向けて謎の物体を差し出す

「どうですかねえ…でもなんですかね、これ。見たことない…」

そう言つて初春は正面からそれを見る。

それはよく見ると戦車のようなデザインが施され、横向きの蓋にはR/Tと書かれていた。

第二話 探し物と合流と

※

「最つ悪だ…」

マシンビルダーを降りた戦兎は盛大な溜息を吐いた。

変な中学生くらいの子—ジャッジメント風紀委員がもめてる内に公園から抜け出し、バイクでここまで来たが

(よく考えたら俺めちやくちや不審者だし、ジャッジメント風紀委員って言うなれば警察の下部組織みたいなもんだよな…)

先ほど指摘されたので声には出さず、あくまで思考の中で一人ごちる。といつまでもバイクを出しっぱなしにするのも邪魔なことに気付いた。

【ビルドチェンジ!!】

タッチパネルを操作すると音声と共にバイク—ビルド専用の変形マシン『マシンビルダー』から携帯へとモードチェンジした。

「さて、っと」

戦兎がいるのは元いた公園から数キロ離れた繁華街にある噴水広場だ。30度に届く気温のせいか、あるいはそういう時間帯なのか、辺りに学生の姿はまばらだ。

「これからどうするにしても、現状の装備くらいは見直した方がいいな」

そう言っつてビルドフォンの『格納アプリ』を展開する。ちなみに格納アプリはビルドドライバ—から各種武器を召喚する機能を利用して持ち物を粒子化し、ビルドフォン内に保存する機能である。

「とりあえずこんなところか」

ちようどいい木陰を見つけ、腰を下ろして自分の装備を眺める。目が覚めた時に持っていたものは、装着していたビルドドライバ—、ポケットに入っていたラビット、タンクボトル、格納されていたラビットタンクスパークリングボトル、ハザードトリガー、フルフルラビッツタンクボトル、ドラゴンフルボトルそして

「なんでこれが…」

そう呟いて手元のガジェット―ジーニアスフルボトルを見る。

「成分は…やっぱり抜けてるな。反応もなし、か」

ジーニアスはエボルトとの戦いで新世界を創る際、その成分をパンドラボックスに移し替えたのだ。ゆえに戦鬼、あの時は葛城巧の精神だが、ともかく開発したボディだけが何故か残っていた、ということになる。

「使えそうなのは…ドライバーは無事、スパークリング、ハザードトリガー、フルフルラビットタンクは、だめだ、修理しないと使えそうにないな…流石にラビットボトルは大丈夫そうだし、ドラゴンも大丈夫…まあ俺は使わないけど。…ん？」

と、そこであることに気付く。

「タンクボトルが…ない？」

※

「なんですかねえ、これ」

街を歩きながら初春は手の中の物体―タンクフルボトルを眺める。

「おもちやじゃないのー？よくあるじゃん、男の子向けのやつ」

隣を歩く涙子は興味なさげに返す。

「それよりさ、やっぱり私はいいよ。常盤台のお嬢様なんて多分気が合わないし」

「そんなことないですよ。白井さん、いい人ですし、御坂さんだって」
「でもさー、あーいうレベルの高い人たちって、それを鼻にかけてると
いうか、偉そうというか」

「少なくとも白井さんはそんな感じじゃないですよ。私とも仲良くしてくれてるし」

うーんと唸りながらも待ち合わせ場所には確実に近づいている。
今向かっているのは第七学区にあるとあるファミレス。そこである
人物と合流する予定なのだ。

白井黒子。風紀委員第一七七支部のメンバーであり、初春とペアを
組んでいる女子生徒。中学1年生ながら名門、常盤台中学校に所属す
る強能力者^{レベル4}。

そして…

「あ、ここですよここ…って、あれ？」

約束のファミレス。その中で見知った女子生徒と見知らぬ女子生徒が絡んでいた…

※

「というわけで、とりあえずご紹介しますわ…」

と白井黒子は痛む後頭部をさすりつつ、自身の右手側を示す。

「こちら、柵川中学一年、初春飾利さんですの」

紹介された初春は顔を赤らめつつ

「は、初めましてっ。初春飾利、です」

と答える。

「それから—」

と自分も初めて見る女生徒の方を窺うと

「どうもー、初春のクラスメートの佐天涙子です。なんだか知らないけど付いてきちゃいましたー。ちなみに能力値は『レベル0』です」

「ぎ、佐天さん。何を…」

とやや嫌味っぽい自己紹介だが、2人の目の前の少女はなんら気にした様子はなく

「…初春さんと、佐天さん。私は御坂美琴。よろしく」

といつも通りの笑顔で応えた。これには先ほどまでレベルがどうこう言っていた涙子、緊張していた初春も虚を突かれたように

「よろしく」「お願いします」

と答える以外なかった。

「では、つつがなく紹介も済んだところで、多少予定は狂ってしまいましたが、今日の予定はこの黒子がバッチグッ!!!」

ゴン！と鈍い音と共に美琴の鉄拳が黒子の後頭部を襲った。その黒子が持っていた手帳落ちてスケジュールのページーランジェリーシヨップ、勝負下着、アロマ、媚薬など不穏な文字列が見て取れ、涙子と初春は何となく黒子が殴られた理由を察する。

「つたく…まっ、こんなところにおいても仕方ないし、とりあえず」

美琴は先ほどと同様の涼しい笑顔で言う

「ゲーセン行こっか」

※

「もうお姉さまだったら、ゲームとか立ち読みではなく、もっとうちにお花とかお琴とか、ご自身に相応しいご趣味をお持ちになりませんか?」
「うっさいわね。大体お茶やお琴のどこが私らしいっていうのよ」

先を歩く美琴と黒子、その後ろからついていく形の涙子と初春はひそひそと言葉を交わす。

「なんかさあ、全然お嬢様じゃなくない…?」

「上から目線でもないですねえ…」

背丈自分と同じくらいか。明るい茶髪のショートカットに装飾の類は前髪を分けるヘアピンのみ。常盤台中学の制服であるベージュのサマーベストとグレーのスカート、革靴は高級感に溢れているもの、遠慮しない感じの態度や、どこか悪ガキのような笑顔が「常盤台のお嬢様」というイメージを壊している。横の黒子も、ややピンクのかかった髪を赤いリボンでサイドでまとめ、独特のイントネーションで話す姿はお嬢様然としてなくもないが、やはり世間一般のイメージから外れているように見える。

「(レベル5か…)」

超能力者^{レベル5}。学園都市にいるすべての能力者の頂点に立つ存在。数百万人いる学生の内たった7人しかいないと言われているエリート中のエリート。

レベル0の涙子にとっては正に正反対の存在。この街では能力の優劣≡評価なので文字通り真逆なのだ。だが

「親しみやすそうない人じゃないですか」

「そうかなあ…」

この街では能力によって評価される。

いい意味でも、悪い意味でもだ。

「ありがとおおおお!!」

「い、いえ…」

そのエリートがなぜ無能力者^{レベル0}である自分の手を握って感謝の涙を

流しているのか。

(カエルのストラップで…)

ことの発端は、初春が持っていたチラシだった。第七学区ふれあい広場、先ほどまで涙子たちがいた公園横の広場に新しいクレープ屋ができた、というものだ。

クレープ屋ができることは別に真新しいことではない。学生の街である学園都市では、そういった「学生の嗜好品」は常に入れ替わっているのだから。

「このゲコ太ストラップ初めて見るわ!!ケータイにつけちゃおー!」

と涙子が先ほどまで持っていた緑色の物体：大分小さな子供向けのカエルマスコット「ゲコ太」のストラップは、しかし今は美琴の手の内に収まっていた。限定品が美琴の前の客、つまり涙子の番で終わりと知った美琴がこの世の終わりかのように項垂れているのを見て、思わず譲ったのだ。

スキップしながらクレープ片手に先に席を取っていた初春と黒子の元に向かう美琴の背中を見ながら、普通の女の子みたいだなあ、とか、ただだけ好きなんだよ、なんて考えていると。

「よかったですね。」

隣から初春が声をかけてきた。涙子の手から「ありがとうございます」と言つてクレープを受け取りながら

「御坂さん。お嬢様って印象とは違うけど、いい人そうじゃないですか」

「…そうなのかなあ」

先ほどと同じような返しをしつつ、じゃれあうお嬢様二人の様子を見ていると

「はいー!」

「はい?」

何かに気付いたかのように美琴が自分のクレープを差し出してきた

「味見でしょ?さっきのお礼。一口どうぞ」

「えっ」

随分フランクだ、と感じながらも戸惑っていると後ろから黒子が、間接キスがどうだとか言いながらまた美琴に絡む。

その様子を見ながら、まあ、悪い人ではないかもね、なんて考えていると。

「あ、そういえば白井さん。さつきこの近くの公園で変な人に会ったんですけど」

と初春が美琴に顔を押しさえつけられながらもクレープを奪おうとしている黒子に向かって言った。

「変な人？どのように変な人なんですの？」

「えっと、大人の男性なんですけど、なんかずっと一人でぶつぶつ話したり、聞いたこともない研究所のスタッフカードを出して来たり、あ、そうだ」

と言ってスカートのポケットから例のボトルを出す。

「変なもの置いていくし・・・しかも話の途中で逃げちゃうし」

「何それ、まんま不審者ね」

例の男が提示したネームカードに貼ってある写真を見ていた美琴が言う。彼女たちも件の男が所属していたという研究所に心当たりがない様だ。

「顔はいかにもなイケメンっぽくないですか？さわやかー、って感じの」

「そう？こういう何考えてるかわかんないやつってどうも気に食わないのよねー」

「見たところ学生ではありませんわよね・・・書庫バンクのデータは確認しましたの？初春」

書庫バンクとは、学園都市に関する情報のデータベースバンクのことで、風紀委員ジャッジメントである黒子や初春の閲覧権限であれば、個人情報まではいかなくても研究所の有無や所属名簿程度の情報は検索可能なのだ

「勿論、お二人に会う前に調べました：でも、今現在学園都市には東都先端物質学研究所、なんてものは存在しないんです。」

「じゃあ、嘘の身分証ってこと？でも学園都市で身元不明の大人なんてあり得るんですか？」

学園都市は、その科学技術の高さから「外」からの出入りには過剰なほどに敏感だ。学園都市の中から学生が外に行くにも、煩雑な手続きと監視GPSのナノマシンを体内に埋め込まないといけない。

「外から学園都市に入るには当然身分証が必要になりますし…客員研究者や教員なら登録があるはずですわ」

「なにより、正規のルートを通らないと外周部の壁は超えられないでしょ。」

学園都市はその外周を高さ5メートル、厚さ3メートルの壁で囲われている。貿易拠点として第1学区があるが、むしろそこは不法侵入防止のため警備員が常時待機している。

「ま、そんな不審者ならそのうち警備員の取り締まりに引っかかるでしょう。この街はそう甘いところではありませんから」

「それもそうね。それにしても…」

と、食べ終えたクレープのごみを捨てつつ美琴が辺りを見回す。

「子供が多いわね」

「ああ、幼稚園の遠足のようですわ」

「だからこんなに…可愛いですねえ」

と初春が子供を見ながら笑みを向ける。と、初春が持っていたポトルに美琴が手を伸ばした。

「これ、なんだろうね。何かの保存容器かな」

「見たところ、何かの成分が入っているのはわかりますが…妙に凝っているデザインですわね。戦車？でしょうか」

「言われてみれば、確かにそう見えなくもないけど…」

「危険な薬品、だったりしてー」

「まさかー、あははは、はは…」

涙子の言葉で一同はポトルに視線を向ける。

「えーっと、冗談ですよ？」

「で、でも、不審者が持っていたものですし…、もしあの人がテロリストだったら…」

「まさか…それにテロリストならこんなすぐバレる偽身分証を馬鹿正直に出すようなことはしないでしょうし」

初春の言葉に黒子が異を唱え、美琴の手からボトルを受け取り、初春へ手渡す。

「ま、なんにしてもこれは風紀委員^{ジャッジメント}でいったん保管しましょう。初春、帰りがけに一七七支部に寄つてきますわよ」

「あ、はい。」

スカート^{!!!}のポケットにボトルを入れようとした、その時だった。

「あつたー!!!」

件の不審者^{!!!}がこちらを指さしていた。

第三話 超電磁砲

桐生戦兎は、正義のヒーローだ。

くわえて、自称とはいえ天つ才物理学者。当然、並大抵のことでは動じないし数々の修羅場もくぐってきた。

スマツシユの魔の手から人々を守った。

東都、北都、西都の三国間の戦争、その代表戦で勝利した。

地球外生命体との死闘を潜り抜けた。

生半可なことでは、天つ才物理学者である桐生戦兎は狼狽えない。

「いや、だからですね？そのボトルがないと困るっていうか…商売道具と言いますか、ええつと、とにかく困っちゃうんです」

「存在しない研究所の存在しない研究の、ですの？」

26歳のいい大人が女子中学生相手に滅茶苦茶狼狽えていた。

あの後、タンクフルボトルがないことに気付いた戦兎は来た道を探しながら戻ってきていた。それはもう、冗談抜きで四つん這いになりながら探偵よろしく探し回っていた。

で、公園近くの広場でたむろっていた女子中学生の一団の内、サイドテールの少女が先刻話しかけてきた頭が花の少女に青い物体を手渡すのが見えたのだ。

何度も振ってきた、タンクフルボトルを。

「存在しないって…確かにあるんだよ、東都に」

「東都？…ここは東京都、学園都市なんですよ？どこか別の場所と勘違いしてませんか？」

「いや違う場所というか、違う世界というか…」

「なんですか？」

「何でもないです…」

かつての悪魔の科学者、東都を守る仮面ライダーが弱冠14歳の女子中学生に負けている。

砂羽さんが知ったら笑顔で記事にされるなーと思っていると

「ねえ、アンタ、学園都市にはどうやって来たの？」

目の前の少女―初春と呼ばれていた子と同じ風紀員らしい少女と同じ制服に身を包んだ短髪の少女が言った。

「どうやってって、そりゃ気づいたらここにいたというか」

「気付いたら？じゃあその前はどこにいたのよ」

「それは、その…」

実は並行世界の狭間にいました、とは言えない。

「えっと、言えない事情でもあるんじゃないですか？御坂さん、白井さん」

初春と同じ制服を着たロングヘアの女子がそう言うが、目の前の風紀員、白井と呼ばれる少女は首を振った。

「家出少女じゃあるまいし、いい大人が自らの素性を証明できない事情なんて、後ろめたいこと以外ないと思いますの」

「まあ、そう言われちゃうとその通りなんですけど…」

いや頑張ってくれ黒髪ロング！と心の中で戦兔が叫ぶが、もちろん聞こえない。

「とりあえず、ジャケットメント風紀委員の事務所までご同行お願いできますか？詳しい話はそこで聞きますので」

「うそーん…」

主人公、いきなり任意同行だつてよ。

「初春、固法先輩に連絡を、って、初春？」

見ると、初春は戦兔たちとは逆方向―ビル群に視線を向けていた

「初春、どうかした？」

「いえ、あそこの銀行なんですけど、なんで昼間つから防犯シャッターを降ろしているんでしょうか…」

「え？」

その場の全員が疑問符を浮かべた、その瞬間。

ドゴオン!!!という轟音と共に閉じられていたシャッターが内側から爆散した。

※

「な、なんなの!?!」

日常生活ではまず聞くことのない爆発音に思わず耳をふさぐ涙子。いち早く動いたのはその涙子の座っていたベンチを飛び越え、ポケットから緑色の腕章を取り出した黒子だった。

「初春!!^{アンチスキル}警備員に連絡と怪我人の有無の確認!!急いでくださいな!!」
「は、はい!!」

そう言つて初春もまた、^{ジャッジメント}風紀委員の証である腕章をもたつきながらも装着する。

「黒子!!」

美琴が白井を呼ぶ。美琴は学園都市に7人しかいないレベル5。もし事件なら協力する、そういう意味での声掛けだったが

「いけませんわお姉さま」

微笑みを浮かべながら続く言葉を制す黒子。右腕に腕章を取り付
けながら

「学園都市の治安維持は、わたくし^{ジャッジメント}達風紀委員のお仕事。今度こそ、お行儀よくしててくださいいな」

その言葉に一瞬反発しそうになるが、後輩の自信に満ちた表情を見て諦めたのか、美琴は何も言わず肩をすくめた。

「—そうです。第七学区ふれあい広場で事件発生。^{アンチスキル}警備員の出勤を要
請します。」

その様子を見ていた涙子の隣で初春が^{アンチスキル}警備員に連絡した瞬間、黒煙と共にまた爆発が起きた。

「…あつちは黒子に任せて、私たちは周りの避難誘導をしましょう。

…あ、アンタ、大人なんだし協力しなさ…」

い、と戦兔の方を振り向いたら当の本人はいなかった。

「まさか、逃げられた!?!」

「違います、御坂さん、あれ」

と初春が指さす方では、既に戦兔が避難誘導を始めていた。周囲にいた幼稚園の子供たちを的確に安全な場所まで連れて行っている。

「事情はどうあれ、悪い人ではなさそうですね」

涙子の言葉に再度、美琴は肩をすくめ、「さ、私たちも!」と周りでパニックになっている子供や学生の元に走り出した

※

「ほら!!ぐずぐずすんな!!きつさとしねえと…」

黒煙を散らしながら三人の男が銀行から転がり出てきた。全員が黒いライダースジャケットなどを着込み、口元をマスクやスカーフで覆っている。

「お待ちなさい!」

男たちの進行方向、その5メートルほど先から女子生徒の鋭い声が静止を促す。黒子は右腕部の腕章を示し

「風紀委員ですの!!器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します!!」

「……つく、ハハハハハハ!」

男たちは一瞬たじろぐが、相手がまだ年端もいかぬ女子学生とわかると、顔を見合わせ笑い声をあげた。

「はっはっは、なんだよこのガキ」

「風紀委員も人手不足か?ハハハ」

「……」

男たちの笑いに眉をひそめながらも歩を進める黒子。

「おいお嬢ちゃん、とつとどつか行かねえと:怪我しちゃうぜえ!!」

最も体格のいいドレッドヘアの男が、向かってくる黒子に対して殴りかかる。

「そういう三下のセリフは—」

黒子はこともなげにその拳を避け、男の右側面に時計回りで回転しながら移動。言葉と共に大ぶりのモーションで伸びきっていた男の左足を蹴り、自分を狙った右腕の袖を引っ張る。

「—死亡フラグですわよ?」

勢い余った男の身体は大きく一回転して背中から地面に落ちる。よほど強く打ち付けたのか、呻くだけで動けそうもない。

「てめえ…」

先ほどまでの笑みを引っ込め、男たちは呻く。

「すげえ…」

避難誘導をしながらも、黒子の立ち回りを見ていた涙子が声を漏らす。が、公園の入り口で初春が女性と口論をしていることに気が付き、

そちらへ向かう。

「駄目ですつてば！今広場から出たら危険です!!」

「でも!!」

「どうしたの?」

美琴も合流し、遠足のバスガイドらしき女性に尋ねる。

「御坂さん、佐天さん、それが…」

「男の子と女の子が足りないんです!!少し前にバスに忘れ物したつて言つて…!!」

今にも泣きそうな顔で悲痛に叫ぶ女性に美琴は言う。

「じゃあ、私と初春さんで」「私も行きます!」

風紀委員である初春を指名したところで、後ろの涙子が名乗りを上げる。美琴は危険なことだと一瞬論そうとするが、その顔が本気であるとみると。

「…わかった。手分けして探しましょう!!」

「はい!!あ、そうだ」

そう言つて涙子は避難誘導を終えたところの戦兎まで向き直り

「えっと、桐生さん!」

「?なんだ?」

何事かと駆けつけた戦兎にむけて、涙子は口を開く。

「女の子と男の子が一人ずついないんです。探してもらえますか?」

「わかった」

即答だった。迷う間もなく戦兎はバスの方へ走り出す。あまりの行動の速さに後れを取った三人は慌てて追いかけた

「今更後悔しても遅せえぞ!!俺たちの顔を見られたからには—」

男たちの一人が掌から炎の塊を放出した。普通の人間にはありえない異能の力、超能力である。

(パイロキネシスト…まったく)

空気摩擦などを利用して人口の炎を放出する能力だ。掌の炎から察するにせいぜいレベル2。黒子にとっては何ら脅威ではない。

「お前には消し炭になって—つて、なに!?!」

男の言葉が中断された。黒子が左手の道路へ思い切り走り出した

からだ。

「おい！ちよつと！」

さすがに能力をあてるのはまずいのでは、ともう一人が止めようとするが、もう遅い。

「逃がすかよオ!!!」

という声と共に炎の塊が放たれる。が。

「消えた!?!」

炎が当たる寸前、黒子の姿が消えたのだ。

「誰が」

とパイロキネシストの男の眼前に現れた黒子。だが次の瞬間には男の背後、上空からドロップキックをかましていた。

「逃げますの?」

蹴りを食らった男が倒れた先に再度姿を現した黒子を見て、男が呻く。

「瞬間移動…テレポートか…」

黒子はスカートの下、腿に装着したお手製のホルダーをなぞる。するとそこに収まっていた数本の鉄製ピックが消失し

ヒュン!!

という風切り音と共に倒れた男の手足、正確には衣服を地面に縫い付けた。

「これ以上抵抗するなら、次はこれを、体内に直接テレポートさせますわよ?」

「くっ…」

その言葉と共に男は抵抗をやめた。

一方、バスの周りを探していた美琴、初春、涙子、そして戦兎だったが

「そつちは?」

「駄目ですー!」

バスの中にいた美琴が初春に声をかけるが、子供は見つからない。「どこに行ったのよ。もう!」

舌打ちする美琴の背後、涙子も見つからない子供を懸命に探してい

た。

「あ、なんだおまえ?」

背後から聞こえる声。見ると探し回っていた男の子の目前に、犯人グループの一人が気付いていた。

「ちようどいい!!」一緒に来い!!」

「なにお兄ちゃん、だれえ?」

「いいから来いって!!早く!!」

そう言つて男は子供の手を強引に引く。今にも連れ去られそうな子供に、しかし気付いているのは涙子だけだった。

(あたしだって・・・!!)

覚悟を決め、勢いよく走りだし子どもをつかむ。

「あ?なんだてめえ!!離せよ!!」

「だめえー!!」

と広場の方を探そうとしていた美琴と初春、男の確保を終えた黒子もその様子に気付く。

「くそがつ!!」

痺れを切らした男が蹴りを放ち、その衝撃で涙子は子供共投げ出される。後方にはガードレール、このままでは激突は必然。

「!」

「佐天さん!!」

美琴が息をのみ、初春が叫ぶ。二人がガードレールに激突する瞬間。

「よつと」

どこからか駆けつけた戦兎が二人をキャッチする。寸でのところで激突を免れた涙子は、背後の戦兎に気付く。

「あ、ありがとうございます。」

「いや、よく守ったなその子。かつこよかったぜ」

場違いなほど軽い声色で涙子を称賛し、逃げていった男の方を向く。男は停めていた白い乗用車に乗り込むところだった。

「逃がしませんわー」

「黒子ツ!!」

とピックを構えながらテレポートしようとした黒子を、しかし鋭い声が制する。

「えっ?」

思わず声の主を見ると予想通り激高した様子の美琴が、今まさに動こうとしている車を睨んでいた。

「ここからは私の個人的な喧嘩だから」

車の進行方向に立ちふさがるように進み、宣言する。

「手、出させてもらおうよ」

瞬間、バチイ!!という音と共に美琴の周りを電流が走る。

「あー…」

と冷や汗を浮かべながらピックを降ろす黒子。その足元で美琴の姿を見た男が顔色を変えた。

「思い出した…風紀委員には確か、捕まったら最後、身も心も踏みこじって再起不能にする最悪の転移能力者がいて」^{テレポーター}

「誰のことですか?それ」

白い車はアスファルトを焦がす勢いでアクセルを踏まれ、発進する。

「畜生…!!このまま引き下がれっかよ!!」

車は猛烈なスピードのまま、黒子と美琴めがけ迫ってくる。

「さらにはその転移能力者の、身も心も虜にする最強の電撃使いが…!!」

「—そう。あの方こそが」

車はなおもスピードを下げず向かってくる。どうやら仲間もろとも御琴を轢くつもりらしい。が、そんなことは気にも留めず黒子は言う。

「学園都市230万人の頂点」

美琴はポケットから取り出した、どこにでもあるようなコインを取り出し、指で宙に弾いた。

「七人のレベル5の第三位」

向かってくる車にまっすぐ照準を合わせ、青白い電流を迸らせる。重力に従って落ちてきたコインを見据え、正面に向けて再度弾く。

ズドン!!!

瞬間、コインは音速の速さで進み、その摩擦熱でオレンジ色の光を放ちながら車に激突。

前方からの衝撃に慣性が働き、車は宙返りするかの如く空を舞った。

「超電磁砲^{レールガン}。御坂美琴お姉さま。常盤台中学が誇る、最強無敵の電撃姫ですよ!!」

※

同時刻。

涙子は美琴の手から放たれた超電磁砲（レールガン）。それに撃ち抜かれ宙を舞う車を呆然と見ていた。

「すごい…」

と感嘆の言葉をつぶやくが、次の瞬間全身に緊張が走った。

（あの子!!）

車が舞う先、道路付近に探していたもう一人の女子のがいるのだ。美琴たちからは見えない角度らしく、気付いた様子はない。

（助けなきや、でも…）

彼我の距離は20メートル以上ある。どう考えても間に合わない。

駄目!!と目をつむった時だった

「まったく、ヒーローならちゃんと後先考えなさいよ」

と後ろの戦兎が言った。青年は涙子の身体を離すと、ポケットから赤い何かを取り出した。

カチャカチャカチャカチャ

戦兎はそれを振り、駆け出す。そこまで来てようやく涙子は戦兎が女の子を助けようとしているのだと悟った。

「だめ!!間に合わない!」

その声に黒子や美琴、初春も事態に気付くが、もう黒子のテレポーターでも間に合わない、

ぶつかる!!と誰しもが思った。

「よつと」

しかし、瞬き一回分の間に戦兎は女の子を抱きかかえ、車の落下地

点から5メートルは離れた場所に立っていた。

「嘘…」

思わず涙子がつぶやく。周りを見ると初春はもちろん、黒子や美琴も驚愕の表情を浮かべていた。

（瞬間移動…？でもあの学園都市の人じゃないんじや…）

思考する初春をよそに、戦兎は女の子を抱きかかえながらこちらに向かってくる。

「もう大丈夫だ。怪我はないかな？」

「うん!!ありがとう、おじさん!!」

「おじさん…おじさん、か…」

若干項垂れた戦兎の方へ先ほどのバスガイドと保育士なのか、若い女性が駆け寄ってくる。

「無事でよかった…!」

「せんせー!」

女の子を保育士の女性が抱きしめる。ほほえましいその様子を見ていた涙子は、同じくその様子を笑顔で見っていた戦兎に向かう。

「あの、さつきは」

「ありがとうございます。と続けようとしたその時だった。

「ぐああああああああ!!」

叫び声の主は、先ほど車で逃亡しようとした男だった。だが、その体には黄色のガスのようなものに覆われつつあった。

「な、なんだよこれえ!!身体が…!!意識、ガ…」

「ネビュラガス!?離れろ!!」

男の身体がガスに覆われる寸前、戦兎が叫んだ。その声の真剣さに本能的に走り出す。

瞬間的な閃光が周りを照らした。

「グウウウウウウウ…」

男だったものは、異形の造形をした怪物になり果てていた。

第四話 降り立つムーンサルト

「スマツシユ…」

かつて東都の平和を脅かしてきた怪物、ネビュラガスを投与した人間がある一定値を超えると変身する異形の存在。

そして葛城巧だった頃の桐生戦兔が作り出したものだ。

そのスマツシユ—かつて戦兔が倒したストロングスマツシユは青い上半身から伸びる太い腕を振り回しつつ、こちらに向かってくる。(なんでこの世界にスマツシユが…、いや、今は！)

自分の背後にいる3人の内、子ども抱きかかえ、女性二人に「どこか掴んで!!」

緊迫した戦兔の雰囲気には二人は目の前の男の腕と背中をつかむ。手に持っていたラビットフルボトルを振って中の成分—トランスジェルソリッドを刺激し、脚部に力を込める。

「しっかり掴まってる、よっ!!!」

ラビットボトルの特性、跳躍力強化による大ジャンプを行う。さすがに人間3人を抱えながらでは本来の力は出せないが、それでも10メートル以上離れた芝生に着地した。

「子どもを連れて向こうへ!!」

「は、はい!!」

大ジャンプの余韻か、ふらつく足で三人は公園の反対側へ歩いていく。

バチイ!

「なんなのコイツ!?電撃が効かない!」

「テレポートがうまくいきませんの!!どうなってますの!」

通りの方ではすでに美琴と黒子がスマツシユに対して応戦している。だが、美琴の雷撃の槍は装甲に弾かれ、黒子が飛ばしたピックも同様に弾かれる。黒子の能力は本来ピックを体内に直接打ち込むこともできるはずなのだが、人間ではないスマツシユだと演算に支障があるのでのか、雷撃と同じく装甲に弾かれる。

「白井さん!!御坂さん!!」

「初春さんと佐天さんは下がって!!」

美琴が二人に向かって叫んだとたん、スマッシュはその巨体にしては素早い速度で美琴に突進をかけた

「っ!!お姉さま!!」

とつさに黒子が美琴の服をつかみ、自分諸共テレポートした。

「ええ!?白井さん!」

バスの隣で様子を窺っていた涙子の眼前に二人は瞬間移動した。驚く涙子だったが、

「またですよ!?!」

という黒子の声を聴いた瞬間、初春の横にいた。

「佐天さん!」

「へ…?う、初春?」

親友の名前を呼ぶと数秒遅れてテレポートした美琴と黒子が姿を現した。

「怪我はありませんの?」

「はい、大丈夫です!」

「よかったですの…あれ相手ではいつ怪我してもおかしくありませんし」

そう言つて黒子は先ほどまで自分たちがいた場所を見る。怪物、スマッシュは子供たちが乗ってきたバスを、その剛腕で破壊している最中だった。

「こうなったら私が超電磁砲で…!」

「いけませんわお姉さま!!」

「何よ、また関わるなつていうの!?!」

「そうじゃありませんの!!敵の詳細は分かりかねますが、あれはおそらく先ほどの殿方ですの」

「だから何だつて…」

「お姉さまのフルパワーなら確かに倒すことができると思いますわ、しかし、あの怪物の中の殿方がそれに耐えきれる保証はどこにもありませんの!!」

「それは…」

黒子の指摘に黙り込む美琴。学園都市のレベル5でも対処できない状況に、誰もが口をつぐんでいた。

「いた、そこのお花中学生!」

そんな沈黙を戦兎は気にせず、声をかける。視線の先にいる女子四人は一瞬誰のことわからなかったが

「あの一、初春のことですか?」

「そうそう、そこのお花についてる子!」

涙子の指摘に戦兎は駆け寄りつつ答える。

「さつき持ってたボトルを返してくれないか?なくて困ってたんだ」

「ボトル…あ、これですか?」

初春はポケットから青いボトル―タンクフルボトルを取り出す。

「ストップ、ですの」

初春の手から黒子がボトルを手取る。

「あなたの行動は不自然ですわ?身元も不明、そのくせ、あの化け物を知っているような素振り…、申し訳ありませんがこれは証拠品として警備員に…」

「あとでいくらでも話はしてやるし、どこへでもついていく。でも今はスマッシュを倒すのにそれが必要なんだ」

「まだ話してますのに…!、ス、スマッシュ?」

食い下がってくる戦兎に対し、再び物申そうと開きかけた口を隣にいた美琴がふさぐ。

「お、おねえふあま?」

「あの怪物、それがあれば倒せるの?」

真剣な面持ちで美琴は問う。

「ああ」

一回り近く幼い少女に、戦兎は即答する、

「…やれるもんならやってみなさいよ」

黒子の手に握られたボトルを戦兎に手渡す。決して疑いがなくなつたわけではない。が、子どもを助けたことやそれまでの行動からこう感じたのだ。

少なくとも悪い人ではない、と。

「ああ、やってやるよ。なぜなら俺は―」
今なおバスを破壊するスマツシユを見据えつつ、高らかに宣言する。

「自意識過剰な正義のヒーロー、だからな!!」

♪

どこからともなく取り出されたそれ、レバーの付いたガジェットを腰に当てると、電子音と共にベルト部分・アジャストバインドが自動で巻き付く。

「さあ、実験を始めようか」

カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカ

左右に持ったボトルを上下に振り、内部成分であるトランスジエルソリッドを刺激する。すると、辺りに白い数式が具現化し、漂い始めた。

「なに、あれ・・・」

誰かがつぶやく中、戦兎は十分に振ったボトルの上部パーツ、シールディングキャップを開き、装着したガジェットビルドドライバーに装填した。

【ラビット】 【タンク】

【ベストマッチ!!】

装填したボトルが識別され、ベストマッチの音声と共に待機音が流れる。ボルテックレバーを握り、回すとエネルギー生成機関たるボルテックチャージャーが赤と青の光と共に回転する。

回転に合わせてビルディングモジュールから高速ファクトリー、スナップライドビルダーが展開され、刺激されたボトル内のトランスジエルソリッドがパイプを通って前後に移動、赤と青のアーマーを形成していく。

【Are you ready?】

ドライバーの音声に合わせて、ファイティングポーズを取り、かつての世界でやっていたように言う。

「変身!!」

前後に展開していたスナップライドビルダーが戦兎をはさむ。白

い蒸気と共に赤と青の装甲を纏う戦士が姿を現した。

【鋼のムーンサルト!!ラビットタンク!!イエーイ!!】

仮面ライダービルド ラビットタンクフォーム。

かつて東都の、世界の愛と平和のために奔走した戦士が今、学園都市に降り立った。

「勝利の法則は決まった!!」

決め台詞と共に、仮面ライダーは走り出す。

※

ビルドとなった戦兎は、スマッシュに向けて拳を放つ。美琴の電撃をいなしした装甲はかなりの強度を誇っているようでビクともしない。

「ウオオ!!」

ビルドのボディ目がけ巨大な腕を振るうが、今度はビルドの青い装甲、パンツアーチェストアーマーがそれをはじく。

ガン!!という音と共にお互いが距離を取った。

「あの装甲は一筋縄ではいかないな…よしー」

装備展開用のスナップライドビルダーを展開。共通武装であるドリルクラッシュャーを召喚し、構える。

「あら、よっと!!」

突撃を仕掛けたスマッシュを躲し、背後をドリルクラッシュャーで切り付ける。ドリルスパイルブレードがスマッシュの装甲を削る。

「ガア!!」

スマッシュは振り返りつつ反撃に拳を振るう、が

「二度も食らうわけないでしょーが」

ビルドの左足、ラビット-halfボディの跳躍強化バネ、ホップスプリングを伸縮し、後方へ宙返りした。

「これでもくらっとけー」

ブレード部分を付け替え、ガンモードとなったドリルクラッシュャーを向け、ボルテックトリガーを引く。発射された光弾がスマッシュに炸裂する。

「グガア!!」

一瞬ひるんだスマッシュに向け、今度は右足による蹴りを放つ。

キヤタピラを模したタンクローラーフットが火花を散らす。

「さて、そろそろ決めますか。」

ビルドドライバーのボルテックレバーを回転させる。ボルテックチャージャーが発光し、白いグラフが具現化する。グラフのY軸めがけビルドがジャンプし、X軸の曲線がスマッシュを挟み込む。

「ready go!!」

【ボルテックファイニッシュ!!イエーイ!!】

高いテンションの音声と共に、曲線に沿ってビルドのライダーキックが炸裂する。タンクローラーフットがスマッシュを削りとった。

「グギャア!!!」

断末魔のような叫びと共に、スマッシュの身体は爆発した。

※

なんだあれは。

爆発するスマッシュを見ながら美琴は困惑していた。自分の能力が通じない相手を見ず知らずの不審者が倒した。しかもその不審者はよくわからない、やたらテンションの高い音声を発するガジェットで謎の姿に変身した。

科学の街学園都市、最先端の技術を常日頃から体感している美琴ですら困惑する事象だった。

「なんですのあれは…」

「本当に勝っちゃいましたね…」

呟く初春と黒子も呆然としている。視線の先の男―ビルドは腰のベルトから二本のボトルを抜く、すると体に纏っていた装甲が消え、不審者こと桐生戦兎の姿に戻った。

「やて、と」

変身を解いた戦兎は先ほど自分が倒したスマッシュを見る。まだ異形のままで、このままだとまた暴走する危険性がある。

「あの…」

と先ほどの中学生たちが戦兎の元に歩いてきた。黒髪ロングの女子生徒、涙子は戦兎に向かって聞く。

「この怪物、元に戻るんですか…?」

「勿論。天才物理学者のこの俺に任せれば、ね」

そう言つて手元のビルドフォンから空のボトル、エンプティボトルを召喚した。

「い、今のどこから!？」

「すさまじい技術ですね…」

「よつと」

驚く涙子たちをよそに、ボトルを横たわるスマツシユへと向け、キヤップを開く。

粒子状の光がスマツシユからボトルへと移り、怪物は元の男へと戻っていた。

「ぐう…」

うめき声をあげているところを見ると、どうやら命に別状はないようだ。

「これで元通り。しかつしなんでスマツシユが…あれ?」

手元のボトルを見た戦兎は疑問符を上げた。通常スマツシユから成分を吸収したらスマツシユボトルと呼ばれる蜘蛛の巣状のデザインが入ったものに変異する。

しかし今戦兎の手元にあるのはかつてn a c i t aの地下研究所にあった浄化装置によつて浄化されたボトル、つまりラビットやタンクと同じ形状をしていた。ゴリラボトル。かつて使用していたボトルだ。

(なんでボトルが浄化されてんだ…?とつかかなんでスマツシユが…)

「あの!!」

と思考に耽つていた戦兎を黒子が呼び戻した。

「先ほどはその、助かりましたの。風紀委員ジャッジメントを代表してお礼致しますわ」

「ん、いやいや礼を言われるほどじゃ…」

ガチャ、と。

ボトルを握る手にテレポートさせた手錠がかかっていた。

「へっ?」

「それはそれとして、器物損壊、並びに先ほどの件の重要参考人として拘束致しますの」
「うそーん?!?!?!」

第2章 再会のベストマッチ

第五話 身の上話

「もう一度聞きますわよ?」

ジャッジメント
風紀委員第177支部に備え付けられた来客室、もとい取調室の椅子に座った黒子は、目の前の男、桐生戦兔に向けて問う。

「お名前は」

「桐生戦兔です」

「ご年齢は」

「26歳です」

「ご職業は」

「天つさ・・・物理学者、です」

「ご出身は」

「あー、多分北都なんだけど感覚的には東都」

「・・・学園都市には何用でいらっしやいましたの?」

「えっと、なんでかなー・・・痛っ!!」

何度目かの問答の末、手近のバケツを怪我しない程度の高度に設定し、戦兔の頭上にテレポートさせた。

「まったく、先ほどの事件で世話になったので警備員ではなくこちらにお連れしましたのに、黙秘はみつともないですわよ?」

「そう言われてもな・・・」

呆れたような黒子の言葉に戦兔は思わず呟く。

スマツシユを倒した後、なぜか浄化されたボトルの謎やいるはずのないスマツシユ、あるはずのないネビュラガスなど考えることは山積んでいたのだが、それらを無視して連れてこられたのが1時間ほど

前。以来ひたすら同じ質問攻めである。拘束されているということ
で、腕にはもちろん手錠（いわゆる鉄製のものではなく電子ロック式
のメカメカシしいデザインの代物だ）持っていたビルドドライバー、
ボトル、ビルドフォンもとつくに没収されている。

「白井さん、どう？話は聞けた？」

と奥の部屋からメガネをかけた女子高生がやってきた。背丈など
から見て目の前の黒子よりも年上なのだろう。カッターシャツに紺
色のベスト、黄色系のネクタイを締めた少女は戦兎の斜め右側の椅子
に腰を下ろし

「ジャッジメント風紀委員第177支部所属、固法と言います。」

「あ、ご丁寧にどうも」

ペこり、と頭を下げる戦兎。相手が女子高生とか、自分の年齢とか
色々と忘れていようだ。

「先ほど貴方の所持していたものを透視能力で見えました。その結
果」

ちらりと横の黒子を見てから

「貴方が持っていたどの品も、見たこともない技術で出来ているのが
わかりました。少なくとも学園都市で一般的に使用されている技術
では解析できないでしょう。」

「それは本当ですか？固法先輩」

「ええ。とくにあの保存容器のようなボトルとレバーの付いたものに
関しては完全にシャットアウト。なにもわからなかったわ」

「そんな・・・学園都市の技術を上回ると言いますの？」

だとすればとんでもないことだ。世界中の研究機関を集めた、いわ
ば世界の頭脳である学園都の技術力を凌ぐ。そんなことを目の前の
不審者に出来るわけが・・・

「透視能力！物体が透けて見えるってことは、物質の粒子分解をしているってことなのか・・・？いや。だとしたら現物にも作用しちゃうから、あくまで像を結ぶ際に何かしらの法則を介して脳内に出力しているのか？あーでも・・・」

と、等の本人はアンテナのように後ろ髪を立たせ。なにやら考え込んでいる。

「あの一、ええつと」

「またバケツをぶちあてますわよ？」

と言われたところで、とりあえず思考の海から帰ってくる戦兎。なぜかアンテナも元に戻っている。

「事情があるのは察しますの。ただ、このままでは貴方を警備員アンチスキルに引き渡さなくてはなりませんのよ？」

「警備員アンチスキルはこんなに甘くはありません。変にはぐらかしたりすると一生出られないかもしれませぬ」

「ま、マジか・・・」

黒子と固法の真剣な顔に、普段なら笑い飛ばすところだがゴクリ、と生唾を飲む。

「白井さんに先輩、そんなに脅かしちゃだめですよー」

と、奥の部屋で戦兎の持ち物の検分をしていた涙子がやってきた。先の一件で黒子や美琴とも打ち解けたのか、口調は柔らかい。

「佐天さん。そっちの様子はどうですか？」

「初春があれこれいじったり、御坂さんが電氣流したりしてますけど、何もわからないみたいです」

「ちよつと待て、電氣!?!俺の発明品に何してるの!?!」

よく聞くと「あれー？ネジ穴どこだろうー」やら「おかしいわねー、電氣流しても動かない」やら物騒な声が聞こえてくる。戦兎としては

取り調べどころではなかった。というか、電気なんて流してボトルの成分に影響出たらどうすんだ。

そんな戦兎に対し、涙子はよしつ、と言つて前へ進み、頭を下げる。

「桐生さん、さっきは助けてくれてありがとうございますとごうございました」

「へっ？ああ、さっきのことなら気にしないでいいよ。当然のことだし」

それよりドライバーとかめつちや心配なんだけど・・・と呟く戦兎に涙子は言う。

「いえ、子どもたちが一人も怪我しなかったのは、桐生さんや御坂さんに、白井さん、通報した初春のおかげです。」

その言葉に戦兎は首を振った。

「君も、あの男の子のことを必死になって守つただろ。それに女の子に気づいたのも君だ。」

「でも、結局助けられちゃつたし、私、レベル0だから、足手まといになつちやつたし・・・」

うつむく涙子に対し、黒子や固法も黙ってしまう。確かに能力者が絡む事件には能力者が対処するのが必然。能力のないレベル0は多くの場合何もできない。

「たとえ力がなくても、人を助けたいって気持ちに優劣はない」

そんな涙子に対し、戦兎は変わらない口調で言う。

「あの時、君は確かにあの子達を助けようとした。その行動が大事なんだ。立派なヒーローなんだよ」

その言葉に涙子は顔を上げ、小さく笑みを浮かべる。

「なんか・・・くさいせりふですねっ！」

「そこは、いいこと言いますね、さすが天つ才!!って褒め称えてほしい

ね」

「あははは」

「・・・盛り上がっているところ悪いんだけど」

はあ、と溜息をつきつつ、固法は戦兎に告げる。

「貴方が、悪意があつてこの街にいるわけじゃないと思います。ただ、やっぱり身元不明で事情のわからない人をいつまでも放置するわけにはいきません」

「やっぱそうだよな・・・」

どんな世界だろうと今の戦兎は異端の存在だ。新世界を目指すにせよ、この原因を見つけるにせよ、どうしたって理解者が必要になる。

それはかつての石動惣一であり、その娘の美空であり、唯一無二の相棒、万丈龍我のような。

「・・・そうだよな、俺は一人じゃ何もできないんだった。」

みんなが桐生戦兎を創った。自分でそういったんじゃないか。

巻き込むことになるかもしれない。けど、スマッシュが現れている以上、彼女たちにも知る権利はあるはずだ。

ここは、彼女達の街なのだから。

「最っ悪、だな」

そう嘯いて戦兎は少女たちを見る。

「信じられないかもしれないけど、話すよ。俺がどこで、何をしていたのか。

少し長くなりそうだな、そう思いながら戦兎は話し始めた。

※

「—というわけで、俺がもといいた世界とこの学園都市は違う世界になるってことなんだけど、わかった？」

戦兎は自分の素性—こことは違う世界にいたこと。パンドラボックス、エボルトのこと、そして新世界をつくったこと—をかいつまんで話した。こうして話してみるとかなり濃い内容である。落ち着いたらいくつかのエピソードでまとめるのもいいなあ、なんて思っている。

支部のメインルーム、各風紀委員のデスクがあるスペース。応接用のソファが沈黙に包まれていた。

「何言ってるの？あんだ。馬鹿？」

最初に沈黙を破ったのは腕組みして聞いていた美琴だった。彼女はいきなり罵倒すると。

「火星の文明とか、宇宙人襲来ならまだオカルトで済むけど、異世界からやってきたなんて非科学的すぎ。ただのファンタジーやオカルトじゃない」

「そういわれても真実なんだからしょうがないでしょうが!! 大体、俺からしたら超能力のほうがよっぽど非科学的でオカルトの領域だよ！」

ああだこうだと御琴と戦兎は言い合う。普段は冷静な戦兎だが馬鹿と言われてカチンときたのだろう。ダメ大人の見本のように中学生と口げんかしている。

「白井さん、どう思いますか？」

二人の言い合いを諫めつつ、初春は問う。

「荒唐無稽、と言い切ってしまうのは簡単ですが・・・」
「ですが、なんなのよ、黒子」

いい合いを中断して御琴が聞く。黒子は少し思考してから言った。

「私たち空間転移を使う能力者は、三次元的空間を無視して四次元、五次元、そして十一次元までを演算していますの。」

「仮に貴方、桐生さんが異世界、もつという別次元の世界から来たのであれば、あながちありえない話ではない、ってことかしら」

「はいですの。もちろん私は三次元以外の次元を把握したり知覚できるわけではありませんの。あくまで計算による作用なので・・・」

「つまり、別次元を把握できれば、その次元から移動することは可能、ってこと？」

美琴の言葉に黒子はうなずく。

「あくまで可能性の問題、ですが、100%ありえないとは言いきれませんが」

「なんか難しいです・・・」

学校の知識を超えた会話に涙子は音を上げる。

「父さん、俺の父親が言うには、違う時空には並行世界、つまりパラレルワールドが存在している。俺と仲間たちはパンドラボックス由来の力を使ってその二つを融合させて、本来の平和な世界にすることでエボルト、その地球外生命体をなかつたことにしたんだ」

「となると、その融合の際に何らかのエラーが起きて、貴方がこの街にやってきた、ということですか？」

「実証は出来そうもないが、おおむねそうだと思う」

一同は再び沈黙した。あまりにも現実離れた話に、脳の回転が追いついていないのだ。

「そういうえば、桐生さんがさつきさんの化け物と戦うときになっていたのが【仮面ライダー】なんですか？」

涙子が尋ねると再び戦鬼の髪がピンツ、と立つ。それまでのシリアスな空気もどこへといったテンションで説明しだした。

「そう!!!コレこそが天つ才物理学者の天つ才的な発明品さ!!世界の愛と平和のために戦う正義の戦士、仮面ライダーだ!!」

机の上におかれたビルドドライバーを手に頬ずりする。当然お年頃な中学生たちは若干引いているが、戦兎はお構い無しに説明を続ける。

「元々はただボトルの成分を装甲にしてビルドになるだけの機能しかなかったんだ。しかーし!!!この俺の改造によってベストマッチを判別する機構を組み込んだんだよ!凄いでしょ、最高でしょ、天才でしょ!」

「は、はあ・・・ベストマッチですか」

初春の引き気味な言葉にさらに戦兎はエスカレートする。

「そう、例えば・・・」

とビルドドライバーに机の上に置いてあったボトルのうち二本を装填する。

【ラビット】【タンク】

【ベストマッチ!】

音声とともに一瞬ドライバーが光った。

「これがベストマッチ。相性のいいボトル同士だと凄い力が出る」

ラビットのボトルを抜き、もう一本のボトル―先刻のスマッシュから生成されたゴリラボトルを装填する。

【ゴリラ】【タンク】

今度はテンションの高い音声も光もなかった。

「こんな感じで、ベストマッチかどうかを認識してくれるんだ。いい子でしょ?」

「でも、フルボトルでしたっけ?3本しかないのに識別もなにもない

んじゃ・・・」

涙子の言葉に戦兎はうなだれる。

「そう、元々ボトルは60本あったんだ。けど、新世界創造のためにどうしても必要でな・・・」

と言ったところで

「いや待てよ、この世界にスマッシュユがいるならボトル増えるかも・・・」

「そう、それよ！」

スマッシュユ、という単語に反応する美琴が口を挟む。

「あのスマッシュユって怪物は、アンタの世界のものなんでしょ？なんで学園都市にいるのよ」

「それは・・・実はよくわかってないんだ」

戦兎は腕を組み

「スマッシュユは、人間にネビュラガスっていうスカイウォールから採れるガスを注入することで変異したものだ」

「スカイウォールというと、貴方の世界の日本を分断していた壁、ですわよね？」

「そうだ。だから、スカイウォールが存在しない以上、ネビュラガスも存在しない、はずなんだ」

「でも、実際にスマッシュユが現れてる、と」

固法の言葉にうーん、と唸っていた佐天があることに気付く。

「つてことは、そのガスの出所がわかれば、桐生さんが現れた理由がわかるかもですね」

それまで悩んでいた一同は、一瞬沈黙したが

「た、確かに・・・」

戦兎と美琴が納得したように呟いた時だった

♪

初春のデスクの上にある電話が鳴ったのだ。

「はい、ジャックジメント風紀委員第177支部、初春です。はい、はい・・・え？」

電話の内容に初春は思わず戦兎たちの方を向いた。

「はい、わかりました。こちらでも近隣の避難に・・・、はい。了解です。」

受話器を置いた初春は一同に向けて言葉を作る。

「第7学区繁華街で、正体不明の怪物が暴れているようです。アンチスキル警備員より風紀委員へ、付近への避難誘導を依頼されました。」

「!?、スマッシュか!？」

思わず立ち上がる戦兎に初春は

「まだわかりませんが、恐らくは・・・」

それを聞くと戦兎は机の上のドライバーとボトル、ビルドフォンを掴み駆け出した。

「ちよつ、まだ取り調べ中なんだけど!？」

「初春はここで状況の把握を、私は彼を追いつつ周辺の誘導をして参ります!」

固法の言葉に、しかし黒子は腕章を付けつつ指示を飛ばす。

「白井さん!、まだ取り調べの途中なのに外に出すのはマズイわよ」

「確かにそうですね。ですが、先ほどの電話の怪物が例のスマッシュだとすれば、対処にはあの方の力があるのも事実ですの」

「そんな・・・アンチスキル警備員が出勤してるのよ?それで対処できるはず」

「いや、どうかしらね」

と、戦兎が走っていったドアを見ながら美琴が呟く。

「高位のテレポルトが効かなかったし、ただの銃弾なんかあの化け物が倒せるとは思えない……」

「お姉様……、言っておきますけど、付いてきてはダメですよ?」

「わかっているわよ、これは風紀委員ジャッジメントの仕事、なんですよ」

苦笑しつつ美琴は言う。

「でも、本当に危ない時は言いなさい。助けに行くから」

「っ!!お姉様!!お手を煩わせないように、この黒子、全力で務めを果たしてきますの!!」

と言つて黒子は瞬間移動した。頭を抱える固法だったが、切り替えたらしく。

「私も避難誘導に行くってくるわ!あなたたちはここで待機、いいつて言うまで外に出ちゃダメよ!」

と言つて走って出ていった。

「大丈夫かなあ、怪我とかないといいけど、あ、御坂さん、私たちも何かできることは……」

と言いかけた涙子のなりに、すでに美琴はいなかった。はつとなつて背後を見ると、道路に面している窓が開け放たれていた。

「……ほんつと、無茶苦茶な人たちだなあ」

苦笑していると、また電話が鳴る。受話器を取った初春が

「はい風紀委員177支部です。はい。はい?」

「初春?どうしたの?」

「いえ、それが……、えつと、それはさっきの正体不明の怪物とは別

なんですか？・・・それと戦ってる？はい、わかりました」

そう言って再び受話器を置いた初春が、涙子に言う。

「佐天さん、さっきの桐生さんが変身した姿って、赤と青でしたよね？」

「え？うん、確かそうだったね。それがどうかした？」

「いえ、なんか今、正体不明の怪物に応戦するような存在が現れたらしいんですけど、それがどうも桐生さんじゃないんですよ」

「え？それって・・・」

「なんでも、青い、龍みたいなデザインをしてるんですけど。何者なんでしょうかね？」

第六話 護る拳

戦兎がスマツシユの目撃情報を聞き、現場に向かっていった、その数十分前。

「というわけで、ここは超能力開発のための学園都市、というところなのです。で、貴方はどこからやってきたのですか？」

「だから、元いた世界の東都だ、って言ってるんだろ！」

とあるアパートの一室でそう答えたのは万丈龍我だった。

「スカイウォールで3つに分断された世界に、めっちゃ強い宇宙人…漫画のお話としか思えないんですよねー」

そう言ってお茶をすすするのは、月詠小萌。身長138センチ、どう見ても小学生にしか見えないのだが、本人曰く教師らしい。

「信じられねえかもしれないけど、全部本当のことなんだよ。」

「うーん、まあ身元不明の人間が学園都市に入れるわけもないですし、あながち全部が嘘というわけではないんでしょうけど」

正座する万丈よりも頭2つ分ほど小さい位置で小萌は言う。

「でも驚きましたよー、ゴミ捨て場であちこち怪我してる人間が倒れてるんですから。先生だから思わず拾ってきちゃいましたけど、下手したら死んでましたよー？」

「それに関してはマジで感謝してる。飯も食わせてくれたし、おかげで体の傷も治った」

「いやー、それに関しては先生、犬でも猫でも家出学生でも拾っちゃう性質なので。というかあなた、治癒能力かなにか持ってるんですか？傷の治り方が尋常じゃないですよ」

「？そうか？」

エボルトとの死闘でできた体の傷は、先ほど食事をしたことによつてほぼ直りつつあった。己の遺伝子にエボルトのものが混ざっている龍我の特性なのか、よくわからないが便利だー、なんて考えていると。

「それで、その…桐生戦兎、でしたっけ？その人を探している？」

お茶のお代わりを汲んできた小萌はちゃぶ台の上に地図を広げる。それは学園都市第七学区の地図だった。

「ここが万丈ちゃんがいいた場所です。で、うちがここ。現実的に考えればそのお友達は第3、もしくは1-1学区にいると思うんですけど・・・」

「?なんでだ?」

「学園都市は23の学区に分かれています。その中で外から入ってくる人間がいるとすれば、外部向け施設が集中する第3学区や、物資搬入路である第1-1学区なのです」

「裏口みたいなもんか?」

「ぜんぜん違います。ひよつとして万丈ちゃんって馬鹿なんですか?」

「せめて筋肉つけろ!」

お約束のやり取りをしつつ、万丈は言う。

「えっと、その二箇所には戦兎がいるかもしれない、ってことか?」

「可能性で言えば、の話ですね。ひよつとしたらもうこの街にいないかもしれません」

「それは・・・そうか」

一瞬下を向きそうになるが、万丈は確信していたのだ。戦兎はこの学園都市にいる、と。

それは彼のよく言う第六感だし、戦兎からしたら「非科学的だ」と言われそうな感覚だが、万丈は信じていた。

「とりあえずこの近辺を探してみるわ。ありがとな、えっと」

「月詠小萌です。小萌先生でいいですよ。というか、ちよつと待つてください」

立ち上がろうとしていた万丈を小萌が制した。

「私の同僚の先生に警備員アンチスキルがいます。もし貴方のお仲間さんが本当に学園都市にいるなら、保護されているかもしれません。」

「マジか!!手伝ってくれんのか!?!」

「乗りかかった船ですからねー、それに万丈ちゃん、23歳とは思えないくらい危なっかしいですし」

「この家に船なんかねえぞ?」

「心配になる知能ですね・・・」

本当に成人してるんだろうか、と自分の容姿を棚に上げつつ、小萌はケータイで同僚の黄泉川に電話をかけるのであった。

※

10分後。

電話で万丈のことを話した小萌は、詳しい話が聞きたいという黄泉川の要望により、万丈を連れ第七学区の繁華街に来ていた。

「すげえな、本当に学生ばかりだ」

「そりゃ、学園都市ですからねえ」

学生服の中では万丈の黒のTシャツに青いスカジャンを腰に巻くスタイルは目立つだろう。きよろきよろと辺りを見回す万丈は小萌に問う。

「なあ、さつきから大人がぜんぜんいないけど、こいつらの親とかどうしてんだ?」

さつき説明したんですけどねー、と思いつつ小萌は答える。

「この街の学生は基本寮暮らしですよ。親御さんは学園都市の外で暮らしています。」

「ふーん」

「親御さんの信頼を裏切らないためにも、私たち教員は日夜、生徒たちのことをサポートしなくてはいけないのです」

「そつかー・・・でも、離れ離れだとやっぱり寂しいよな・・・」

目を細めて万丈は言う。その姿に、彼も不安を感じているのかもしれない、なんてことを思っていると。

「おーい!!小萌センサー!」

と同僚である黄泉川愛穂がこちらに向けて手を振っているのを見つける。長身に抜群のプローション、そしてそれらを台無しにしている緑色のジャージ姿の教師はこちらに向かってきた。

「いやー、わざわざ呼び出して悪かったじゃん」

「いえ、頼んだのはこっちなので。黄泉川先生、こちら万丈ちゃん

す」

と隣の万丈を指し、紹介する。

「万丈龍我っす」

「私は黄泉川愛穂、小萌センサーとは同僚で、警備員アンチスキルでもあるじゃん」

「あんちすきる?」

聞きなれない単語に万丈は疑問符を浮かべる。

「この街には特殊能力をもった学生が当たり前のように生活してるじゃん。中にはその力を悪用したり、反対に力のない奴が事件を起したりすることがある。それを取り締まって、指導するのが警備員アンチスキルじゃん」

「警察みたいなもんか」

「まあ、そういう解釈でも問題ないですね」

納得した万丈の様子を見て黄泉川はうなづく。

「なるほど、確かに学園都市のことを知らないようじゃん」

「ああ、まったくわかんねえ」

「その様子だと、技術狙いの産業スパイ、っていう線もなさそうだし・・・本当、何者じゃんよ」

「お馬鹿なのでスパイはないですね」

「だから筋肉つけろって!」

馬鹿・・・とつぶやいてから黄泉川は笑う。少なくとも悪人ではないと判断した。

「そういうえば、電話で聞いたお友達のことだけだな」

「!!戦兎、見つかったのか!?!」

思わず身を乗り出した万丈に、黄泉川は落ち着け、と諭し。

「他学区を含めて、桐生という苗字の、身元不明の男を保護した、という情報はなかったじゃん」

「そうか・・・」

落ち込む万丈だったが、続く黄泉川の言葉に顔を上げる。

「ただ、第七学区のふれあい広場付近で、おかしな事件があったとの通報があつてな。どうも正体不明の怪物がいた、とか、その怪物を別の正体不明の人物が倒した、とか」

「なんだそりや?」

「警備員アンチスキルが出動したにしては、あいまいな情報ですね」

「現在状況把握を急いでるらしいが・・・とにかく、そういうよくわからない事件の中に、そのお友達が関係しているかもしれないじゃん」

黄泉川の言葉に万丈は珍しく思考を回転させていた。

(怪物ってスマツシユか?でもここが新世界ならスマツシユなんているわけねえし・・・)

「なあ、ここって、なんかこう、怪物を生み出すような変な実験とかしてるのか?」

「実験って、どんな?」

「例えばこう、人を怪物に変えるとか・・・」

と、万丈が言った瞬間だった。

「キヤアアアア!!」

という悲鳴が3人の前方から聞こえてきた。

「なんだ?」

「ひったくりとかじゃんよ。まったく・・・ちよつとここで待ってるじゃん」

そう言って黄泉川は悲鳴の方まで駆け寄る。

「何でしようねえ。って、万丈ちゃん?」

小萌の声を無視して万丈も黄泉川のあとを追う。悲鳴のあげたのは女性らしく、震えて立てないようだ。

「おい、警備員アンチスキルだ。なにがあつた?」

「お、お客様が・・・急に暴れだして・・・」

そういつて、店員らしい女性は前を指差す。

「なんだ。あれは・・・」

そこには、暴れたという男性なのだろう。苦悶の表情を浮かべた男が激しくのたうち回っていた。

「何だよこれ!!体が熱い!!助けてくれ!!」

暴れ回る男の体は、黄色いガスのようなもので覆われていた。それは口や鼻、皮膚からも入り込んでいるようだ。

「おい!!どうした!?!何かやばいものでも・・・」

「うあああああああ?!?!」

黄泉川が声をかけるのと同時に、男は叫びを上げた。その瞬間、全身をガスが包み彼の体を変貌させたのだった。

「嘘だろ・・・」

後を追ってきた万丈がつぶやく。現れたそれは、幾度も拳を交えた怪物。スマッシュユだった。

「全員逃げろ!!」

アシチスキル警備員としての職務からか、辺りにいた学生達に向けて怒鳴る。学生達は叫び声を上げながら逃げ出した。

「おい!この店員さんを頼む!!安全なところまで連れてくじやん!!」

黄泉川に言われ万丈は女性店員を抱える。

「アンタはどうすんだよ!!」

「応援は呼んだ!!それが来るまで、仕事をするじやんよ!!」

そう言って逃げ遅れた学生の下へ走り出す。スマッシュユは辺りを無造作に破壊していくが、それに恐怖している素振りはなかった。

「生身で向かってくなんて、前の俺みたいな女だな・・・」

そう思いながらも女性を抱え、小萌のところまで走る。

「彼女を頼む!怪我はしてねえみたいだ。」

「わかりました!!って万丈ちゃん!?どこに行くつもりですか!?!」

女性を降ろした途端、一目散に走り出そうとする万丈を小萌が呼び止める。

「決まってるだろ、あいつと戦う」

「どう考えても警備員アシチスキルに任せるべき事件です!学生でないとはいえ、教師として命を投げ出すようなことは許しません!!」

強い口調の小萌に、振り返った万丈は答える。

「死ぬつもりなんてねえよ。あいつが、みんなが繋いでくれた命を、無駄にするわけねえだろうが!!」

叫び、走り出す。爆発があったのか煙が立ち込めているが、気にせず突っ走る。

一方黄泉川は、逃げ遅れた女の子を見つけていた。

「さあ、もう大丈夫じゃんよ。掴まりな」

店に取り残されていたのか、泣いている女の子を抱きかかえ、逃げようとするが

「ガアアアッ!!」

それまで辺りかまわず破壊行動を取っていたスマッシュが、立ち上がろうとしていた黄泉川たちに飛び掛ってきたのだ。

「くそっ!!」

子供は傷つかせない、そう思い抱きかかえたまま背中を向ける。

黄泉川の背中にスマッシュの鋭い針が突き刺さろうとしていた瞬間だった。

「うおおおおおお!!おらあ!!」

駆けつけた万丈の拳が、スマッシュの巨体を吹っ飛ばした。

「お、お前・・・」

「その子連れてさっさと逃げろ。後は俺が何とかする。」

「ふざけるな!!民間人を戦わせるわけにはいかないじゃん!!」

「じゃあお前にあれが倒せるのかよ!」

思わず怒鳴った黄泉川に万丈は同じくらいの怒声で返す。

「アンタはその子を救うために命をかけようとしたんだろ!!だったら俺は、アンタやその子を守るために戦う!!」

「戦うって、お前一体何者じゃんよ・・・」

黄泉川の言葉に万丈は巻きつけたスカジャンの背中側、間に挟んでいたものを取り出し、腰に当てる。

それービルドドライバーが万丈を認識し、アジャストバインダーによって固定される。

~~~~~♪

と同時に、上空から飛行型のガジェットが飛来してきた。それは起き上がりこちらに向かってくるスマッシュにむけて、炎を吐き出した。

「グアア!!」

けん制のための炎をやめ、そのガジェットトローグレートクローズドラゴン は万丈の手に収まると、首と尻尾をたたんだ。

先ほどスマッシュを吹っ飛ばした拳に握っていたボトル、グレート

ドラゴンエボルボトルのシールドイングキャップを開き、クローズドラゴンに装填する。

【覚醒】

前部にあるウエイクアップスターターを押し、ドライバーに差し込む。

【グレートクローズドラゴン】

待機音が鳴り、ボルテックチャージャーが発光する。万丈はボルテックレバーを強く回し、高速ファクトリー、スナップライドビルダーを前後に展開する。

「俺は・・・仮面ライダーだ!!」

【Are you ready?】

問いかけに、万丈は拳を手のひらに打ちつけ、かつてのようにファイティングポーズをとる。

「変身!!」

【Wake up CROSS—Z! Get GREAT DRA  
GON! Yeah!】

トランスジェルソリッドによって生成された装甲が万丈を挟み込み、その姿を変える。

仮面ライダーグレートクローズ。

かつて、東都を守ったもう一人の仮面ライダー。気合の入った拳と共に万丈は言う。

「来いよ!!今の俺は、負ける気がしねえ!!」

※

クローズは開口一番、スマッシュに向けて拳を打ち出した。拳はスマッシュの頭部にヒットし、よろめかせる。

「おらあ!!」

連続して左の拳を打ちつけるが、スマッシュもタダではやられず、鋭い嘴で反撃してきた。

「くそっ、危ねえだろうが!!」

大振りの嘴攻撃をかわし、逆にその嘴めがけ蹴りを放つ。スマッ

シユはバランスを失い転倒した。

「今のうちだ！早く逃げろ!!」

近くで呆然としていた黄泉川に万丈は言う。未だに信じられないものをみたような顔をした黄泉川だったが、すぐに状況を理解したのか、再び子供を抱きかかえ走り出す。

「ギャアアア!!」

と、突然悲鳴のような声を響かせたスマツシユは、肩部分の針を増殖させていた。

「やべえ!!」

咄嗟に黄泉川とスマツシユの間に入りこみ、二人を庇う。

ヒュン!!

という風切り音と共に無数の針が襲い掛かる。

「くっ!!」

何本かヒットしたが、ほとんどはGCZブレイズチェストアーマーに弾かれたようだ。

「大丈夫か!？」

「ああ、この子は無事じゃん」

【ビートクローザー】

黄泉川と子供の無事を確認したクローズは、ビルドドライバーからスナップライドビルダーを展開し、専用武器ビートクローザーを召喚する。

「これでもくらってる!!」

【ヒツパレー】

【スマツシユヒット!】

グリップエンドを1回引っ張り、ビートクローザーの刀身に蒼炎をまとわせ、本体を投げつけた。

「グガッ!!」

砲弾のようなスピードで飛んでいったそれは、スマツシユの肩装甲を砕き、奥のコンクリートに突き刺さった。

「オイ!!早く逃げろ!!」

「逃げたいところだが・・・足が・・・つく!」

「はあ!? 怪我してんじゃねえか。ったくしょうがねえ!!」

クローズは黄泉川と少女をそれぞれ脇に抱え、勢いよく走り出した。

「ちよっ!! 早すぎるじゃん・・・!!」

「んなこと言ってる場合か!!」

と言いつつ少しだけスピードを緩めるが、それでも安全だと判断できるところまで10秒もかからず走り抜けた。

「ここで待ってろ。あいつ倒してくる」

そう言って戦場に戻ろうとするクローズだったが

「まってー!」

幼い声に呼び止められる。見ると、黄泉川に抱きかかえられていた少女がクローズを見て。

「ありがとう!!」

「・・・おう!!」

かみ締めるように返し、改めてスマッシュの前に立つ。

「そろそろ決めるぜ!! オラオラオラオラア!!」

ボルテックレバーを回す。ボルテックチャージャーが発光し、ドラゴンに装填されたボトル内のトランスジェルソリッドが活性化される。

「ready go!!」

「グレートドラゴニックファイニッシュ!!」

右足に炎を纏い、ジャンプして間合いをつめつつスマッシュの側頭部にライダーキックを放った。

「グアアアアア!!」

スマッシュは炎に包まれ、爆発した。

※

「先輩!! 大丈夫ですか!?!」

黄泉川は背後からの声に振り返る。見ると、警備員アンチスギルの特殊車両と共に後輩の鉄装綴里がこちらに走り寄ってきた。

「ああ、足を怪我してるけど、大丈夫じゃん」

「よかった・・・、で、通報にあつた怪物はどこに!？」

「あー、それがな・・・」

と言つて再び振り向く。そこにはドライバーからグレートクロー  
ズドラゴンを抜き取り

元の姿に戻つた万丈の姿があつた。

「えっと・・・あの男性が怪物、なんですか？」

「いや、アイツは・・・」

一瞬説明に迷う。どう説明したものかと。すると

「何で戻らねえんだ？ちゃんと倒したはずなのによー」

と倒れているスマツシユの前から万丈の独り言が聞こえた。

「どうした万丈？」

「いや、スマツシユ倒したんだけど、元の姿に戻らなくてよ」

「なに!？」

慌てて駆け寄ろうとするが、足に激痛が走る。

「せ、先輩!」

「すまん鉄装、肩貸してくれ」

言われた鉄装は黄泉川を支え、先ほどからあれー?とつぶやいてい  
る男の下へ向かう。

「おい大丈夫か？」

「私はいいい、それよりこいつだ。元に戻らないつてどういうことじゃ  
んよ」

横で鉄装が、なんですかコレ!?!と驚いているが今は無視する。

「前は倒したら元に戻つたんだよ!!なんでだ?ここが東都じゃないか  
らか!?!」

「冗談じゃない!このままじゃまた暴れだすかもしれないじゃん!そ  
れに命にも関わるかも・・・」

「あーもおー!!どうしたらいいんだよ!!」

「スマツシユから成分を抜き取るんだよ。それくらい覚えとけて。」

と、聞き慣れた声が万丈を罵倒するのと、目の前のスマツシユから

成分が抜けるのは同時だった。

「戦兔!？」

「記憶喪失は俺の持ちネタだろ？いくら目立たないからってパクるんじゃないよこの馬鹿」

「・・・馬鹿ってなんだよ、せめて筋肉つけろよ!!」

そう言いながらも笑顔で戦兔の肩をどつく万丈。

「痛ってーな!まったく、その分だと特に異常はないみたいだな、万丈」

「お前こそ、その感じまったく問題なさそうだな、戦兔」

「もちろん。天才に隙はないよ?それより、スマツシュになっていた子は」

「そうだった!」

そう言つて万丈は慌てて振り返ると、先刻見た男が横たわっていた。側で容態をみていた黄泉川は、

「大丈夫、心臓は動いてるし、朦朧となってるけど意識もあるじゃん」

「そつか!よかつたあー!」

一安心、と言つた感じの万丈だったが、ハツとなって戦兔に聞く。

「それより戦兔!この世界は本当に新世界なのか?もう何が何やらわかんねえよ」

「慌てるなよ、とりあえずこの場をどうにかしねえと」

「万丈、その男がお前の言つてた友達か?」

再び鉄装の肩を借りて立ち上がった黄泉川が戦兔を見て問う。

「ああ、こいつがー!どうも、天才物理学者の桐生戦兔って言います。」

「おい!割り込んでくんなよ!」

「うるさい馬鹿、バナナやるからあっち行つてろ」

「ウツキーバナナだ!つてだから猿扱いすんじゃないやねえよ!」

「アンチスキル警備員の方ですよね?多分色々聞きたいと思いますが、事情があつて、できれば大っぴらに話したくないんです」

華麗に無視を敢行した戦兔が黄泉川に言う。公にしたくない話と  
いうのは、おそらく先ほどの怪物や万丈が変身したことだろうと黄泉川は推測した。

アソチスキル  
警備員としては、職務上万丈や戦兎と呼ばれている青年に話を聞かなくてはいけないが、それでは記録が公式に残ることになる。

黄泉川個人としては、どうであれ自身の優先すべき「子どもの命」を助けてくれた万丈に借りがある。

「・・・わかった。私と、そいつを拾った教員とで聞こう」

「助かります。・・・おい万丈、もう喋っていいからそのへん片付けるぞ」

「おう！・・・ってバナナは？」

「あるわけないだろ。というか、俺もお前も無一文だ」

「うそーん？」

と話ながら大きな瓦礫をどかしていく2人を見て黄泉川はつぶやく。

「なんというか、『いいコンビ』じゃん」

その直後、避難誘導を終えた黒子と追いかけてきた美琴が現れて、

「ちよつと、話をまとめないでもらえますの？ 私達の聴取も終わってないんですよ？」

「なに？もう終わってるの!?せつかく全速力で来たのに!!」

「おい戦兎！急に人が出てきたし、なんかバチバチいってんぞ!?宇宙人か!?!」

「・・・最っ悪だ・・・」



### 第三章 幻想御手

#### 第七話 いままでと、これからと

「つまり、じゃん」

黄泉川はそう言うて前を見る。場所は警備員アンチスキルの詰め所、ではなく、黄泉川と小萌が働いているとある高校の一教室だった。

「桐生と万丈はこことは違う世界にいて、その世界を侵略しようとしていた宇宙人を倒し、戦争とか高い壁やらをなかったことにするため、『新世界』を作った、と」

「概ねそんなところですよ。」

黄泉川のまどめに戦兔がうなずく。教室は普段は使われていないのか、机や椅子がまばらにしかなく、皆思い思いの場所に座っていた。戦兔は自分の前方、教壇の上に椅子を置き、椅子に座っていた黄泉川の隣、足が届いていない小萌が口を開く。

「万丈ちゃんや戦兔ちゃんがいた世界というのは、10年前には火星への有人飛行が実現してるんですよ？学園都市の技術でもまだ成しえていないことを」

「はい。そして火星で見つけたパンドラボックスの影響でスカイウォールが出現。それを取り戻しにやってきた地球外生命体によって地球は壊滅寸前まで追い込まれました。」

戦兔にとってはつい1日前までの世界の出来事を、改めて説明する。

「・・・小萌先生、どう思うじゃん？」

「どうもこうも、夢物語の世迷言にしか聞こえませんが、実際にああいう怪物が現れた以上」

「信じざるを得ない、じゃんね」

教員陣の意見がまとまった。戦兔としてはこの2人に信じてもらえないと話が進まないなので内心胸を撫で下ろした。

「で、スマッシュユってというのは結局何なの？」

教室の窓側、ジャッジメント風紀委員の事務所からやってきた美琴が戦兔に聞く。

その隣や後ろには黒子、初春、涙子の3人も座っていた。

「人間がネビュラガスを体内に取り込むことによって急激な細胞分裂と細胞変質がおき、一定値を超えて変異した姿だ。スマツシユになると多くの人間は自我を失い、強い闘争精神を持つようになる。」

「つまり、暴走するということですか?」

「そうだ。ただし一定のハザードレベルであればスマツシユに変身することはしない。」

「ハザードレベル?」

聞きなれない単語に初春が聞き返す。

「ハザードレベルっていうのは、あれだよ、体に秘められたすげーパワーだ」

「ちがうよ馬鹿。話がこじれるから黙ってる。……ハザードレベルは、ネビュラガスに対する耐性値だ。これが高いとネビュラガスの症状を抑えることが出来る」

「病気に対する抗体、みたいなものですわね」

「ああ。だが病気と決定的に違うのは、ハザードレベル1、つまりほとんど耐性のない人間がガスを摂取すると……死ぬ」

戦兎のその言葉に万丈を除いた全員に驚きが走る。万丈は相手にされないことに拗ねたのか、美琴たちの後ろ側の席に座り、再会したばかりのグレートクロードドラゴンを撫でている。

美琴の後ろにいた涙子が昼間にも抱いた疑問を聞く。

「何でそんなものが学園都市にあるんですか?そのガスって戦兎さんの世界にしかないものなんですよね?」

「それはわからない。だが、少なくともこの街の学生がネビュラガスを吸って死ぬことはほぼないと思う」

「何でそんなことがわかるじゃん?」

黄泉川の発言に戦兎はビルドフォンを取り出す。そして、

「万丈、ドラゴンを貸してくれ」

「ん?おお」

とじやれていたドラゴンに「いけ」と言う。クロードドラゴンは空中で旋回し、戦兎の近くまで飛んていった。

「ちよーつとごめんなー」

そう言つて戦兎はビルドフォンから伸びたコードの端子をドラゴンのボディに差し込む。すると

「プロジェクトですわね」

「何だよコレ！めっちゃ便利だな」

はしやぐ万丈をよそに、ビルドフォンを操作。廊下側の壁に映し出だされたのは広場に出たスマッシュと繁華街のスマッシュに変身した学生のデータだった。

「これは？」

「さっきの男と、一件目の変身者の身体をスキャンした画像です。」

「一件目に関しては桐生さんに頼まれて病院から譲ってもらいました」

戦兎の言葉に初春が補足する。

「これがガスとどんな関係がありますの？」

「この二人の脳や細胞の性質にはいくつかの共通点があった。それに、これを見てくれ」

「これは・・・アンタの身体データ？」

英語表記の戦兎の名前を見た美琴の言葉に戦兎は首肯する。

「そうだ。俺の身体のスキャンデータなんだが、二人の共通点が俺の身体にもあることがわかったんだ。つまり、この共通点によつて一定のハザードレベルを保っている、というのが俺の仮説だ。」

「どういうことじゃん？お前と、いわば違う世界の学生になんで共通点が・・・」

問う黄泉川に対し、席を立った小萌が戦兎とほか二人のデータを見比べ、言う。

「これ・・・カリキュラムの初期段階に投与する薬品による反応みたいですね」

「カリキュラムというと、超能力開発のことですね？・・・そうか、偶発的かどうかはわからないけど、その薬品による反応がハザードレベルを擬似的に上昇させて、スマッシュに変身できるまでになったということか」

小萌の言葉に戦兎のアンテナが立つ。そんな戦兎の言葉に美琴は気付いたことを聞いた。

「てことは、アンタもそのガスを吸ったことがあるってこと?」

「ああ。万丈も俺も、ネビュラガスを投与されてる。潜在的な適応力と、少量ずつ段階的な投与によつてハザードレベルが上がってるんだ。だから人間の姿のまままでいられるしー」

そう言いながら椅子の横においていたビルドドライバーを掲げ

「こいつを使つて変身できる。」

「仮面ライダー、でしたっけ」

涙子の言葉に黄泉川が反応する。

「そのハザードレベルっていうのが高ければ、誰でもそのライダーになれるってことじゃん?」

「理論上は可能です。ただ、ライダーシステムは人間の感情によつて大きく左右されるものなので、そう簡単には変身できません。それに……」

「ん?」

ハザードレベルが高く、使いこなせたとしても、過度な使用や急激なハザードレベルの上昇は、場合によつては変身者の消滅の恐れがある。

それはかつての「海」仮面ライダーグリスや幻さん「仮面ライダーローグのように。」

「どうしたんですか? 戦兎さん」

かつて散つていった仲間のことを思い出し、思わず顔をしかめていた戦兎に涙子が声をかける。

いや、なんでもないよ、と言い黄泉川に向き直る。

「俺から話せるのは以上です。突拍子な話だとは思いますが、信じてもらえますか?」

戦兎の言葉にまず声を上げたのは涙子だった。

「私信じますよ。話の内容はよくわからなかったけど、戦兎さんと万丈さんは嘘をつくような人じゃないと思います」

「私も、実際に怪物がいるわけですし、信じられると思います。」

涙子に続き初春も同意する。

「・・・正直、まだ疑わしくは思っていますの。」

黒子は風紀委員ジヤッジメントという立場からか、慎重に言葉を紡ぐ。

「ただ、あのスマッシュやあなた方の力は現実に存在してるものです。・・・わたくしの目で見たものなら信じるより他ありませんわ」

「白井さん！」

黒子の言葉に初春と涙子は嬉しそうに笑う。

「私は」

とそんな中、美琴が戦兎を見据えて言葉を作った。

「正直アンタたちがどこの住人でもいい。でも、あんな怪物がまた暴れるのは許せない。罪のない人が傷つくなんてもつてのほかよ」

「お姉様・・・」

「だから、アンタたちが元の世界とやらに帰るにしても、怪物騒ぎにケリをつけてからにして。そのためならファンタジーだろうがオカルトだろうが信じてやるわよ」

「ああ、約束する。」

美琴の言葉に戦兎はしっかりと頷いた。それを見た美琴は再びを腕を組み座った。

戦兎は再び黄泉川の方へ振り返り言う。

「わかってほしいのは、俺たちは学園都市に対して敵意はありません。スマッシュが発生する原因を突き止め、この世界に来たプロセスを解明して新世界に行くことだけが望みなんです」

「・・・敵意がないのはわかってるじゃん。子供たちを助けてくれた恩もある・・・。だが、身元不明の人間二人がこの街で生きていくのは厳しいじゃん」

そう言って黄泉川は腕を組み、唸る。

と、はつとなって何かに気づいたかのように携帯端末を操作した初春が

「あの一！」

「どうしたんですの？初春」

「桐生さんって、物理学者ということとは頭いいんですね!？」

「もちろん。天っ才だからな」

なぜためるじゃん・・・とあきれ黄泉川だったが、お構い無しに初春は言う。

「今、うちの中学校で臨時の教員枠があるのを思い出しまして、特別採用って形で優秀な人材を探しているらしいんですけど」

「本当？初春？」

「はい、しかも採用試験に受ければ免許も必要ないそうです。上手すぎる話ですけど、これなら」

初春の言葉に、しかし小萌が首を振る。

「そもそもお二人は学園都市の住民権を持っていません。ゲストIDがあればまだ言い訳も聞きますが・・・」

その言葉に初春と涙子がしゅんとなる。それを見た黄泉川が

「・・・しゃあないっ！IDの件はわたしがどうにかするじゃん」

「ほ、本当ですか!？」

戦兎の言葉に黄泉川はうなずく。

「桐生には子供を救ってもらったし、万丈には命を救ってもらった。借りはキチンと返すのが私のモットーじゃん」

「あ、ありがとうございます！」

お前も頭下げなさいよ、と万丈に言っ二人で頭を下げる。

「ところで、アンタはその試験受ければいいけど、そっちのアンタはどうすんの？同じく試験受けるの？」

と美琴が万丈を示して言った。

「いや、万丈の知能はサル並だ。むしろ万丈を学校に通わせてちゃんとした知性を持ってほしいくらいだからな」

「だからサルはやめろっつってんだろ！」

「それについてなんだがな」

わめく万丈に黄泉川は言う。

「万丈、お前は警備員アンチスキルに入れ」

「はあ？」

疑問符を浮かべる万丈に黄泉川は言う

「もしまたスマッシュが現れた時、即戦力になる奴が必要だろ？それ

に、その腕っ節なら警備員アンチスキルにぴったりじゃん」

「そうだな。お前みたいな筋肉馬鹿雇ってくれるだけでもありがたい  
と思いなさいよ」

「なんか馬鹿にされている気がするけど・・・ま、いいか」

(バカだわ)

(バカですね)

(バカだなー)

(バカですわ)

(おバカなのです)

学園都市の面々にも万丈龍我という男のことを理解してもらえた。  
そんな形で。

戦兔と万丈の今後の方針は決まっていたのであった。

## 第八話 誰だつて戸惑いますわ

「さあ、授業を始めようか」

曆上では7月11日。戦兔と万丈が学園都市で目覚めてからはや一週間と2日が経ち、戦兔は 初春と涙子の通う柵川中学校の教壇に立っていた。

「桐生先生。自己紹介をと言ったのですが・・・」

「あ、すいません」

隣の教員―大園先生の言葉に頭を下げ、改めて教室を見渡す。スタンダードなセーラー服 に身を包んだ子供たちがぼかん、とした表情でこちらを見ていた。

「改めて、今日から理科分野を担当する桐生戦兔です。趣味は発明、好きなものは卵焼き（甘め） 科学に関することなら何でも聞いてください。よろしく」

「桐生先生は、特別採用枠で着任しました。まだ学園都市に来たばかりらしいので、皆も仲良くしてくれな」

「じゃあ先生、私はこれで、と言って大園先生が教室から出る。

「さて、改めて授業を始めようか」

「そう言つて戦兔は黒板に向かった。

〜10分後〜

「つまり、地球上の重力加速度は9. 80665 m / s<sup>2</sup>と  
いうことがわかる。これにより地球の重力を求めるには」

「あのー、戦・・・桐生先生」

と涙子が挙手し戦兔に呼びかける。

「ん？どうした佐天」

例の一件以来、何かと話す機会の多かつた涙子に答える戦兔、もちろん教室内の生徒は彼が仮面ライダーとは知らない。

「私たち中1なので、重力加速度？とかまだやってないんですけど・・・」

「うそーん・・・じゃあ中学生つてなにやるんだ？」

うーんと唸り、教科書をめくる戦兔は、あるページで手を止める。



「・・・これいいな」

そう言って生徒たちの方に向き直り、

「さあ！実験を始めようか！」

※

「お姉様。お姉様!!」

「うん？」

常盤台中学の食堂。その一角で昼食を摂っていた黒子は、目の前の美琴に声をかけた。

「どうしましたの？ここ数日心ここに在らずと言った感じですよ？」

「そんなこと・・・ないわよ」

そう言って美琴は残っていたスープを飲み干す。お嬢様学校である常盤台中学の食事は、高級店のランチにも引けを取らないはずだが、何故だかあまり美味しく感じなかった。

「あの2人、さ」

「2人？ああ、桐生さんと万丈さんですか？」

「うん。あれからも何度かスマッシュと戦ってたじゃない？」

戦兔と万丈は、あの話し合いの後から学園都市で行動を開始していた。戦兔は教員になるための試験を受け（満点合格で即採用だったらしい）、黄泉川の紹介で格安のマンションの一室（なんでも建築学系大学の実証実験で作られたらしく、破格の値段らしい）に住居を構え、着々と生活の準備をしていた。

万丈は黄泉川の後輩として警備員アンチスキルに入り、研修をしていた。持ち前の体力と素直さで仕事をこなし、警備員内でも評判がいいという。

そして、その間にもさらに三件、スマッシュが、現れる事件が発生し、その度に2人は変身して戦った。

「スマッシュの事件はなにぶん被害が大きくなりがちですし、それと戦うお二人もかなりお目立ちになりますので、巷では都市伝説化していると佐天さんがおっしゃってましたわ」

「この間のブレッドスマッシュ？とかね。辺り構わず飛ぶ銃弾を磁力

で集めたから良かったものの、放っておいたら辺り一面蜂の巣状態だったわよ」

スマツシユはそれぞれ採れる成分から個体名をつけるらしく、先のブレットドスマツシユからはガトリングのボトルが採取できたらしい。「ネビュラガスを摂取するとスマツシユになる。今までの人たちは全員そうだったでしょ？」

「？」

「それがどうかしまして？」

「うん。それって、私や黒子もそうなる可能性がある、ってことなんだって思うと、なんかね……」

「それは……」

美琴の言葉に黒子は口をつむぐ。スマツシユに変身したのは学生ということ以外の共通点は見つからず、ランダムにガスを投与してるといなのが戦兎の見解。しかし、誰がなんのためにやっているのか、原因の尻尾も掴めていない状態だ。

「ううん、それだけじゃない。もしもあの時……始めてスマツシユが現れた時、あのガスが、男じゃなくて子どもに向かっていたらって思ったらさ」

美琴はスプーンを弄びながら、言った。

「ねえ黒子、そうなってもアイツらはいつも通りスマツシユを倒すのかな」

「……わかりませんわ。彼らとはまだ知り合ったばかりですもの。それに、ここ最近立て続けにいろいろなことが起きてますの。誰だっ戸惑いますわ」

「そうよね……でも」

そうやって美琴は窓を見る。

「そうなったら私はどうするんだろ……」

その言葉に、黒子はなにも言えなかった。

「実験の結果と、疑問点をまとめてくること。あ、明日からは普通に授業できるようにしとくからそのつもりで」

言って、戦兎は教室を出る。時刻は昼時。今日の戦兎の受け持ちは

これで終了なのでここから先は職員室で授業の準備をするだけとなる。

メシどうすっかなあと考えていると後ろから声をかけられた。

「桐生先生、お昼一緒に食べませんか？」

振り返ると初春と涙子がそれぞれ弁当箱を持って声をかけてきた。

「佐天に初春か。一緒に食べたいのは山々なんだけど、このあとやることがあつてさ」

「やることつて、授業の準備とかですか？」

初春の言葉に戦兎は首を振る。

「それもあるけど、今のうちにこのあいだのボトルの解析や、前使つた発明品の修理をしたくてさ。午後から科学実験室を貸してもらおう予定なんだ」

勿論その許可を取った大園先生には、授業の準備と伝えたのだが

「ボトルの解析ですか。それならしょうがないですね」

「桐生さん、あれ関係になると周り見えなくなりますからね・・・」

初春は先日スマッシュを倒した時のことを思い出して言った。

「いやあれは、ベストマッチになる組み合わせのボトルが手に入ったからテンション上がるうーっ」ってなっただけで」

「そのことを言ってるんですよ。万丈さんに引きずられて帰るまで気付かないとか重症です」

「す」

「す、すいません・・・」

と謝る戦兎をよそにあーあ、と涙子は言う。

「先生誘えなかったって言ったら皆がっかりするかなあ」

「そうですね、皆さん先生とお話したそうでしたから」

「なんで？」

疑問符を浮かべる戦兎に涙子は言う。

「そりゃ、あんなに楽しい授業でしたし、戦兎さんイケメンだからですよ。みんなすごい話したがつてたし、炎色反応でしたっけ？炎がいろんな色に変わって綺麗だったよねー、初春」

話したがってたし、炎色反応でしたっけ？炎がいろんな色に変わっ

て綺麗だったよねー、初春」

「はい！入れる物質によって色が変わるなんてとっても面白かったです！なんでこうなるのかなーってすごい興味が湧きました」

「あー私も！小学校の理科の実験とかは、ただ実験やって『こういう結果になりましたね』で済みいで、自分からなんで？って思うことってあまりなかったんだよね」

2人の言葉に戦兎は微笑んだ。

「科学の根底は『なんで？』っていう疑問だ。仕組みを、その本質を知りたいという気持ちから科学を発展させてきたんだ。」

ちが科学を発展させてきたんだ。」

言って、窓の外の街を見る。

「この学園都市だって、そういう純粋な気持ちから産まれたはずだ。だからこそ多くの人が笑っている街になっているんだと思う。」

が笑っている街になってるんだと思う」

「純粋な、気持ち……」

涙子のつぶやきに戦兎は頷く。

「勿論、時に科学は悪用されることもあるけど、科学は愛と平和を創るためにあるんだ。それを実感してくれたなら嬉しいけどね」

それを実感してくれたならうれしいけどね」

「愛と平和って、随分大きな話ですね」

「そんなことないさ。誰だって持つてる大事なものだよ」

言って、戦兎はビルドフォンの時計を示す。

「さっ、飯食う時間なくなっちゃうぞ？」

「本当だ！佐天さん、教室に戻りましょう！」

「えっ？ああ、うん。そうだね」

初春と涙子は元来た道を駆ける。

「先生また後でー!!」

「廊下走んなよー」

一生でまさかこのセリフ言うとはなー、と一人感慨にふけりながら見送ったせいだろう。

いつもと違う涙子の様子に、戦兎は気付くことができなかった。

※

平日昼間の学園都市は人通りが少ない。

それもそのはず、学生が人口の八割を占めているため、ほとんどが授業を受けているからだ。

だが、どの世界の学校も優等生ばかりというわけではなく。

この学園都市にもいわゆる不良は存在する。

スキルアウト、無能力者で組織された学生の集団であり、中には武装した者たちも存在する。

「万丈君。繁華街にスキルアウトの集団がいるらしい。武装はしてないから大丈夫だとは思うけど、念のため見てきてもらえないかな？」  
「了解つす」

第七学区詰所にて、腕立て伏せをしていた万丈は先輩の言葉に頷いた。時刻は午後1時過ぎ。昼どうすっかなーと考えていたのでついでに食ってくるかと立ち上がり、傍の椅子に掛けておいた支給品のベストを着る。ちなみにいつも腰に巻いているスカジャンは付けていない。仕事初日に巻いて来たら黄泉川に殴られ、置いてこいと厳命されたのだ。

「よつと」

ポケットからビルドフォンを取り出す。ちなみにこれは戦兎が作成した二号機である。学園都市中を走り回った戦兎が研究機関から出た廃棄機材やら廃棄家電やらを片っ端から集めて（運搬したのは誰だと思う？ 万丈だ）、新居の大部分をラボに改装した際、

「お前絶対迷うから」

と言って有り合わせの機材で作ってしまったのだ。ちなみに本来はライオンフルボトルを装填して使用するのだが、現状準備できないのでドラゴンフルボトルで代用できるように設計してあるらしい。万丈には全く仕組みを理解できないが、移動手段があるのは素直に喜ばしいことだった。

前の文章と同じ事が書かれていますよ

カチャカチャとドラゴンフルボトルを振り、ボトルスロットに差し

込んで放る。

【ビルドチェンジ】

という音声と共に携帯モードのビルドフォンからバイク形態のマシンビルダーに変形した。ハンドルにかかっているヘルメットを被つて、またがり、出発する。

『ツギノシンゴウヲミギヘ』

ヘルメットに内蔵されたスピーカーからの指示通り進む。これも戦兔がつけた機能で、警備員アンチスキルの通報システムからビルドフォンに座標情報が送られ、それをヘルメット内蔵のナビゲーションシステムによって案内するものだ。

戦兔曰く、

「万が一迷ってまた逮捕されて脱獄されても困る」

とのことらしい。

『モクテキチシュウヘンデス』

と言われ辺りを見渡すと、それっぽい集団がゲームセンターの前でたむろっているのが見えた。

「オイお前ら、昼間っから何やってんだ？」

「あん？」

4人のスキルアウトが一人の学生を囲んでいる。ひ弱そうな男子学生を見ると唇が切れているのか、血が滲んでいた。

「・・・なんもしてねえよ。ちよつと話してただけだ。なあ？」

「・・・はい」

スキルアウトの一人の言葉に男子学生は震えた声で答える。どうみても何かがあつたことは明らかだ。

「なんもしてねえわけねえだろ。コイツ怪我してんじゃねえか」

「本人がなんもなかつたって言ってるんだろ。しつけえんだよ」

「オイ!!!・・・ったく」

万丈の言葉に答えつつ、スキルアウトの四人は去っていった。万丈は目の前の男子学生に向き直ると。

「大丈夫か？あいつらに何されてた？」

万丈の言葉に男子学生は、本人の物なのか落ちていたカバンを拾い

上げ

「・・・来るのが遅いんだよ。くそっ」

と恨むような声色で万丈に言い放ち、早足でスキルアウトとは逆方向に去っていった。

「なんだあいつ・・・」

と言いつつ万丈は辺りを見回す。すると、小さい長方形の白い物体・・・USBメモリが落ちていた。側面には名前を書く欄のだろう。英語で何か書いてあった。

「なんだこれ、れぼる、うぷぷえあー?」

ローマ字読みすらままならない万丈も、直前の出来事からの推測はできるらしく、

「これって、あいつのか?」

と呟き、万丈はマシンビルダーをビルドフォンに戻し、男子学生の方へ駆けていった。スキルアウトに怪我でもさせられたのか、学生の歩くスピードは遅く、そう遠くは離れてい なかった。

「おーい!!」

万丈の呼びかけに男子学生は振り返る。めんどくさそうな表情のまま男子学生は言う。

「なんですか・・・?急いでいるんですけど」

「わりいな。これ落ちてたんだけどお前のじゃないかって思って」

万丈は先ほど拾ったUSBメモリを見せる。

「ツ!!返せ!!!」

男子学生は血相を変えて万丈の手からメモリをひったくる。

「なんだよ、せつかく拾ったってやったのに・・・、そんなに大事なモンなのか?」

「・・・あんたには関係ない」

そう言っつて踵を返し、再び歩いて行った。

「変な奴」

と言っつて万丈は元来た道を引き返す。大通りまで歩いたところで見知った中学生がいるのを見つけた。

「あれ?みかさじゃん。サボりかー?」

常盤台の制服を着た少女は万丈を見ると、噛みつくように言う。

「御坂よみ・さ・か!!変な覚え方するな!!」

「あれ?そうだっけ?」

そう言っつて万丈は美琴に近づく。

「何よアンタ、仕事中華なんじゃないの?」

「おう。今さっきそこでスキルマイトの連中がうろついてるって言われてな」

「スキルアウトでしょ?どういう言い間違いよ・・・」

「お前は何やってんだ?サボつちやダメだろ学校は」

「サボってないわよ。うちの学校は今の時期夏休み前の短縮授業だから午前で終わりなの」

「へえ・・・あれ?いつもの連中は一緒じゃねえのか?黒井とか。」

「・・・わざとやってんじゃないでしょうね」

「はあ?なにがだよ」

「・・・はあ。黒子なら風紀委員の方で呼び出しがあるとかでそっちに行ってる」

あと白井よ、白井。と言っつて美琴は万丈を改めて見る。

「・・・意外と似合ってるわね、それ」

と言っつて万丈の服装——警備員アンチスキルの制服であるベストを示す

「そうか?まあ昔東都兵の服かつぱらった時もこんな着たしなあ」

「かつぱらったって、どんな生活してたのよアンタ・・・」

げんなりしている美琴に、脱獄してたとか言わない方がいいよなあと考えていると、万丈のポケットからビルドフォンの着信音が鳴った「もしもし?」

『万丈か、今どこにいるじゃん?』

「黄泉川さんか。通報があった場所らへんにいる。今から戻るぜ」

『通報?ああ、さっきのスキルアウトか。それより、そこから少し離れた地点から通報があったらしい。スマッシュの可能性もあるから念のため向かってくれ』

「おお、わかった」

『お前の携帯に位置情報を送ったじゃん。詰所からも何人か向かわせ



るからな、変身する事態になったら周りに見られないよう注意しろよ』

「了解」

と言って電話を切り、再びビルドフォンに装填するボトルを取り出した。

「何かあったの？」

「ああ、なんかあったらしくて、とりあえず向かってくれってさ」

「・・・スマッシュユ？」

万丈の言葉に美琴が質問する。

「いや、まだわかんねえらしい。まあ行ってみればわかんだろ」

と言ってビルドフォンにドラゴンフルボトルを差し込み道路へ放る。

【ビルドチェンジ】

「じやなみかさ。帰り気をつけろよ」

「み・さ・か!!じやなくて、私もついていく」

「はあ？」

ヘルメットを被った万丈が美琴に行った。

「もしスマッシュユだったら、何か役に立てるかもしれないでしょ？」

「いやでも、戦兔から、お前らなるべく巻き込むって言われてるし」

「なるべくってことなら絶対じゃないんでしょ？それにアンタ馬鹿だから正体ばれるかもしれないし」

「馬鹿っていうなよ!!せめて筋肉つけろ!つたく・・・」

観念したかのようにマシンビルダーのシート下スペースから予備のヘルメットを取り出し、美琴に投げる。

「めんどくせえからもういいや。さっさと乗れよ」

「わかってるわよ」

ちよろい、そう思いながら美琴はマシンビルダーの後ろに腰掛けた。

※

「万丈さんに・・・お姉さま!?!」

数分後。

黄泉川に言われた場所には風紀委員の腕章をつけた黒子がいた。

「おー黒、じゃなかった白井。なんでここにいるんだ？」

「通報があったので来ましたの。それより!!」

と言つてマシンビルダーから降りた美琴の前にテレポートする。

「お姉さま!!黒子というものがあらながらどうして万丈さんのバイクに相乗りしておりますの!?!」

「どうしてって、たまたまあいつに会つて、事件だつて言うから……」  
「ならば!!わたくしに一声お声がけしてくださればいいのに!!一瞬でお送りしましたのに!!」

「いやアンタ、そこは『事件に首を突っ込むのはおよしになってくださいませ』とか言わないのね」

「……それもそうですわね。ではお姉さま、ここは危険なので黒子が送つて差し上げますわー!!」

と言つて抱き着こうとする黒子だったが。

「やめなさいっ!!」

バチッ!という音と共に雷撃を食らい、地面に突っ伏した。

「おおー、すげー、ビリビリだ」

「ビリビリ言うな!で黒子、何があったの?」

慣れているのか、既に復帰した黒子は万丈と美琴に言う。

「最近多発している爆発事件ですわ。これで五件目になりますの」

「ああ、例のあれね」

2人が話している事件というのは、ここ最近第7学区を中心に発生している爆発物事件のことだ。いずれの事件も怪我人は出ていないが、爆発の規模は着実に大きくなってきているという。

「そんなのあったかあ?」

風紀委員の黒子ですら知つてる情報を、入りたてとはいえ警備員の万丈が知らないはずはない。ちゃんと仕事してるのかコイツ、と美琴が思っていると、黒子が事件のあらましを話し始めた。

「ここ数日で5件、第七学区の公園やゴミ捨て場などで爆発物の爆破が相次いでいますの。どれも小規模なものだけが人は出ておりませ

んが、事件の頻度や少しずつ大きくなっていく爆発の規模に、<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員では警戒と調査に当たってますわ」

「愉快犯だとしても、笑えない話ね・・・犯人の目星はついてるの？」  
「昨日、ようやく手がかりがつかめましたの。グラビトンってご存知ですか？」

「ぐらびとん？」

「重力子のことだっけ？」

万丈がわかるはずもなくおうむ返しし、美琴は正解を言い当てる。黒子は頷いて続きを話した。

「どのケースも、爆発の直前に重力子の急激な加速を衛星が確認していましたの。どうやらアルミを起点に重力子の速度を爆発的に加速させて、一気に周囲にまき散らす。つまりアルミを爆弾に変えていた、ということですよ」

「なんだそれ、あぶねえな。アルミって言ったら缶とかのアルミだろ？」

「ジュースの缶が爆弾になるなんて、物騒な話ね。でもなんでアルミなの？」

「さあ、そこまでは・・・」

「ふうん・・・、まあでも、それってつまり能力者の仕業ってことでしょ？なら学園都市の書庫<sup>バンク</sup>を検索すれば一発じゃない。すべての学生の能力データが登録されているんだから。」

美琴の指摘に黒子は頷く。

「勿論検索しましたわ。該当する能力は量子変速。それもただのアルミを爆弾にするほどの能力者となると、レベル4の生徒一人だけ」  
「だったらそいつ捕まえればいいじゃねえか」

何とか話の流れを聞いていた万丈が言うが、黒子は首を横に振った。

「ところが、その生徒にはアリバイがありますの。ずっと入院していて、一連の事件を起こすのは不可能なのですのよ」

「なるほど、それでどんづまりってわけね」

「ええ。まさか書庫<sup>バンク</sup>のデータに不備があるとも思えませんし・・・

警備員アシナスキルでも頭を抱えているとのことですね

「・・・ひよつとして、まだ登録されていない能力者がいる!!とか」「んー」

美琴の現実離れた意見に黒子は閉口する。言った美琴は少しだけテンションが上がっている様子だ。

「ねえ、犯人見つけるの私も手伝ってあげようか?」

「結構ですの」

美琴の提案を黒子は頑として拒否する。

「?なんでだよ?コイツ強いし手伝ってもらった方がいいんじゃないかね?」

万丈の気楽な言葉に額に手をあてつつ、黒子は言った。

「いいですよの万丈さん。お姉さまは今『これってちよつと面白いかも。相手次第じゃ腕試ししてやろうじゃない』などとお考えですの」

「そ、そんなこと思ってたー」

「とぼけても駄目ですの。黒子はお見通しですの」

視線を逸らす美琴に黒子は言う。

「それに、いつも申し上げている通りお姉さまはあくまでも一般人。

治安維持活動はー」

「『風紀委員ジャッジメントに任せていただきたいんですの』でしょ?わかってるって」

「いたずらな好奇心や興味本位で勤まるほど、風紀委員ジャッジメントの仕事は甘くないんですの。そもそもお姉さまは常日頃から常盤台のエースという自覚が足りませんわ」

「そんなの今は関係ないじゃー」

「いえ!!」

言いかけの美琴にビシツ!!と指を突き付け黒子は制する。

「いい機会だからはっきり言っておきます。一つ、不用意に事件に関わろうとしないこと!!二つ、事件に遭遇しても風紀委員ジャッジメントが来るのを待つことー」

「それはアンタたちが来るのが遅いだけじゃない!!」

「三つ!スカートの下に短パンを履かないこと!!」

「それはまったく関係ないでしょうが!!」

「はあはあ、と息を切らしながら反論した美琴に黒子は追い打ちをかける。

「いーえ、そもそもそういう身だしなみからして常盤台中学の品格を台無しにしていますの。短パンならまだマシですがお姉様ったら寝間着は子供っぽいパステル柄、下着ですら女兒向けキャラものやフルーツ柄、これではレベル5の看板に傷が付きかねるところか、女子中学生としてのセンスすら欠落していると思われてしまいますわ。」

「あ、アンタねえ・・・」

バチツつと美琴の髪から紫電が弾ける。通常感覚と知性を持った人間であれば不用意なことは言わず、一目散に逃げるだろう。

だが、命知らずにもその不用意な発言をしよう、この場の危険性がわかってない黒子以外の人間がいるとしたら、誰だと思う？

「それって、イチゴのパンツとかか？」

万丈だ。

「いえ、イチゴ柄ならまだよかったですの。お姉様ったら先週もゲコ太のパンツなんていう今時小学生でも履かないような下着を買ってきましたの」

「ふーん、ま、パンツなんか誰が見るわけでもねえんだし、幼稚な奴でもいいんじゃないの？」

「何を言ってますの万丈さん！常盤台のエースが小学生向けのゲコ太パンツを履いてるなんて知られては、レベル5としての威厳が保てませんの。それに――」

「・・・いい加減にしろツ!!!」

「ギャアアアア!?!」

バチイ!!

美琴の言葉と共に、電撃が馬鹿二人に走った。

## 第九話 力の意味

「これは、先輩の友達の前氏が実際に遭遇したって話です」  
「ある蒸し暑い夏の夜、その彼氏さんが人気のない公園を通りかかると、一人たたずんでいた女の人に、駅までの道のりを聞かれたんです。」

「・・・その彼氏さんが快く道順を説明していると、どこか虚ろなその女の人が、ふわっと手を挙げて・・・突然ガバーツと!!」  
「・・・ブラウスを脱いだんです」

「ただの露出狂の話じゃねえか」

放課後の科学実験室。暗室のようにカーテンを閉め切った部屋内で、涙子の話を聞いていた戦兎が言った。

「えー？、実際遭遇したらって思うと怖くないですか？いきなり脱ぎ始める都市伝説脱ぎ女!!」

「そりゃあ、実際に会ったら怖いかもしれませんが・・・」

「いや怖くないでしょ。どう考えてもそれただの変質者だし」

「じゃあじゃあ、こんな話はどうですか？」

と戦兎の言葉にかばんからPCを取り出した初春が画面を示す。

「風力発電のプロペラが逆回転するとき、街に異変が起きる!!」

「夕方4時44分に学区をまたいではいけない！幻の虚数学区に迷い込むー!」

画面をのぞき込んだ涙子も一緒になって読み上げる。やれやれといった面持ちで戦兎も画面上の文字を読んだ。

「使うだけで能力レベルが上がる道具、レベルアップ・・・、内容が環境によって変化しているのは面白いと思うけど 都市伝説なんていかにも非科学的な話、学園都市にもあるんだな」

「桐生先生の世界にもあったんですか？都市伝説」

「あったあった。ていうか俺自身が都市伝説だったよ」

「どういうことですか？」

涙子の言葉に配線をはんだで繋げながら、かつての仲間の一人が書いた記事を思い出しつつ戦兎は答える。

『『東都に出現する怪物から市民を守る正義のヒーロー仮面ライダー』っていう見出しだったかな、たしか』

「あーなるほど」

得心したように涙子が頷く。それを見た初春が苦笑しながら。

「それなら、先生はこの世界でも都市伝説になっていきますよ。ほら」

そう言っただけのページを見せる。そこにはおどろおどろしい文字で

『学園都市の秘密実験によって生まれた怪物、それと戦う謎の仮面戦士』

「あー・・・」

「写真も結構あるねー。どれもピンボケしてるけど」

添付してある画像ファイルを流し見しながら涙子が言う。どこから撮影したのかわからないが、走りながら撮ったのかビルド やクローズの姿はボケてはつきり見えない。

「まあこれくらいなら問題ない。俺や万丈の正体がバレると色々面倒くさいけど、噂レベルならむしろ注意喚起に繋がるかもしれないな」

「逆に興味を煽って現場にうろつかれても困りますけどねえ・・・ところで先生、何作ってるんですか？」

「よつくぞ聞いてくれましたっ!!!」

それまでの冷静さが嘘かのように、先程組み上げたガジェットを二人に示す。

「前の戦いでビルドのパワーアップアイテムは破損してしまい、修復が必要だったんだが、ついに最初の一つが修理完了したんだ!!」

そう言っただけで手に握った銀色のガジェットに頬ずりする。

「修復って、そんな簡単にできるものなんですか？」

「その辺は、念のためビルドフォンに保存していた設計データと、この学園都市の技術で何とかなかった。やっぱり半端ないなこの街は」

工具やパソコンなどをしまひながらしみじみと戦兔は言う。

「先生のいた世界の技術って、仮面ライダーとかスマッシュとか、学園都市の技術でも現状再現が難しいものだと思うんですけど・・・」

「いや、この学園都市でも一からベルトを作るくらいの技術レベルはあると思うよ。」

「そうなんですか?」

初春の言葉に戦兔が答える。

アンチスキル  
「警備員の資料にあったパワードスーツなんかの技術を応用すれば十分可能だ。もつとも、武装しなくても十分強い能力者がいることや、何よりネビュラガスをほとんどの科学者が知らない時点でだいぶ難しいけどな」

「能力・・・」

「佐天さん?」

呟く涙子に初春が聞く。

「・・・いやー、私ってレベル0でしょ?スマッシュのこととか、それ以外にも、こう、色々な事件が起こっているのに何もできないのが、なんというか・・・」

どこか苦い笑顔で言う涙子に、戦兔は何ともなしに言う。

「能力の優劣が、イコール人間の優劣に繋がるわけじゃないと思うよ?もつと大事なものを佐天は持つてるじゃないか」

それを聞いた初春も同様に応える。

「そうですね。私だってレベル1ですし、これからレベルが上がる可能性だってなくはないんですから」

「・・・戦兔さんには、わからないですよ」

二人の言葉に普段とは違い俯きながら涙子は言う。

「ん?」

「仮面ライダーなんていう力を持つてる戦兔さんには、何もできない無力さなんてわからないです!」

叫ぶように言つて涙子はそのまま教室を出て行ってしまった。

「ちよっ、佐天さん!待ってください!」

初春が慌てた様子で後を追いかける。実験室には戦兔一人が取り残されていた。

「・・・えーっと、何かまずいこと言っちゃったかな」



眩きつつフリーズしていてもしょうがないし、この後の予定もある。机の上の工具類を片付けていると、荷物を取りに来たのか初春が戻ってきた。

「佐天さん、鞆も持たずにどっか行っちゃいました」

肩を落とした初春に対し、悪びれるように戦兎は言う。

「ごめんな、なんかまずいこと言っちゃったかな、俺。」

「いえ、・・・でも、佐天さんに限らずこの街のレベル0は皆、何かしら負い目や引け目を感じてるのは事実です。」

「負い目？」

自分の鞆を持った初春に戦兎が尋ねた。

「親の、私たちを学園都市に送り出してくれた人の期待に応えられなかったっていう負い目だったり、全てが能力によって評価されることだったり」

「・・・それなのに『能力以外にいいところあるよ』って言われれば、まあ、怒るな普通」

苦笑する戦兎に初春は慌てたように手を振る。

「そんなことないです！私もレベル1で、能力も大したことないですけど、努力して、憧れていた風紀委員ジャッジメントに入りました。まだ半人前ですけど、いつか能力がなくても自分には力があるって証明したいと思ってます」

目を輝かせて言う初春を見て、しかし戦兎は自分の荷物を見つづけた。

「でも、みんながみんなそう思えるわけじゃないんだよな。佐天みたいに、何もできない自分を呪う奴もいる。」

どこかで聞いた話だ、と戦兎は嘯く。

かつての戦兎も、自分が――葛城巧としての自分が創ったライダーシステムが、結果的に戦争の引き金を引いたこと、その元凶が自分であると言われたとき、おのれの無力さを実感した。

「・・・先生は、この街の在り方が嫌いですか？」

初春の突然の問いかけに、戦兎は少し考えて答える。

「正直、まだこの街に来たばかりで何とも言えない、っていうのが本音

かな」  
けど

「この街が本当に『能力だけが全て』の街だったら、これだけの人が平和に暮らせないと思う。何より」

いつも通りの笑顔のまま戦兎は言う。

「初めて出会ったときの初春や佐天の、誰かを助けたいという気持ちは能力とは関係ない、お前たち自身のものだった。だから俺はお前たちを信用したんだ。」

「・・・そうですねっ！」

曇っていた初春の笑顔が晴れる。その顔を見て戦兎もくしゃつと笑った。

心地よい雰囲気か包む。その空気に当てられた穏やかな笑顔の初春が、思い出したかのように戦兎に言う。

「ところで、月詠先生とお会いするんじゃないかなかったんでしたっけ？」

「・・・あ、やっべ」

※

涙子は繁華街を歩いていた。

「(どうしよう・・・変なこと言っちゃった・・・)」

俯きながらトボトボといった感じで歩く。特に行くあてはない。最終下校時刻まではまだ時間があるものの、あまり寮から離れるとアンチスキル警備員に注意されかねない。

しかし、そんなことを気にする余裕は涙子にはなかった。

「(何で私、あんなこと言っちゃったのかな・・・。レベルのことなんて、気にしてないはずなのに)」

「……い、佐……」

「(何もできない無力さなんて、私はただの一般生徒なのに……。そりゃ、御坂さんや白井さんみたいに力があれば、できることも多いんだらうけど……)」

「ちよ……聞いて……か？、佐……？」

「(というか、御坂さんや白井さんにも負い目を感じてるのかな……やだなあ、そういうの……)」

「無視すんなよ！」

「ひゃっ!？」

思考に没頭していたのか、肩をいきなり掴まれた涙子は思わず小さい叫び声を上げた。

「何回も呼んでるのに無視するなって。つか、信号変わってるし危ねえぞ」

「万丈さん……」

アシチスキル警備員の仕事なのか、制服であるベストを着てなぜかカップラーメンの器を片手に持った万丈は、涙子の肩から手を離してスープを飲み干す。

「……ぶはー！学園都市限定だけあって美味えな！」と馳走さん。」

「あ、歩きながらカップラーメン食べてたんですか？」

器用な、などと思っていると目の前の青年は首を振った。

「ちげえよ、そのベンチで食べてたらお前を見かけて、声かけたのに全然振り向かぬえからここまで来たんだよ」

と言つて示す先には同じデザインの空容器が積まれたベンチがあった。

「いや食べ過ぎじゃないですか!？」

「あとで筋トレするから大丈夫大丈夫」

そう言つてベンチへと駆けて行き、空容器を持ってきた万丈は、ポケットからビルドフォンを取り出し

「確かこの辺に……あった」

と言つて格納アプリービルドドライバ―やボトルなどを収納しているビルドフォンの機能の一つ―を立ち上げて中にラーメンのゴミを放つていく。

「いいんですか？そんなことして」

「戦兎にバレる前にコンビニか詰所で捨てるから大丈夫だつて」

戦兎、という人名に少し忘れかけていた感情が思い出される。

改めて酷いことを言ってしまった、と思つていると。

「で？何してんだこんなところで。いろいろはどうした？」

「……初春なら戦兎さん、桐生先生と話してました」

言い間違いに突っ込む気にもなれず、暗い声で答える涙子に、バカの万丈も何かに気づく。

「なんかあったか？」

「万丈さんでもわかりますか？」

「バカにされている気がする・・・」

万丈のバカさ加減は四人の共通認識らしい。もともと美琴ほどストリートではないため万丈本人にもバカにされている気がしない。

「万丈さんは、戦兎さんのお友達なんですよね」

「友達？そんなんじゃないよ、俺とあいつはー」

いいかけて、口をつぐむ。珍しく考えるそぶりをしたと思ったら涙子に向かい

「なんつーか、そういう言葉じゃ言えない感じだな」

と言った、

「なんですかそれ」

「わかんねえよ、あいつとは色々あったからな、少なくともただのダチってわけじゃねえし、仲間ではあるんだろうけど・・・あー、わかんねえ」

ガシガシと髪をかきながら悩む万丈を見て、涙子は笑みをこぼした。

「万丈さんって、本当にバカですな」

「馬鹿って言うなよ！せめて筋肉つけろ」

「あはははっ」

「・・・たく」

怒っていた万丈だったが、涙子の笑顔を見て苦笑し、言った。

「で？なんかあったのか？それともあいつに何かされたのか？」

「えっ？あ、違うんです。戦兎さんは何もしてません。むしろ私がー」

そう言っただけ涙子は先ほどの実験室のことを話した。

「ーそれで、怒鳴って出て行っちゃって・・・よくないですよね、やっぱ」

「んー、よくわかんねえ」

「私が言うのもあれですけど、話聞いてました？」

道の真ん中で話すのもなんなので、近くのベンチに二人で腰掛けて  
いる。近くのコンビニで買った飲み物（涙子は普通の炭酸飲料、万丈  
はバック入りのプロテイン飲料だった）を手に持っている。

「要はテストの点が悪いみたいな話だろ？ま、戦兔の奴が頭いいのを  
自慢してるとつてなら一発ぶん殴つてやるよ」

「いやまあ、例えはそんな感じですけど戦兔さんはそんなことしてま  
せんよ。・・・むしろ、わたしを励ましてくれてたんだと思います。」  
ただ、

「・・・万丈さんや、御坂さん達と出会って、スマツシユの事件に巻き  
込まれたりして、不謹慎かもしれないかもしれませんがちょっとワクワクしたん  
です、私。」

「なんでだよ、スマツシユと出くわしたら危ねえし、あのビリビリだつ  
てすぐ怒つてこえーし」

「それは万丈さんが怒らせるからですよ・・・、じゃなくて」

缶の縁を指でなぞりながら言葉を続ける。

「いつもと違う、非日常というか、自分が特別なことに関わってるつて  
いうか、そんな感じがしたんです」

本当、不謹慎ですよ、と苦笑し、

「でもレベル0の私じゃ、その場所にいられても、何もできない。初春  
みたいに風紀委員ジャッジメントでもない、ただのレベル0の私じゃ」

ペコツ、と缶が少し凹む。その程度の力しかないと言うように。

「あいつな」

そんな涙子を見て、万丈は前を向きながら言った。

「前いた世界じゃ『悪魔の科学者』とか言われてたんだ」

「えっ?」

突然の言葉になんのことか分からず聞き返す涙子。

「戦兔さんのことですか?」

「おう。あいつはネビュラガスの研究をして、ライダーシステムを  
作った。それをエボルト・・・悪い奴に利用されて、結果的に俺たち  
の世界では戦争が起こっちゃったんだ」

「戦、争・・・」

日常生活では使わないその言葉を、しかし万丈はいつもと変わらぬ口調で口にした。

それが、彼がその戦いに少なからず関わっていることを物語っているかのようには。

「でもな、あいつには自分が悪魔の科学者だつていう記憶がなかった。記憶喪失つてやつだな」

「記憶喪失つて、でも」

「そ、今のあいつは自分がライダーシステムを発明したこともちゃんと覚えてる。・・・ある時に教えられたんだ。自分のせいで戦争が起きたつて」

「自分のせいで・・・」

涙子は万丈の顔を見る。目の前の青年はただ前を見てかつての出来事を語っている。

「目の前で街が壊されて、人が悲しんで、それが全部自分のせいって言われて、想像できねえけどすげえ辛いよな」

でもな、

「それでもあいつは言ったんだ。『ライダーシステムは戦争の道具じゃない、愛と平和のために使うんだ』ってな」

「愛と平和・・・」

「笑っちゃうだろ、そんなこと大真面目に言うんだぜ、あいつ」

笑いながらようやく涙子の方を見る万丈は、しかしその言葉を心底信じているかのようには言った。

「ラブ&amp;p.ピースなんて脆いものかもしれない。けど、みんながそれを胸に生きていける世界を作る。そのために力を使う。」

ポケットにしまったあるドラゴンフルボトル。愛する人の形見でもあるそれを取り出し、硬く握る。

「でもあいつは、たとえ力がなくても、仮面ライダーじゃなくてもその理想のために立ち上がるんだ。変身できるとか、できねえとか、そんなのは関係ねえ」

なぜなら

「愛と平和のために立ち上がる限り、あいつは正義のヒーローなんだ

よ」

「ヒーロー……」

「おう、だから……ん？」

と笑顔だった万丈の顔が曇る。

「どっ、どうしたんですか？」

「いや、あれー？結局何が言いてえんだっけ？」

ズコツ、と。

昔のギャグ漫画よろしくずっこけそうになった涙子に構わず、あれー？と考え込む万丈。

「……感動を返してください……」

「ま、とりあえずできることからやりやいいんじゃねえの？そしたら何か見えるかもしれねえし」

「……そう、ですかね……」

「俺みたいな奴でも誰かのために戦えるんだし、お前ならできるとて、そう言っつて万丈はバックを空にし、立ち上がる。

「さっ、そろそろ戻らねえと黄泉川にどやされるし、帰るとするか」

「サボってたんですか？仕事」

「いやーあちこちお腕回しされたから飯食ってなくてな」

「たらい回しですよ……」

んー、と体を伸ばしながら言う万丈に涙子は突っ込むが、当の万丈は意に介さずポケットのビルドフォンを取り出し、持っていたボトルをスロットに差し込んだ。

【ビルドチェンジ】

変形バイクマシンビルダーに跨り、シートからヘルメットを取り出すとそれを涙子に向かって投げた。

「わわっ、なんですか急に」

「そろそろ完全下校なんかだろ？フラフラしてっと危ねえし、送ってやるよ。乗れ」

「あ、ありがとうございます」

礼を言いつつヘルメットを被る。大人用なのか完全にフィットせず余裕があり、少し重い。

バイクの後部、ボトルを横した部分に苦勞しながら跨ると、行くぞー、という万丈の声と共に、いきなりバイクが加速した。

「!!速すぎますよー!!」

「大丈夫大丈夫、任せとけてっ!・・・あ」

キキーツと勢いよくブレーキがかけられる。街の治安を守る警備員アンチスキルとしてあるまじき運転技術を披露した万丈は、後ろの涙子に悪びれもなく言った。

「お前ん家どこ?」

「先に聞いてくださいよ!!」

やはり馬鹿だ、と涙子の中での万丈の評価が盤石のものとなったのであった。



## 第十話 都市伝説

「卵1パック120円は安いな・・・でもセール時間までには間に合わないか」

初春と分かれ、戦兎は一人第7学区の通りを歩いていた。手には書類の入った茶封筒とビルドフォンがあり、近隣のスーパーのチラシをチェックしていた。

「つーか万丈のやつ、一人で3人前も食いやがって・・・食費だけでいくらになるんだよ」

そうぼやきながらもより安い食材を探すためにサイトをはしごする戦兎。と、画面表示が受話モードに切り替わった。ディスプレイに書かれた名前は月詠小萌。

「もしもし」

「もしもし、月詠です」

自分より年上とは思えない幼い声がスピーカーを通して聞こえてくる。ちなみにビルドフォンの通信は携帯ショップで購入した安いSIMカードでまかなっている。

「桐生先生、予定の時間なのですが、少し遅らせてもらえませんか？」

「？俺はいいですけど、なんかあったんですか？」

「いえたいしたことではないのですが、受け持ちクラスの生徒さんが落第寸前なので、補修をしなくてはいけないのです」

「落第って・・・本当にあるんですね」

「ないほうがいいんですけどねー、っと、もう時間なので終わり次第連絡しますね」

「わかりました」

そう言って通話を切り、ビルドフォンをポケットにしまう。今着ている服は教師ということもあり白いカッターシャツに赤と青の幾何学模様が入ったサマーベスト、スラックスという出で立ちだ。

「暇になっちゃったな・・・どこかで時間でもつぶすか」

言いつつ前方にコンビニがあるのを発見。この世界では大手らし

くここ第七学区にも複数店舗あるチェーン店だ。

「いらっしやいませー」

あまりやる気のない挨拶とともに冷風が戦兔を迎える。やっぱ冷房はいいなー科学が創る未来だなーと思いつつ雑誌コーナーに行く。

「お、御坂じゃん。なにしてんだこんなところで」

雑誌を立ち読みしている常盤台中学の制服姿に声をかける。

「なんだアンタか。今日はいろんな人に会うわね・・・」

「そうなのか？」

言いつつ美琴の隣に陣取り、手ごころな週刊誌を手取る。

「さっきもその辺で万丈に会ったのよ。最近連続して起きてる爆発事件の現場でね」

「爆発事件・・・ああ、この間黄泉川さんがそんなこと言ってた気が。犯人が能力者で能力の内容も大方わかってるのに検索しても出てこないんだろ？」

「らしいわねー、ま、私は風紀委員じゃないから？詳しいことはわからないけど・・・一般人一般人うるさいのよ、あんたたちが来るの遅いから片付けちやうんどしようが。」

強めの静電気を発しながら美琴はイライラした口調で言った。

「御坂の安全を考えての言葉・・・つてよりかはお前の電撃で二次被害が生まれるのを防ぐための言葉だろうに」

週刊誌をぺらぺら捲りながら戦兔は言う。

「そんなことわかってるわよ。つていうか」

と立ち読みしていた雑誌を戻し美琴が言う

「何で私の隣でさらつと立ち読み始めてるわけ？なに？暇なの？」

「天つ才には休養が不可欠なんだよ。たまに脳を休ませることですばらしいアイデアが浮かぶってこと」

「出た、ナルシスト」

「なんとも言いなさい。ま、それは冗談として、月詠先生と会う約束してたけどさつき用事ができて遅れるって連絡があつてな。時間まで暇をつぶしてるところなんだよ」

「月詠・・・あの小さい先生か」

「そつ、あのとでも小さい先生」

「じゃあ本当に暇人なんじゃない・・・あ、そーだ」

新しく開きかけていた雑誌を閉じ、美琴は戦兔に言う。

「暇ならあたしと勝負しなさい」

「はい？」

※

蝉の鳴き声がただでさえ高い気温を聴覚から増幅させる。風鈴の逆だな、と戦兔は夏の風物詩に思いをさせていた。

「いやー、夏はいいなー。暑いけど」

「ちよつと、何無視決め込んでんのよ」

コンビニから出て、第七学区にあるという小萌が教鞭をとっているという高校を目指して歩く戦兔の後ろで、美琴が言った。

「無視なんてしてない、いい年した大人が女子中学生の言葉を無視するわけないだろ？まして俺は天っ才物理学者にして学校の先生なんだからな」

「御託はいいからとつと勝負しなさいって言ってるのよ」

「あー、夏はいいなあー」

バチつという音と共に戦兔の目の前に雷撃が打ち込まれた。

「あつぶねえな、何すんだよ電撃姫」

「あんたが白々しくスルーするからでしょうが!!」

怒った美琴の様子に戦兔はやれやれというように肩をすくめた。

「あのねえ、俺は大人、君は中学生、普通大人は中学生と勝負なんかしねえんだよ。」

「あたしはレベル5の超能力者であんたは仮面ライダー、戦力差は関係ないでしょ」

「わかつてねえなあ・・・、いい年こいた大人が女子中学生に本気で戦うわけないでしょうが。そもそも前提が間違ってるの」

やめやめ、と言い戦兔は歩き出そうとするが、その眼前に美琴が立ちふさがる。

「おい、いい加減にしないと俺でも怒るぞ」

「・・・なんであなたたちは戦ってんのよ」

「はあ？」

少しうつむいた美琴の顔には、苛立ちと不安の感情が共存していた。

「あなたたちはこの世界の人間じゃないんでしょ？元の世界に戻るためにスマツシユが発生している原因を突き止めたんじゃないの？」

「そのとおりだけど？」

「だったら、やり方はいくらでもあるじゃない。出てきたスマツシユを倒さずに敵の本拠地を見つけるとか―」

「はいアウト―」

パシン、と持っていた茶封筒で戦兎は美琴の頭をはたく。いつもならギャーギャー反撃するであろう美琴は、しかし何もせず俯いていた。

「ま、確かにそういう方法を使えば誰がどうしてこんなことしているかすぐわかるかもな」

でも

「それはできない。スマツシユになってるのは罪のない子どもたちだ。それを放っておくなんてことはありえない」

「なんでよ。あなたたちはこの街には関係のない人間なんでしょ、なのに、力があるからって戦って、いつ死んで自分たちの目的が果たせなくなるかもわからないのに、なんでこの街を救っているの？」

それは、戦兎に対して美琴がずっと抱えていた疑念だ。

思えば初めて会った時も、ジャツジメント風紀委員である黒子から逃げる方法なんていくらでもあったはずだ。正体不明の怪物を倒すだけの力があれば、美琴や警備員アンチスキルの追跡を振り切るなど朝飯前だろう。なにより、この街を救うことにそこまでのメリットが彼らにあるとは思えない。

「自分たちの世界のことと人助けと、どっちが大事なのよ」

その問いに戦兎は即答する。

「決まってるんだろ、人助けだよ」

断言する。かつて似たような質問をされたな、なんて思いながら。

「俺だって、元の世界がどうなったとか、新世界に無事みんなの命を繋

げられたのかとか気になるさ。でも、それは目の前の悲劇を見過ごす理由にはならない」

それは、桐生戦兔の、仮面ライダービルドの根幹。ライダーシステムという力を使う理由。

「ラブ&amp;ピース。この力はそのために使うって決まってるんだよ」

「ラブ&amp;ピース？そんなのただの綺麗事じゃない」

「いいじゃねえか、綺麗事が言えるくらい平和な世界が一番だろ？」

戦兔の言葉に美琴は溜息を吐く。

「・・・もういいわ、なんかやる気そがれちゃった。勝負はまた今度」

「だからやんねえって・・・、つと、まだ時間あるな。スーパー寄ってから行くか」

「スーパー？」

美琴の疑問に先ほどまで見ていたビルドフォンのページを見せる。

「これこれ、特売で卵が1パック120円なんだ。うちにはよく食う馬鹿がいるからこういう時に買っておかねえとな」

「・・・アンタ、滅茶苦茶この街に順応してない？」

「ん？そうか？」

こいつもあのバカと似たりよったりかもしれない、美琴はそんな感想を抱いた。

※

「そういえば御坂、この街の都市伝説って知ってるか？」

「都市伝説？」

スーパーの道すがら、戦兔が美琴に尋ねた。

「さつき佐天と初春と話しててさ、確か、脱ぎ女とか」

「それなら私も佐天さんたちに聞いたことある。虚数学区とか幻影御手だとか、あとは—」

「どんな能力も効かない能力、だな。どんな街にも都市伝説ってあるもんなんだな」

「・・・くだらない、あるわけないじゃないそんなの」

美琴の少しの沈黙に、戦兔は何かを感じ取った。

「なに、心当たりでもあんのか」

「なんで今の話からそうなるのよっ・・・はあ・・・」

溜息を一つ吐き、美琴はここ最近抱えているもう一つの案件について語り始めた。

「この間、ゲーセンを出るときにスキルアウトに絡まれたのよ」

「レベル5に絡むとかいい度胸してるなそいつら」

「それについては同意だわ。で、面倒くさくなつたから電撃ちらつかせて追い払おうと思つたのよ」

「選択肢が物騒だが、まあ正当だな」

絡まれて電撃なんて食らつたらトラウマもんだな、と戦兎は思つた。

「で、電撃ぶち込もうとしたその瞬間に・・・あー駄目、思い出すと腹立ってきた」

「いややめてくれる？体の周りバチバチしてるから」

戦兎の言葉をよそに美琴はその当時のことを思い出していた・・・

※

『なあなあ、俺たちと遊びにいかなあーい？』

『あれ、この制服常盤台じゃん。お嬢様に夜遊びを教えてやろうぜ』

見るからに頭の悪そうな四人組が、万丈よりも頭の悪い言葉をかけてくる。大通りに面しているわけではないが、最終下校時刻間際の道は帰りの学生や仕事終わりの大人たちが数人、こちらを窺いつつ素通りしていくのが見えた。

『(別に彼らが薄情つてわけじゃない。わかつてる)』

実際、ここに割って入ってきても、なにかができるわけじゃないし、怪我をするだけだ。誰だつて自分が一番かわいい。それが普通。

見ず知らずの人間の為にそんなことするやつは、ただの馬鹿か、それとも――

『あーいたいた。いやー連れがお世話になりました』

と、いい加減絡まれるのも飽きたし、勇敢な誰かに風紀委員や警備員アンチスキルへ通報されても面倒だ、と雷撃を発生させようとしたその時。

『駄目だろー勝手にはぐれちゃー』

見覚えのない男子学生がにこやかな顔で割り込んできた。中肉中背で、この近くの高校の制服を着ている。特徴という特徴はやたらツンツンと立っている髪形くらいだろうか。

その学生は美琴の手をつかむと引つ張りながら

『じゃあどもー、あつははは』

と言って男たちの輪から連れ出そうとする。

『誰？アンタ』

『あはははは・・・え？』

思ったそのままを口にした美琴の前で、ツンツン頭の少年は笑いをやめた。

『ちよ、おまつ、知り合いのふりしてこつそり連れ出す作戦が台無しだろ!!』

『なんでそんなめんどくさいことしなくちやいけないのよ』

美琴の返答にツンツン頭の少年は頭を抱える。

『おいてめえ、なめた真似しやがって』

『何か文句でもあんのか、ああ？』

『いやー、その、ええつと・・・はあ、しゃあねえなあ』

美琴達のやり取りに業を煮やしたのか、チンピラが少年に詰め寄ると、当の本人はしどろもどろになったあと、溜息を吐いて言った。

『ああそうだよ。恥ずかしくねえのかお前ら。こんな大勢で女の子一人を囲んで情けねえ。大体お前ら、声かけた相手をよく見て見ろよ』

——へー、今時熱血漢もいたものね、と感心した美琴の耳に、少年の言葉が届いた。

『まだガキじゃねえか!!』

『がっ』

その一言に反応した美琴をよそに、少年の熱弁は続く。

『さつきやり取り見ただろ!!年上に敬意を払わないガサツな態度!!見た目はお嬢様でも、まだ反抗期も抜けてねえじゃん!!とんだガキだぞ!!』

バチバチ、と。

彼らの背後からかすかに電流を迸らせているお嬢様に、しかし少年

は気付かない。

『俺はな、お前らみたいなきれなきやガキ一人相手にできないような奴ら、むかつくんだよー』

バチバチイ!!

と空気を焦がすような音とにおいを感じたチンピラAが振り返ると、そこには辺りに電流をまき散らしている少女の姿が―

『私が一番むかつくのは・・・』

怒気を孕んだ声で美琴は言う。

『お前だあああ!!!』

怒声と共に電撃が美琴を中心に周囲を走る。勿論生命の危機に陥るほどの威力ではないが、その一撃で周囲の人間は黒焦げになる。

『ぐあ・・・』

ボタン、とひとり、またひとりチンピラがうめき声をあげて倒れていく。あの少年を入れて五人分の人間が倒れる音が生じる。

『フン・・・えっ』

はずだった。

前髪を払い、帰路に就こうとした美琴の眼前。

ツンツン頭の少年は、その身体に傷一つなく、右手をこちらに突き出して立っていた。

まるで。

「まるで電撃を消したみたいにな、ってことか?」

美琴の話聞いた戦兎は言った。

「そうね・・・現に周りは焦げ跡ばかりだったから、電流が流れてないってことはまずないと思うんだけど」

「焦げ跡が残るほどの電流を人に向けてぶっ放つのはどうかと思うけどな」

「不可抗力、あるいは正当防衛よ」

「ま、まあ命に別状がないならいいか・・・」

言いながら戦兎は先ほどの話について考える。

「電撃に限って言えば、無力化するのとは可能じゃないか? 誘電するとか」



「何の装置もなしに？」

「それこそ、能力なんじゃねえの？この街何でもありだし」

投げやりな戦兎の言葉に、美琴は若干腹を立てる。

「なによその適当な意見。あんた一応物理学者なんでしょ？」

「一応じゃない、天才物理学者!!なんだけど・・・」

いつも通り否定する戦兎だったが、途端に肩を落とす。

「この街の能力って、一応物理法則に基づいている。基づいてはいるけど、理論上可能ってだけの事象が多すぎて、いざ実際に目の当たりにすると、さすがの天っ才でも戸惑うってわけよ。正直、この件に関しては素人同然と認めざるを得ない」

「へー、殊勝なところもあんのー」

「しかーし!!天才は天っ才であることに意味がある!!ということコレ!!」

そう言って手に持っていたビルドフォンの画面を示す。

「月詠先生と初春から、閲覧できる限りの能力関係の論文、資料を貰ったんだ!!あと数日もすれば全部読み終わるから、俺の天才性は揺るがない!!」

フウウウ→とテンションを上げる26歳に引く中学生の美琴だったが、先ほどの話を思い出した。

「(見たところ能力者って感じじゃなかったし、まさか本当に都市伝説通り・・・)」

ぶんぶん、と首を振り自らの考えを否定した。

「(あり得ない!!あたしが全力を出せば・・・今度会ったら・・・)」  
そんなことを考えていた時だった。

「えーっと、目印とか何か覚えていないんですか？」

「目印か・・・」

美琴達の右手側の路地で、件の少年と見知らぬ女性が話していた。

「あっ」

「んー?どうした？」

思わず足を止めた美琴に戦兎が気付き、声をかける。美琴の視線の先では二人が何やら話していた。

「目の前に横断歩道があったな。」

「横断歩道じゃ、あまり目印とは……」

と首を書きながら困惑している少年を戦兔が見ていると。

「ちよつとあんだ!!」

「ん?」

と、隣で何故かお怒りの美琴がその少年に怒声を発していた。ちよついきなり喧嘩かよラブ& amp;ピースでいこうぜ、と戦兔が美琴を宥めようとすると。

「おービリビリ中学生」

「ビリビリじゃない!!」

「火に油ぶち込むようなことを……」

呑気な少年の声と、美琴の大声に紛れ、戦兔の眩きが風に舞った。

「御坂美琴!! 今日という今日こそ、決着つけてやるんだから!!」

「なんだ御坂、知り合いか?」

戦兔の問いに美琴は振り向いて答える。怒りながら。

「さつき話したむかつく高校生よ!! ここで会ったが100年目、勝負してやる!!」

「いや展開が世紀末過ぎるだろ。少し落ち着きなさいよ」

「うっさいわね、アンタには関係ないでしょ!!」

と悶着をしている二人、というか美琴にツンツン頭の彼は言った。

「つてことは、お前今、暇なんだな?」

その問いに美琴は振り返り胸を張ってこたえる。

「ええ! 時間ならたつぷりあるわ!!」

「じゃあ、この人の駐車場探すの、手伝ってくんない?」

「もちろん!! ……は?」

と少年の言葉を受けてフリーズしている美琴に、彼の隣にいる女性が言った。

「いやあ、車を停めた駐車場がどこだか、わからなくなっちゃってね。」

「えっ、ちよつと、なんで」

混乱している美琴に少年は軽く謝りつつ告げる。

「俺、行かなきゃならないところがあつてさー、お前暇なんだからいいだろ？あ、そっちのお連れさんもお願ひできます？。」

「え、俺も？。」

と、それまで黙っていた戦兎の言葉を無視して美琴は怒鳴る。

「い、いいだろじゃねえっつの!!またそうやって適当なこと言つてごまかそうつたつてそうはいかないんだから、大体いつもいつもー」

続く美琴の言葉は、しかし少年の耳には届かなかった。

「・・・はあ、いやあ、それにしても暑いな・・・」

と言いながら、隣の女性がいきなり着ていたシャツを脱ぎだしたために、だ。

「ぬわあ!!」

驚く少年をよそに女性は完全にシャツを脱ぎ、下着ーブラジャーを晒していた。顔を赤らめて声を震わせた美琴が、女性に問う。

「な・・・何をしてしるんですか・・・?」

「炎天下のなか、随分歩いたからね・・・汗びっしよりだ」

「確かに、汗かいたままの服でいると身体が冷えて風邪ひくからな」

と、場違いな返答に場違いなコメントを発した物理学者を残し、美琴はずんずんと二人の元に歩いて行った。

「なによ!!この人!!」

「俺もさつき知り合つたんだよー!」

女性の姿を見ないよう目を手で覆う少年だったが、周りの目を気にしたのか、傍に落ちていたシャツを女性に突き出す。

「と、とにかく、シャツを着てください!!」

突き出されたシャツを不思議そうに見る女性。美琴の後をついてきた戦兎は、その光景を見て思わず。

「あ、それ誤解招く構図」

その戦兎の言葉通り、道行く女子学生が少年を指さし叫んだ。

「女の人が襲われてる!!」

「あの男の人が脱がしたの!？」

あらぬ嫌疑を受けた少年は、後ずさると隣にいた美琴にシャツを押し付け、

「違う・・・誤解だぁー!!」

と叫んで走っていった。

「ちよつとお!!?」

「おー見事な逃げ足」

呑気にしてる場合か、と後を追おうとした美琴に、女性が声をかける。

「君、シャツを持っていかれると困るんだが」

その声ではつとなり、周りを見渡す。

上半身下着の女性。

腕を組んで少年が走った方を見ている青年。

女性のものと思わしきシャツを抱えている中学生。

好奇の視線に晒されるには申し分ない三人組がそこにいた。

「・・・とりあえず、服着てください。見られてます、見られてますからっ!てかあんた、ぼさつとしてないでこの人隠しなさいよ!!」

「とばつちりくらった!」

美琴と戦兎の声だけが、夏の空に響いていった

※

「いやあ、ここは涼しくて気持ちがいいな」

第七学区で一番の人気を誇る複合ショッピング施設、セブンスミスト。

その手前の広場に戦兎たちは移動していた。

「・・・なんなのあの人・・・」

「人前でいきなり脱ぐなんて、露出狂くらいしか思いつかないんだが」  
カフェスペースのようなベンチに腰掛け、テーブルに頬杖を突く美琴に戦兎が言った。

「露出狂ってわりには、その・・・見せつけてはこなかったわよね・・・」  
「ただ服をいきなり脱ぎだす・・・あ」

「えー、実際遭遇したら怖くないですかー?いきなり脱ぎだす都市伝説脱ぎ女!」

美琴も同じことを思ったのか、はつとなつて戦兎を見たが、

「・・・いやないない」

と同時に首を横に振った。

「面白がつて都市伝説につなげるから、世の中陰謀論とか流行っちゃうのよ。まったく、ここは科学の街、学園都市なんだからね。」

「そうそう。大体あの人だってちよつと変わってるけど普通の人間だしな」

「変わっているというのは、私のことかな」

「うおわっ」

と話していた二人の背後に当人が立っていた。

「そ、そんな！見ず知らずの人を捕まえて変だなんて、ね、ねえ？」  
「まったく。俺も天才ゆえによく『実は戦兎くんってバカなんじゃないの？』とか言われるけど、人の表面だけみて判断するなって教わらなかったのかって言いたいね」

微妙にずれたコメントをする戦兎と、その後ろでひきつった笑いをしている美琴に特に何も言わず、女性は持っていたものを一缶入りの飲料をテーブルに置いた。

「これ・・・」

「ああ、付き合ってもらおうお礼だ。」

付き合うことは確定なんだ・・・と戦兎は思いつつ缶を持つと。

「えあつっ！」

てつきり冷たいものと思ひ込んだからか、いつもより強い刺激が掌を襲う。もう一度、今度は慎重に缶を持つ。黄色いパッケージにアラビアンナイトのようなランプのイラスト。

「・・・なぜホット、そしてスープカレー？」

「・・・個性的なチョイスですね・・・」

若干引いた声で戦兎と美琴が言うが、女性は何ともなしに言う。

「ああ、暑いときには熱い飲み物の方がいいのだよ。それに、カレーのスパイスには疲労回復を促すものが含まれている。」

「ま、まあ理屈は分かる気もしますが、気分的には冷たいものの方がいいなあ、なんて」

よくこの場でそんなセリフが言えるな、子どもってすごい。と思いつつ戦兎としても、外気温と体温と水分吸収効率の関係を理解してい

てもなお、冷たい三〇矢サイダーなんかたまらないよなーとか思っていた。

「気分、か……。若い娘さんはそういう選択の仕方をするものだったな……。買い直そう。何がいい」

「い、いやいいですよ！お気持ちだけで十分ですよ!!」

スッと席を立とうとした女性を美琴が慌てて制止する。女性は浮かしかけた腰を椅子に戻し、足を組んだ。

「すまないね、研究ばかりしているせいかな、理論的に考える癖がついているものでね」

「研究って、学者なんですか?」

研究、という二文字にいち早く反応した戦兎が問う。

「ああ、今は主にAIM拡散力場について研究をしている。」

女性は自分の分のスープカレーを開け、一口飲むと微笑みながらも飲め、といった感じのジェスチャーをする。

「AIM拡散力場!?!」

「……。それって、能力者が無自覚に周囲に発散している、微弱な力のことですよね」

単語に反応した戦兎の髪がアンテナのように逆立つ。美琴は女性からのジェスチャーに観念し、仕方なさそうにプルタブを開けつつ言った。

「もう授業でやったか。そちらは……。研究職かなにかで?」

一年生の時に……。と呟きながら缶を一気に煽る。絶妙な生ぬるさと共にスパイスの味が鼻を抜ける。冬場なら大変ありがたい味だった。

「今は教師ですが、元は天才物理学者です。」

「ほう、物理学ですか。しかしこの街で天才を名乗るなんて随分自信家だな」

「そりゃ、自意識過剰でナルシストなのが謳い文句ですから」

そう言って戦兎もカレーを一気に煽り、女性に話しかける。

「確か、人間の五感では感じ取れず、専用の計測機器がなければ観測もできないほどの弱い能力による力場のことですよね」

「ああ。私はその力を応用する研究をしているんだ」

「へえ……ってことは、能力についても詳しいんですか？」

力場の応用!?フウウー、テンション爆上がりっしょー→っとビルドフォンで論文データを漁り始めた戦兎をよそに、美琴は女性に尋ねた。

「ああ、それなりにはな……何か知りたいことでも？」

「えっ……あ、ええと、どんな能力も効かない能力なんてあるんでしようか」

「ふむ」

それまで眠たげだった女性の目に、かすかに光が差す。やはり研究者なのか、興味が湧いたらしい。

「能力と言っても色々あるからねえ。どんな能力が効かないんだ？」

「高レベルの電撃を受けても何でもない、とか」

「電撃か……例えば避雷針のようなものを発生させ、電撃をそらす能力とか」

「……そういうものはまた違った感じなんですけど……」

当時を振り返りつつ美琴が答えた。

「ふむ……それは君の知り合いか？」

「へっ？」

予想外の質問に一瞬戸惑うが。

「いや、都市伝説ですよ都市伝説、ちよつと小耳に挟んだだけです。ねえ？」

と隣でビルドフォン片手にぶつぶつ呟いている戦兎に振る。

「ん？ああ、都市伝説な、あとはレベルアッパーとか、脱ぎおーゲフツ」と余計なことを言いそうになった戦兎の鳩尾に美琴の肘が直撃した。躊躇のない一撃にそれ以上続けられず蹲る戦兎。

「ん？そっちの彼は大丈夫かね」

「大丈夫、大丈夫。カレーが辛かったんじゃないかなー」

はははーという美琴の誤魔化しには気付かず、女性は微笑みながら続けた。

「しかし、都市伝説か。最近の若い子でもそういう話をするのか」

「まあ流行ってるってほどでもないんですけど・・・」

と美琴が言った時だった。

「わーい、そこで食べよー!」

と小学生くらいの女の子が美琴達の後ろにあるベンチへと走ってきた。手には近くの売店で買ったのであろうアイスクリーム。

「待ってよー、ーうわっ」

と、後を追ってきた男の子が美琴達の手前で転んでしまった。手に持っていたアイスクリームは宙を舞い――

「あっ」

べちゃっという音と共に女性のスカートにアイスクリームが付いてしまった。

「ご、ごめんなさい」

と少年はすぐに女性に謝るが、女性は何ともなしに立ち上がり、  
「気にすることはない。すぐに洗えば問題ないさ」

と言いつつ自然な動作でスカートのホックに手をかけ、降ろし――

「だから脱ぐなって!!」

「えっ?」

赤面した少年と蹲る26歳、そしてスカートを半脱ぎした女性。

この上なく犯罪チックな光景がそこにはあった。

※

「脱ぎ女あ?」

美琴が駄目な大人たちに呆れている同時刻。万丈はマシンビルダーの  
―のを運転しつつそう言った。

「はい。最近流行っている都市伝説なんですよ。知りませんか?」

「知らねえなそんなの。つーかなんだよそれ、脱ぐだけなんだろう?別に襲い掛かってくるわけじゃねえなら怖くもなんともねえ」

と、戦兔や美琴と同じく実害なければ無問題派の万丈の言葉に、涙子は反論する。

「脱ぎ女の怖いところは、もっと他にあるんですよ」

「ほーん?」

ちなみにバイク上でも問題なく会話できているのは、ヘルメットに



内蔵されている無線機能のおかげである。戦兎と万丈の物に、それぞ  
れの車輛に一つずつ予備がある。

「脱ぎ女って、伝染するんですよ……!!」

「電線って、タイツなのか?そいつ」

「……なんでとつきにそつちの意味が出てくるんですか?」

それはかつての恋人、小倉香澄がよくタイツが電線したー、と言っ  
ていたのを覚えていただけだったのだが。

「いや、前にちよつとな……で、伝染がどうしたって?」

二度と会えない思い人に、一瞬でも気持ち沈みかけないよう万丈  
は涙子に先を促した。

「脱ぎ女に出会った人は、自らも脱ぎ女になるんです!!」

「はあ?」

「つまりですね、脱ぎ女に戦兎さんや御坂さんが遭遇するとするじゃ  
ないですか」

「おう」

「すると、2人ともところ構わず服を脱ぎだすわけですよ!!」

「……それは確かに怖い、というか嫌だな……」

「でしょー?ま、都市伝説なんですけどね」

そう言っつて再び他愛もない話に戻る二人。

まさにその二人が脱ぎ女に遭遇しているとは露とも知らずに。

※

「すまないね。面倒かけて」

「いえ、乗りかかった舟ですから」

セブンスミストの店内。女子トイレの個室からの声に、美琴はハン  
ドドライヤーでスカートを乾かしながら答えた。

「つと、これでいいか。どうぞー」

クリームの汚れが落ちたスカートを個室のドアにかけると、色の白  
い手が布地をつかみ、引っ張った。

「ありがとう。ーそうそう、あの彼にもお礼を言っておいてくれ」

「彼?それなら自分でー」

「知り合いなのだろう?途方に暮れた私に声をかけてくれたのだよ」

そこまで聞いて、話しているのが戦兎ではなく、あのツンツン頭の  
高校生のことだと気づく。

「へえー、あいつが」

「いい子だな」

「お節介なだけですよ。かつこっつけていうか。大体声をかけておい  
て人に押し付けて姿くりますなんて、無責任ですよ。」

言葉とは裏腹に美琴の表情は柔らかい。

「なんていうか、人のあしらい方が上手いというか、てきとうとい  
うか、色々むかつくんですよ。いつだって自分が」

「楽しそうだな」

「えっ?」

突然の言葉に疑問符を発する美琴に、女性は着替えながら問う。

「君はあれか、彼が好きなのか」

「なっ、なにを・・・」

動揺する美琴に女性は淡々と言葉をつづけた。

「ほら、好きな相手には冷たくしてしまうという、昔流行った、ツン：  
ツン・・・」

その先の言葉を予測し、わなわな震える美琴の周囲に電流が逆る。

「ツン・・・ツンダラ? 違うな・・・」

「あり得ないから!!」

足踏みと共に多量の電流が流れ、トイレ内の照明機器がダウンし、  
異常感知の警報が鳴った。

「どうした、何かあったのか?」

と不思議そうに個室から出てきた女性を、美琴は慌てて連れ出すの  
であった。

## 第十一話 飛翔する銃口

まったく同時刻。

戦兎は先ほどのベンチに座っていた。

「AIM拡散力場か……」

ビルドフォンに表示しているのは力場に関する資料。美琴達がスカートを洗っている間、女子トイレで待つのもあれなので元の場所に戻り資料を読みふけていたのだ。

「んー、なーんか思いつきそうなんだけどなー、もやもやする……」

先ほどAIM拡散力場の話を聞いた時から、何かに気付きそうなのでも気付かないような変な気分なのだ。普段から発明をしている戦兎からすれば、インスピレーションがあと一歩のところまで出てこない状況というのがとてもむずかゆい。

「それにしてもあいつら遅いな……まあ洗濯するようなもんだからしょうがないのか。」

と言いつつカバンからいくつかの物を取り出す。

「……コイツらの謎もまだ解けてないんだよなあ」

言いつつ手に持ったのはフルボトルだった。

「ゴリラ、ハリネズミ、タカ、ガトリング、掃除機……別に有機物に偏っているのは関係ないよな……」

学園都市にやって来てから倒したスマッシュは5体。そのすべてから成分を採取し、すべてが浄化され、見慣れたボトルに変化したのだ。

「(美空のバングル……ベルナージュの力と浄化装置があつて初めて、ボトルはフルボトルになる……。しかし実際にこの街ではエンプティボトルで採取した途端に浄化された)」

このことから予測できるのは、

1 戦兎にベルナージュの力が移った。

2 戦兎自身に不思議な火星パワーが備わった。

3 学園都市だから。

「3はともかく、1、2はないな……」

1の場合、戦兔自身に変化―美空にバングルが付いたような変化が現れて然るべきだし、2の場合は同じく戦闘の末にボトルを回収した万丈にも同じ現象が起きたということになる。二人揃って不思議な力に目覚めるなんて確率は、途方もなく低い。

「となると3つてことになるが・・・うーんそれもどうなんだろうな・・・」

ボトルを解析して分かったことだが、ボトルの構造自体は戦兔と万丈が持っていたラビットやドラゴンのボトルと同一の物。即ち、A世界で戦兔たちが集めていたボトルと同じものなのだ。つまり、学園都市由来の技術が使われている、というわけではない。

「うーん、わからない、もやもやする」

髪を掻きながらつぶやいた時だった。

「キヤー!!」

という悲鳴が戦兔の思考を遮った。

「なんだ!?!」

悲鳴の元を探すために辺りを見渡す。すると、美琴達が入っていた施設のすぐ傍で女性がうずくまっていた。

「ツ!!ネビュラガスか!!」

黄色いガスが女性の周りに漂い、次の瞬間身体が発光し、

「グウウウウ!!」

スマツシユへとその身体を変質させた。

「か、怪物だー!!」

周りの人々が逃げ惑う。スマツシユ―ダイヤモンドスマツシユは近くのガードレールに光線を照射する。するとガードレールは無数のダイヤモンドとなり、

「ガア!!」

スマツシユはそれらを蹴りで放ち攻撃した。ダイヤモンドの一つが逃げ遅れた男子学生の背中まで迫る。

ガキン!!

と、召喚したドリルクラッシュヤーのガンモードから放たれた光弾がダイヤモンドを打ち抜いた。

「早く逃げろ!!」

ビルドフォンから同じく召喚したバイクヘルメットを被って顔を隠した戦兔が言う。周りの学生たちが悲鳴を上げて逃げる中、戦兔はビルドドライバーを装着した。

「白昼堂々変身するのはまずいんだけどな・・・」

言いつつ両手にボトルを持ち、振る。トランスジェルソリッドを十分に刺激し、シールドイングキャップを開く。

【ラビット】 【タンク】

【ベストマッチ!】

ボトルの装填によって待機音が鳴ると同時に、ボルテックレバーを回し、スナップライドビルダーを展開する。

【Are you ready?】

【変身!!】

【鋼のムーンサルト! ラビットタンク!】

ビルドラビットタンクフォームへと変身した戦兔は、ブレードモードへと変わったドリルクラッシュャーで切りかかろうとするが、ダイヤモンドの散弾によって思うように近づけない。それどころか散弾が近くの自販機や、異常を検知してやってきた警備ロボが早くも被害に遭っている。すぐに避難させたおかげか周囲に人の姿がないことが唯一の救いか。

「とは言え、こんな市街地でまたあんなのぶっ放されちゃたまんねえしな・・・ってあぶなっ!」

大きなダイヤモンド片が戦兔の鼻先をかすめる。ラビット-halfボディの脚部、ホップスプリンガーによる跳躍で距離を取り続けるが、このままでは街が壊され放題だ。

「遠距離戦ってことなら・・・コイツっしょ!!」

と攻撃を回避、あるいはドリルクラッシュャーで防ぎつつ、戦兔は二本のボトルを取り出した。左手でラビット、タンクのボトルを外し、右手のボトルの内一本を左手で持ち直し、振る。

すると周囲に無数の白い数式が漂い始めた。キャップを開き、新たなボトルをドライバーにセットする。

【タカ】 【ガトリング】

【ベストマッチ！】

最高の相性を知らせる光と共に、ボルテックレバーを回転させる。ポトルと同じ、オレンジとメタルカラーの成分がスナップライドビルダーを通って、それぞれのハーフボディを形成した。

【Are you ready?】

【ビルドアップ！】

掛け声とともにラビットタンクフォームの上から新たなボディが装着された。

【天空の暴れん坊!!ホークガトリング!!】

仮面ライダービルド ホークガトリングフォーム。

遠距離戦、及び空中戦において優れた機動力を発揮するベストマッチフォームである。

「さあ、実験を始めようか」

【ホークガトリングー】

そう言つて専用銃、ホークガトリングーを召喚し、背面の翼―ソレストアルウイングを展開して地面を蹴る戦兎。内蔵ブースターによってその身体を一気に空へと運ぶ。

「ウガア!!」

宙を舞うビルドに向かって再びダイヤモンドの散弾を放つスマッシュだが、それはすべて、巨大化したソレストアルウイングによって弾かれた。距離を取ったことによつて威力が弱まった状態であれば十分に防御できるといふ戦兎の読み通り、空中にいる間は散弾は通じず、周囲へ被害が出ることもない。

「とは言え、防戦一方つてわけでもないんだよ」

そう言つてホークガトリングーの中央に位置するリボルマガジンに手をかけ、回転させる。

【10!20!30!40!】

音声と共に十発ずつ弾丸が生成、装填されていく。四回転分、つまり四十発まで装填したところでホークガトリングーをスマッシュに向けて、

「ロックオン、だ」

銃の前部に搭載されている照準装置―サードアイホークによつて照準が定められたまま、引き金を引く。

瞬間、タカを模したオレンジ色の光弾、バレットイレイザーが発射される。光弾は左右に分かれながらスマッシュに接近し、着弾する。しかし、ボディもダイヤモンド級なのか、40発の弾丸を食らつてもスマッシュはビクともしない。周囲に爆発による黒煙が立ちこめただけだった。

「ギギ・・・ガ?」

反撃の為、空中を見たスマッシュは、そこに先ほどまでいたビルドがどこにもいないことに気付く。

「こつちだ、よ!!!」

と光弾の発射と同時に高速飛行した戦兎は、スマッシュの背後にまわりガトリングハーフボディの脚部―ガンバトルシューズで勢いよくその身体を蹴りあげる。表面を覆う特殊火薬による爆発力でスマッシュは空へと舞った。

「勝利の法則は、決まった!」

「10、20、30、40、50・・・」

先ほどの装弾を超える回数、リボルマガジンを回転させる。と同時に宙を舞うスマッシュの周りに球体上の隔離空間が現れる。

「70、80、90、100 (ワンハンドレッド)!フルバレット!!」

引き金を引く戦兎。瞬間、100発分の弾丸が持つエネルギーが一気に放出され、巨大なタカを模した光弾がスマッシュを襲い。

「ギギガガガア!!」

スマッシュの硬いボディを爆砕した。

※

「あつぶねー、落とすところだった」

とぐつたりとしたスマッシュの身体を空中でキャッチし、近くの物陰に着陸した戦兎は、エンパイボトルのキャップを開き、成分を採取する。

「……っと、やっぱりダイヤモンドか」

先ほどの攻撃から予測してはいたが、水色の成分が入ったボトルはやはり戦兔が知っている通りの形に浄化されている。

不思議だ……と思いつつ成分を抜いた女性の方を向く。幸い呼吸はしており、目立った外傷も見当たらなかった。

「さてと……」

と言いつつドライバーからボトルを抜き、変身を解いた。先ほど採取したボトル諸共格納アプリにしまうと、戦兔は黄泉川に電話をかける。

「あ、どうも桐生です。第七学区のセブンスミスト前でスマツシユと交戦、撃破しました。変身者に外傷はありませんが、念のため医者に見せた方がいいかと」

『了解じゃん。すぐに向かう。着いたら詳しく話を聞くじゃん』  
「わかりました」

『あ、桐生。変身するところ誰かに見られてないじゃん?』

「勿論、万丈じゃあるまいし、そんなへましませんよ」

「あつそ、じゃあ万丈以下ってことねアンタ」

あはは、と笑う戦兔の背後で、美琴は腕を組みつつ言った。

「み、御坂!」

「店を出たら辺りは荒れてるし、人はいないし、かと思えば空からアンタ（ビルド）が降りてくるし……」

「いやあ、さすが常盤台のお嬢様……抜群の観察眼で」

「お嬢様は関係ないっつの。まったく、私だからいいけど他の人に見られたら、アンタまた路頭に迷うことになるわよ?」

「はい……以後気を付けます……」

女子中学生に頭を下げ、全力で反省している26歳がそこにいた。

「君たち、なにかあったのかね……何やらあちこち壊されてるみたいだが……」

と、美琴と共にセブンスミストの中にいた女性が、こちらを見て言った。

「いやー、なんででしょうねー、見当もつかないわー、ねえ?」



「ん？お、おう。ナンモ、ナカツタ」

見られた!? いや、多分大丈夫。というアイコンタクトを取りつつ、戦兎たちは答える。

「ふむ・・・てつきり最近話題の未確認生物かと思ったが・・・、ん？  
そこで倒れてるのは・・・」

と戦兎の背後で倒れている女性に目を向ける。

「や、これは、えーっと」

「人体実験がしたいのなら止めないが、足が付くと面倒だぞ？」

「ちやうわー!!」

戦兎の叫びが学園都市にこだました。

※

「いやあ、助かった。」

夕暮れが迫る空模様。戦兎たちは女性の所有しているという青いスポーツ車の前でそんな言葉を聞いた。

「いろいろ世話になった。礼を言うよ」

「いえ、それほどでも」

苦笑しつつ美琴は言う。この車、一番始めに女性と出会った場所から徒歩5分くらいの場所にあったのだ。

なんでこんなに疲れなくちやいけないのよ・・・なんて思っている  
と、ドア越しに紙が差し出されると。

「名刺？」

『大脳生理学専攻 木山 春生教授』

そう書かれた紙片を見つつ戦兎が言う。

「ああ、ここで会ったのも何かの縁だろう。また会う時が来たら、の話  
だが」

そう言って女性―木山は窓を閉め、車を発進させた。

「お気をつけて〜」

と手を振る戦兎をよそに、美琴はぐったりしながら歩き出した。

「疲れた・・・」

「俺もだ。まさかスマッシュに出くわすなんてな・・・、しかーし!!」  
とポケットから先の戦闘で採取したダイヤモンドボトルを取り出

し、瞳を輝かせる。

「これでベストマッチがまた増えた!!ごめんなゴリラ、ダイヤモンド。本編でも何かと不遇な扱い受けてたけど、今度こそ日の目を見ような!!こうなったら専用武装作っちゃおう?作っちゃおう!!?夜は開発っしょー!!」

とひとり奇声を上げステップする戦兎に突っ込む気力もないのか、美琴はだるそうに言う。

「なんで私がこんなに苦労しなくちゃいけないのよ・・・これも全部あのバカのせいだ。今度会ったらぼっこぼこの黒焦げにしてやる・・・」  
「あああー!!」

と公儀の犯行予告をした美琴の耳に突然、戦兎の声とは別の絶叫が届いた。

「・・・全滅だ・・・、重要なタンパク源が・・・。せつかく、せつかく2時間も並んだのに・・・」

悲壮な背中を見せ、落としてしまったのか割れた中身の入った卵のパックを悔しそうに見る少年が、そこにいた。

「「ん?」」

3人同時に顔を見合わせる。瞬間。

「さっきはよくも私を置いて逃げたわね!?!人に厄介ごと押し付けておいて、自分はお買い物か!!」

指を突き付けて怒鳴る美琴に少年も反論する。

「貧乏学生にとって、特売品を手に入られるかどうかは死活問題なんだ!!常盤台のお嬢様にはわかるまい!!」

そう言つて手に持っていた卵のパックを突き付ける。割れた卵から白身が出てきており、調理に使うのは絶望的な有様だった。

「あつ、それお一人様1パック限定の120円の卵?もう終わっちゃったの!?!」

戦兎はといえば、自身も狙っていた特売が終わっていることに頭を抱えている。この駄目大人、と思いつながら美琴は言った。

「こつちだつて大変だったんだから!!汚れたスカート脱ぎだすわ、しょうがないから洗ってあげるわ!!拳句の果てにはツンデ・・・!!」

その単語を想起した瞬間、木山とのやり取りを思い出し言葉を詰まらせる。少年と戦兎はそんな美琴を見ながら。

「ツン?」

「ツンドラ?凍原?」

「・・・っと、とにかく勝負しなさい勝負!!」

顔を真っ赤にしながら少年に言う美琴。少年はあからさまにいやそうな顔をして応える

「勝負って、今までお前の全戦全敗じゃんか。」

その言葉に戦兎が驚く。

「マジか?てか普段から勝負してんの?めっちゃ仲良しじゃん」

「黙れ駄目大人!!仲良くなんかない!」

腕を組みながら美琴は戦兎に言った。

「大体、私だつて一発も食らってないんだから、負けてないわよ!!」

「・・・じゃあ、どうしたら終わるんだよ・・・」

「君が電撃食らうまでじゃないか?そりゃ」

少年の呟きに戦兎が応えた。

「それってつまり勝つまでやるってことじゃん。つか、アンタは、えーっと」

「ああ、俺は桐生戦兎。今は中学校の教師をしているんだ」

「中学というと、常盤台っすか?」

敬語使えるなんて、どこぞの電撃お嬢様とは大違いだ。なんて思いながら戦兎は言う。

「いや、御坂とはちよつとした知り合いなんだよ。それより、君の名前は—」

「ああ俺はかみ—」

「ちよつとちよつと、何勝手に親睦深めてんのよ!!いいから勝負しなさい勝負!!」

「・・・はあ—」

「そこっ!!ため息つかない!!」

自分抜きで話されていたのがそんなに気に障ったのか、食って掛か

る美琴に溜息を吐く少年だったが。

「つたく、わかったよ」

立ち上がった少年は美琴を見据えて、

「それで気が済むっていうなら、相手になってやる」

そういう姿には妙な迫力があつた。

それに気づいたのか、美琴も息をのむが、さすがレベル5というべきか、不敵な笑みを浮かべて、

「やつと、その気になったようね!!」

と言つた。

「・・・これ、教師的には止めるべきなのか？」

戦兎だけが、このシリアスな空気になじめていなかった。

※

月が出てきた。

夏とは言つてもこの時間帯になれば気温も下がり、いくらか心地よい風も吹いている。

第七学区と第八学区の学区境にあたる鉄橋の下、伸び放題となった雑草に覆われた河原に、三人は移動してきた。

「あの一」

「なによ」

河原で腕を組み、仁王立ちする美琴に戦兎は聞いた。

「そろそろ万丈も帰ってくるし、帰りたいですけど・・・」

「さつきも言ったでしょ。どっちが勝ったか、判定してもらわないといけないのよ」

美琴の言葉に肩を落とす戦兎。

「いや・・・俺関係ないし・・・」

「あんた正義のヒーローなんでしょ、だったらいたいけな中学生の頼みくらい聞きなさいよ」

「いたいけな少女はやたらめったに勝負吹っ掛けねえよ」

くどくど言う戦兎を美琴は睨む。

「今ここでアンタが帰ったら、明日職場に『桐生先生が完全下校時刻間

近なのに学区境に連れてきて、置き去りにしました』って言うわよ」  
「……ますますいたいけにほど遠いじゃねえか……」

戦兎は降参の意を込めて両手を挙げた。

「ここならだれにも迷惑かかんねえだろ。いつでもいいぜ。かかってきな！」

と、やり取りがひと段落するのを待っていた少年が言った。

「……言われなくても、こっちはずっとこの時を」

バチバチ、と周囲に電流を放出させながら美琴は言う。

「待ってたんだからッ!!」

言うと同時に雷撃の槍を少年に向けて放つ。威力が抑えられているとはいえ、常人が食らえばひとたまりもない。

パリン!

しかし、その一撃は少年が突き出した右手に当たった瞬間、ガラスの割れるような音と共に消失した。

「……本当に消えた」

戦兎が思わず呟いたが、美琴は想定済みだったのか、驚いた様子はない。

「やっぱ電撃は効かないか……ならー!」

そう呟いて右手で何かを掴むように電力を生み出す。すると、地中から黒い砂のようなものが美琴の手に集まった。

「なるほど、磁力によって砂鉄を集めてるのか」

戦兎の推測のとおり、集まった砂鉄は美琴の右手に集合し、長細く変形した。さしずめ、刀のように。

「ちよっお前、獲物使うのはよくないんじゃないの!?!」

「能力で作ったものだもん」

少年の抗議にあっけらかんと答え、砂鉄の剣を構える美琴。砂鉄の剣に宙に舞った葉が当たるとずたずたに切り刻まれる。

「いつ!?!」

「砂鉄が振動してチェーンソーみたいになってるから、触れるとちよっと血が出たりするかもね!!」

言いながら少年との距離を走って詰める美琴。対し少年はでたら

めな構えを取りつつ、

「どう考えてもそれじゃすまないと思うんですけどっ!？」

美琴の振るう剣を紙一重で躲していく。

二度、三度と剣を振るう美琴だが、剣の達人というわけでもないの  
でどうしても攻撃が単調になっている。そのせいか少年も何とかで  
はあるが対処できている様子だった。

「やばいと思ったなら止めに入ろうと思ったけど、やるなアイツ」

感心している戦兎だったが、当の本人は割といっぱいいらし  
く、呼吸を乱していた。

「ちよこまか逃げ回ったってー」

距離を取ろうと大きく転がった結果、背中を見せた少年を見て、美  
琴は言い放つ。

「コイツにはこんなこともできるんだから!!」

瞬間、電流による磁力の操作で変形させたのだろう、剣が巨大な鞭  
となって少年の背後に迫る。

「!!剣が伸びっ!!」

「(入った!!躲せるタイミングじゃない!!)」

美琴の思ったとおり、こちらを見ようとしたのか少年の身体は中途  
半端に後ろを向いている。あれでは逃げようにも足を大きく踏み出  
すことはできず、直撃してしまう。

流星にやばい、と戦兎はラビットとゴリラのボトルを振りつつ助け  
に入ろうとしたが、

「つく!!」

シユバアン。

と少年が無理やり右手を砂鉄の鞭に当てる。すると鞭として形成  
されていた砂鉄が宙に舞っていた。

「強制的に砂鉄に戻された・・・?」

両手にボトルを持ったまま戦兎がつぶやく。美琴も驚いているの  
か、宙に舞った砂鉄を見て呆然としている。

「あつぶねー、よかった・・・」

と自身の右手を見ながら安堵している少年を、舞う砂鉄越しに見る

美琴は、しかし思考を巡らせていた。

「(ここまででは予想通り。)」

っと、少年はそれを見て諦めたと思ったのか、うつすら笑って美琴に言う。

「勝負あつたみたいだな！」

それに対し美琴は不敵な笑みを浮かべ、答えた。

「それはどうかしら、ねっ!!」

右手を突き出し、再び電流を流す美琴。その対象は少年ではなく。

「お前、風に乗った砂鉄まで!!」

少年の言葉のとおり、空中の砂鉄が少年の上空に、渦を巻くように集まっていく。

それらは槍のように変形して少年を襲う。

「こんなの、何度やっても同じ結果じゃねえか!!」

そう言っただけで向かってくる砂鉄の槍に腕を振るう。

「違う、攻撃が狙いじゃない」

それを見て、状況を見ていた戦兎はそう呟いた。砂鉄の槍が分解されていくと共に少年も違和感を覚える。それは

「(こんなにたくさん砂鉄が必要だったのか?)」

分解された砂鉄が落下する。黒く風に乗って舞うそれはまるで、

「煙幕。目くらましか」

「とつた!!」

戦兎がつぶやいた瞬間、回り込んでいた美琴が少年が今まさに振るった右手を取った。

「飛んでくる電撃は打ち消せても!!」

直接流れる電流なら問題ない、そう思っただけの戦略。しかし。

「(電流が・・・流れない!? なんなのよこいつ!?)」

いくら能力を発動して電流を流そうとしても、電流が流れていかない。困惑する美琴は、はっとなって目の前の少年を見た。

「んー・・・」

少年は少し考えると、握られているのは逆の左手を振りかぶり。  
「ひっ」

そのモーシヨンに美琴は思わず自由な方の手をかざして目をつむった。

「・・・ええつと・・・」

半笑いを浮かべどうするか考える少年だったが、突然、右手を離し、後ろに倒れこんだ。

「ぐわーっ、ヤ、ラ、レ、ター」

とぐったり横たわり目を閉じる少年。

「(穏便に済ますために、花を持たせる。いい考えだ。でもな)」  
それをする相手は誰だと思う？

御坂美琴だ。

「ふ」

「あ、やべっ!!」

「ふざけんなああああ!!」

美琴の怒りと羞恥に震える顔を見た少年はとっさに逃げ出す。その後ろでバチバチーと紫電を放出した美琴が叫んだ。

「まじめにやんなさいよ!!」

「だってお前!ビビってんじやん!!」

「ビビってなんかないわよ!!」

「嘘つけ!!こーんな風に涙目になって、びくっつてしながら、ってうわっ!!」

「死ねえ!!」

最後まで聞かず、電撃を放つ美琴だったが、少年は避け、あるいはすべて打ち消していった。

「おい!今の直撃したら死ぬぞ!!」

「どうせ効かないんでしょうが!!」

バチイと電撃と怒声を放ち続ける美琴を見て、戦兎は溜息を吐く。これ以上は無駄だろうと判断した戦兎は美琴に言う。

「やめとけて御坂。もう決着ついたろ?早く帰らないと寮監がやばいとか言ってたかった?」

「うっさい!!邪魔しないで!!」

と辺りが見えてないのか少年にむけて電撃を放ち続ける。



「つたく、しょうがないな」

そう言つて少年の前、つまりは美琴の前に立ちふさがる戦兎。

「なによ、邪魔すんなつて言つてるでしょ!」

「やかましい。いい加減やめないと警備員が飛んでくるわ。明らかに  
アンチスキル  
負けたんだから負けを認めなさいつて」

「・・・アンタに関係ないつて言つてるでしょ!!」

そう言つて戦兎に向けて電撃を放つ。

「っ!あぶねえ!」

少年が戦兎の身を案じたのか駆け寄るが、電撃の方が早い。

「よつと」

しかし、戦兎は電撃を左手でなんでもないようにいなした。

「んな!?!」

驚く少年をよそに、戦兎は美琴に近づき、手刀で美琴の頭を小突く。

「痛っ」

「落ち着きなさいつて。あんな攻撃ばつかしてたら周りの電気系統に  
影響与えちゃうでしょうが。少しは考えろよ」

「・・・わかつてるわよ、そんなの」

ほんとかよ、と戦兎は思ったがとりあえず冷静になったのを見て警  
戒を解いた。

「あのー、大丈夫つすか?」

「ん?」

後ろからの声に振り返ると、逃げ回っていた少年がこちらに近づい  
てきた。

「大丈夫大丈夫、そつちこそ平気か?」

「ああ、俺は大丈夫なんだけど・・・」

と少年は戦兎の左手をしきりに見ている。

「どうかしたか?」

「いや、あんな電撃をいなすなんてどんな能力なのかなーつて」

「いやそれは君もだろ・・・そうだな、強いて言えば」

と戦兎は手に持っていたダイヤモンドボトルを振り、

「ダイヤモンドは電気を通さないんだよ」

「・・・は、はあ」

「ま、とりあえず今日はここまで。続きはまた今度、命にかかわらない範囲で俺のいないところで人様の迷惑にならないところでやつてくれ」

「条件多過ぎよ」

「あははは・・・と、とりあえず、なんか助けられたみたいで、ありがとうございました、ええっと」

「桐生戦兔。戦兔でいいぞ」

「戦兔・・・、変わった名前つすね・・・」

そう言つて少年は向き直り、名乗つた。

「俺は上条。上条当麻です。」

桐生戦兔と上条当麻。

本来出会うはずのない二人の主人公が知り合つた瞬間だった。

※

「ふむ・・・なかなか興味深い・・・」

とある一室。一台のPCの前で女性―木山春生はつぶやく。白衣を纏つた姿は研究者然としており、とてもエキセントリックな言動をしていたようには見えない。

画面には、書庫バンクにアップされている御坂美琴のデータと写真が表示されていた。

「あれが常盤台の超電磁砲レールガン・・・そして」

PCには美琴の画像と共にもう一枚、監視カメラの映像なのか、若干ピンボケした写真が表示されていた。

「仮面ライダー。実に興味深い存在だ」

スマッシュと戦うビルドの姿が、表示されていた。

## 第十二話 グラビトン事件（前編）

「なー戦兔おー。お前爆弾なんか作ってねえよな？」  
「はあ？」

午前7時。朝のことだ。

戦兔は研究用のデスクに腰掛け、トーストを片手にパソコンをいじりながら万丈の言葉に反応した。

「何言ってるの？お前。そんな物騒な物作るわけないでしょうが」

「だよなー。戦兔じゃねえとすると、じゃあやっぱり超能力ってことなのか・・・」

「なんの話だよ」

パソコンを閉じ、戦兔は居間のテーブルでラーメンを食べている万丈の元に向かう。よく朝からこんなもん食えるなど万丈の手元をしげしげと眺めた。

「ほら、例のグラビトン事件、まだ犯人捕まらなくてよ」

「惜しい、一つ余計だ。グラビトンだろグラビトン」

そう突っ込み、インスタントコーヒーを淹れるためにお湯を沸かしつつ、戦兔が言った。

「該当する能力を持った学生にはアリバイがある。可能性としては急激な能力レベルの上昇で、これまで容疑がかかっていない能力者がやっているか、重力子を加速して金属片を爆発させる何らかの技術か・・・」

「おお、黄泉川もそんなこと言ってたな」

「そりゃあ、その黄泉川さんに聞いたんだから当たり前でしょ。ま、前者はそんな急激にレベルを上げる方法が存在しないらしいし、後者は、そんな技術があれば即書庫<sup>バンク</sup>のデータがヒットするってさ。」

沸騰直前を見計らってコンロからやかんを離し、マグカップにお湯を注ぐ。

「なるほどな。それであんな質問したのか。まあ？この街がいくら科学技術の粋を集めた街でも？天つ才物理学者の俺なら作れるかもしれないって思うのはしょうがないけどな」

「別にお前が爆弾作るとは思ってたねえよ。新しい武器作って試し打ちした、とかならわかるけどな」

「そんなことしねえよ」

「いや、海賊レッシヤーやら四コマ忍法刀創ったとき振り回してただろ」

お湯が沸くのを待つあいだ、片付けをしようと流し台に向かった戦兎だったが、ふと思いついたかのような反応をして

「あ、そうそう、武器と言えば」

朝食作りに使用した食器等を流しに置きながら、戦兎は思い出したかのように言った。

「ライダーシステムの復旧過程で、スクラツシユドライバーの設計図が出てきたんだよ」

「マジか!？」

スクラツシユドライバー。

それはかつて万丈、一海、幻徳の三人が使用した、プロジェクトビルドの最終段階。使用するにはビルドドライバー以上のハザードレベルが要求されるが、その分スペックも上がる。

かつて使用していたベルトに思いを馳せる万丈だが、

「ま、作ったりはしないんだけどな」

「なんでだよ！そこは『お前の為に作っておいたぜ』とかいうもんじやねえのかよー!」

「なんでお前の装備が先なんだよ。ビルドの方を優先するに決まっているでしょうが」

それに、と戦兎はコーヒーを飲みつつ続ける。

「戦争もない今、必要以上にライダーシステムを強化する意味はない。スマツシユ相手ならビルドとクローズだけで十分対処できる。幸か不幸か、ボトルも集まって来てるしな」

「まあ、そりやそうだけどよ・・・」

「とりあえずビルドドライバーで使う武装は修理する予定だ。お前のマグマナツクルもじき直してやる。でもまあ」

そう言ってカップを置き、テーブルの上に二台並べておいてあるピ

ルドフォンの内、万丈の物を手に取って言った。

「ビートクローザーだけだと何かあった時に心許ないだろうから、ツインブレイカーだけは修理して装備できるようにしておいた。スクラッシュゼリーもドラゴンボトルから再生成したから、困ったら使え」

「マジか!!そりやありがてえ!!ナツクルも早く頼むぜ!」

「そこはもつとお礼を言うところでしょうが。まったく・・・」

飲み干したマグカップを流しですすぎ、乾燥台に置いた戦兎は言った。

「そういうわけで、今日一日ビルドフォンは預かるからな」

「ああ、わかった」

「で、万丈。お前そろそろ出ないと時間、まずくないか?」

卓上の置時計を示す戦兎の言葉を聞いて、万丈は一瞬フリーズし、「やべえ!!遅刻する!!バイクバイク!!」

「いやだからツインブレイカーのデータ追加するから預かるんだってば」

「マジか!!だったらお前乗っけてってくれよ!!」

「嫌だよ方向逆だし・・・っておい!押すんじゃないよ!!」

「マジ頼む!!プロテイン奢るから!!」

「いるか馬鹿!!」

ギヤーギヤーという言い合いと共に、朝の時間は過ぎていった。

※

「はあ・・・」

午前8時。

柵川中学校に向かう道すがら、涙子は溜息をついた。

「(なんか、気まずいな・・・)」

昨日、戦兎に言ってしまったあれこれを未だ気にしているのだ。万丈に聞いた戦兎の過去も含め、明らかに言い過ぎたと感じている。「そもそも会ったばかりの戦兎さんに、なんであそこまで感情的になっただろ・・・」

いや、自分ではその答えにうすうす感づいているのだ。

「佐天さーん!!」

と、そこまで考えたところで背後から声をかけられた。

「初春・・・おはよう」

「おはようございます、佐天さん」

言つて、初春はじーつと涙子を見る。

「な、なに?」

「なに?じゃないですよ。はいこれ」

と言つて鞆を差し出す初春。

「もう、鞆も持たずに帰っちゃうなんてひどいですよ」

「あ、あははは、そうだよねー、ごめんごめん。持ってきてくれたんだ。ありがとね」

「いえ、中身すつからかんだつたので重くはなかつたですし」

「すつからかんつてわけじゃないでしょー?お菓子とか、音楽プレーヤーとか」

「授業に関係ないじゃないですか・・・」

いつも通りなやり取りをしつつ、どこか浮かない顔の涙子に初春は言う。

「先生なら大丈夫ですよ。気にしてません。」

「へっ?なんのこと?」

涙子の言葉に苦笑して初春が言う。

「とぼけても無駄ですよ。気まずいーつて顔に書いてあります。」

「あはは・・・初春には敵わないね・・・」

涙子は観念したかのように両手を挙げる。

「なんか、あんなに感情的になっちゃって私らしくないなーとは思っただけどね」

「確かに、佐天さんはその辺、妙に飄々としてますからねえ」

「そうかな?・・・そうかもね」

初春の言葉に涙子は苦笑する。確かに自分は、自分がレベル0であることを受け入れていたつもりだったのだ。

「私さ、結構今の生活気に入ってるんだよね」

「はい?」

いきなりの言葉に初春は疑問符を浮かべる。

「今の生活っていうとー」

「初春と学校通って、御坂さんや白井さんと放課後にスイーツ食べて、戦兔さんの授業受けて、たまに万丈さんをからかって」

「万丈さん、中学生相手にガチの反応しますからねえ」

「そうそう、そんな生活が割かし気に入ってるんだ」

言葉とは裏腹に、その表情は苦虫を噛み潰したように苦い。

「だけどき、どんなに気に入っても、私には何の能力もないんだよね。」

「それはー」

「事実なんだよ。レベル0だったことは変わらないんだなーって。レベル5やレベル4、仮面ライダーみたいになすごい人たちに囲まれてるからこそ、それを感じちやうのかも。」

「それでも、佐天さんには佐天さんにしかないものがあるはずですよ」

「うん、戦兔さんもそう言ってたし、私にもそれはわかってる。．．．わかってるんだけどさ、頭では」

空を見て涙子は初春にも聞こえない声でそつと呟いた。

「．．．心じゃ、納得できないよね」

※

午前11時。

テスト期間も終わり、夏休みに向けての短縮授業期間であるこの時期は、普段は生徒がいない時間にもちらほら姿を見かける。

夏休みという、学生にとつては一大イベントを目の前に、羽目を外し過ぎる者がいてもおかしくはない。

というわけで万丈と黄泉川は第七学区繁華街を巡回していた。

「あーちいー．．．」

「コラ万丈。シャキツとするじゃんシャキツと」

気温はすでに30℃を超え、なお上がり続けている。この暑さに加えて、アンチスキル警備員の基本装備である強化ベストの通気性があまりよくない。肩に乗っているドラゴンも心なしかぐったりしているように見える。

「そんなこと言ったって、この暑さやべーよ。涼しいところいこうぜ」  
「何言ってるじゃん。まだ巡回の途中だ。私たち大人がシヤンとしてないと、いざって時に子供たちに示しがつかないじゃんよ」  
「そりやそうだけだよお」

と万丈は額の汗をぬぐい、巡回図を見る。警備員アンチスキルの詰所から持ってきたそれには新たにつけられたのか、赤丸が記されていた。

「あ、そういうば、戦兔は作ってないらしいっすよ。爆弾」

「お前、本当に桐生に聞いたのか」

「いやアンタが聞けって言ったんだろ」

「可能性の話、じゃん。自称とはいえ科学者で、フルボトルだのバイクに変形する携帯電話だの高度なテクノロジーを持っているんだ。可能性は0じゃない」

けど、と黄泉川は続ける。

「お前らの人となりは、まあ基本わかっているつもりじゃん。爆弾事件なんて起こす奴だとは思ってないじゃんよ」

「じゃあなんで俺に聞けって言ったんだよ・・・」

「話が堂々巡りじゃん・・・やっぱお前馬鹿じゃん」

「せめて筋肉つける!!」

そんなこんなで、巡回は続いた。

※

その少年は、痛む足を引きずりながら歩いてきた。よく見ると服は汚れ、頬には何かで踏みつけられたのか内出血のあとがある。

「・・・を救わないお前らなんて・・・」

少年は、所謂カツアゲを受けていた。

ほんの少しだけ自分よりもレベルの高い同級生たち、会うたび会うたび金を貸せと言われ、歯向かえば殴られ、蹴られる生活。

「ちゃんと返すって言ってんだろお？出世払いでさ」

「大体さあ、無期限・無利息。無制限ってのがお前の売りだろ？」

「なんだよ、これっぽっちしかねえじゃん」

『さーて、ジャッジメント アンチスキル 風紀委員や警備員が来る前に行こうぜ』



『楽勝楽勝！だってあいつら来んの、事件が起こってからだろ？』

そいつらは嘲笑を残して去っていく。ばれなければ問題ない。ばらしたら更なる暴行。がんじがらめになっている少年は心の中でつぶやくしかなかった。

「(くそが・・・)」

思い出しつつ、少年は齒噛みする。

「(何やってんだよ・・・なにが風紀委員、ジャッツジメント 警備員だ。アンチスキル お前らが無能だからこんな目に遭うんだ・・・)」

この世のすべてを恨むような眼で、少年はただ地面を見つめる。

「見てろ・・・」

その声は騒音にかき消されていた。

※

「はあ・・・」

「大丈夫？」

眠そうに溜息を吐く黒子に、美琴は言った。時刻は13時。短縮授業であるため帰路についているわけだが

「これからまた風紀委員？」ジャッツジメント

「ええ・・・グラビトン事件はますます被害を広げてますから・・・」  
「大変ねえ・・・」

いつになく忙しそうな後輩を見て、美琴は言った。

「仕事熱心なのはいいけど、あんまり無理しないようにね。あ、なんならこの後買い物行く？初春さんや佐天さんも誘ってさ」

そのねぎらいの言葉に、眠気なんて何のそのと言った感じで黒子は目を輝かせる。

「お姉様!!黒子がそんなに心配なんですよのね・・・、それなら!!今夜はベッドで添い寝してくだされば!!疲れなど吹っ飛びますわー!!」

と抱き着こうとし、美琴がそれを避けるといってお約束をしつつ、黒子は首を横に振った。

「せっかくのお誘いですけど、この後も風紀委員ジャッツジメントに行きますの。もう少し、調べたいんですの」

「・・・っそ。ほんとに無茶しないようにね」

やれやれ、と苦笑する美琴と、労いを受けホクホク顔の黒子の前に見知った顔が通りかかる。

「おっ、常盤台コンビじゃん」

「あら桐生さんですの。こんにちは」

「何してんのよこんなところで」

戦兎は何やら大きい箱を持っていた。

「ああ、ちよつと風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の事務所に行こうかなって。白井もか？」

「ええ、グラビトン事件の調査がありますので……で、何用ですの？」

目的地が同じなので自然と同行する形になる。戦兎は歩きながら答えた。

「そのグラビトン事件について、ちよつとしたものを持ってきたんだよ」

「ちよつとしたものって？」

戦兎の言葉に美琴が問う。

「それはまあ、見てからのお楽しみってことで」

そう言つて、いつの間にか着いていた風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の事務所を示した。

※

ドラゴン。

その厳密な出典は不明だが、中世ヨーロッパに多く伝承が残っている。巨大な体躯。空を舞うための翼。すべてをかみ砕く強靱な顎。そこから放出される炎で人間を――主にゲームの中が多いが――襲う。

『――♪』

今、黒子の目の前にあるのは、ボディが金属製でサイズが掌に収まり、鳴き声が軽快な音楽なのを除けば、まごうことない、ドラゴンそのものだった。

「なんですの？これ……」

目の前で宙を舞う物体――ドラゴンを指し黒子が聞いた。

聞かれた相手、戦兎は普段初春が使っている椅子に座り、持参したパソコンを起動させ作業しながら答える。

「ドラゴン型のペットロボット……的なものだ」

「的なものって・・・」

と、グラビトン事件関連のファイルを整理していた固法が言う。学園都市にもペットロボ「的なもの」は存在するが、それでも目の前であちこち飛び回れはしないし、そもそもドローン技術が発展していてもここまで自由に飛び回るには、相当高感度なセンサーや飛翔ユニットが必要になる。

「コレ・・・万丈さんが変身するときを使うのと似ていますわね。」

ドラゴンのボディを見て黒子が言う。確かに、今戦兎の近くで浮いているドラゴンは、カラーリングこそ黒と黄色で、万丈の持っている赤色とは異なるが、細部がよく似ている。

「お、よく気付いたな。」

言いつつ戦兎はドラゴンにパソコンから伸びているコードを差し込んでいく。ドラゴンは多少嫌がるそぶりをしたが、やがて大人しくなった。

「ゴイツは昔万丈に作ったクローズドラゴンの試作機だ。多少改造しているんなセンサーや機能を追加した。勿論、ビルドドライバーに対応しているから変身も可能だ」

もつとも、俺と万丈以外使えないんだけどな、と戦兎は付け加え、キーボードを叩く。

「で、これが一体どうしたというんですの？まさか、発明品を見せつけに来ただけ、とかではありませんわよね？」

ジト目の黒子に戦兎は首を振る。

「勿論、そんなわけないでしょうが。これには衛星回線を傍受・・・利用して学園都市内を監視していて、何か異常があればたちどころに教えてくれるんだ」

「今、傍受って言った？」

「ノー。で、今回のグラビトン事件に関してもセンサー代わりになると思っただけだよ」

「・・・お心遣いは痛み入りますけれど、それこそ衛星からの警告が届くから必要ないのでは・・・」

黒子の言葉に戦兎はまあそうだな、と言う。

「でもこいつにはナビシステムも搭載されてるし、なによりスマッシュに対する防御にも使える。白井や御坂ならまだしも初春や佐天がスマッシュと出くわしたときの用心棒って思ってくれればいいよ。」

「それはまあ、必要かもしれないわね」

「だろ？で、コイツにお前らのDNAパターンを記憶させようと思ってきたんだけど・・・」

そう言っただけを見回した戦兎に固法が言った。

「初春さんは今日非番なんです。ここのところ働き詰めだったから、久しぶりに羽を伸ばしているんでしょう」

「そういえば、さつき御坂が買物に行くとか言ってたっけか」

そう言いつつも着々とクローズドラゴンの調整のためにキーボードを叩く戦兎。白井はその様子から目線を外し、再びグラビトン事件の資料をパソコン画面に呼び出した。

「それにしても……ここにきてどんづまりですわね……」

そう言っただけを見返す。わかっているのは能力種、それにレベル4以上の能力者であること。爆弾になっているのはアルミ缶やヘアピン、アクセサリなどどこにでもあるもの、ということだけだ。(いきなりレベルが上がるなんてことはあり得ない……とするといつたかどうか……)

「実は犯人が複数いて、別々の事件だった!!とか」

「そんなわけありませんの、手口は間違いなく同一のものですわ……それに、そもその動機も不明ですのに複数犯の可能性を考えてるのは……」

「冗談よ……同僚がもう9人も被害に遭っているんだもの。早く犯人見つけないとね」

固法の言葉に頷きかけた黒子がふと呟く。

「9人？」

くしくも、クローズドラゴンからコードを抜いていた戦兎の声と重なった。

「風紀委員が、9人も被害に遭っているんですの？」

「ええ、私のルームメイトの子も言ってたから間違いないわ。直接的に被害に遭った子もいれば、巻き添えになった子もいるって話よ」

固法の言葉に戦兔がつぶやく。

「・・・いくらなんでも多すぎじゃないか？」

万丈に聞いた話では、今日までに起きた事件は11件。内2件は初期に起きた爆竹程度の爆発と、駅前のごみ箱内の缶が爆発した、比較的規模の小さいものだ。

「最初の2件は実験・・・爆発できるものの確認と、規模のコントロール・・・」

「本番はそれ以降の9件と言うことですよ・・・？ということとは・・・!!」

戦兔の言葉で黒子が何かに思い当たった、その瞬間だった。

『~~~~~♪!!~~~~~♪!!~~~~~』

戦兔の傍で浮遊していたクローズドラゴンが突然、警告音のような音楽を鳴らし始めた。と、それに合わせて室内の風紀委員用端末から一斉にアラート音が鳴る。

「監視衛星に反応あり!!重力子の加速を確認したわ!!」

固法が表示された情報を読み上げる。戦兔はクローズドラゴンから受信したデータをビルドフォンで読み込み、言った。

「場所は・・・第7学区。ここから近いな・・・って、ここは?」

「そんな、まさか!!」

画面を見ていた黒子が目を見開く。

反応は、学園都市第7学区のなかでも最も学生に人気のある複合施設。

「反応は第7学区、セブンスミス内だ!」

そこは御坂たちが今まさに買い物をしている店の名前であった。

## 第十三話 グラビトン事件 (後編)

「(新しい世界が来る。)」

少年は大通りを歩いていく。耳元には愛用のヘッドホンをつけ、黙々と。

「(僕が、僕を救う)」

学校でも、街に出ても目をつけられ、傷つけられる。能力がないから、それに、助けてくれるはずの存在が、助けに來ないから。

「いやー久しぶりですねセブンスミス！新しい服ほしいと思ってたんですよねー！」

「そうねー、パジャマなんか一着欲しいかな」

「白井さん來れないんですねー、残念です」

道路を挟んだ歩道で三人の少女が会話している。内一人の腕には、この街特有のシンボルが付いた腕章が取り付けられていた。

「・・・僕を救わなかった風紀委員は、いらぬい・・・」

風に乗って消え入るような眩きを残した少年の手には、どこかで見たとようなカエルの人形が握られていた。

※

「(こつちこつちー)」

楽し気な涙子の声が店内に響く。木山との一件以来となるセブンスミスとは、放課後ということもあり大勢の学生で賑わっていた。

「初春さんは見たいところある？」

「いえ、特に決まっていないますけど・・・」

久しぶりの非番である初春と、最近悩んでいる様子の涙子に気分転換を、ということが集まったのだが、どうやら功を奏したらしく、2人とも表情は楽しげだ。

「うーいーはーるー！」

先行していた涙子が初春を呼ぶ。どうやら下着店でかなり派手な下着を勧めているのか、初春は顔を真っ赤にして首を横に振っている。

来てよかったなあ、なんて美琴が思っていると、不意に涙子が声を

かけてきた。

「御坂さんは、何か探してるものありますか？」

「んー、さつきも言ったけど、パジャマかな」

本格的に暑くなる前に夏用のものを買いそろえておこうと前々から考えていたのだ。

「だったらこっちですよ!!」

下着店から一刻も早くはなれたいのか、初春が率先して店まで案内する。その様子を見ながら美琴と涙子は後をついていった。

「初春、楽しそうですね。こここのところ根つめすぎって思ってたから、いい息抜きになるといいな」

「そうね、それに、佐天さんもね」

「へ？」

自分の名前が出てくると思っていなかったのか、涙子は驚いた様子で美琴を見た。

「ここ最近、ちよつと悩んでるのかなーって。私の気のせいだったらあれだけど」

「わかつちやってみましたか・・・ありがとうございます。気遣ってくれて」

苦笑しつつ、美琴にお礼を言う涙子。いーのいーのと言いつつ美琴は店内を見回した。

「それに、色々お店観てるんだけど、あんまりいいの置いてないのよねー。みんなで回ればいいのみつかるかなって・・・」

とそこまで言ったところで美琴はとある店の前で立ち止まる。

そこは、パステルカラーかつカラフルな色合いの服を専門にした店で、所謂かわいい系の服を取り扱っているところだ。美琴の視線はその店頭に表示してある、ピンク地カラフルな色合いの花柄がプリントされたパジャマだった。

「わー・・・可愛い・・・」

見とれて思わず顔がほころんだ状態の美琴は、先に行く涙子と初春に声をかける。

「ねえねえ、これすつごくかわ」

「うわあー見てよ初春このパジャマ。こんな子供っぽい、今時着る人いないよね?」

「小学生の時まではこういうの着てましたけど、流石に今は」

いい、まで言いかけた美琴の耳に二人のコメントが届く。認めれば楽なものを、変なプライドが邪魔して素直になれないお嬢様は慌てるように言い直した。

「そ、そうよねー!!中学生にもなってこれはないわよねー!!うん!ないない!!」

ごまかすために深く頷きながら言う美琴に涙子と初春は疑問符を浮かべる。

「あ、私ちよつと水着見てきますね」

「水着ならあっちにありましたよ。私も見てきます」

涙子の言葉に初春も反応し、2人して別の店へと向かう。ちらりと二人がいないことを確かめ、美琴は素早くパジャマを手に取る。

「(いーんだもん。別にパジャマなんだから人に見せるわけじゃないし・・・今の内に一瞬合わせるだけ!!)」

勢いよく試着室の隣にある姿見の前に躍り出た。

「何やってんだ?ビリビリ」

と、自分の身体の前にファンシーなパジャマを合わせた美琴の背後に、上条が立っていた。

「な、な、なんでアンタがここにいるのよ!？」

「いちやダメなのかよ・・・」

一瞬でパジャマを後ろ手に隠した美琴に対し、上条は答える。と同時に二人ではない第三者がこちらに駆け寄ってきた。

「おにいちゃん!!」

駆け寄ってきたながら上条を呼んだのは、小学校低学年くらいの少女だった。ピンクの髪留めで二つに分けた髪を揺らしながら、美琴の方を見ると笑顔になる。

「あー、常盤台のお姉ちゃんだ!事故の時に助けてくれた!」

「事故・・・?ああ」



と思い出すのは、一か月くらい前になる例の銀行強盗事件。どうやらあの時の子供たちの一人らしい。

思い出したところで上条をみて美琴が言った。

「お兄ちゃんって、あんた妹がいたの!？」

驚くように聞く美琴に上条は否定する。

「違う違う。俺はこの子が洋服店探してるっていうから、ここまで案内してきただけだ」

「あのね！お兄ちゃんに連れてきてもらったんだ！わたしも、テレビのひとみたいにお洋服でおしゃれするんだもん！」

そう言われた少女は嬉しそうにはねながら美琴に話す。美琴は彼女の頭をなでながら言った。

「そうなんだ。今でも十分おしやれで可愛いと思うわよ」

「・・・短パンの誰かさんとは違ってな」

「なによ!!やる気!?!なんならいつぞやの決着をここでつけてもいいわよ！」

上条の呟きに反応する美琴。その様子を見た上条は溜息を吐きつつ美琴に言う。

「お前の頭ん中はそれしかないのかよ・・・大体」  
辺りを見回して。

「こんな人が多いところで始めるつもりですかー?」

ぐっ、と黙る美琴をよそに、少女は上条のシャツの裾を引っ張った。

「ねえねえお兄ちゃん、あっち見たい」

「ん？おお、わかった」

と言って引っ張る手を取る上条は、そのまま連れられるように歩いて行った。

「お姉ちゃんばいばいー!」

と手を振る少女に笑顔で振り返す美琴だったが、反対につかんだままのパジャマを見て溜息を吐く。

あの子がこれに反応していなかったということは、あの子より子供っぽいのか、と。

※

「あれ、どうしたんですか?」

水着店から戻ってきた涙子と初春は、先ほどのお店の前で項垂れていた美琴を発見していた。

「・・・なんでもない」

と、なんでもありません。顔を言われ、顔を見合わせる二人に、お手洗いに行くと言って美琴は離れていった。

「ひよつとして御坂さん、こういうの好きだったり」

「ま、まさかー」

などと話している間に見知った顔が二人に声をかけてきた。

「おー何してんだお前ら」

「あ、万丈さん」

声をかけてきた万丈に対し、涙子が言う。万丈は今日はオフなのか白色に派手な柄の入ったTシャツに、赤と黒の上着を腰に巻くというスタイルで二人に向けて手を挙げていた。

「私たちは買い物ですよ。万丈さんこそ、何やってるんですか?」

「お前らと同じだよ。この間服焦がしちゃったから代わりのを買おうかと思ってる」

その言葉に涙子は溜息を吐く。

「万丈さん。ここ女性の服しか売ってませんか?」

「マジか!? 無駄足じゃねえかよ・・・」

「普通、事前に調べたりでわかるはずなんですけどね・・・」

万丈の言葉に初春も困ったように言う。

「はあ、じゃあ男もんが売ってる服屋ってどこにあるんだ?」

「えー? それくらい自分で調べてくださいよー、あのバイクに変形する携帯で」

「そうしたいのは川々なんだけどよ、戦兔に朝取られちゃって持ってねえんだよ」

山々って言いたいんだらうな、と思いながら涙子はそつと携帯を取り出した。

※

「はあ・・・」

手を洗い、ハンカチで濡れた手を拭きながら美琴は嘆息した。鏡を一瞥してからトイレを出る。

「アイツ相手だとも調子が狂うというか、ペースが乱されるとい  
うか・・・」

ぶつぶつと呟く美琴だったが、視界の端で緑色を捉えた途端、ハツ  
となつて振り向いた。

「(ゲコ太!?)」

見ると、階段の昇る男子学生の手には、緑色のカエルを模した人形が  
抱かれていた。美琴お気に入りキャラクター、ゲコ太かと思つて振  
り向いたが、

「(じゃないか・・・)」

がつくり、と肩を落とす。色こそ緑だが、ゲコ太に似ても似つかぬ、  
どちらかと言うとリアル志向の人形だった。

「(よく見たら全然違うじゃない・・・戻ろ)」

そう思い美琴は踵を返した。カエルに夢中過ぎて、女物専門のセブ  
ンミストに男子学生が、しかも人形を持っていることへの違和感  
感じていなかった。

※

「なんで馬鹿がここにいるのよ」

「筋肉つけるコラ」

お手洗いから帰ってきた美琴は万丈を見るやいなやそう言った。  
中学生にため口を使われるのはもういいのか・・・と初春が思ってい  
ると涙子が声をかけてきた。

「初春、携帯鳴ってない?」

「えっ? あ、ほんとだ・・・、はいもしもし・・・」

「初春!? グラビトン事件の続報ですの!!」

かけてきたのは、ジャッジメント風紀委員の詰所にいる黒子だった。すさまじい音  
量で話したためか、美琴達も話をやめて電話の声を聴く。

「学園都市の衛星と桐生さんのペットロボが、重力子の爆発的加速を  
観測しましたの!!」

「!!」

黒子の言葉に初春だけでなく、美琴や涙子の顔にも緊張が走る。

「か、観測地点は!?!」

「今近くの警備員を急行させるよう手配してますの!! あなたは速やかにこちらに戻りなさい!」

矢継ぎ早に言葉を紡ぐ黒子に初春は尋ねるが、黒子は答えず、後輩の退避を命じた。電話の向こうに負けにくいぐらいの大声で初春は怒鳴る。

「ですから!! 観測地点を!!」

「第七学区の洋服店!!」

その怒鳴り声に張り合うかのように続けられた言葉を聞き、初春の表情が凍る。

「セブンスミストですの!!!」

「セ、セブンスミスト・・・」

今まさにいる地点を言われ、一瞬不安がよぎる。が、すぐに己の責務——風紀委員としての自分がこぶしを握り、言葉を放った。

「ちようどいいです。私、今そこにいます! すぐ避難誘導を開始します!!」

そう言うが早い、初春は二つ折りの携帯の通話ボタンを押し、美琴、涙子、万丈を見る。

「みなさん、聞いてのとおりです。犯人の次の標的は——この店です!」

※

「初春!? 初春!!」

切れた電話に呼びかけている黒子をよそに、戦兎はパソコンのGPSアプリを立ち上げる。先ほど黒子が言っていたとおりに近くの警備員を急行させているが、それに万丈が該当しているかもしれないと考えていた。

「でも、万丈さんが向かってても馬鹿だからダメなんじゃ」

「確かにな。万丈には爆発物を処理するような知恵はないが、変身すれば爆発から周囲を守るくらいの芸当は訳ないんだよ」

固法の言葉に戦兎はキーボードを叩きつつ返す。グレートクロスドラゴンの素体であるクロスドラゴンにはGPS電波の送信機

構が備わっている。傍にいるドラゴンが使っている衛星回線を利用し、万丈の位置を特定しているのだ。

「ってあいつまさにその現場にいるじゃねえか!!」

これだから馬鹿は怖い、と万丈の破天荒っぷりに今は感謝しつつ、ビルドフォンで万丈にかける。

「——♪」

持ってきた鞆からお馴染みの着信音が鳴った。戦兔の物は戦兔自身が持っている。つまり、

「ってあいつの俺が持つてるんだったー！ー！！！！」

「何ふざけてるんですか!!」

くそー！ー！と言いながらビルドフォンを手に走り出す戦兔。彼よりも早く瞬間移動で飛び出した黒子は、短距離のテレポートを連続で発動しながら現場に向かっていた。

「(今回のターゲットは・・・まさか・・・)」

嫌な予感を振り払うかのように、黒子は数十メートル先に消えた。

※

「なんだか凄いことになってる・・・」

人ごみの中、涙子は見上げる。眼前には先ほどまでいたセブンスミストがあり、今も続々と学生客や店員が避難している。

「初春・・・大丈夫かな・・・」

そう呟いた涙子は、先ほどの会話を思い出していた。

『犯人の次の標的はこの店です』

先ほどの電話と、初春の言葉の重みからそれがグラビトン事件のことであることは、あの万丈ですら理解していた。

『爆弾が爆発するってのかよ!!今すぐ全員外に出さねえとやべえ!』

『馬鹿!声が大きいわよ!!パニックになったらどうするの!?!』

美琴が万丈に注意する。さすがにこんな状況ではいつものようなやりとりもせず『わ、わりい・・・』と謝罪しているだけ成長がみられるが。

『とにかく、騒ぎにならないように避難誘導をしましょう。御坂さん、

協力してもらえますか?』

『わかったわ』

初春の言葉に即答する美琴。次いで初春は涙子の方を向き

『佐天さんは避難してください』

『えっ……、うん、わかった。気を付けてね』

一瞬言葉が詰まったが、涙子はそう答えた。そんな涙子に気付かず初春は万丈に指示していた。

「……私だけ避難、か」

頭では理解できる。美琴はレベル5で年上。普通の中学生よりも多くの場数を踏んでいる彼女に協力を仰ぐのは当然だし、万丈はアシタスギル警備員だ。そう、一般人である自分が避難するのは当たり前だ。

でも、

「私に能力があつたら頼ってもらえたのかな」

その呟きは、誰にも届かなかつた。

※

『——申し訳ございません。店内で、電気系統のトラブルが発生したため、本日の営業は終了させていただきます。店内のお客様は落ち着いて正面入口より退店をお願いいたします』

「出口はこちらです。落ち着いて出てくださーい。外に出たら、十分に離れてくださいねー」

入り口付近で最後の一人の誘導を終えた美琴は、人ごみに倣って店から離れる。店内には今、最後の確認をしている初春と、爆発物を探している万丈だけが残っているはずだ。

「そろそろ出てこないとやばいんじゃない?」

そう呟く美琴を指し、とある少年が向かっていた。

「ビリビリー!」

そう声をかけた来た上条は、美琴の返答を待たず尋ねる。

「あの子みなかったか!」

「あの子って、一緒じゃなかったの!」

「外にいないんだ、ひよっとして、まだ中に……」

上条の言葉を聞いた美琴は、文句の一つでも言つてやろうかと一瞬

口を開きかけたが、すぐに引き返すように走り出す。

「何やってんのよもう!!」

「ちよ、まっつて!!」

慌てた上条も店内へと走る美琴を追いかけていった。

※

「駄目だ!見つかんねえ!」

爆発物を探していた万丈の言葉を初春は聞いた。一緒に探していたのか、グレートクローズドラゴンが傍で浮遊している。

「そうですねか・・・とりあえず白井さんに避難完了を知らせましょう。そしたら私たちも避難を」

そう言っつて携帯を取り出し、登録してある黒子の番号に発信する。1コールを待たずに相手は出た。

『初春?!』

「はい、避難は完了しました。店内は大丈夫です」

『今すぐそこを離れなさい!!』

「えっ?」

予想に反した指示に初春は戸惑う。そんなことはお構いなく黒子はまくし立てた。

「過去の事件の人的被害は風紀委員ジャツジメントだけですの!!犯人の真の狙いは、観測地点周辺の風紀委員!!今回のターゲットはあなたですよ!初春!!」

「そんな・・・」

表情を凍らせた初春を見て万丈が声をかけるが、その視線はすぐ初春の背後に向けられた。

「なあ、あれっつてお前らと話してたガキじゃねえの?」

「え?」

振り返ると、銀行強盗の時の女の子が「おねえちゃん」と言いながらこちらに駆け寄ってきていた。

疑問よりも、逃げ遅れていた子供が見つかったことへの安堵が大きかったからか、その手に抱かれたカエルのぬいぐるみに違和感を持ってなかった。

「これ、眼鏡をかけたお兄ちゃんが、お姉ちゃんに渡してって！」

はい！と差し出されたぬいぐるみに反射的に手を伸ばした初春は見た。

ぬいぐるみの顔が不自然に内側へめり込んでいくのを。

まるで、重力によつ無理やり収縮してるかのように。

「ッ!!」

咄嗟にぬいぐるみを後方へと投げ捨て女の子を守るように抱き、すぐ近くの万丈と、腕の中の子を探しに来たと思われる美琴と上条に向けて警告した。

「離れてください!!あのぬいぐるみが爆弾です!!」

「くそッ!!」

万丈は言いながらビルドドライバーを取り出しつつ、初春の前に立ちふさがる。変身して爆発から二人を守ろうとしているようだ、が。「間に合わねえ・・!!!!」

ドラゴンにボトルを差し込んだ時点でぬいぐるみ、正確には中に仕込まれた金属片が膨張する寸前だった。万丈はドラゴンをつかんだまま二人に覆いかぶさるように背を向ける。

一方、美琴もただこちらに向かって走り出したわけではなかった。

「(超電磁砲で爆弾ごと!!)」

そう思考しながらポケットのコインを取り出す、が

「しまっ!!」

焦りからか、コインは指の間を滑り落ちてしまう。慌ててもう一枚取り出そうと思うも今のが最後の一枚だと気づき、血の気が引いた。

「(やばい!!)」

コインの落ちる音が鳴り、冷や汗を浮かべる美琴の視界が白く染まりー

ドゴン!!

※ という爆発音と共に、セブンスミスト上階の壁が吹き飛んだ。

「危険です!!下がって!!」

「離れてください!!二次災害の可能性があります!!」



急行した警備員が声を張り上げる。事前に避難していた客や店員は、一瞬にして野次馬へと変貌した。

「爆発したぞ」

「まだ中に人がいるんじゃない？風紀員の……」

「これってやつぱり、例の連続爆破事件の」

そんな喧騒から離れた一人の少年がいた。近くの路地に入り抑えられない感情を口元に表しつつ、歩く。

「(いいぞ……！すごい、素晴らしい！徐々に強い能力を使いこなせるようになってきた)」

思わず笑みを漏らしながら、空を見上げ言う。

「もうすぐだ……！もう少し数をこなせば、無能な風紀委員も、あの不良どもも、みんなまとめて吹き飛ばさば!?!」

後方からの衝撃と共に、少年は思わず転倒する。

「いったい、なにが……」

何事かと振り向くと、そこには三人の人間が立っていた。

「はあーい？何の用かは」

「言わなくてもわかるよな？」

「爆弾魔くん？」

現場から店内に引き返した、常盤台の超電磁砲レールガンに見知らぬ二人の大人。一人は警備員アンチスキルの制服を着込み、もう一人は肩に謎の機械を乗せていた。

「……何のことだか、僕にはさっぱり……」

「まあ？威力だけは大了もんよね。でも残念。死傷者どころかかすり傷一つ誰も負ってないわよ」

白を切ろうとする少年に向かって、美琴は腕を組みつつ言う。想定外の言葉に思わず少年は食って掛かった

「そ、そんな馬鹿な!!僕の最大出力だぞ!!」

「へえ？あっさり自白してくれるのね？」

思わず出た言葉に美琴はにやりと笑う。

「いやあ……外から見てもすごい爆発だったんで……」

「自白なんかなくても、お前が犯人だったのは分かってたんだよ!なあ

戦兎！」

「ちよつと、俺が説明しようと思つてたのに出鼻くじくんじやないよ。まったく……」

少年の言い訳を遮つた万丈を戦兎がはたく。

「君の能力は金属の粒子の内、重力子を爆発的に加速させることによってそれを収縮させ、一気に膨張させることによって爆発させることだ。重力子の操作は遠隔で出来るみたいだけど、その際に微弱な重力波の乱れ、電磁波の揺らぎが生じるんだ。そして、その乱れは爆発の規模が大きければ大きいほど強くなる。」

言いながら戦兎はクロースドラゴンを手に乗せ、続ける。

「あとは、衛星回線を通してその乱れの道をコイツにたどらせれば、爆弾魔につながるってこと。くうー！すごいでしょ！最高でしょ？天っ才でしょ!!」

一人でテンションを上げる戦兎を睨みつつ、少年は落とした鞆に手をかけた。

「い、いやだなあ……ぼくはただ、あんな爆発じゃ……」

正しくは中に入つていた金属製のスプーンに手をかけ、

「中の人は無事じゃすまないんじゃないかって!!」

三人の眼前へと投げた。と同時に能力を使って重力子を操作させようとして

ズドン!!

「うわあああー!!!??」

美琴の放つた超電磁砲レールガンによって、スプーンは融解した。

「……」

つまらなそうに電流を迸らせる美琴。二人の大人がばねえわー、と若干ビビっている。

「……超電磁砲……、今度は常盤台のエアス様か……」

勿論直撃はしていないが、余波で数メートル転がった少年が膝をつき眩いた。

「……いつもこうだ、何かをやっても、力で地面に……ねじ伏せられる……」

震えながらも、その眼に憎悪を宿し、美琴をにらみつける。

「殺してやる・・・！お前みたいのが悪いんだよ！！風紀員も同じだ！！力のあるやつはみんなそうだろうがー！！」

少年の呪詛のような言葉を受けつつ、美琴は進む。少年の眼前まで来たところで、前髪付近に紫電が走った。

「おい、電撃はやべえんじゃ」

「万丈」

止めに入ろうとする万丈を戦兎が制する。

「大丈夫だ。あいつは、『力の意味』をちゃんと分かっている」

「戦兎・・・」

「ちから、ちからって・・・」

「つく！！」

美琴は少年の襟をつかみ、強引に立たせる。能力が飛んでくると予想した少年の顔から血の気が引いた。

「・・・歯を食いしばれッ！！」

「ばちん、という人を殴った鈍い音と、少年の付けていたヘッドホンが転がる乾いた音が、路地裏に反響した。

「・・・ったく」

「・・・・・・」

踵を返す美琴に対し、何も言えずただ震える少年。頬を抑える彼に、いつの間にか瞬間移動してきた黒子が言う。

「殴られて当然ですわ。あなたみたいな能力を言い訳にするのは、一番嫌いなタイプでしょうから。」

腰に手を当て、戦兎と万丈に合流する美琴を見やり、続ける。

「ご存じかしら？常盤台の超電磁砲は、もともとはただのレベル1でした。」

その一言に少年は黒子を見上げる。自分よりも小さい少女の言葉を、ただただ聞く。

「並々ならぬ努力の末に、レベル5と呼ばれる力を手に入れたんですの。でも——」

そう言っただけで黒子は少年を見下ろす。その口元に笑みを浮か

べ

「たとえレベル1だったとしても——お姉様はあなたの前に立ちふさがったでしょう。」

少年は黒子の言葉に歯噛みする。悔しき、憎悪、そして、嫉妬。

自分よりも年下の少女の強さの前に、ただただ歯を食いしばり、呻く声だけが聞こえた。

※

「白井さーん！」

爆発現場に戻った黒子を初春が呼ぶ。

「初春！まったたく、心配しましたのよ？」

「ごめんなさい……でも、御坂さんが助けてくれたんですよ！かつこよかったよね？」

「うん！」

と傍らの少女と笑う後輩に苦笑する。これだけの爆発を目の前にしたというのに、さすが風紀委員ジャッジメントともなれば、メンタルも強くなってはいけません、と。

「それにしても……」

と改めて爆発現場を見渡す。爆発から初春たちをかばったのは美琴だと、彼女たちは証言した。万丈に関しては後ろを向いていたためわからないと言っていたが、あの場でこんなことができるのは確かに美琴くらいだろう。

しかし

初春たちが立っていた場所以外、煤と焦げで変色しているのに対し、初春たちの周りだけ何ともない

「いったい、どんな風能力を使えばこうなりますの？」

その疑問に、しかし答える者はいなかった。

※

「はあー、疲れた……」

「ったくひどい目に遭った……戦兎——カップ麵食う？」

マンションに帰宅した戦兎と万丈。とりあえずの現場検分と事情聴取を終え帰宅したらもう深夜と呼ばれる時間帯だ。

「いやいい・・・あ、そういえばこれ」

と思いついたかのように戦兎はポケットからビルドフォンを取り出し、万丈に向けて放る。

「あー！ やつと帰ってきたー！ これなくて今日大変だったんだからな！」

「うるさいよまったく。ちゃんとパワーアップしといたから文句言うんじゃないよ。」

それよりも、と戦兎は傍らに置いておいたアイテムを―スリープモードにしたクローズドラゴンを手に取り、万丈に言う。

「そろそろ真剣に元の世界に帰る方法を探すぞ。」

「・・・おお、やつとか」

真剣な面持ちの戦兎に万丈もいつになく真剣に応える。

「で？ どうするんだ？」

「まずはスマッシュが発生している原因を突き止める」

それは、かつて涙子が指摘したアプローチだ。二人の世界にしかないはずの異形、スマッシュ発生の原因、もつと言うと

「ネビュラガスがなぜ存在しているのか、をな」

「簡単そうに言うけどよ、わかんねえんだろ？」

「まあなー」

戦兎もただただ女子中学生相手に教鞭をとっていたわけではなかった。スマッシュに変身した被害者への調査や、血液など各種身体検査、現場検証など主に黄泉川と小萌の協力を仰いで地道に行っていた。しかし、

「確かに現場にはネビュラガスが残っているわけでもなかったし、変身した学生たちも、ハザードレベルはスマッシュ変身の為の基準値に達しているものの、特別な反応などは特に出てこなかった」

「ガン詰まりじゃねえか」

「どん詰まりな。語感はあるように聞こえっけど」

そう言って手元のクローズドラゴンのスリープを解除する。ドラゴンは音楽のような鳴き声と共に早速室内を飛び回る。

「それ、俺のドラゴンとおんなじやつじゃねえか。お前もそれ使うの

か？」

「いんや、これは変身の為に使ってるわけじゃないんだよ。」

疑問符を浮かべる万丈を放置しつつ、戦兔は飛び回る龍を見て思う。

必ず帰ると。

## 第十四話 噂とうわさ 1

「ready go!ボルテックファイニッシュ!!」

深夜の学園都市、第17学区の工業地帯にテンションの高い音声と共に爆発音が響き渡る。

音の主ービルドドライバーを腰に巻いた仮面ライダービルド／桐生戦兔は召喚したエンブレイボトルを爆発したほうへ向け、シールドイングキヤップを開く。見慣れた成分吸収の発光を見届け、マスク内のマイクへと指示を飛ばす。

「17学区のほうは片付けました!被害者の搬送をお願いします!!」

「了解じゃん!!」

通信相手の黄泉川が言うやいなや、警備員用の特殊車両のサイレンが遠くから聞こえてきた。スマッシュ化していた学生を見つけやすい通りまで運んだところでベルトからボトルを抜き、変身を解く。

「万丈、そっちはどうだ?こっちははずれみたいだ」

万丈のクロードラゴンに搭載された無線にビルドフォンでかけ、呼びかける。

「いま!!それどころじゃ!!ねえ!!」

珍しく息を荒くしている万丈に戦兔は言う。

「ちなみに俺が倒したのは電車のスマッシュだった。お前のが海賊だと嬉しいなあー」

「だからっ!!!!そんなこと言ってる場合じゃねえんだよ……!!って気持ちわりっ!!こっちくんない!!」

その一言を最後に通信が切れた。どうやら気が散るため強引にきいたららしい。

「おーい?筋肉馬鹿?、まったく、何のスマッシュと戦ってんだか」

助けにいったやるか、と思いいビルドフォンをバイクへと変形させ、跨る。マシンビルダーに取り付けられている画面には、学園都市全域のマップと、スマッシュの位置を示すマーカーが表示されていた。

「さて、今日こそ原因究明といこうか!」

と意気込みつつ、戦兔は相棒の救出へと向かうのであった。

※

『これにはネビュラガスの発生、急激な上昇を感知するセンサーを組み込んでいる』

遡ること一週間前。グラビトン事件解決後の自室で戦兎は言った。『マジか、そういや前ん時は美空にスマッシュ情報とか言つて教えてもらつてたけど、今はそんなことできねえもんな』

『ああ、美空のネットアイドルとしての情報収集力でスマッシュの目撃情報を集めてもらつてたんだが、今の俺達にはそんなことできない。どうしても風紀委員や警備員の情報網を頼らざるを得ない』

しかし、

『スマッシュが現れるのはほぼ俺たちがこの世界に来たことが原因だろう。この街の人達にはなんの関係もない。被害の出ないようスマッシュを倒し、原因を突き止めるのは俺たちの役目だ』

戦兎の言葉に万丈は頷く。

『もちろんだ。誰だか知らねえが黒幕がいたら必ずぶつ飛ばしてやる！』

『ああ、そこでこいつだ』

そう言つてPCを立ち上げ、画面を向ける。ディスプレイには学園都市全域の地図と人口衛星らしき写真、何らかの数値を現したグラフが表示されていた。

『なんだこれ？あれか、GNPか!!』

『なんでこのタイミングで国民総生産だよ。じゃなくて』

と戦兎は説明を続ける。

『これは学園都市内でのネビュラガス探知機だ。監視衛星と、各地に設置したセンサー、それと、どういうわけか街中に漂つてるシリコンを利用してネビュラガスの濃度を感知している。ネビュラガスが少しでも発生したらセンサーからコイツに信号が送られる仕組みだ』

戦兎は知る由もなかったが、街中に漂うシリコンは滞空回線アンダーラインと呼ばれるもので、学園都市統括理事長の目となっているものだ。戦兎は空中に漂うそれらが量子信号を出していることに注目し、異常事態が起きた際の信号パターンをクロースドラゴンに記憶させ、有事の際にそ



のポイントを割り出せるように設計し直した。

当の本人は学園都市すげえな、としか思わなかったようだが

『これでスマッシュが現れたらすぐに現場に向かえて被害を減らせるし、上手くいけばスマッシュになる前に助けられるかもしれない』  
『なるほどなー。．．でもそれと元の世界に戻ることと何の関係があるんだ？』

万丈の言葉に戦兔は答える。

『スマッシュになるにはネビュラガスが必要だ。つまり変身者は直前その身をネビュラガスに晒されるはずだ。それが自然発生しているのか、あるいは—』

『!!そうか!』

万丈の反応に戦兔は頷く。

そう

『人為的なものなら、そいつは俺たちの世界に大きくかわりがあるはずだ。そいつを捕まえて原因を突き止めるんだ!』

※

「キモイキモイキモイ!!!」

万丈は、仮面ライダー!になってから最も苦戦していた。

生身でスマッシュと戦った時、ナイトローグ、ブラッドスタークの死闘、かつて敵対していた 그리스 や鷲尾兄弟が変身するヘルブロス、最凶の敵エボルト。

今までの戦いも生半可なものではなかったが、今日の前にいる敵は別格だった。

何故なら、

「無理無理無理無理!!タコキモイイイ!!」

その悲鳴に反応するかのように敵—オクトパススマッシュは腕から伸ばしたたこ足状の触手を万丈に振るった。

「ウオオオ!!?」

変身する余裕もないのか、ドライバーをつけたまま逃げ惑う。持ち前の運動神経でアクロバットに避けていく万丈。触手はかなりの速さで襲い掛かってくるが、普段の万丈からしたら避けることなど朝飯

前のはずだ、が、

「なんでだ!?俺こんなタコ嫌いだったか!？」

「何してんだよその馬鹿」

普段の燃えるような闘志はどこへやら。ギャーギャー叫びながら逃げ惑っている万丈。そこにマシンビルダーで駆けつけた戦兎がドライバーを取り出しつつ言った。

「戦兎お!!なんかわかんねえけど俺コイツ駄目だ!!さつきから鳥肌が止まらねえ・・・」

「はあ?何言ってるんだお前・・・あ」

そこまで言いかけ、とあることに気付く戦兎。

「そういえば、スタークだった時のエボルトもオクトパスライトの攻撃は避けられなかったし、マスターもたこ足苦手とか言ってたな」

おそらく万丈の中のエボルトの遺伝子が作用しているのだろうが、ここまで怖がるのは異常だ。恐らくは遺伝子情報の内タコに関する部分が顕著に表れているのだろう。

もしかしてこれならエボルトもつと楽に攻略できたんじゃないや・・・と考えていると、

「ツ!!あぶねえ!!」

言葉と共に万丈が戦兎を突き飛ばした。一瞬遅れて高速で振るわれた触手が戦兎のいた地面に叩きつけられる。

「あつぶねえ・・・、サンキュー万丈」

言って、手に持っていたビルドドライバーを腰に装着する。

「さっ、とつとと倒しちまうぞ」

「いやいや!俺は無理だ!今回はお前に任せる!!」

「ふぎけんない!近づけないなら遠距離でサポートしなさいよ!なんのためにツインブレイカー渡したと思ってんだよ!」

「そ、そっか!よし!!」

ようやく決心が固まったのか、ポケットに入れていたらしいグレートクローズドラゴンを取り出し、同じく取り出したボトルを取り出す。

【ゴリラ】【ダイヤモンド】

「ベストマッチ！」

【覚醒】

【グレートクローズドラゴン】

装填と共にボルテックレバーを回し、スナップライドビルダーを展開、それぞれのアーマーが形成されていく。

「変身!!」

【輝きのデストロイヤー!ゴリラモンド】

【Wake up CROSS-Z! Get GREAT DRA  
GON! Yeah!】

ビルドゴリラモンドフォームに変身した戦兎はダイヤモンド側のハーフボデイの肩部分―BLDプリズムシールドからシールドを展開し、襲い掛かる触手から身を護る。

「攻撃は俺が防ぐ!お前は援護射撃しつつ隙ができたら突っ込め!」

「突っ込むのは無理だー!!」

返しつつ万丈はスナップライドビルダーを展開。右腕に武装を召喚する。

『ツインブレイカー』

青と白の銃機構を兼ね備えたパイルバンカー、ツインブレイカーの砲身、レイジングビーマーを正面に向け。

『ビームモード』

音声と共に万丈はトリガーを引き、レイジングビーマーからエネルギー弾を連続で放つ。

「オラオラオラオラあ!!」

威勢のいい声と共にオクトパススマッシュにヒットしていく光弾だったが、

「ちよっ、おまつ、あぶねえよ!!」

「しようがねえだろ!間にいるお前が悪い!」

「攻撃を防いでるからだろうが!!しっかり狙えノーコンバカ!」

「誰がバカだ!!」

「シャー!!!」

言い合っている二人の隙について、オクトパススマッシュは触手で

戦兔の脚を掴んだ。

「しまったー！」

「戦兔お!?」

バンジージャンプのように片足をつるされた状態の戦兔が宙を舞う。さすがに喧嘩は一時中断したのか、戦兔を助けるため光弾で触手を狙う万丈だったのが

「このっ！くそっ!!オイちよこまか動くなよー！」

「コイツに言ええええ!!」

大雑把な性格のゆえんか、ビームはあらぬ方向に飛んでいく。

「!いや万丈!そのまま打ち続ける!!」

「はあ!?そんなことしたら当たっちゃうぞ!?いいのかよ!?!」

「いいからやれ!!」

上に下にはねる戦兔の言葉に従い、万丈は戦兔の脚を離さない触手を狙い、連続してビームを放った。

と同時に戦兔は先ほどと同じようにダイヤモンドのシールドを展開し、無数に飛来してくる光弾の一つに向ける。

「反射は物理学の基礎なんだよっ!!」

着弾の寸前に戦兔はシールドの角度を変えた。正確には反射面を下方、オクトパススマッシュに向けてずらしたのだ。ツインブレイカーから放たれた光弾がそれに当たり、

「グギャア!!」

結果としてオクトパススマッシュの腕、触手を伸ばしているたこ足にヒットし、触手が引きちぎられた。

「よっどー！」

空中で体制を直して着地した戦兔に万丈が駆け寄る。

「どーよ!!俺の?大・乱・射!!イテッ」

「乱射の時点でまったく自慢できないでしょうが。さっさと決めるぞ」

「おうー！」

戦兔はゴリラハーブボデイの腕でボルテックレバーを回し、

【ツイン!!】

万丈はドラゴンフルボトルと、先日戦兔が復元したドラゴンスクラッシュゼリーをツインブレイカーのボトルスロットに装填する。

「ready go! ボルテックファイニッシュ!!」

「ツインブレイク!」

先ほどまで戦兔の脚に絡みついていた触手をダイヤモンドに変換し、右腕であるサドンデストロイヤーを叩きつけて発射。万丈もツインブレイカーからドラゴンを横したエネルギー弾を放つ。

オクトパススマッシュは二大必殺技の衝撃に耐えきれず、爆発。フルボトルの元となる成分の粒子が砂埃に交じって二人の方へ向かう。後に残っていたのは、

「・・・またハズレか」

戦兔は眩きと共に向けていたエンプティボトルを降ろす。

そこには見知らぬ男子生徒が倒れていた。

※

「んーっ」

「ふわあ・・・」

「はあ・・・」

「・・・随分と疲れてるわね、アンタたち」

伸びをする黒子、あくびを漏らす万丈、肩を落とし溜息を吐く戦兔を見て美琴が言う。

「・・・白井はあれか、例の爆弾魔くんの取り調べが上手く行ってないのか」

「ええ・・・、どうしても信じられませんの。介旅初矢がレベル2ということが」

「レベル2?」

黒子の言葉に戦兔と美琴は同時に反応した。

「そんな・・・、あの破壊力、少なくともレベル4はあつたはずよっ!」  
「ああ。とてもレベル2の所業とは思えないな」

「ええ、つまりこれはー、これはー・・・、どういうことなんでしよう?」

「いやそれを聞いたんだけど」

うーんと唸り続ける三人を見て、万丈は思わず質問した。

「なあ、レベル2ってそんなに弱いのか？」

「わたくしが言うのもどうかと思いますが、決して強いとは言えませんわ・・・レベル1の念動力でスプーンが曲がるとすれば、レベル2ではせいぜいボールや筆箱なんかを数10センチ浮かせることができる、といった感じですよわね」

「ふーん。レベル2でもっと強いと思ってたぜ」

「なんでだよ？」

戦兔の問いに万丈は答える。

「いつだったか、スカイウォールのない世界の仮面ライダーたちがそんな感じだったろ？エグゼイドだったけか？」

「万丈・・・お前・・・！」

がしつと両腕で万丈の肩をつかむ戦兔

「ちゃんとエグゼイドのこと覚えてて、ちゃんと言えたんだな！えらいぞ!!」

「馬鹿にすんな!!」

ギャーギャー言い合う大人二人。何やってんだかこの社会人はと思いつつ美琴は先ほど万丈が言った言葉について聞く。

「エグゼイドってなによ？」

「ん？ああ、前に違う世界のライダーたちと共闘したことがあってな。エグゼイドはその時に知り合った仮面ライダーのこと」

まあそのあとちゃんと会ってはないんだけどなーと懐かしそうにつぶやく。

「ふーん。ってちよつと待った。アンタたち前にも違う世界に行ったことがあるの？」

「おおあるぜ！スカイウォールがなくて、火野さんとか、あとは馬鹿な神のいる世界な!!」

「俺はあの辺のライダーとは絡みなかったからなー、ベルトの仕組みとかその辺、聞けばよかった・・・」

「いや思い出話じゃなくて、その時の方法で帰れないの？」

美琴の言葉に大人二人が固まる。

「その手があったか」

「今の今まで気付かないなんて・・・天才が聞いて呆れますわね」

「べっべっべっ別にいい？気付いてないわけじゃなかったよお？だって俺天才物理学者桐生戦兎だし？たたたたたただ？他のことでもちよーつとだけ？ちよーつとだけその可能性を考えるのを後回しにしてたと言いますか、そう、これから考えようと思っただけだよ!!」

いち早く黒子の言葉に反応した戦兎はそうまくしたてた。

「戦兎！あのエビグマだったら元の世界に帰れるんじゃないか？」

「エビグマ？」

今度は美琴と黒子が声をそろえる。

「エニグマだよ馬鹿。エ・ニ・グ・マ。新しい中華料理か」

「エニグマと言いますと、あれですか？ナチス軍が大戦中に使用したという暗号機の」

「いや、名前は同じだけど別物だ」

落ち着きを取り戻した戦兎が言う。

「エニグマ。別名並行世界合体装置。最上魁星っていう科学者が作った装置だ。最上はそれを使って俺たちの世界とエグゼイドの世界を融合し、もう一つの世界の自分自身とも一つになって不老不死になろうとしたんだよ。まっ、最終的にはその計画は失敗して二つの世界の繋がりがなくなっちゃったんだけどな」

「ふーん。じゃあそのエニグマはもうないわけ？」

「おお、戦兎とそのエグゼイドってやつがぶっ壊した」

「でも、それこそ桐生さんなら作れるんじゃないか？聞いたところあなた方の世界の技術が使われているようですし」

「いや、実を言うとエニグマを作るのは不可能なんだ」

「なんで？」

美琴の疑問はもつともだ。事実戦兎達自身が異世界移動をしているのだ。困難ではあっても不可能ではないはず。

しかし戦兎は首を横に振って続ける。

「エニグマの原動力には、スカイウォールから出るネビュラガスと、エグゼイドの世界に存在するバグスターウイルスを掛け合わせた、ネ

ビュラバグスターっていうのが必要になる。ネビュラガスは出役しているスマツシユの原因を辿れば手に入るかもしれないが、バグスターウィルスはどうやって手に入らない」

「そうなんですの・・・光明が見えたと思いましたが」

「ああ。まあ？この天つ才にかかれば異世界移動装置の一つや二つ、そのうち作って見せるさ」

「で？そのスマツシユの原因は見つかったの？」

「……」

「空振りですね・・・」

「いい考えだと思ったんだけどな、いかんせんスマツシユ発生場所も時間もばらばらで法則性がさっぱり見当たらないんだよ」

これまで学園都市に出現したスマツシユは既に16体。ボトルも同様の数入手しているが、今のところどのボトルも以前戦兎達が使用していたものと変わらないものだった。

「でもまあ、今のところスマツシユになった学生に怪我はないし、もしアンタたちの世界の関係者がネビュラガスを使って悪だくみしていたとしても、とりあえず邪魔はできてるんじゃない？」

「・・・まあ、それはそうだけど・・・」

とんとん、となおも溜息を吐く戦兎の肩を万丈が叩く

「とりあえずよ、あちいから気分転換しようぜ」

そう言って前方を示す。

「馬鹿にしては気が利くわね」

「せめて筋肉つけろ！」

万丈が示した先、この時期にはうれしい、こちらの世界でも変わらない夏の風物詩、

「冷たいものでリフレッシュ、ですの」

かき氷の屋台だった。

※

「黒子は？」

「お姉様と同じものを。お二人はどうなさいますの？」

「宇治抹茶で」



「プロテイン味」

「んなもんねえよ」

じゃあブルーハワイだと万丈が言って全員分のオーダーを受けた店員さんが奥に引つ込み、氷の削れるシャリシャリという音と、これまた夏の風物詩である風鈴の音が聞こえてくる。この音だけでも涼むなあ、と戦兔が思っていると、

「それにしても不思議ですわねえ、風鈴の音を聞いてると少し涼しく感じますの」

「そうかあ？ちりんちりん鳴ってるだけだろ」

「違うわよ、それは共感性ってやつね」

「共感性？」

2人の疑問に戦兔が応える。

「ある一つの刺激で、複数の感覚を受けることだよ」

そこまで言ったところで店員のお姉さんがかき氷を四つ手渡してきた。ちなみにここの支払いは戦兔と万丈の奢りである。「中学生に支払わせるんだ、ふうん」という美琴の一言によって有無を言わず財布を出すことになった。寝床であるマンションの家賃が破格の安さとは言え、ライダーシステムの復旧にかかる諸々の機材費など、家計は乏しい。おまけに一人で3人分くらい食べる筋肉馬鹿のせいで赤字寸前だ。

今日も素麺かなあ…と献立を考えつつ先ほどの続きを説明する。

「つまり、赤色を見ると暖かい、青色を見ると冷たい、みたいなイメージが湧くだろ？」

「暖色、寒色といえますものね」

黒子の言葉に美琴は頷く。

「そういう、一つのもので色んなイメージが湧いたり、感覚が生じるのを共感性っていうのよ。このかき氷だって—」

と手に持っていたかき氷の中身を見せる。イチゴ味のもので実際にイチゴの果肉が入っているタイプのものだ。

「赤いシロップにフルーツのイチゴの赤、ってわけよ」

「なるほど…ってお姉様、一度にはおばり過ぎすのよ」

かき氷特有の頭痛に目をつむる美琴に黒子が言う。

「さっぱりわかんねえ。なんだよ男爵って」

「それは芋な。じゃなくて」

宇治抹茶のシロップを氷になじませながら戦兎は言う。

「クローズマグマのボディは赤だろ？赤色は炎のイメージを湧き立てるだろ？そーゆーことだ」

「なるほどな!!確かに魂燃えるもんな!!」

「何よその納得・・・」

スプーン片手に呆れる美琴はさらに一口、二口と氷を口に運ぶ。やっぱ夏はこれよねこれなんて思っている

「御坂さーん!みなさーん!」

屋台のある広場の入り口からこちらを呼ぶ声。

「佐天さん」

制服姿の涙子がこっちに駆け寄ってきた。

※

「んー!頭痛い!」

「もはや夏の風物詩ねー」

レモン味のかき氷片手にめを細める涙子に美琴が言った。

「確かに、わかってもついつい食べ過ぎちゃうんですねー」

「ちなみにそれはアイスクリーム頭痛っていうらしいぞ。」

「らしいですね。あ、戦兎さん、ごちそうさまです!」

「おう!残さず食べよ!」

「お前一円も出してないだろ」

いつものような会話が繰り返される。昼下がりの広場で女子中学生と大人二人が会話しているのは奇妙な光景ではあるが、今更それを気にするものはいなかった。

「そういえば、初春さんは?」

「あー、初春は今風邪でダウンしてます。夏風邪らしいんですけど寝込んでるみたいで」

「そうなんだ・・・これからお見舞いに?」

涙子の持つ少し大きめの手提げ袋を見て美琴が言う。

「はい、初春は『心配しないでください』とか言っていましたけど、放っておけませんし」

「・・・そうだね。きつと心細いもんね」

「じゃあこれからみんなで見舞いに行こうぜ。プロテインお土産に」「いやいや、さすがにお邪魔過ぎるだろう」

単純な万丈の言葉に戦兔が突っ込む。しかし言われた側の涙子は「いえーみんなが来てくれた方が初春も喜びますよ!!ぜひお願いしますー」

「ですわね。どちらにしても風紀委員本部からの伝達事項を伝えなくてはいいけませんし、甘いものでも持って見舞いしましょう」

「・・・よし！じゃあこの天っ才が調合した栄養ドリンクをー」

「「それはだめ」」

「うそーん？」

かくして、初春宅へのお見舞いが決定した。

※

「つてことで、お見舞いにきましたー!」

「「お邪魔しまーす」」

10分後。

お見舞いに近くの洋菓子店で買ったゼリー(プロテインを入れようとする万丈を美琴と黒子で全力で止めた)を持参して、初春が住む学生寮にきた美琴達。ちなみに戦兔は先約があるとのことで謎の栄養ドリンク(という名のケミ〇ルX)を残して去っていった。

「すいませんわざわざい・・・」

1Kの小さな部屋には女子中学生らしいパステルカラーの家具が取り揃えられており、いかにも女の子の部屋、といった様相だった。「いいのいいの。ちよつと動かないでねー」

ピピッと耳に当てるタイプの体温計のアラームが鳴る。数値を見ると37.5。微熱と言えば微熱、だが。

「あんまり熱はないけど、今日一日は大人しく寝てなきやだめだよ?」「うー、すいません、迷惑かけて」

その言葉に涙子は笑う。

「何言ってるの、大事な親友が風邪ひいてるのに放っておくわけないでしょ」

「・・・ありがとうございます」

「ま、これに懲りたらもうお腹出して寝ちゃだめだぞー?」

「・・・佐天さんがいつもいつもスカートをめくってくるからですよ」と冷たいタオル持ってくる、と言った涙子に向けて初春が照れ隠しに言う。

「大事な親友が毎日ちゃんとパンツ履いてるかどうかが確認するのは、友達として大事な責務だよ!!」

「ちゃんと毎日履いてますよ!!」

「はいはい、病人は大人しくねー」

美琴が初春を宥める。と、この場に一人の男性である万丈が口を開いた。

「邦春ー、冷蔵庫にゼリー入ってるからあとで食べよー」

「万丈さん・・・ありがたいですけど初春です・・・」

誰だよ邦春、と思わず呟く美琴だったが、万丈は気にせず美琴達と同じように床に座る。

「・・・いやに慣れてるわね。普通女子の部屋に入ったらもつとキョドるものじゃないの?」

「いやまあ、前に住んでたところにも女いたし、それに」

香澄の部屋にだって何度か行ってるし、お見舞いだってよくしてた、とは言わない。香澄のことも美空や砂羽さんのことも、こいつらには関係のない話だ。下手に話して心配させるのはよくない。

いや、なんでもねえよ、と万丈の中にあるなけなしの「大人らしさ」によってそれ以上は語られず、美琴もそれ以上詮索してこなかった。

「そういえば白井さん、グラビトン事件について進展はありましたか?」

涙子が台所でタオルを冷やす間、初春が黒子に聞く。

「ある、といえはありますし、ない、と言えはなし、と言った感じです」「どういうことですか?」

「わかったのは書庫バンクの情報から、犯人の能力はレベル2だった、と言う

ことだけですの。でも」

「ええ、あれは間違いなくレベル4はあった」

黒子の目配せに美琴が応える。うーんとみんなで唸っていると、万丈が口を開いた。

「そんなの、そいつのレベルが上がったんじゃねえの？レベルっていうからには上がるモンなんだろう？」

「それはー、そうなんですけど・・・」

「ゲームと違って、能力のレベルは一朝一夕で上がるもんじゃないのよ。仮にもものすごい努力をしたとしても、あの事件の期間でレベルが二段階上がるなんてことはあり得ないの」

「じゃあお手上げじゃんか」

万丈の言葉に再び唸る一同。

と、レベルを上げるというワードで美琴はあることを思い出す。

「そういえば佐天さん、前にレベルアップとかなんとか、レベルを上げる道具の話、してなかったっけ？」

## 第十五話 噂とうわさ 2

「レベルアップー？」

「はい、なんでも、使うと能力レベルが上がるって噂の物らしいのですよ」

戦兔に対してそう説明するのは、椅子に乗って黒板を消す月詠小萌だった。

「ま、都市伝説レベルの話なんですけどねー」

「さすがに実在はしないですよね」

そんなものがあつたら美琴のようなレベル5が容易に量産できてしまう。下手したら軍事兵器にもなる能力者がそんなにいたら戦争につながりかねない。

「桐生先生の学校でも流れてるんじゃないですか？そういう噂」

「佐天がそんな感じの噂を言ってましたけど、まあ都市伝説みたいなもんじゃないですか？」

「街を守る仮面ライダー、みたいにじゃん？」

と、戦兔の言葉に隣に座っていた黄泉川が茶化すように言った。涙子、万丈達と別れた後、スマッシュ退治の報告にとある高校に来たというわけだ。

「前の世界でもそんな感じに都市伝説化してましたからね・・・まあそのレベルアップーと違ってスマッシュは実際に街を壊したりして被害が出ますから、野次馬とか心配ですけど」

「その辺はコッチで何とかしてるじゃん。この間の時みたいに包囲したり、援護したりな」

「それは感謝してますよ。おかげで戦うことに専念できる」

なにせ変身しているのはほぼ全員善良な学生だ。ネビュラガスによる体内汚染が進行すれば最悪消滅する恐れもある。素早く倒して成分を吸収するのは絶対条件なのだ。

「それで、手がかりはあったのですか？」

「そうじゃん。結構な数のスマッシュが現れてるし、なにかしらヒントみたいのはなかったのか？」

「それがですね・・・」

と言って戦兎は机に置いていたバックからノートPC(ジャンク品から自力で組み立てた天つオモデル)を出し、ディスプレイにマップを表示させて二人に向けた。

「今まで現れたスマッシュの位置情報をまとめたんですが、完全にランダムに発生しています。強いて言うならこの第七学区が一番多く、そこから同心円状に発生していると言えなくもないですが」

「んー、発生の順番はランダムですし、そもそも発生してから発見するまでに多少のタイムラグはありますからねえー、位置情報にはあまり期待できないと思うのです」

「被害者、変身していた学生に何か共通点はないのか？」

黄泉川の質問にも戦兎は首を振る。

「あるとしたら学生ってことだけですね。学校はバラバラ、学年、性別も・・・」

そこまですぐいいかけて戦兎は顎に手を当てる。

「どうしたんですか？桐生先生？」

「・・・学園都市は学生の街だけど、学生だけが住んでいるわけじゃない」

「そりやそうじゃん。生徒だけじゃ授業はできない。教員や労働者は必要じゃんよ」

「・・・いままで13体のスマッシュが出現して、そのすべての変身者が学生だけ・・・八割が学生だとしても一人くらい大人がいてもおかしくない。何者かが意図的にネビュラガスアンチスキルをばら撒いているのなら、むしろ夜間の見回りをしている警備員や昼夜を問わない研究者の方が狙いやすいはず・・・」

「あ、あのー？桐生先生？」

一人で思考にどっぷりつかり始めた戦兎に小萌が声をかけるが、彼は意にも介さず呟き続ける。

「大人にネビュラガスは効かない？いや、成分の組成に変化はないからそれはありえない。だとすれば・・・学生を故意に狙っている？なんのために？」

「……それが本当なら、一層警備を強化する必要があるじゃん」

黙って聞いていた黄泉川が言うと小萌も口を開く。

「そもそもネビュラガスへの耐性値、ハザードレベルでしたっけ？ある程度のレベルがないと死んじゃうはずなのに、全員が全員スマッシュになるというのも不自然な話ではないですか？」

「…あまり考えたくない可能性ですが、俺たちの知らないところで誰かが消滅している、とか」

「いや、それは考えにくいじゃん」

考えうる中でも最低な可能性に、黄泉川は首を横に振った。

「学園都市の全学生は、それがスキルアウトだろうとお嬢様であろうとどこかの学校や研究機関に所属しているじゃん。仮にネビュラガスによって消滅していたとしたら、そこから警備員アンチスキルなり風紀委員ジャッジメントなりに通報が入る」

そこまで言っただけ机の上に置いてあったペットボトルをあおる。

「……」数週間で生徒の失踪の通報は来ていないじゃん。13体もスマッシュが現れているんだ、仮に消滅しているならそれ以上の人数が消えているはずだしー」

「噂になっているでしょうね」

つないで言っただけ小萌も言葉に三人は沈黙。

「ま、地道にスマッシュを追うのが一番確実じゃん。桐生、お前たちが言っているフルボトルってのも集まっているじゃん、戦いは楽になるんじゃないのか？」

「そうですね…」

そう言っただけ戦兎はビルドフォンを取り出し、格納していたボトルを全て実体化させた。

「13本に、元々お前と万丈が持っていたボトルを合わせた17本か…、並べると壮観じゃん」

「元々は60本あるって考えると、これでもまだ2割くらいってことですね」

2人は机に並ぶボトルたちをしげしげと眺める。今あるボトルは、元々持っていたラビット、タンク、万丈のドラゴンとグレートドラゴ



ンエボルボトルに、ゴリラ、ダイヤモンド、タカ、ガトリング、ハリネズミ、消防車、ライオン、掃除機、オクトパス、忍者、フェニックス、ロケット、パンダ、計17本。

「あとはこの間復元したアイテムもありますし、着々と装備は整いつつありますね」

「一般市民に頼りっぱなしってのはアレだが、頼もしい限りじゃん」  
「そうですねえ、生徒たちの安全が第一です」

笑顔で話す二人を見ながら、しかし戦兔の心は複雑だった。

ボトルが集まり、装備が整う。この状況はまるでかつての戦兔達と同じなんじゃないか？

そう、エボルトによってライダーシステムを強化するように仕向けられていた、あの頃と。

「…手放しには喜べねえな」

黄泉川に聞こえないくらいの声で戦兔はつぶやいた。

※

「それはそうと、レベルアップでしたっけ？結局どういう噂なのですか？」

教室での報告会も終わり、戦兔は小萌と共に帰路についていた。彼女の住んでいるアパートの方に初春の住む寮があるため、顔でも出していくか、という運びになったのだ。

「いや俺もそんなに詳しく聞いたわけじゃないんですよね。」

歩きながら戦兔は言う。夏休み前だからかいつもより学生の姿が多い。まだ完全下校時刻まで大分あるとはいえ、この時期は風紀委員ジャッジメントも警備員も大忙しだろう。急な呼び出しを食らっていた黄泉川からもそれはうかがえる。

「レベルアップパーっていうものがあれば、能力のレベルが上がるとかなんとか・・・、実際使ったみたいだな書き込みもありますけど、あやふやすぎて信ぴょう性はかなり低そうですね」

「むー、先生としてはあまりよろしくない噂ですねえ」

「楽な方法にすぎない生徒が増えるからですか？」

「それもそうなんですけどー」

んー、小萌は口を尖らせ唸る。

「桐生先生は能力開発についてどのあたりまで理解していますか？」  
「薬物投与や催眠術なんかで脳の構造を変化させ、『自分だけの現実』  
を獲得すること、ですよね？」

「その通りです。『自分だけの現実』とは、超能力の土台、たとえば――」  
と小萌は持っているバックを戦兎の方へ向ける。

「このバックの中身を透視できますか？」

「俺には無理ですね。」

「そうです。でも、『物体を透視する』という、普通の世界とはズレた  
世界を観測できる生徒さんは、その現実を基にミクロの世界に干渉  
できるのです。」

「ズレた、世界」

故に『自分だけの』『現実』

「能力開発においては、この『自分だけの現実』をいかに強く観測でき  
るか、自分自身の主義、自分だけの世界をどれだけ強く持てるかが重  
要なのです。」

「でもそれって、高位の能力者ほど普通とはかけ離れているってこと  
なんじゃ」

「そうとも言えます。でも、大事なのは自分の、自分だけの世界を持ち  
続けること、限界を定めず、自分を信じることなのです」

「信じる、ですか」

「そう、自分の現実を信じること、それが能力の強さにつながるので  
す」

その言葉を聞いて戦兎は思う。ライダーシステムに似ている、と。  
ライダーシステムは変身者の感情の強さによって上下する。戦兎  
自身、ラブアンドピースをかかげ、その精神によって限界までハザー  
ドレベルを上げたこともあり、また最終決戦における氷室幻徳や猿渡  
一海のように、誰かの為を思う気持ちによって限界を超えた力を出し  
た例もある。

「たしかに、それならレベルアップなんていうインチキはよくない  
ですね」

「そうなのです!!それに—」

小萌はこぶしを握って力強く言った。

「生徒さんは皆原石!!磨いて輝かない宝石はないのに勝手に人口研磨なんてさせませんよー!!」

「じ、人口研磨っすか…」

悪魔の科学者、なんて呼ばれてた戦兎でも、この人やばいんじゃないかと素直に感じたのだった。

※

「能力のレベルを上げるレベルアップ?」

涙子の言葉を反復した美琴は、信じがたいというような顔をした。「ですから、本当にただの噂ですよ?実態のつかめない、言っちゃえば都市伝説みたいな話なんですから」

手を横に振りながら涙子は言う。黒子、涙子、美琴に加え万丈まで座ると、1Kの学生寮室は満員だ。病人である初春は二段ベッドの上で横になっている。

「実態のつかめない、っていうのは?」

「えっと、噂によって話が全く違うんですよ。レベルアップがどんなものかっていうのも、載っているサイトによって全然違うし」

「確かに都市伝説みたいな話ねー、ガセっばいわ」

「…そうとも言えませんの」

美琴の呟きに黒子は言う。

「どういうこと?」

「実は、例のグラビトン事件以外にも数件、実際の事件の規模と能力レベルに差がある事件がありましたの。覚えてませんか?戦兎さんと最初にお会いした時のパイロキネシスとや、常盤台狩りの眉毛女など、お姉様がご存じのものだけでも二件御座いますの」

「それって、え?レベルアップってマジモンなんですか?」

涙子が驚いたように言う。と、それまで黙っていた万丈が美琴の開いていた端末の文字を見て口を開いた。

「それなら見たことあるぞ」

「はあ?」

黒子と美琴が同時に万丈へ振り向いた。

「いつ、どこでですか?!」

「あの爆弾野郎がスキルマイト「スキルアウトよ」そうそう、そのスキルアウトの連中に絡まれてた時、拾ったモンに書いてあったんだよ『れべるうぷぷあ』って。そっか、それレベルアップって読むのか」  
「(れべるうぷぷあって・・・そのまま読んだんですね・・・)」  
「(類まれなる馬鹿ですわね・・・)」

中学生レベルの英単語も満足に読めない万丈はともかく、これでグラビトン事件とレベルアップが繋がったということになる。

「佐天さん、他に何か情報ない!?!」

「ええ? えつと、本当かどうかわかりませんが、自分はレベルアップを使ったってという人がネットの掲示板に書き込んでいるとか・・・」

「それ、どこのサイトですか?!」

「ええ? えつと・・・」

「これじゃないですか?」

美琴と黒子に詰め寄せられたじろく涙子の頭上から初春がPCの画面を示す。

「お手柄ですの初春!!」

「そうね、あとはそいつらの素性やたまり場さえ突き止められれば!」

「一毛達人ってわけか!」

「一網打尽!!」

「素性まではわかりませんが、たまり場ならほら」

と万丈へ突っ込んでいる三人に向けて、ある書き込みを示す。

「このファミレスによくいるらしいですよ?」

「よし!! じゃあ早速そこに「ちよつとお姉様!」ここは風紀委員ジャッジメントにお任せくださいですの!」  
「なんかわかんねえけど、俺も行くぜ!」

と、すぐさま三人は外へと駆け出した。後に残った涙子と初春はお互いに顔を見合わせ、

「・・・お腹すきましたね」

「なんか作ろつか」  
苦笑しつつ言った。

## 第十六話 噂とうわさ 3

「じゃあ桐生先生、私はここでお別れなのです」

もうすっかり日も落ちた学園都市第七学区は、夏休みということもありまだまだ人通りが多い。ではーと言って路地を行く小萌を見送りつつ、補導されないのかなあの人は・・・と戦兔は思った。

「さ、帰って飯作らねえとな。考えてみればかき氷しか食べてねえや今日・・・、ん？」

マシンビルダーに変形させようとビルドフォンを取り出した戦兔の目線、繁華街の方へと見覚えある影が走っていく。

「御坂と白井と万丈？」

相棒と知り合いの女子中学生が走っていく。これが普通の知り合いだったら何とも思わない。夏だからなあともっともらしいことを呟きつつ戦兔は帰路に就いただろう。が、あいにく見かけたのは学園都市最強クラスの能力者二人に筋肉馬鹿の仮面ライダー。その面々がこの時間の街を走っている、ということは、

「・・・なんかトラブルの臭いがするんだよなあ」

最悪だ・・・と一声呟き、戦兔は三人を追った。

※

「大丈夫ですかねえ・・・」

ベッドから降りてきた初春が言う。

「あの三人なら心配ないでしょ、万丈さんは仮面ライダーだし」

何を作ろうかなー、と携帯で検索エンジンを立ち上げた涙子と言う。

「学園都市が誇るレベル5とレベル4だもん。あたし達が行っても、ね」

「佐天さん・・・」

涙子の言葉に、どこか羨望と諦めを感じた初春は友人の方を向く。

「ねえ初春、もしレベルアツパーを使ったら、私たちも本当にレベルが上がるのかな？」

「さあ…、あ、でも」

と、いつものように人差し指を立てながら

「ズルは駄目ですよ？」

「なっ、だから『もし』って言ってるじゃん！大丈夫！手なんか出さな  
いって!!」

少し顔を赤くして弁解する涙子。その様子を見て少しほっとする  
自分に、少しだけ疑問を持った初春だったが、

「本当ですかー？」

いつものように返すことでいつも通りの親友同士に戻ったので  
あった。

※

「そういえばさ、課題でパーソナルリアリティのことが出てたんだけ  
ど、イマイチわからないから教えてくれない？」

「交換条件ですかー？まったたく…」

そう言いながらも涙子が鞆から取り出したプリントに目を通す初  
春。柵川中学校は公立校のため、常盤台のように大学レベルの文献や  
資料を読むことはないが、大体の学校では能力開発分野に関しては中  
学生から本格的に習うため、中一の二人にとっては今一つ理解でき  
いない分野になる。

「自分だけの現実って、知識ではわかっていますけど…」

「自分だけの…」

雑炊用の出汁に冷蔵庫にあったご飯を入れひと煮立ちさせている  
間にネギを刻む涙子。実家には弟もいる長女のうえ、常に自炊派の手  
元は中学生にしては見事な手さばきであった。

「初春だけ、私だけ…、そんな現実ってなんだろうねえ…、あ、妄  
想とか？」

「あ、近いかも」

「えっ?」

冗談のつもりが、予想外にきた反応に初春の方を見る。初春は頼杖  
を突きながら資料をめくって言った。

「妄想はアレですけど、思い込みとか信じる力とか、そういう強い気持ちじゃないですかねえ？」

「へえー、信じる力、か」

鍋に刻んだネギを入れ、鍋をかき混ぜる。風邪をひいたときに母がよく作ってくれた卵雑炊。母の味には及ばないが、こつちも悪くないと涙子は思っている。

「私自身レベル1なんで、全然説得力ありませんけど」

「ううん、ありがとう。…正直、自分だけの現実って言われてもちんぷんかんぷんだったけど、なんとなくわかった気がする」

おたまで少しだけすくって味を見る。

「私も信じていれば、いつかレベルが上がるのかな？」

「大丈夫ですよ、佐天さんは思い込みが激しい人ですから」

「何気にひどいこと言うねえ、きみは」

笑顔でこちらを見る初春に涙子もまた、笑顔で返す。

お母さんの味には、やっぱり届かないと思いつつながら。

※

「ここね」

「このラミレスにその掲示板に書き込んでいる奴らがいるのか？」

「誰ですのラミレス…」

第七学区、風力発電用の風車が目印の公園が近いファミレス。美琴達がよく利用する店だがこちらは大通りから少し外れている店舗らしく、先ほどから出入りする客層も所謂不良のような格好の学生が多い。

「じゃあ早速」

「乗り込むか！」

「もう、お姉様つたら、というか万丈さんも」

「なによ、アンタは風紀委員ジャッジメントなんだから面が割れてるかもしれないでしょ？いいから私に任せときなさいって！ってゆーか…」

拳を掌に打ち付けながら気合を入れてる万丈に言う。

「アンタなんかまんま警備員アンチスキルじゃない、ここで黒子と待ってなさいよ」



「はあ？俺だつて馬鹿じゃねえし、これ脱げば問題ねえだろ」

「問題大有りよ！、大の大人と女子中学生なんて、この街じゃ目立ってしょうがないのよこの馬鹿」

「せめて筋肉つけろよ！」

「ば、万丈さん！声が大きくて目立ってますの!!」

美琴の言葉通り、何を話しているかわからなくてもこの三人の取り合わせは目立つよううで、今も通行人から何事かとみられている。

「じゃ、ちよつと行つてくるわね。アンタたちは離れた席で待機してなさい」

言うが早い、美琴は店内へと消えていった。

「なんでしよう…黒子は嫌な予感しかしませんが…」

「ん？なんでだよ？どうでもいいけど腹減つたし、なんか食つてようぜ」

※ この人にも感じますの、とは口には出さなかった。

「レベルアップについて知りてえだ？」

「うん♪ネットでくうぜんー、お兄さんたちの書き込みつけて、できたらわたしにも教えてほしいなあーって、ねっ？おねがい！このとおーり♪」

猫なで声、としか形容できない声色で美琴は喋る。目の前には3人の男子学生。見た目からして高校生といった感じだ。

「んなの知らねーよ、とつとと帰んな。」

「そんなこと言わないでー」

「しつけど、ガキはもうおねむの時間だろ」

そんな美琴の演技もむなし、素っ気なく返す不良たち。

「これは…早くも頓挫の予感ですの…」

注文した飲み物をストローで吸いつつ、黒子はつぶやく。美琴たちから5席ほど離れた一画に座っている二人は、先ほどから美琴の動向を見守っているのだが、

「このスパゲッティーめっちゃうめえな。マスターが作ったのとは大

違いだ。んー、でもやっぱプロテイン入ってねえと気合入んねえなあ」

「あの、万丈さん？今はそんなことしてる場合じゃありませんのよ？お姉様の方を」

「ええー？私そんな子どもじゃないよー？」

「ぶっぶお」

唐突な美琴のセリフに噴き出す黒子。

「(な、なに言ってますのお姉様黒子というものがありませんが!!)」

「きつたねえな！つたくふきんふきん…」

「ほらよ、ふきんだ。ちゃんと拭けよ」

「おーサンキュー戦兔。…戦兔？」

と、横を見ると見知った顔の男が眉をぴくぴくさせながら席に座っていた。

「…何してんのお前ら？」

「き、桐生さん…、あの、何故かご機嫌ななめに見えるのは気のせいですの…？」

「カルシウム足りてねえんじゃねえの？」

火に油を注ぐ真似を！と黒子が止めに入るもむなしく、

「それは、お前らが、さつきから、さんざん、怪しいことしてるからでしょうがああ!!」

と店内であることを考慮したうえでの怒声と共に万丈の頭をはたく。持っていたゴリラフルボトルの効力か筋肉馬鹿で頑丈な万丈にもダメージがあつたらしく、頭を押さええて悶絶していた。

「あ、あの、これには深いわけがございまして…」

と制裁を恐れた黒子はかくかくしかじかと成り行きを話す。いつの間にか頼んでいたコーヒーを飲みつつ聞き

「つまり、信憑性不確かな情報を頼りにレベルアップの謎を突き止めよう？相変わらず無茶な真似するな」

「返す言葉もありませんわ…」

反省の色を見せる黒子にはそれ以上何も言わず、万丈の方に向き直る。

「お前も、俺たち大人が危ない真似を助長してどうする。そういう時は慎重に動いけていつも言ってるだろうが」

「別に言われてねえし」

「それはお前が覚えてないだけだよこの馬鹿」

「馬鹿って言うなよ、せめて筋肉つけろ」

「やかましわ。ところで」

と黒子の後方を見て戦兎は言う。

「その御坂だけど、結構前にチンピラ連れて外でてったぞ」

「なんですって!?!」

急いで振り返れば、確かにいつの間にか美琴と男子学生たちはいなくなっていた。

「お姉様に限って危険はないと思いますが、急いで探さないよ」

「大丈夫だ、さつきドラゴンをつけといたから場所はわかる。追いかけるぞ」

そう言って戦兎は席を立とうとするが、万丈に掴まれ、止められる。

「なんだよ」

「悪かった、俺の判断が甘かった。…次からは気を付けるよ」

「わかればいいんだよ。筋肉馬鹿でもちゃんと学べるじゃねえか。ほら、とつとと行くぞ。白井もな」

「おう」「了解ですの」

そう言って二人は戦兎に続いて駆け出した。

「あ、万丈罰としてお前ここ払えよ」

「は?それとこれは別の話だろ!つーか財布持ってねえし」

「中学生に払わせる気だったのかよ!?!」

「わたくしが払いましたから!早くいきますわよ!」

「は、はい…」

最後まで締まらない大人たちであった。

## 第十七話

### 噂とうわさ 4

「おっと、ここから先はタダってわけにはいかないなあ」

「……えつとお……」

店から出た美琴とレベルアップの情報を持つと思われる男子学生は、人気のない路地裏へと移動していた。ところが、

「さつきレベルアップのこと教えてくれるってお兄さん言ってたよね……?」

「言つたっけなあ……、だがよ、あれは俺らだつて手に入れるのにえらい苦労したんだぜ? 情報だけだろうとタダで教えるわけにはいかないんだよ。」

「そーそー、見たとどこどこかのお嬢様っぽいし、金、出せるだろ? 出せなきゃ……」

「別の方法でも払ってくれてもいいんだぜ?」

と美琴の身体を下卑た目で見る男子学生。それを聞いた美琴は小さくため息を吐いた。

「…素直に教えれば痛い目に遭わずに済むのに」

「なんだつて? よくきこえなかつ……」

そこまで言いかけて黙る。美琴の風貌、そして先ほどから彼女の身体周辺にバチバチとちらつく紫電からある情報を思い出したのだ。

「その制服、常盤台…、エレクトロマスターってまさかつ!!?」

「気付くのが遅いわよ馬鹿」

バチン!!と言う音と共に男子学生が倒れた。

ただし、

「アンタら何やってんだい!! カタギのお嬢ちゃん相手によお!」

突然現れた女子生徒の張り手によってだった。

「な、なに?」

「姐さん!!」

美琴の問いと男子学生達の声が重なる。姐さん、と呼ばれた女子学生は美琴の方を見ると頭を軽く下げた。

「悪かったねえお嬢ちゃん。うちの馬鹿が」

「いやそれはいいんだけど…」

「悪気はなかったんだよ。ただ、アレに関しての情報はそうやすやすとは渡せなくてねえ」

「レベルアップのことね」

美琴の言葉に女子学生は首肯した。

「さ、いいところのお嬢ちゃんはもうおねむの時間だよ。とつとと寮に帰んな」

「悪いけど、こつちもはいそうですかかって引くほど育ちはよくないのよねえ」

バチバチ！と美琴の髪の毛から紫電が迸る。それを見た女子学生はわずかに目を見開いた。

「…おやおや、こんなところで常盤台のエース様に会えるなんて思ってもみなかったよ」

「あたしのことを知っているなら話は早いわ。痛い目見たくなければさっさと情報を—」

「気に入らないねえ！」

言葉を遮り女子学生は怒鳴る。

「能力者が、持つてる人間が何も無いアタシ達レベル0から奪うっていうのかい」

「べ、別に私はレベルアップが欲しいわけじゃないわよ？」

「なんだっていいさ…とにかく、黙って返すわけにはいかない、ねっ！！」

「ッ!!」

言葉と同時に女子学生は手を地面に向けて突き出す。攻撃に備え構える美琴だったが、

ずぶり、

「な、なにこれ!?!」

足元―地面が急に緩み、美琴の履いているローファーを飲み込もうとしていた。

「見たか！姐さんの能力はフラックスコート!!コンクリートの粘性を自在に操ることができるんだ！」

「解説お疲れさん、さあ、この路地裏には逃げ場なんてないよ!!」  
「こうするわよッ!」

飲み込まれまいと必死に足を動かしながら、美琴は前方に向けて雷撃の槍を放つ。だが、

「効かないよ!!」

女子学生の足元からコンクリートの壁が突き出て雷撃を阻んだ。

「んな!?!」

「どうした! そんな攻撃通じないよ!!」

威勢と共にさらにコンクリートの粘性を下げ。もはや泥のように変化した地面が美琴の身体を沈めていく。

「だったらこれで!!」

と今度は右側から回り込ませるように雷撃を放つ、またしてもコンクリートの壁が女子学生を守るように覆いかぶさり、

「通じない、って言ったはずだよ・・・なにつ!?!」

防いだ雷撃と自ら作った壁によって美琴を見失ってしまった。

「どこだ、どこに・・・なっ!?!」

気配を感じ、左右にそびえるビルを見上げると、そこにはまるで蜘蛛のように壁に張り付く美琴の姿がそこにあつた。

「な、なんだいそれは!?!」

「電気ってね、磁界を発生させるのよ。それをビルの中の鉄骨に向ければ・・・便利でしょっ!!」

再び雷撃の槍を放つ。同じように壁を作って防ごうとするが、

「これは・・・」

先ほどは防げたはずの雷撃はコンクリートの壁をやすやすと吹き飛ばし、地面をえぐっていた。

「う、嘘だろ・・・? コンクリートの壁が・・・」

「どう?、そろそろ話してくれる気になった?」

笑顔で言う美琴には明らかに余裕がある。その様子を見て女子学生は

「・・・なるほど、初めの攻撃は本気じゃなかった、ってわけかい」

「わかつたらさつさと―」

「なめるんじやないよ!!」

「へっ?」

いきなり怒声を浴びせられ、呆ける美琴。

「アンタも能力者なら本気で来な!!手加減なんて哀れみはいらないんだよ!!」

「…そう」

その言葉に美琴の目が細まる。、と同時に今までとは比べ物にならないほどの紫電が周囲を迸り―

「ちよつとだけ、ね」

※

「ドラゴンのGPSだとこの辺なんだけどな」

ファミレスから出た戦兎、万丈、黒子の三人は、美琴を追っているクローズドラゴンの反応を追いつつ、辺りを探し回っていた。

「時間的にそう遠くに離れている、というのは考えにくいのです。きつとこの辺りに―」

ドゴン!!!

と凄まじい音と共に青白い光が闇を照らした。

「うおお!!ビックリしたー、なんで雨でもねえのに雷なんか落ちてるんだ?」

「あれって…」

「もしかしなくても、アイツだよな…」

「ですわね…随分と本気に近い威力ですけど、あんなあの不良に打ち込んだら消し炭になってしまいますわよ…」

その言葉に戦兎、万丈、黒子は目を合わせて、

「「やばくね?」(やばいですわね?)」

「ダツ!!と有無を言わずに三人は全力で駆け出した。」

※

バチチツ、と周囲に青白い電流が走る。

土煙が漂い、辺りの景色を曇らせているが、その中で二つ視認できるものがある。





「なんというか、タフね…よくもまあそんな前向きに考えられるわね」  
言うほど疲労を感じさせない戦兔の様子に美琴は尋ねた。

「どんな状況でも前を向いて進んでりや、いつかは光が見えてくる」  
それにな、と戦兔は続ける。

「一人だったら何にもできてねえよ。同じ方向してる仲間がいるって  
わかってるから目的に進めんだ」

「よくもまあそんなクサイセリフを大真面目に言えますわね…」

「そりやそうだ、なんたって俺は自意識過剰の—」

「あー！ー！ー！！！！」

と、戦兔の決め台詞が決まる寸前、万丈の大声が街中に響いた。

「なんだよ！てかうるさいよ！！お前ね、人が折角いいセリフ言ってる  
のに邪魔するんじゃないよ！！」

「思い出した！例のラベルクラッカー「レベルアップーですの」を前見  
たって言っただろ？あれだ、戦兔がよく持つてるやつにそっくりなんだ  
よ！！」

「マジか！オイ万丈、それはなんだ!？」

「それはな…アレだ！USAメモリ!!」

シーン、と。

見る人が見れば痛い、とさえ感じる静寂が辺りを包む。ドヤ顔で腰  
に手を当て、自信満々にこぶしを振り上げる万丈、その後ろで俯く三  
人。

と、戦兔が手を振り上げ、指揮棒を振るように「サン、ハイ」と顔  
を上げ、

「「あと一文字頑張れよ!!」」

盛大な突っ込みが夏の夜空に溶けた。

※

「レベルアップーかあ、…やっぱりただの噂なのかな」

初春宅を後にし、寝る前のネットサーフィンをする涙子。今見てい  
るのは学園都市でもそこそこの知名度を誇るニュースまとめサイト。  
なにか手がかりはないかとニュースをチェックしていたのだが、

「…なんか新曲でも入れようかな」

とメインメニューに戻るために「サイト トップ」というアイコンをクリックしようとしたところで気付く

「これ…」

見ると【トップ】という部分だけクリック可能を示す反応が現れた。

「隠しリンク？」

Webサイトには時々、表示とは異なるリンク先に飛ばされる隠しリンクが現れることがある。そのほとんどはアクセス数伸ばしの悪戯だが、噂によつては学園都市の裏サイトにつながる、などとまことしやかに囁かれている。

「…どうせ悪戯だよね…」

微かに震える指先でマウスカーソルを合わせ、ボタンを押す。

「…これって…」

そこには黒い背景に白い文字で、データのダウンロード画面が表示されていた。

【TITLE;Level Upper】

【ARTIST;UNKNOWN】

※

翌日、学校に向かおうとしていた戦兎と万丈の元に、グラビトン事件の犯人である介旅初矢を含め何人かの生徒が昏睡状態になったと言う知らせが届いた。

## 第十八話 レベルアップ

「その話、本当なの？」

「ええ、今朝警備員から連絡がありましたの。あのグラビトン事件の犯人、介旅が…昏睡状態だと」

走りながら美琴と黒子は言葉を交わす。向かう先は第七学区のとある病院だ。

「御坂ー、白井ー」

と、後ろからいい加減聞きなれた声が聞こえた。

「アンタたちも介旅の話を聞いたってこと？」

マシンビルダーに乗った戦兎とその後ろに乗る万丈に尋ねる。

「ああ、今朝黄泉川先生から連絡がきてな」

路肩にマシンビルダーを止め、「ビルドチェンジ」の音声と共にバイクモードからスマホモードに変形させる。

「昏睡って聞いたけど、具体的な容体はどうなんだ？」

「介旅は事件後、精神面を鑑みて医療施設に収容されましたの。経過は順調。カウンセリングも受けて、一週間後には観察付きで学校に復帰させる予定でしたわ」

しかし、

「昨日、収容先の病院で突然気を失いましたの…以降、心拍、身体面に異常はないのに意識がない状態らしいですわ」

「それは…」

「わかった！そいつ寝てるんだろ!!」

「違うよ馬鹿」

「いえ、あながち外れでもないんですの」

「うそーん」

まさかの返答に思わず口が塞がらない戦兎を置いて美琴達は病院へと入る。先行する黒子について介旅が運ばれたという病棟に向かった。

「ここですよ…、あの、介旅という方がここに運ばれたと聞いたのです  
が」



「修理中なんじゃね？」

「それにしても、修理業者とか見えないけどな」

「確かに…あ、お姉様、お姉様」

「来たか、オイ万丈。起きろ」

「んー…」

「フガツ」

あのか

寝坊助二人を起こし、先ほど問い合わせをした窓口の奥から、初老の白衣姿が歩いてきた。

「あの、介旅の容体は…」

「介旅君かい？未だに目を覚まさないよ。身体は健康体なのに目覚めないなんて…、医者として何もできないのが歯がゆい限りだ」

「そう、ですか」

「ところで君たちは？」

「あ、私たち―」

「風紀委員ですの。以前の事件の関係者である介旅が意識不明ということの様子を見に来たのですが…」

「そうか、なら彼女に聞いてみるといい。彼を診たのはほぼ彼女だからね」

「彼女、といますと…」

「先生」

医師の背後から女性の声、奥を見やるとそこには同じく白衣に夏用のスーツを着込んだ女性が立っていた。

「ああ、木山先生。この子たちが介旅君の詳しい容体を聞きたいそうなんですよ」

「木山先生？」

医師の口から発された名前に四人の内2人―美琴と戦兔が疑問符を浮かべた。

「ん？君たちは先日の…」

「ぬ、脱ぎ女…」

「おい御坂！失礼だろうが！」

四人の前に現れたのは、美琴と戦兎が世話をした女性、木山春生だった。

※

「なんだ、君たちまだいたのか」

それからさらに一時間後。

「ええ、ちょっと伺いたいことがございまして」

詳しい診察をしていたのか、木山が出てきたところを黒子が口を開く。

木山は黒子、美琴、戦兎、万丈と順に視線を移し、

「しかし…暑いな。ここは夏でも冷房を入れない方針なのか…」

「確かに…」

「申し訳ございません、昨晚停電があつて、まだ復旧してないんですよ」

通りすがりの看護師の言葉になるほど、と呟き

「常用電源は重篤患者や手術室に使われるからな…」

「そうですね…つて、え？」

黒子が返し、木山の方を向くと目の前の女性はおもむろに首元の黒いネクタイの結び目に手を当て、

「ふう、我慢ならない…暑さ、だ」

言つて木山は瞬く間に来ていた白衣とシャツを脱ぎ―

「ま、また始まった…」

「な、なにを唐突にストリップしてますの?!?!」

「戦兎!やべえこいつ変態だ!!」

「見るな馬鹿!!」

と戦兎は万丈の首を180度回し、自身も顔を背ける

「下着を着ているのに…駄目なのか?」

「殿方の目がありますのよ!!」

そう言つてブラウスのボタンをとめる黒子。されるがままになつている木山に向けて、既に経験のある美琴がぎこちない笑みで聞く。

「木山先生!専門家としてぜひお話を伺いたいのですが…」

「それは構わないが…場所を変えようか。ここは暑い」

「そうですね…って、自己紹介がまだでしたの。わたくし、風紀委員  
第177支部所属の白井黒子と申しますの」

「ああ、研究員の木山だ、専門は脳生理学。そっちの彼も初めての顔  
だが」

「あ？俺か、万丈龍我だ。」

「万丈さんは警備員に所属してますの。普段からその、捜査協力をし  
てる関係ですわ」

「は？なんだ捜査協力って、俺そんなこと―ゲフツ」

そこまで言ったところで戦兎に首根っこを掴まれる万丈。片方の  
手でゴリラボトルを握っているのですさまじい圧力が首にかかって  
いる。

「(余計なこと言うんじゃないよ！ただの警備員と教師が風紀委員と  
はいえ女子中学生と何の理由もなく一緒にいたら変でしょうが)」

「馬鹿ってなんだよせめて筋肉つけろ！つか痛えよ！」

「アンタらうるさい!!」

見知らぬ看護師に怒られる大人二人を尻目に、木山、黒子、美琴の  
三人は病院を出た。

※

「それで、何故下着を付けているのに脱いではいけないという話だっ  
たか…」

「いえ、違います」

10分後、美琴達行きつけのファミレスに入った5人ちなみに席順  
は、窓際から黒子、美琴、戦兎で反対側に万丈と木山である。

「それで、レベルアップだったか。それはどういう機能なんだ。形  
状は？どう使う？」

「まだわかりませんの…」

「とにかく君たちは、それが昏睡した学生達に関係あるのではないか  
と、そう考えているわけだ」

「はい。って、え？」

「どーしたの？黒子？」

急な疑問符を浮かべた黒子に尋ねる美琴。代わりに戦兎が応える。  
「学生達、つてことは介旅のほかには昏睡状態の学生がいるつてことだ。それも複数」

戦兎の言葉に木山は頷き、

「ああ、彼の他にも5人ほど、同じ症状の子がいたよ。…これがリストだ」

そう言つて鞆から取り出した携帯端末を示す。画面には言葉のとおり5人の顔写真があり、

「(こいつ…)」

「(ねえちよつと、これつて…)」

小声で話す美琴も同じことを考えていた。それは。

「(全員スマツシユにされた奴らだ)」

「(どういふことですか?)」

黒子の問いに答えようとしたが、戦兎は口をつぐむ。

「どうした?知り合ひでも?」

「いえ、何でもありません」

そう答えて端末を木山に返す。疑問は尽きないが仮面ライダーやネビュラガス、スマツシユのことは他の人には知られてはいけない。その意図を組んだのか黒子が話を変えた。

「木山先生にお話をしたのは、能力のレベルを上げるといふレベルアップの特性を思い出したからです」

「というと?」

アイスコーヒーを一口飲み、木山が先を促す。

「はい。能力のレベルを上げるといふことは、脳に何らかの作用をもたらすことだと思つておりますの。ですから、もしレベルアップが見つかったら」

「それを先生にみてもらいたい、ということなんです」

黒子と美琴に言われ、思案するように中空を見つめる。

「いや、むしろこちらから協力をお願いしたいね。大脳生理学者として、興味がある」

「あ、ありがとうございます!」



戦兎、美琴、黒子が頭を下げる。

「礼はいい。それより…」

と木山は戦兎に向けて言う。

「仮面ライダー、というのを知っているかね？」

※

戦兎は内心の動揺を隠すのに必死だった。

このタイミングで聞かれるとは思っていなかった、というのもそうだがそれよりも悩みの種は

「(何も言うなよ筋肉馬鹿!!!)」

やっぱり万丈だ。

「最近巷を騒がせている怪物騒ぎは君たちも知っているだろう。その怪物と戦う者たちを『仮面ライダー』と呼んでいるらしい」

「も、もちろん知ってますよ？天っ才ですから？」

「(何故に疑問符を付けますの!)」

「(こいつら本当にアドリブに弱いわね…)」

隣で色々ひそひそ話している中学生を黙殺し、戦兎はひたすら万丈に向けて念を送っていた。

そんな万丈と目が合う。

「(万丈！下手なことは何も言うな！適当に領いとけ!!)」

「お、アンタもビルドとクローズ知ってるのか！有名人だな！」

「(この馬鹿!!!)」

「ビルド？クローズ…？」

聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる木山。

「ええっと、都市伝説！そう都市伝説なんです！」

「というと？」

慌てて言う美琴に木山は問う。うっ、と考えなしに言ったのか美琴は言葉に詰まる。

「都市伝説で、その仮面ライダーをビルド、クローズと呼んでいるそうなんです。語源は分かりませんが…」

「ふむ…ビルドとは『創る・形成する』、クローズは…『閉じる』という意味だが…」

「意味までは分かりませんが・・・」

(すっげー！説明したい!!!)

(我慢しなさい馬鹿)

わなわなと震える戦兎を抑える美琴、そんな様子をよそに黒子と木山は話を続ける。

「その仮面ライダーに関することと言えば、都市伝説以上のことは存じ上げませんわ。木山先生は科学者ですのにこんな都市伝説に興味がありますの？」

「そうだな・・・どうもあれは怪奇現象の類とは違うと思うのだよ。なにか科学的な理論の元に動いているような」

「そう、ですか・・・」

戦兎は先ほどとは違う種類の焦りを覚えた。それは、

(都市伝説のビルドを科学的に見ている・・・)

さすがは科学の街の研究者か、とこの時は焦りだけしか感じていなかった。

※

戦兎達がファミレスに入って少し経ったのと同じ時刻。

「佐天さーん、遅いですよもうー!」

「ごめんごめん。もう風邪はいいの?」

「はい、おかげさまですつかり。で、なんなんですか?直接会ってしたい話って」

「んー?ふふふ、じ・つ・は!ついには手に入れちゃったのよ、話題のアイテムを!」

そう言って初春の眼前に突き出されたのは、

「アイテムって、音楽プレイヤー?」

学園都市でも一般流通している音楽プレイヤー。パソコンから音楽のデータをダウンロードすることができるもので、初春も型落ちした古いタイプを持っている。

「ちっちゃっち、中身が重要なんだなあ。詳しくはどこか入って話さない?って、あれ?」

「どうしたんですか?」

「いや、あれって戦兎さん達じゃないですか？ほら、あのファミレス」  
初春が指さす方向には、窓越しに何やら話している見知った顔がそ  
ろっていた。

※

ファミレスの外から見かけたという涙子、初春が合流し、木山にそ  
れぞれ自己紹介、という流れになった

「へえー、脳学者さんなんですかー・・・、ハッ、まさか白井さんの脳  
に異常でも!？」

「・・・レベルアップの件で相談していましたの・・・」

黒子の言葉にそれまでパフェを食べていた涙子が反応する。

「あ、それならー」

「黒子が言うには、レベルアップの所有者を保護するんだって」

ここにありますが、実は手に入れちゃったんです。と言おうとした  
涙子に美琴がかぶせる。思わず動きを止める涙子には誰も気づかな  
かった。

「どうしてですか？」

「まだ調査中で断言はできないが、使用者に副作用が出る可能性が高  
いんだ」

戦兎の答えに黒子が補足する。

「それに、容易に犯罪に走る傾向が見受けられます。まずは保護し  
て、必要があればカウンセリング、といった感じですね」

「なるほど・・・、って、どうかしたんですか？佐天さん」

固まっている涙子に初春が言う。

「え?!いやあ、何でも無いでもない!」

と慌てて引いた腕が飲み物の入ったグラスに当たり、  
バシヤッ

と、隣に座っていた木山の足元にかかってしまった。

「ああ、すみません!!」

「・・・いいさ、かかったのはストッキングだけだからー」

と言って席を立ち、腰のスカートのホックを外しー

「ストッキングさえ脱げば問題ない」

「だ・か・ら!!!人前!!何より殿方の前で脱ぐなど言っていますの!!」

絶叫する黒子。ちなみに戦兎と万丈は即座に顔を伏せていた。

「・・・とはいっても、起伏の乏しい私の身体に欲情する者なんていないだろう。」

「趣味嗜好は人それぞれですよ!!それに、よからぬ感情を抱く同性もいますのよ」

「いやそれお前が言う?」

顔を伏せたまま、珍しく万丈が突っ込んだ。

※

「お忙しい中、色々教えていただきありがとうございました」

「いや、私も教鞭を振るっていた時を思い出して楽しかったよ」

その言葉に初春、黒子は一礼する。ちなみに万丈と戦兎は用事があるとかで抜けていった。後でメールが来て、スマッシュが現れたということだった。

「教師をなさっていたのですか?」

「むかし、な」

それだけ言っただけで踵を返す木山を見送る。姿が見えなくなったところで黒子が口を開いた。

「なんとというか・・・ちょっと変わった感じですよ」

「白井さんよりもですか?」

人睨みして初春を黙らせる黒子。木山から聞いた話をまとめた髪をポケットに入れ、言う。

「一度支部に帰らないといけませんね」

「はい。乏しいですけど、木山先生に渡すデータもそろえておかないと」

初春の言葉に頷き、振り返る。

「そういうわけで、わたくしたちは支部に戻りますのーって、あれ?お姉様?」

※ そこには涙子も、そして美琴の姿もなかった。

※

(やっぱり手放したくない)

逃げるように三人の前から姿を消した涙子は、心の中で弁解する。  
(まだ使ったわけじゃないし、黙っていれば、いいよね……)

普段は近づかない裏通り。その壁を背に乱れた息を整える。

「せっかく見つけたんだもん……」

手の中にあるプレーヤーを握りしめる。折角手に入れたそれ、自分を変えてくれるかもしれないものを

「どうしたのー?」

不意に横からの声。見れば、見知った顔がこちらに近づいてくる。

「み、御坂さん、どうして?」

「だって、急にいなくなるんだもん。心配するでしょ」

「な、なんでもありませんよ」

「でも……」

「だって、」

必死に笑顔を作る。悟られないように。いつもの自分のように

「ほら、私だけ事件とか、そういうの関係ないじゃないですか。風紀委員じゃないし」

ポケットに手を入れ、中身を固く握る。守るように。

ポト

「あつ……」

手を入れた拍子に入れてあつたもう一つの物が落ちてしまう。

美琴はそれを拾い上げ、涙子に手渡した。

「それ、いつも鞆から下げてるやつだよね?」

「ええ、そうなんです。……母からもらったんです」

赤い布地で出来たお守り。どこにでもあるようなそれを涙子は見る。

「御守りなんて科学的根拠なんかないのに」

——『姉ちゃん超能力者になるの? かけえー!!』——

『お母さんは、やっぱりまだ不安なの』

『大丈夫だよ』

『はいこれ』

『えー、非科学的』

『何かあつたらいつでも帰って来てね。あなたの身が、なにより一番大事なんだから』

「ほんと迷信深いです。私のお母さん」

かつて、学園都市の外でこれを貰った時のことを思い出す。

「こんなもので身を守るわけじゃないですよね。バリアじゃないんだから」

「優しいお母さんじゃない。佐天さんを気遣って、その御守りをくれたんでしょ？」

苦笑しながら言う涙子に、美琴は首を振って優しい笑顔を向ける。

「わかっています、でも・・・その期待が、重いときもあるんですよ。いつまでたつてもレベル0のままだし」

諦めたように語る涙子に、美琴はなんてことのないように言う。

「レベルなんて、どうでもいいことじゃない」

あなたがそれを言うんですか。御坂さん。

そう言いたい気持ちを、涙子はそつと、心にしまった。

※

「レベルアップの取引場所、ですか？」

「はい！戦兔さんと二人でこの間の掲示板を含め、怪しいサイトを片っ端から調べたんですよ」

翌日。戦兔と万丈は風紀委員の支部に来ていた。

「学生がすることだからな。SNSを中心に調べたらかなりの数で出てきた。まあ大半は嘘情報っぽいけど、信頼度がそれなり高いのをリストアップしておいた。それと」

もう一枚、学生の写真が載った紙を手渡す。

「これは？」

「昨日スマッシュになった生徒だ。この子の端末を調べたんだが、高確率でレベルアップを使用しているような痕跡が見つかった」

「つまり、スマッシュの件とレベルアップはつながっている、ということですか？」

「断言はできないが、可能性は高い。そこで・・・」

と戦兎は万丈と黒子に向き直り言う。

「これから万丈と白井でそのリストをつぶしてほしい。スマツシュが現れる以上ライダーシステムを持つ万丈が付いていれば安心だ。コイツは馬鹿だけど実力は信頼していいからな」

「それは・・・合理的ではありませんけど」

「どうして戦兎さんではなく万丈さんなんですか？」

「なんだよ、俺じゃダメなのか？」

万丈の突っ込みはともかく、事情をより深く把握している戦兎の方がいいのではないか、というのはもつともな意見だ。しかし、

「いや、俺はここで待つ。もし仮にレベルアップが見つかったら木山先生に送る前に自分で調べてみたいし、お前らが戦っている間に別のところで何かあつたら対応できる奴が必要だろ？」

「そうですね。では早速行動開始ですの。まずは廃墟ビルですの」

「おう!!行ってくるぜ!!」

そう言って二人は出かけて行った。

※

「はあ・・・」

同時刻。涙子は図書館近くの広場に来ていた。

「これ、結局どうしようかな・・・」

持っているのは音楽プレーヤー。正確にはその中に入っているレベルアップのデータ。ダウンロードして以来、再生していないそれはタイトルとミュージシャン名のUNKNOWNの文字だけが繰り返し表示されている。

(持つてるだけでこんなにしんどいなんておもってなかったな)

あるいは、隠していることへの罪悪感の重さか。

また一つ溜息を吐く涙子に声がかけられた。

「涙子じゃん、何やってるの?」

「アケミ・・・」

クラスメイトであるアケミは、他の友人二人と共に声をかけてきた。

「ちよっと散歩だよ。ついでに図書館で課題用の本借りようかなっ

て」

「そうなんだー、てか課題か！忘れてたー」

言いながら合流して歩く。先行する少女、むーちゃんは手を後ろに組みながら言った。

「うげー、課題なんてやる気起きないよ……、涙子のせいで嫌なこと思  
い出した。アイス奢れー！」

「ここら、課題は平等に与えられるものでしょ。それに、桐生先生の  
出した課題なんだもん、張り切らなきゃ！」

「マコは本当桐生先生推しだよねー。まあ格好いいけどさ」

笑いながら繰り広げられる当たり前の会話。何故かそれに安堵す  
る自分が少しおかしくなり、苦笑する涙子だったが。

「ああー、噂のレベルアップーでもあれば、サクッとレベル上がるのに  
なー」

「レベルアップーって、あんなの都市伝説でしょ？」

「えー？でも掲示板とか見るとマジもんっぽいじゃん、って涙子？」  
急に立ち止まる涙子に友人たちは不思議がる。無理もない、当の涙  
子は右手にオーディオプレーヤーを握りしめて立ち止まっているの  
だから。

「そっか……」

私だけじゃないんだ。

レベル0ってことは、レベルアップーを使うのに十分な理由なん  
だ。

みんなも、コレを使いたいわって言ってる。

「涙子ー？」

「レベルアップー、持っていたり、して」

つい、そう言ってしまった。

※

「これでもくらえ!!」

【ready go! Great draconic fini  
sh!!】



その少し前。

万丈と黒子はスマッシュと交戦していた。

GCZドラゴライブレイザーによってボトル成分を猛炎のエネルギー、グレートクローズドラゴン・ブレイズに変換し、竜の吐く炎と共に繰り出したキックがスマッシュ―ロックスマッシュに迫る、が、ジャラララ

ロックスマッシュは自身の腕から生成したらしい鎖によって傍に停めてあったバイク―変身者であるスキルアウトのものだろう―を捕獲し、グレートクローズこと万丈との間の障害物にする。勿論無傷ではすまないがいくらかダメージを軽減できるという目算。だが、「させませんわー!」

どこからか瞬間移動してきた黒子が万丈の頭上に現れ、その肩に触れる。

ヒュン!

という独特の音と共に二人の姿はバイクを構えたスマッシュの背後に回っていた。

「おオオオオアアアア!!」

障害物のなくなつた空間を引き裂くように万丈のライダーキックが炸裂、5メートルほどスマッシュの巨体が吹っ飛び、爆発する。

「つと、危ないところでしたの。あんな蹴りをバイクに当てていたら大爆発必至ですよ!」

「ありがとな白子!助かったぜ!」

「し・ら・い・ですの!!さっさとあのスマッシュを元に戻してきてください!」

あいよー、と言ってグレートクローズドラゴンを引き抜いて変身解除しつつ、スマッシュの方へと走る万丈を見送り、

「さて、その殿方」

とビルの陰にへたり込んでいた少年に向けて言った。

「逃げ遅れたわけではありませんわよね?腰を抜かした、という表現の方が適当ですよ?」

言いつつ少年の退路を塞ぐように近づく。少年は先ほどから本当

に腰が抜けているのか、それともただの恐怖による硬直か、すっかりへたり込んでいる。

「面倒なので単刀直入に聞きますが、あなたはレベルアップを買いに来た人ですか？それとも…」

鉄製ピックを少年の足元に瞬間移動させ、詰め寄る。務めて普通の声色で

「売る方、ですか？正直に言ってくださいまし」

「う、売る方だよ!!ほら!!」

あまりの恐怖からか声まで震わせながら少年は手に持っていたものを見せる。

「なんですのこれ、音楽プレーヤー？」

少年の手にはよくある携帯端末型の音楽プレーヤーが握られていた。黒子はあまりこういうものは使用しないが、常盤台のクラスメイトや涙子が似たようなものを持っているのは知っている。

「おーい桃井ー、こっちは片付いたぜ。黄泉川と戦兔にも連絡しておいた。」

「白井ですの。ではなくて…、あなた、これは何ですか？」

万丈に突っ込みつつ、黒子はピックを構えて少年に聞く。

「だからっ…これがレベルアップなんだよ!!」

そう言っって手元の端末についているボタンを押す。スリープモードだった端末の画面に光が戻り、「NO IMAGE」と書かれた画面と共に流れる文字がある言葉を表示していた。

「これって……」

「ビビるアップー!!」

シリアスに向きませんのこの人？と場違いな感想を黒子は抱いたのだった。

## 第十九話 レベルアップ2

「むー…ふっ!!」

気合の入った声と共に涙子の友人であるアケミの前方にいた友人の足が地から離れる。

「うわああ!」

友人は地上から3メートルほどの距離まで浮くとそこで静止した。念動。学園都市の中でもポピュラーな部類の能力だ。

「すごいよ涙子!!私今まで紙コップしか浮かせられなかったのに…つて、涙子…?」

能力を上げてくれた張本人である涙子を見ると、本人はベンチの横で一人呆然としていた。

「(能力だ…)」

掌の上を青々した葉が風に乗ったように回転している。名前も付いてない、レベル1にも満たない能力。でも、

「(他人から見たら大したことないものかもしれないけど…御坂さんや白井さんと同じ、能力者になったんだ!!)」

そのことがただ嬉しく、思わず笑みがこぼれる。

その様子にアケミ自身も微笑みを見せる。口には出さないが、同じレベル0、その苦悩は理解できるのだ。

「アーケーミー!!」

と、先ほどまで自分の能力で浮かばせていた友人が後ろから抱き着く。じやれあいながら涙子を見ると、その表情はやはり笑顔だった。

この時までには。

※

「うーん…これがレベルアップですか…」

「こんな音楽データで、能力のレベルが上がる、と」

万丈と黒子が持って帰ってきたデータと、暴れていた学生から入手したURLから元のデータをダウンロードしたものを初春と戦兎はそれぞれの端末に表示する。

「眉唾ですねえ、こんなもので本当に能力が上がるっていうんですか

？」

「少なくとも善意の協力者はそう言っていましたわよ」

「言ってたな、アイツ腰抜かしてたし嘘は言ってねえだろ」

何したんだあいつら…、と半目になりながら戦兎は音声解析ソフトにレベルアップのデータをアップロードする。すでに木山にも同じデータを初春から送ってもらい解析を進めているが、まあ知恵は多い方がいいだろう。

とはいえ、戦兎の専門は物理学。医学分野に関しては完全に素人だ。物理学的な見地でどこまで解析が進むのかは疑問ではあるが、

「ま、何もしないよりはマシだろ」

言いつつキーボードを叩く。と、なにやら初春とじゃれあっている黒子の携帯端末に着信が入る。

2. 3話して黒子が告げる。

「レベルアップに関連しているであろう学生が暴動を起こしている  
そうですわ、出動します」

「なら俺も行くぜ！もしかしたらスマッシュ出るかもしれないしな  
！」

「わかりましたわ、掴まってください」

そう言って万丈が黒子の手をつかみ、2人は消えていった。

「あ、木山先生からですね」

「ほんとか？早いな」

まだデータを送ってから1時間も経ってない。もう経過報告だとすれば相当早い。

「木山先生、風紀委員177支部の初春です」

「桐生です。同席しています。」

『ああ君たちか。先ほど現物が届いたよ。今解析しているところだが…』

「そのことなんですけど、音楽ソフトなんかで能力が上がる、なんてことあるんでしょうか」

『んー難しいねえ、テストメントならいざ知らず、ただの音楽ソフトでは…』

「てすためんど？そういう装置があるんですか？」

『ああ、あとでそれに関してのデータも送ろう。まあこちらでも解析は進めるが、あまり期待しないでくれ』

「はい、わかりました」

そう言つて通話を切る。

「やつぱり音楽ソフトなんて見当違いなんでしょうか」

「さあな、とにかく今やるべきなのはコイツをこれ以上拡散させずに、作つたやつを検挙することだろ。俺も万丈達を手伝ってくるから、なんかあつたらドラゴンに言つてくれ」

そう言つて戦兎は机の上に会つたビルドフォンを掴み、代わりにクローズドラゴンを起動しておく。

「わかりました。」

初春は一人、残された音楽プレイヤーレベルアップが入つたそれを見つめる。

「(佐天さん…)」

涙子はレベル0だ。本人はそのことを気にしないようふるまっているが、本心ではコンプレックスに思っているはず。

音楽ソフトなら手に入れられるルートはいくらでも考えられる。インターネット上、友人からなど、日常的に手に入る可能性は十二分にある。

「(一応、一応です…)」

自分の端末から涙子へ連絡する。が、コール音が鳴り響くだけで繋がることはなかった。

※

「俺様の能力を見るがいい!!!」

「見ませんのよ!」

ある公園では黒子が男子学生の浮かせた砂利を避けつつ、頭上に瞬間移動して拘束する。

「ぐがががあが!」

「おりゃあ!!」

ある路地裏ではスマッシュとグレートクローズが拳を交えていた。そして、

「まったく、こんな真昼間から現れるなんてな」

戦兎は第七学区の外れにある寂れた工場でスマッシュと対峙していた。

「ぐるぐる」

相対するスマッシュは体のいたるところに南京錠やら鎖やらを巻き付けている。

「見た感じロックボトルのスマッシュか・・・、どうやって倒したっけな」

言いながらビルドドライバーを装着し、ボトルを取り出す。手元にあるボトルはいつものラビットタンクではなく、

「さあ、実験を始めようか」

ボトルを振ってシールドイングキャップを開き、ドライバーに装填された色は紫と黄色。

【忍者】【コミック】

【ベストマッチ！】

【変身！】

ボルテックレバーを回してスナップライドビルダーを展開。形成されるのは紫と黄色のボディ。その二つに戦兎が挟まれる。

【忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！】

仮面ライダービルド、ニンニンコミックフォーム。変幻自在の忍術を使うトトリキーなフォーム。

【四コマ忍法刀】

ライドビルダーを展開して専用武器である四コマ忍法刀を召喚し、ロックスマッシュに切りかかる。しかしその一閃は鎖によって防がれた。

「そりゃ防ぐよな！」

言いながら二撃、三撃と攻撃を繰り返すが、すべて鎖で防がれてしまう。しかも、

「あつぶね!!」

ロックスマツシユの背後から細長い鎖が何本も飛び出し、ビルドの四肢を拘束しようと襲い掛かる。それらを続けざまに弾く間にじりじりと下がってしまふ。そして、

「しまっ!!」

死角からの鎖が足に絡まり、一瞬で宙づりにされる。奇しくも先日のオクトパススマツシユとの戦闘と同じ状況に陥ってしまった。

ように見えた。

『隠れ身の術！ドロン』

その音声と共に四コマ忍法刀から白い煙が噴出し、次の瞬間にはスマツシユの背後にビルドの姿が現れた。四コマ忍法刀に搭載されている四つの忍術の内の一つ、刀身から目くらまし用の濃煙を発生させた隙に鎖を断ち切り、煙に紛れて移動したのだ。

「お返しだ！」

そう言つて忍法刀のボルテックトリガーを二回引く。刀身の下から二つ目のコマ「二のコマ、火遁」が光る。その状態のまま再度トリガーを引きスマツシユに切りかかった。

『火遁の術！火炎斬り！』

刀身に炎を灯した斬撃によって鎖ごとロックスマツシユの身体を切り裂く。苦痛のうめき声を上げながら倒れるスマツシユを尻目にボルテックトリガーを一回引き、「二のコマ、分身」を選択してトリガーを引く。

『分身の術！』

その音声と共にビルドの姿が3人に増えた。

「二勝利の法則は決まった!!」

3人のビルドが一斉にボルテックトリガーを引き、剣を振るう。

『『風遁の術！竜巻斬り！』』

刀身から発生した激しい竜巻がロックスマツシユの身体の自由を奪い、空中へと吹き飛ばす。間髪入れずに分身を解いた本物のビルドがボルテックレバーを回す。

『Ready GO!ボルテックファイニッシュ!』

「はああああ!!」

風に乗ってスピードと威力が増したライダーキックを受け、スマッシュは爆散したのであった。

※

「いたたた…」

「無理すぎですよ、白井さん」

レベルアップの実物が見つかったから3日。学生による能力使用事件は平常時の倍近く発生していた。また、スマッシュの発生件数も比例するように増加している。

「スマッシュの数が aumentando っていることは、いよいよレベルアップとの関係性は確実なものになってきたな」

ここ数日で増えたボトルを並べながら戦兎は言う。所持していたものを含めるとボトルの数はかなりのものになり、旧世界の東都、北都のボトルはほぼコンプリートしている。

「それだけじゃねえ。なんか最近のスマッシュやたら強くねえか？」

「…それは何となく感じていた。いくら俺たちのハザードレベルが最後の戦いから下がっているとはいえ、ただのスマッシュにあれだけ苦戦するのは違和感がある。それこそ三羽カラスの時みたいな感じだ。まあベストマッチが増えていいるから俺はまだ対応できるが…」

そう言って戦兎はクローズの戦闘データを見る。万丈の戦い方はいたってシンプルだ。殴って蹴ってたまに斬る。ツインブレイカーのビームモードなんてほとんど使用履歴がない。

一応ツインブレイカーにボトルをセットすれば、そのボトルの特性を生かした攻撃は可能なのだが。

「万丈にそんな戦況に対応して戦い方を変えるなんていう知能指数の高い真似ができるわけないか」

「馬鹿って意味か？」

「馬鹿って意味だ」

筋肉つけるこの野郎、と食って掛かるのを無視して画面に違うデータを表示させる。それは旧世界のライダーシステム、プロジェクトビルドの設計データであり、悪魔の科学者、葛城巧であった時の自分の発明品、



「スクラツシユドライバー…」

スクラツシユドライバー。特定のボトルから抽出したスクラツシユゼリーを用いて、ビルドドライバーのシステムよりもはるかに強力な力を引き出すベルト。かつて万丈や仲間の一海、幻徳が使用していたものだ。

「また作ってくれんのか!?!」

「…正直迷ってる。勿論、お前が暴走しないってことはわかっているが、今回の件に限らず、この街には明らかにネビュラガスが関わっている。つまり—」

タン、とスクラツシユドライバーのデータから学園都市全域の地図へとキーを押して切り替える。

「ハザードレベル3，5以上の人間が生まれる可能性があるんだよ」

ハザードレベル3，5。それはプロジェクトビルドのライダーシステムを使用するのに必要な数値。戦兔も万丈もかつて東都で暗躍していた秘密組織、ファウストの人体実験によって体内にネビュラガスを注入されて至った状態。

「もし前の時みたいにスクラツシユドライバーのデータが奪われて、暴走する人間が生まれたらと思うと、どうしてもためらっちゃう」

「…難しいことは、よくわかんねえけどよ」

と、戦兔の呟きに万丈が返す。

「ライダーシステムにとって必要なのは技術とかじゃなくて、ラブアンドピースの気持ちだろ? 根っこのところ忘れなきやいいんじやねーの? お前にとってそれ以外は全部ついでだろ」

一瞬言葉が出なかった。

「…筋肉馬鹿が、知ったこと言いやがって…」

戦兔の口元は、その悪態とは裏腹に微かにほころんでいた。

「まっ、とりあえずこの騒ぎを收拾しないことには開発も何もできないんだけどな。」

「いや先に言えよそれ」

いつも通りぎやーぎやーとわめきあう二人なのであった。

## 第二十話 大丈夫です

「黒子ー？頼まれてた着替え持ってきたけどって…なにこれ」

風紀委員詰所に紙袋を下げてやってきた美琴は、いい歳こいた大人二人がメンチを切っているというアレな場面に遭遇した。

「あ、お姉様！わざわざお呼び立てして申し訳ありませんの…、この二人はそのー」

「万丈さんの新装備を作る作らないで揉めているんです…」

「ふーん…、これ、頼まれてた着替えと差し入れ、ちゃんと食べなさいよー」

「御坂さんありがとうございますー！ございますー！わあ美味しそう…」

美琴が持ってきたのは第七学区の人気スイーツ店のケーキセット。今の時期だと清涼感溢れるゼリーなんか人気らしい。

そんな甘味をいただきつつ、大人二人の言い合いに耳を傾ける。

「だーかーら!!再開発するにしてもスクラツシュゼリーの成分精製やらベルト基盤のプログラミングやらやること多いんだよ!!そもそも元々持っていたビルドドライバーと違って一から創るんだから、そんな一朝一夕で出来るわけねえだろうが!」

「プロペラリングとかわかんねえよ!!もつと簡単な言葉で話せ!!つか、そんなもん気合でどうにかしろよ!!」

「気合でどうにかできんならまず俺の発明品直すつーの!俺の装備だってまだまだできてないのにお前のドライバー作ってられるかい!」

「この間スパークリング作ってたじゃねえか!!あれで十分だろ!」

「ちよおまつ、ここぞって時に使おうって思ってたのに!!ネタバレ禁止!!」

「…子どもの喧嘩ね」

「その通りですの…」

「それより、これまでにわかったことをまとめましょう」

そう言つて初春はPCから出力した紙の束を机に広げる。

「まず、レベルアップと呼ばれるものは音楽データであり、それを聞

いた人間の能力は向上する、と」

「向上の度合いは人それぞれだけど、これは元のレベルが関係してる可能性がりますの。」

つまり

「元々レベルが上がリそうな人間は、そこからさらに向上する、と」

いつの間にか戻った戦兎が黒子の言葉を繋げた。

「もつとも眉唾ものだけどな。学習装置ならいざ知らず」

「テストメント？」

戦兎が使った聞き慣れない単語に反応した美琴に、黒子が解説した。

「木山先生がおっしゃっていた、短期間で大量の電氣的信号を脳に与える装置、らしいですわ。ただ——」

レベルアッパーの入った音楽プレーヤーを見ながら

「それは視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感すべてに働きかけるもので——」

「レベルアッパーはただの音楽ソフト。聴覚作用だけね」

美琴の言葉に万丈以外が頷いた。

「昏睡状態になった人たちの自宅を搜索しても、あの曲のデータ以外何も見つからないんです……あつ。お湯湧いた」

話している途中に甲高い音、お湯が沸いたときに生じる薬缶の音がしたので、初春が火を停めに走る。

「…仮の話だけどさ」

考え込んでいた美琴がふと話し始める。

「その曲自体に五感に働きかける可能性はないかな？」

「どういうことですか？」

「前にかき氷食べた時の事、覚えてない？」

うーんと腕を組む黒子の横で戦兎が思い出したようにつぶやく。

「共感性の話か」

「そう、ある種の方法で多数の感覚を刺激すること。つまり——」

「音で五感を刺激し、疑似的に学習装置と同じ効果を得る、ということですか？」

「ああ、そもそも耳は脳に近い部位だし、あるいは可能かもしれない」  
「ちよ、ちよつと木山先生に聞いてみますー！」

言うが早い、初春は携帯を取り出し木山の連絡先をコール、今の美琴の仮説を話し出す。

『その可能性はあるな。なるほど、見落としていた』

「その線で調査をお願いしたいのですが！」

『ああ、そういうことならツリーダイアグラムの使用許可も出るだろう』

「ツリーダイアグラム!？」

「急に何大きな声出してるんだよ。なんだよスキータイムスリップト」

「ツリーダイアグラムだ馬鹿! 学園都市が誇る世界最高スペックのスーパーコンピューター! その演算能力があれば、プロジェクトビルドの再構築も容易!! ああ、少しでいいから貸してほしい!!」

『・・・結果が出たら伝えるよ。』

「あ、じゃあ今からそちらに行ってもいいですか? ツリーダイアグラムを使うところ見てみたいんです」

『ああ、構わんよ』

初春の申し出を受け入れ、そこで通話が終了した。

「初春!! 俺も!! 俺も行かせてくれ!!」

「駄目ですよ、こちらはスマッシュやレベルアップ使用者の対策を!!」

「そんな!! 学園都市の英知の結晶をこの目で見たかった・・・!!!  
がっくりと項垂れる戦兎を尻目に初春は駆け出すのであった。!!!」

※

「(やっぱり・・・初春には話しておこうかな・・・)」

レベルアップを使って能力の試し打ちをする友人たちを眺めつつ、涙子は頭を振った

「やっぱり怒られちゃうかな・・・」

やっぱり隠し事って向かないなあ、と思いつつ真つ暗な携帯端末を見つめると、ドサツと何かが倒れる音が前方から――

「え?」

視線の先、そこには先ほどまでゴミ拾い用の清掃ロボットをサイコキネシスで浮かせてご満悦だったアケミが倒れていた。

「アケミ!?」「アケミちゃん!」

他の友人たちが駆け寄る中、涙子の脳裏にはある文言が浮かんでいた。

—レベルアッパーを、使ったから……?—

その場から動けず、ただただ見つめることしかできなかった。

※

「着信……あ、佐天さんだ」

佐天涙子と書かれたディスプレイに苦笑しながら、初春はいつも通り親友に応える。

「佐天さん?もう心配したんですよ?なんかよそよそしいし、電話しても着信拒否だし—」

『……つちやった』

「はい?」

いつもの調子とはかけ離れた涙子の声に思わず顔が曇る、か細く注意して聞かなければわからないほどの声で涙子は話し始める

『……アケミが、急に倒れちゃったの……』

「つえ?」

アケミ—おそらくクラスメイトの女子の名前だ。初春もたまた話をしたりする。そのアケミが倒れた?

『……レベルアッパーを使ったら倒れちゃうなんて、わたし、知らなくて……みんなに……、わたし、そんなつもりじゃ……』

「お、落ち着いてください、そ、そうだ!」

と初春は端末を操作してあるアプリを起動した。それは、今聞いている会話を第三者に届けるといふ盗聴器まがいの物で、以前戦兎が研究開発費の足しになればと警備員に提供したものだ。

送信先を戦兎にして、再び涙子に話しかける。

「落ち着いてください、ゆっくり、最初から—」

※

『レベルアッパーを手に入れちゃったんだけど……所有者を捕まえるっていうから……でも捨てられなくて……それで……』

「戦兔!!?」

「ちよ、アンタどこ行く気よ!!」

弾かれたように走り出した戦兔はすぐに初春の位置情報を割り出し、そこにむけて駆け出した

『アケミ達が、レベルアッパーが欲しいって、ううん……』

走りながらもビルドフォンを耳に強く押し当て、涙子の一語一句を聞く。歯を食いしばりながら

『……ほんとうは、一人で使うのが怖かっただけ……』

『とにかく!!今どこですか!?!』

初春の位置情報が変わる、おそらく走り出したのだろう。スピードを上げつつ会話を聞く。

『……わたしも、倒れちゃうのかなあ……』

『何言って……』

『そしたらもう、二度と起きれないのかなあ……』

「つく!!!」

道行く人を押しわけ、戦兔は走る、そして

「初春!!!乗れ!!!」

初春を見つけるとすぐにビルドフォンを変形させ、ヘルメットを渡す。初春の端末を接続して通話しつつ、涙子の通話発信源を探る。

『……わたし、能力のない自分が嫌で……でも、どうしても憧れが捨てられなくて……』

「見つけた!!飛ばすぞ!!」

言ってバイクを急発進させる戦兔。画面はここから5kmほどの目的地―涙子の自宅である学生寮を示していた。

『……かな』

「なんですか!?!」

ヘルメットに取り付けてあるスピーカーからか細い声。まるで、懺悔のような声

『レベル0って、欠陥品なのかな……?』

「なにを……！」

『それがズルして、能力を得ようとしたから、罰が当たったのかな……  
危ないものに手を出して、周りを巻き込んで……わたし……』

「大丈夫だ（です）!!!」

『つえ?』

こんな状況なのに、初春の口元は笑顔だ。

いつも親友に語り掛けるように。

いつもどおりに。

「もし眠っちゃっても、わたしがすぐに起こしてあげます！」

「そうだ！お前、まだ俺が出した課題提出してないだろ、アケミたちも  
だ」

「佐天さんも、アケミさんも、他の眠っている人たちも、必ず私たちが  
目覚めさせます」

だから

「だからドーンと！任せてください!!佐天さんきつと、あと五分だ  
けーとか言っちゃいますよ!!」

「ああ！だけど提出は待ってやらないからな！遅れたら全員まとめて  
補習してやる！」

『ういはる……せんせい……』

「佐天さんは欠陥品なんかじゃありません!!」

戦兎の背中が震える。サマーニツトの背を、強く握られる

「能力なんか使えなくなつて、いつもいつも私を引っ張ってくれる  
じゃないですか!!力がなくても佐天さんは佐天さんです！私の親友  
なんだから！」

震える声で

「だから……そんな悲しいこと、言わないで……！」

『……ういはる……』

「そうだ。初めて会ったあの日、お前は能力なんかなくても子どもを  
助けようとした!!その気持ちか！能力よりもよっぽど優れたその心  
が、お前がお前である証なんだ！それを欠陥品なんて呼ばせない！絶

対に」

『戦兔せんせい……………』

戦兔の言葉、初春の嗚咽が涙子の目にその名の滴を浮かばせる。

『……………初春を頼れって、言われてもねー』

「わ、私だけじゃないですよ!?!」

その声は、いつもと同じ。

親友であり教え子である佐天涙子の声に戻っていた。

「御坂さんや白井さんや戦兔先生に万丈さんはアレだけど、他にもすごい人がたくさん!!」

『…うん、わかってる。ありがとね、初春。……………迷惑ばかりかけてごめん』

あと、よろしくね。

その言葉を最後に、通話は切れた。

※

「初春さんは?」

「絶対データを解析して佐天さんを助けるんだって、今木山先生のところへ」

第七学区のとある病院、涙子が眠る病室の前で美琴と黒子は話していた

「そう…あいつは?」

「桐生さんは共感性という観点からデータの解析を、万丈さんはスマッシュ警戒のために市内を見回ってますわ」

「そう……………、ちよつといい?」

「?はい…」

そう言って二人は屋上へと移動する。第七学区の街並みが見える気持ちのいいスポットだが、今は二人以外誰もいない

「それで、話ってなんですか?」

「佐天さん、御守り持ってたでしょ?」

「…ああ、いつもかばんにぶら下げてる」

「うん。あれね、お母さんにもらったんだって。学園都市に来る前に」  
「そんな話をお姉様に……………」



「多分、色々話したかったんだと思う。それなのに私……レベル5とか言ってもそういうところ、全然だめだよね」

「お姉様……」

「私はさ、目の前にハードルが置かれたらそれを飛び越えないと気が済まない性質だから……レベル5もその結果っただけで、全然すごいとも思っただけでなかった」

でも

「ハードルの前で立ち止まっちゃう人もいるんだよね。そういう人がいることを考えてもみなかった」

フェンスを少しだけ握り、視線を落とす。

「レベルなんてどうでもいい、なんてさ……無神経な話だよね」

『そこまでわかってんなら大丈夫だろ』

「え？」

とシリアスな雰囲気似つかわしくない声が聞こえる。

見ると、2人の頭上を例のドラゴンが飛び回っていた。

『確かにお前は無神経のビリビリ女だ。けどな、佐天だって、誰かを頼ったり相談したりできたはずなんだ。悪いのはその方法を示してやれなかった俺たちみたいな大人だ。』

「でも、事実私は佐天さんを傷つけた……それはもう変えられない……」  
『変えられないことはねえよ。お前の力なら、佐天を、みんなを救えるはずだ』

「はずって……根拠はありますか？」

『ない。これから探すよ。さしあたって一人あつてほしい人がいるんだけど……』

「それって——」

※

「……ゲコ太……」

「違いますのよお姉様」

戦兔との通信後、美琴達はこの病院の医師だという男を訪ねた。かえる顔、としか形容できない医者。美琴達の名前を聞くと得心したか

のように頷き、自身の仕事スペースまで二人を通し、PCを立ち上げる。

で、カエルに反応した美琴を黒子が宥めているところであった。

「これはレベルアップ被害者の全脳波パターンだ」

そう言っただけの顔の医者は画面を切り替え、説明を続ける。

「脳波は個人個人で違うから、同じ波形なんてありえないんだね。ところがレベルアップ被害者には共通の脳波パターンがあることに気が付いたんだよ」

「…どういうことですか？」

黒子の問いにかえる顔の医者は脳波の画像を表示させる。

「誰か他人の脳波パターンで無理やり脳が動かされているとしたら、人体に多大な影響が出るだろうねえ。加えて、どういうわけか脳の海馬にも共通の症状がでているんだ」

「…つまり、レベルアップで脳をいじくられて植物状態になったってこと？」

「誰が何のつもりで……」

「僕は医者だ。それを調べるのは君たちの仕事だろ？」

その言葉に二人は顔を見合わせる。

「わかりました。帰って分析しましょう」

「そうね。ありがとうございました」

「ああ。…あ、そうだ。彼に伝言を頼めるかい？」

「彼…桐生先生ですか？」

「ああ、いずれ機会を設けるから、その時は宜しく、と」

「?はいですの」

言っただけ二人は部屋を後にした。

かえる顔の医者は、笑っていた。

※

「そうか、この間の彼女まで」

「……私のせいなんです」

木山の研究室で初春はつぶやく。あのあと戦兎と別れ、単独でこの

研究室に向かった初春だが、未だ気持ちは沈んだままだ。

「…あまり自分を責めるものじゃない。少し休みなさい、コーヒーでも―」

「悠長なことを言ってる暇は―」

ぽん、と

思わず立ち上がりかけた初春の肩に木山の手が置かれる。

「分析結果はまだ出ていないが、お友達が目覚めたときに君が倒れていたら元も子もないだろう」

「……」

「…大丈夫、最後はきつとうまくいくさ」

そう言い残して木山は部屋を出た。

「……………」

自分の不甲斐なさや木山の言葉かけで少し冷静になった初春は、改めて研究室を見回した。大脳生理学と聞いていたので、やはり脳に関する蔵書が所せましと置かれている。

「…ん？」

そんな中で、引き出しからはみ出ている紙片が目にとまった。こちらからは逆さまになっているが、表題の単語は判別できた。

『Synesthesia』と

※

風紀委員の事務所に戻った美琴、黒子は、別行動をしていた戦兎にカエル顔の医者から聞いたことを話していた。

「なるほどな。特定の個人の脳波パターンによる脳の制御か。そのパターンがわかっているなら」

「ええ、初春に書庫の記録を検索してもらえば―って初春はいないんですの」

木山のところに行っていることを失念していた黒子が肩をおとした。「安心しろ。この天才物理学者が事前に書庫へのアクセスを申請しておいたんだ。警備員経由だがアクセス権は問題ないはずだ」

そう言っただけで戦兎は初春のPCを立ち上げ、書庫にアクセスを始めた。

「ねえ、書庫にデータがなかったらどうするの？」

「大丈夫ですわ。能力開発を受ける学生は勿論、病院の受信や職業適性テストを受けた大人のデータも保管されていますの」

「（そーいや俺と万丈のデータとか、その辺どんな扱いなんだろう）」

後で調べてみようかと決め、あらかじめ控えていたパスワードを打ち込み、検索する脳波パターンを出力する。

「でも、なんでレベルアップを使うと同一人物の脳波が組み込まれるのかな」

「しかも能力のレベルが上がるなんて、さっぱりわかりませんわ」

「…仮定の話だが、脳波の統一による能力の向上って点になら仮説はあるぞ」

「は？」

何気なく言った戦兎の一言に二人は疑問符を上げる。

「どういう仮説よ」

「脳波によるネットワークの形成、それによる演算能力の向上だ」

「ネットワーク？」

検索をはじめてシークエンسバーが表示されるのを待つて戦兎は話しはじめる。

「例えば、このパソコンも単体じゃ能力に限界はあるが、ネットワークに接続、構築することによって全体の能力を上げることができるように、能力使用の際に必要な演算能力もネットワーク経由なら底上げされて、結果的に能力自体が強化されるように見えなくもない、ってことだな」

「なるほど、でもどうやってみんなの脳を繋いでるの？脳波を同じにしただけじゃ……」

「…考えられるとすれば、AIM拡散力場ですの。能力者が無意識に発生させている能力の力場」

「ありえなくはないな。」

戦兎の言葉に美琴は反論する。

「でも、あれって無意識下のものでしょ？それに私たちの能力ってパソコンで言えばOS種類が違うようなものでしょ？」

「いや、PCの並列ネットワークもOSは関係ない。大事なのはそれらを繋ぐプロトコルだからな」

「つまり、共通の脳波パターンと言うプロトコルで能力者間にネットワークを構築している、と?」

「可能性の話だけだな。だが」

「もしこれが実現できれば、弱い能力でも演算をネットワーク全体で共有すれば処理能力は向上するし、同系統の能力者ならより効率的に能力が扱えるはず」

「……もしかして、今昏睡状態の人達は、演算処理に脳のすべてを使われているんじゃない?」

「あり得るな……つと出たぞ!脳波パターン照合率99%、つて……」

「この人は……」

※

同時刻

初春は木山の研究室で立ち尽くしていた。

「これも、これも……共感性の論文ばかり……どうして」

「いけない子だな」

ビクツと、声のする方を見ると木山が不気味な笑みを浮かべつつ、

初春を見ていた。

「木山……先生……」

「人の研究成果を勝手に見るとは……そろそろ潮時かな」

そう言って木山は、後ろ手でドアを閉めた。

※

「照合率99%、木山春生……」

「「初春が!!」」

黒子はすぐに携帯端末を操作して初春に電話するが、つながらない。いい。

「警備員に通報しますの!木山春生の身柄を確保。ただし、人質がいる可能性がある」とー!

「初春の携帯の位置が分かった!万丈!黄泉川さんと一緒に今から送る場所に向かってくれ!俺もすぐに行く!!」

『わかった!!』

いつの間にか通信していたクロードドラゴンにデータと声を飛ばし、そのまま机の上にあったビルドドライバを掴んで立ち上がろうとした、まさにその時。

「ちよつと待て……なんだこれ……」

ビルドフォンからの通知、それは。

「スマッシュが同時に5体出現した!？」

## 第二十一話 多才能力

「―ところで、以前から気になっていたんだが君のその頭の花、それはなんだい？君の能力に関係があるのかな？」

「お答えする義務はありません。それより……」

腕につけられた電磁手錠を見つつ、初春は隣の運転席を睨む。

「レベルアップってなんですか？なんでこんなことを？眠っている人たちはどうなるんです？」

「矢継ぎ早だな。こちらの質問には答えないのに。まあ仕方がないか」

そう言っただけで運転席に座る女性―木山春生はハンドルを操作する。彼女の愛車である青いスポーツカータイプの車は、学園都市の学区間をつなぐ高速道路を走っていた。

「誰かの能力を引き上げてぬか喜びさせて、何が面白いんですか？……佐天さんだって、……佐天さん、だって」

俯く初春の言葉に木山は小さく笑う。

「他人の能力なんて興味ないよ。私の目的は―」

まっすぐ目の前を見つめて木山は言った。

「―もつと大きなものだ」

※

「演算装置？」

「ああ、A I M 拡散力場を媒介としてネットワークを構築し、複数の脳に処理を割り振ることで高度な演算を可能とする。それがレベルアップの正体だ」

「……どうして」

初春の疑問に木山は淡々と答える。

「あるシミュレーションの為にツリーダイアグラムの使用申請をしたが、どういうわけか却下されてね。……代わりになる演算装置が必要だった。」

「そんなことのために、能力者を？」

頷き、答える。

「1万人ほど集まった。十分代用してくれるはずだ」

「っ……！」

「そんなに怖い顔をするな。あと少しですべて終わる。そうしたら開放するさ。」

言つて木山は白衣のポケットからUSBスティックを取り出した。

「レベルアップをアンインストールするためのデータだ。君に預ける」

「えっ？」

手錠をされた手に渡されたUSBを見る。

「後遺症はない。すべて元に戻り、誰も犠牲にはならない」

「信用できません！臨床研究も十分じゃないものを安全と言われても、気休めにもなりません！」

「手厳しいな……、っとお客さんか」

そういつてカーナビを操作すると前方1キロ先に赤い点と表示が現れる。警備員の車輛情報と、何らかのアラート。

「随分早いな……君のお友達たちか、それとも彼か……」

言つて木山は車を止め、ダッシュボードを開けあるものを取り出した。

「そ、それは!?!」

「悪いが今捕まるわけにはいかないのでね」

言つて手に持ったもの——フルボトルのシールドイングキャップを開き、外へ放った。

「安心しろ。これは人間を必要としないクロールスマッシュ、というものらしい。従来の物よりは性能が劣るらしいが、足止めにはなるだろう。」

木山の言葉通り、ボトルから出た成分が異形を形どり、街を脅かす脅威——スマッシュへと変貌した。

「まさか、スマッシュもあなたが……」

「私ではない。が、どういうわけかレベルアップの使用者の中でも特に能力値の上昇が顕著に表れていた者たちは変身していたな。まあ仮面ライダーたちが安全に倒してくれるとわかってからは特に気



にしていなかったが、すまないことをしたとは思っているよ」

「そんな・・・」

「さて、ある程度指示は通じるといった彼の言葉をどこまで信用していいかわからないが――3体は前方へ、残りはここで待機していてくれ」

「・・・」

通じたのか、三体のスマッシュが進行方向に走り出し、もう二体は後方を警戒するよう向き直った。

「さて、今私の研究室に警備員が踏み込んだようだ。所定の操作を踏まないまま機器を起動すると知らせてくれる上に、全データを消去するよう組み込んでいた。つまり――」

アクセルを踏みつつ初春を見る。

「それが唯一の突破口になったんだ。大事にしろ」

車はスマッシュ達を追い抜きつつ前進していった。

※

「どういうことよ!?!スマッシュが五体ってこんな時に」

「わかんねえよ!!とにかく行かねえと――ってなんだこれ、初春の動きとスマッシュの動きがリンクしてる?」

ビルドフォンに表示されているスマッシュを示す赤い点の内、二つが発生した場所にとどまり、三つは初春たちの移動経路を追うように動いている。

「どういうことですか?」

「考えたくないが。木山はスマッシュにもかかわってるのかもしれない」

そう言うのと戦兎は万丈に向けて通信を飛ばす。

「万丈!スマッシュが二手に分かれた!3体の方は俺が分身してどうにかするから、二体の方頼めるか!?!」

『はあ!?!もう移動中だぞ!?!いまから別のところ行けって言われてもよ!!』

「わたくしが送りますわ!!万丈さんの位置情報を送ってくださいですの!!」

「黒子！あんた怪我は!？」

「・・・これくらい大丈夫ですよ、万丈さんもいますし、それに――」  
と言って戦兎を見る

「勝算があつてのご指示なのでしよう？」

「ああ、万丈と白井ならここ最近タッグを組んでたからな。勝率は高い。万丈、今からポイントを送るからそこまで行ってくれ！」

『おうよ!!すいませーん!!ちよつと降ります!!』ちよつ万丈!?なにしてるじゃん!?!』

通信が切れた。

「白井、ボトルを何本か渡しておく。内容はお前の端末に送ったから見返しといてくれ。万丈の装備に装填すれば使えるはずだ」

行ってビルドフォンから取り出したボトルを黒子に手渡す。

「ええ、わかりましたわ・・・お姉様」

「黒子、無茶しちゃだめよ」

「わかつていますわ。では」

行って黒子は瞬間移動した。

「俺たちも」

「行くわよ!!」

窓からビルドフォンを投げ変形、戦兎はそのままバイクに跨り、美琴も手渡されたヘルメットを付けて座り、フルスロットルで発進した。

※

「万丈さん!」

「助かった!!」

万丈と黒子は数十分前まで初春たちがいたポイントにたどり着いた。そこには。

「.....」

無言でたたずむスマッシュが二体、2人の前に立ちふさがっていた。

「こいつら.....」

「戦ったことがありますの?」

「確か難波重工が作った・・・なんだっけ、ウーロンスマッシュ?」  
「・・・中国茶ですの?」

「わかんね。とにかく中に人が入ってないから手加減の必要がないって前に戦兔が言ってた」

「なら、問答無用で行きますの!!」

そう言つて黒子は腿に装着したホルスターから鉄製ピックをテレポートさせる。

「おう!!」

万丈もビルドドライバーを取り出し、装着した。

※

『木山春見生!!お前にはレベルアップ拡散の容疑がかかっている。おとなしく人質の学生を開放し投降に応じるじゃん!!』

「・・・どうするつもりですか?年貢の納め時ですよ?」

大量の武装警備員と専用車両に行く手を阻まれた木山は、ハンドルにもたれかかると薄く微笑んだ。

「レベルアップパーは人間の脳を使った演算装置を作るためのプログラムだった。・・・だが同時に、使用者にある副産物をもたらしてくれるんだよ」

「・・・え?」

「面白いものを見せてやろう」

そう言つて木山はドアを開け、外に出る。

『両手を後ろで組んで、うつぶせになれ』

拡声器を使って呼びかける黄泉川の横で、警備員の一人が電子スコープ越しに初春の姿を確認した。

「人質は無事みたいです」

「よし・・・確保じゃん!!」

横並びで隊列を組んだ警備員が少しずつ、木山ににじり寄つていく。当の本人は眠たげな眼でそれを眺めて、しかし、

じゅわつ、と。

木山の右目が充血した。

パン!

「ぐあああ!!」

銃声と共に、しかし倒れたのは警備員の一人。そして銃声はその隣にいた隊員の銃から発せられていた。

「何をしているんだ!!」

「違う!!俺の意思じゃない!」

言いつつ銃を振り回す隊員に混乱している警備員たちを尻目に、木山は口元を笑わせながら右手をゆっくりとかかげる。すると、彼女の周囲から暴風と言つていいレベルの風が吹き始める。

「馬鹿な!?まさか能力者!」

学園都市にのみ存在する異能の力、超能力。

それでしか説明できない力を目の前の彼女が行使している。

しかし、

「どういうわけだ!?木山の書庫データに能力開発の話なんて一言も……」

戸惑う黄泉川の耳に通信が入る、相手は――

『黄泉川さん桐生です!!現状は!』

「木山が能力を発動したが、どう考えても2種類以上の能力を使つてきている!!対処のしようがないじゃん!!」

『……おそらく、レベルアップパーによって構築したネットワークそのものを一つの脳として使用しているんだと思います。現在の被害者は1万人弱、その人数の能力を使えたとすれば……』

戦兔がごくり、と唾をのむ。

『普通の人間の常識が通用しない存在、今の木山は理論上あり得ないとされた多重能力者かもしれません!』

「くそ!!車両は放棄しろ!!避難するじゃん!!」

その言葉と共に激しい音がヘルメット内に響き、そこで通信が切れた。

「くっそ!!」

「ねえ!あれ!!」

後ろに乗る美琴が指さす先に煙と火炎が上がっていた。

「上の道か!しゃあない、御坂!ちよつと飛ぶぞ!」

「は!？」

言うが早いか、戦兎は手元の画面を操作、マシンビルダーに装填したボトルを入れ替える。

【ロケット】 【ビルドチェンジ】

次の瞬間、マシンビルダーの後部とタイヤパーツからジェット噴射し、2人は宙へと舞い上がる。

「いっけー」

ドリフトを綺麗にかまし、2人は現場に到着した。しかし、

「これは……」

そこには倒れた警備員車輛とそこかしこから立ち込める白煙、辺りには意識を失った隊員たちが倒れている。

「警備員が、全滅……」

「!!初春さん!!」

美琴が青い車に駆け寄ると、衝撃のためか気を失っている初春がいた。

「しっかりと!!初春さん!」

「安心しろ、戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ」

呼びかけるが返事がない。電子錠を破ろうと能力を使おうとした美琴は、白煙の向こうから聞こえた声に気づき、そちらを見た。

「御坂美琴……学園都市に7人しかいないレベル5。さすがの君も、私のようなものと戦ったことはあるまい。それに、」

白衣を風になびかせたその姿は、どこか全能感を醸し出していた。

「桐生戦兎。君も来てくれるとは」

「木山……春生……」

木山は余裕を持った口調で言う。

「御坂美琴。君に、今の私を、1万の脳を統べる私をとめられるかな?」

「……止められるかな、ですって?」

ゆつくりと木山の方を向いた美琴は、睨みをきかせながら答える。

「当たり前でしょ!!」

その言葉と共に駆け出した美琴に対し、木山は美琴の足元を陥没させ、手から衝撃波を放って撃退しようとする。

「うわ!!」

対し美琴は高速道路に設置されている街灯目がけて磁力を発生させ、回避。近くにいた戦兎はラビットボトルを振って同じように回避していた。

「・・・驚いたわ。本当に複数の能力が使えるのね。デュアルスキルなんて、相手するの楽しみじゃない!!」

「私の能力は理論上不可能とされたあれとは方向性が少し違う・・・言うなればマルチスキルだ。それより・・・」

と黙っている戦兎の方を見る。

「驚いたな。そのボトルにはそんな使い方があるのか」

「・・・やっぱり、ボトルのことを知ってるのか」

「専門分野ではないので解析などはしていないがね。ではやはり君が仮面ライダーか」

「だったらどうする?こっちは二人がかりでお前を止めるだけだ」

戦兎の言葉に木山は薄く笑う。

「手合わせしてデータを取りたいところだが、君にはそんな暇はないはずだろうか?」

そう言って後ろを指さす。

「君の相手はあれだ」

振り向くとそこには三体のスマッシュュータートルスマッシュュ、クマスマッシュュ、ウルフスマッシュュがいた

「・・・お前があのおスマッシュュを作ったのか」

「ああ、だが安心しろ。アレの中身は空っぽだ。学生は入っていないから遠慮する必要はない」

「ふざけるな。今までのスマッシュュもすべてお前が作ったのか」

「違う、と言うと嘘になるが、そんなことはどうでもいい。君たちを足止めすれば、すべて終わるのだから」

言って、木山は腕を前に出し構える。

「御坂」

「木山は私に任せて。アンタはスマツシユを倒しなさい」

「そのつもりだが、お前、あんまやりすぎるなよ?」

「大丈夫よ。―あれ相手なら多少やり過ぎても」

「・・・後で色々話聞きたいから、五体満足で頼む」

そう言って美琴は木山に、戦兔は三体のスマツシユに向けて歩みを進める。

「万丈、スマツシユは発見できたか?」

『おう。これから戦うところだ』

「そいつらはおそらく、難波重工が作ったクローンスマツシユに近いものだ。中身がないから思い切りやって構わない」

『あー・・・、ウーロンじゃなかったか』

「この馬鹿」

『だから筋肉つけろって!!・・・たたくとつとどぶっ倒して、佐天の奴おこしに行くんだろ?』

「ああ。主役は俺だけだな」

『何言ってるんだよ。ヒーローは・・・俺たちだ』

「・・・うるせ」

言葉とは裏腹に笑顔でビルドドライバーを装着する。もう言葉はいらなかった。

【ラビット】 【タンク】

【ベストマッチー!】

【覚醒】 【グレートクローズドラゴン】

ボルテックレバーを回し、アーマーを展開する。

【Are you ready?】

覚悟を問う言葉に、2人のヒーローが応える。

「変身!!」

【鋼のムーンサルト!ラビットタンク!】

Wake up CROSS-Z! Get GREAT DRA

GON! Yeah!

闘いが、始まった。

## 第二十二話 木山せんせい

「オラア!!」

先に開戦したのは万丈と黒子対二体のスマッシューアイススマッシュとスパイダースマッシュだ。

ガキン、とクローズの拳がアイススマッシュの外殻に阻まれる。が、衝撃までは防げないようで数歩のげぞつた隙をさらに畳みかけようとするが。

「ー!!」

無音のままスパイダースマッシュがその手から蜘蛛糸を射出。持ち前の反射神経からなんとかのけ反ってそれを避け、距離を空ける。「わたくしもいますのよ!!」

クローズの背後から黒子が飛び出す。指の間に挟んだ鉄製ピックを瞬間移動―対象は糸を射出したスパイダースマッシュの顔面。

しかし、

「(やはり座標が定まりませんの……!!)」

何度かの戦闘でわかつてはいたが、スマッシュに対してレポートを使用すると演算結果と実際の移動先に若干の齟齬が生まれる。それはスマッシュがこの世界とは異なる物理法則を元に動いているからか。今は分からない。しかし、

「そう何度も同じことで立ち止まったりしませんのよ!!」

そう言つてスカートポケットからホルスターにあるのは別のピックを取り出し、レポートする。狙いはスパイダースマッシュの足元にある地面。

「万丈さん!!離れてください!!」

「おう!!」

黒子の言葉にスパイダースマッシュと交戦していた万丈がバックステップでその場から離れた瞬間、

「ッ!!!」

スパイダースマッシュの足元が突然爆発した。

「万丈さん!」



「任しとけ!!」

その一瞬の隙を見逃さず、クロースはビートクローザーにフェニックスボトルを装填し、グリップエンドを三回引っ張る。

「ヒツパレーー! ヒツパレーー! ヒツパレーー!」

「メガストラッシュユー!」

炎を纏った斬撃がスパイダースマッシュユを捉え、その身を焼き尽くした。

アイスマッシュユは仕留めきれなかったものの、これで二対一。明らかにクロース・黒子の側が有利となった。

「おい風呂子、なんださっきの?」

「く・ろ・こ!! ですよ!!…あれは桐生さんが開発してくださったピックですよ。先端に爆薬が仕込んであって、設定した秒数で起爆する仕組みになっていますの。起爆計算はややこしいですが、これならスマッシュユとも戦えますのよ」

「いつも部屋にこもってんなと思ってたが、そんなもん創ってやがったのか」

俺のナックルも直してくんねえかな、と場違いなことを考えていると万丈の足元に違和感が。

「万丈さん!?!」

「ん?」

黒子の言葉で足元を見ると徐々に体を覆っていく氷が目に入った。目の前のアイスマッシュユが発生させている冷氣によって凍らされているのだ。

「おわー!!?!」

慌てて氷を割ろうとする万丈と襲い掛かるアイスマッシュユに頭を抱えつつ、黒子は新しいピックを手元に呼び出した。

※

【忍のエンターテイナー! ニンニンコミック!】

【分身の術!】

ビルドニンニンコミックフォームに変身した戦兎は、すかさず四コマ忍法刀のボルテックトリガーを押し、自身の分身を二体呼び出す。

相手はクマ、ウルフ、タートルの三体。いずれも旧世界では戦ったことのない北都由来スマッシュだが、ジーニアスフルボトルを作成した過程ですべてのボトル成分を解析した経験から、特性は分かっていた。

『一気に決めるぞー!』

三人のビルドは同時にそれぞれの目標に切りかかる。それに対しスマッシュ達は各々の特性を活かした動きで交戦する。

タートルスマッシュは甲羅状のエネルギーを腕に出現させ、防御しクマスマッシュはその腕力で近くの瓦礫を投げ、

ウルフスマッシュは――

「ガルー!」

(はやっ!!)

先に切りかかったビルドの眼前に爪を立てこちらに応戦するウルフスマッシュの姿があった。こちらの攻撃が間に合わないと思った戦兎は咄嗟に四コマ忍法刀のボルテックトリガーを四回引き、

【隠れ身の術!ドロン!】

煙幕を発生させつつその場から離脱しようとした。しかし、

「ぐあ!!?」

着地したと思った矢先、ウルフスマッシュの腕がビルドを捉え、弾き飛ばした。高速道路の壁に激突した衝撃は直に背中に伝わり、容赦なく体内の酸素を吐き出させる。

「つく…そっか、オオカミだもんな。鼻が利くわけだ!!」

追撃してくる敵に対し、刀を構えて相対する戦兎。鋭利な爪で斬撃を繰り出してくる相手に忍法刀を振るって対抗する。

「ちよっと!!なに苦戦してんのよ!」

声の方を見ると木山の攻撃をいかくぐっている美琴がこちらの状況に対し檄を飛ばしている。

「苦戦してないわ!!これも勝利の法則だっつーの!!みんな!そろそろ決めるぞ!」

怒鳴りつつ戦兎はスマッシュの攻撃をいなしつつ、分身体ビルドに指示を送る。クマスマッシュ、タートルスマッシュと相対していたビ

ルドたちは、それぞれが勝利の法則に向かって動き出した。

「そらこつちだ!!」

「ついてこいー!」

「鬼さんこちらー!」

三者三様の方法でスマッシュ達を誘導し、一か所に集め始める。スマッシュ達が近づき、ビルド達が囲い込む。気が付けばそのような図式が出来上がっていた。

それだけではない。

「誘い込みお疲れー。ではではつと!!」

『!!!』

いつの間にかビルドがもう一人増えていた。四人目のビルドはその手に持っていたものを―実体化した鎖を―勢いよくスマッシュ達に投げつける。

「驚いてるな?この四コマ忍法刀の剣先についてるリア

ライズペンエッジは描いたものが実体化できるんだ。せつせとお前たちを拘束するための鎖を四人目に描かせてたんだよ。ま、クオリティはアレだけど」

そう言いつつ四人のビルド達は四コマ忍法刀を構える。二人のビルドが二回、もう二人が三回ボルテックトリガー引き、忍術を発動させる。

【風遁の術!竜巻斬り!】

【火遁の術!火炎斬り!】

竜巻によつて何倍にも威力を増した炎がスマッシュ達を襲う。その隙に四人のビルドはボルテックレバーを回す。

「二」勝利の法則は決まった!!「二」

三人の分身体が脚部のペンユニットで手裏剣を描いてスマッシュ達に突き刺し、本体のビルドが飛び上がる。

【Ready Go】

【ボルテックファイニッシュ!!】

ライダーキックが炸裂し、スマッシュ達は爆発した。

※

「…驚いたな。もうスマツシユがやられたか。残りの二体もじきに君たちのお仲間…風紀委員の彼女ともう一人の仮面ライダーが倒してしまうだろう」

「驚いたって言ってるわりには、えらく落ち着いてるじゃない」

「慌てる必要はないからな。そもそもスマツシユには期待していなかった…私自身の力でどうにかなるからな」

そう言っつて木山は美琴に向けて斬撃状のエネルギーを放つ。寸でのところがかまいたち攻撃をかわしつつ、美琴は電撃で応戦した。しかし

「…どうした？複数の能力を同時に使えないと踏んでいたのか？」

球状に貼られたバリアによって美琴の電撃は阻まれた。凶星をつかれた美琴に笑みを浮かべ、木山はさらに能力を使用する。

「うわっ!!」

瞬間、衝撃波と共に足元の道路が崩れる。恐らく念動力の応用なのだろう、なんなく着地した木山に対し、美琴も近くの柱、その中の鉄に磁力を発生させて落下を防ぐ。

(なんて奴…自分を巻き込むのお構いなしに能力を振るうなんて…)

「…拍子抜けだな」

「何よ」

「レベル5とはこの程度のものなのか？」

「くっ!」

挑発とわかっているものの、それに乗るような形で美琴は柱から磁力で破片を浮かせる。

「電撃を攻略したくらいで勝ったと思うな!!」

それを磁力で思い切り木山に向けて放つ。が、木山は手元に出した光の剣で破片を切った。

「はい?」

思わず間抜けな声を発した美琴に対し、木山はさらに能力を使った。対象は美琴が張り付いている柱。円状に切り込みが入ったと思ったら。

「うわっ!!」

せり上がり円柱状になって美琴諸共落下する。

「げほっげほっ…」

「…もうやめにしないか」

粉塵が舞う中せき込みつつ木山を睨む。白衣のポケットに手を突っ込むという余裕な姿を見せ、木山は静かに言う。

「私はある事を調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する。」  
目を閉じ、

「誰も犠牲にはしない」

「ふざけんじやないわよ（んな）!!」

【鋼のムーンサルト ラビットタンク】

戦闘を終え、ラビットタンクフォームに変身した戦兎と美琴が同時に言う。

「ん？」

「誰も犠牲にしない…？あれだけの人間を巻き込んでおいてっ」

美琴は立ち上がり、眼光を光らせる。

「人の心を弄んでおいて!!そんなの、見過ごせるはずないでしょうか!!」

「…やれやれ、レベル5と言っても所詮は世間知らずのお嬢様か…」

「いや、天才物理学者も同意見だ。」

頭を抱えた木山は美琴の後方に降り立ったビルドを見やる。

「アンタは科学者でありながら、科学を使って守るべき子どもたちを利用した。科学技術は誰かの笑顔のために、愛と平和のために使うべきものだ。その矜持を失った時点でアンタに科学者を名乗る資格はない！」

「青いな…この街では、そのようなものは文字通り幻想だよ…」

髪を掻き上げた木山は二人に向けて静かに告げる。

「君たちが普段から受けている能力開発、あれが人道的で安全なものだと思っっているのか？」

「どういう意味だ？」

戦兎の問いに木山は口元をゆがめて答える。

「学園都市上層部は能力に関する重大な何かを隠している。それを知

らずにこの街の教師たちは、学生たちの脳を日々『開発』しているんだ。…それがどんなに危険なことかわかるだろう」

「…中々面白そうな話じゃない。アンタを捕まえた後でゆつくりと…」

言いつつ右手から電力を地面に向けて流し、砂鉄を巻き上げる。「聞かせてもらうことにするわ!!」

言葉と同時に数十本に及ぶ帯状の砂鉄流が木山に襲い掛かる。それは常時警戒している戦兎の目にも止まらぬ速さで、

「残念だが、  
ガギン!!」

しかし足元の瓦礫でガードされ、木山本人には一つも届かない。

「まだ捕まるわけにはいかないっ」

念動力で周囲に散らばっていたものを浮遊させ、その中身をぶちまけた。

「これは…空き缶!」

「グラビトンか!」

一瞬早く気が付いた戦兎はドリルクラッシュヤーをガンモードへ変形させ、撃ち落とそうとする、が

「さあ、どうする?」

「全部…撃ち落とす!!」

その前に美琴が雷撃の槍によって宙を舞う空き缶を根こそぎ薙ぎ払った。

「すごいな…しかし」

その声に反応し、戦兎は木山を見る。噴煙に紛れ木山は周囲の空き缶をあてがうとともに、その一つを手に取り、

「ぎつとこんなもんよ!!もう終わり?」

美琴の背後へとテレポートさせた。

「御坂!!」

咄嗟に美琴の盾になろうとする戦兎だが、介旅が使用していたグラビトンと同等以上の威力を持った爆発が起こり。

「ドカン、だ」

2人を襲った。

※

「…もつとてこずると思っただが」

土煙が晴れる。木山が見つめる先には先ほどまで自分と戦っていた二人が横たわっていた。ビルドは咄嗟に美琴を庇おうとした結果、まともに爆発の衝撃を受けたはずだが、微動だにしない美琴に比べ、変身解除されてるとはいえ、うめき声が聞こえる。意識があるのだろうか。

「こんなものか、レベル5」

「ぐっ…」

「すごいな、仮面ライダーというのは。あの衝撃にも耐えられるものなのか。機会があつたら調べてみたいものだ。まあ、そんな機会はこないだろうが」

「まてっ…!!」

「恨んでもらって構わんよ。」

そう言つて木山は踵を返し、車に戻ろうとする。が

「…つつかまーえた…」

背後から腰のあたりを抱かれる感触。そして、先ほどまで微動だにしなかった少女の声が、さらに、

「馬鹿なっ!!」

目の前には生身ではあるもののドリルクラッシュヤーガンモードを突き付ける戦兎の姿が、。

「こつちこそ、随分てこずらされたよ」

ドロン!という音声と共に背後にいた戦兎の姿が消える。あの一瞬でニンニンコミックにビルドアップし、分身を作っていたのだ。

さらには、

(即席の磁力の壁!?)

美琴が倒れていた場所、不自然に盛り上がった地面がまるで美琴を守るかのように爆発地点と美琴の間に立ちふさがっていた。

「ゼロ距離からの電撃…あのバカやそこの変人には効かなかつたけ

ど、いくら何でもあんなトンデモ能力までは持ってないわよね!!」  
「くっ!!」

瞬間的に地面を隆起させ美琴に差し向ける、が、  
「遅い!!!」

電流の速度には及ばず、美琴の身体から紫電が走る。

「ぐあああああああ!!!」

「…いや、やり過ぎじゃね?」

戦兔が心配するレベルの絶叫が響いたが、それもつかの間、電流を止めると木山は気を失ったのか、ぐったりと前にめりになった。

「おっと」

抱き着いた美琴が支えられない上半身を支え、木山の様子を見る。  
どうやら完全に気絶しているようだ。

「一応手加減はしてるから死んではない、と思う…」  
「どうした?」

急に黙った美琴を訝しんだ戦兔が問うが、美琴はどこか中空を見ている。それはまるで、誰かの声を聴いているかのように。

と、その瞬間戦兔にもそのわけがわかった。それは

(…せん…い)

(…せんせ…い)

(…せんせい…)

「なにこれ、まるで頭の中に直接…」

「それだけじゃない…これはイメージ…?見たことのない子どもの顔が頭の中に…」

はっとなり二人は自分たちの間にいる木山を見る。

「これって、木山春生の記憶…?」

「…おそらく御坂の電気によって触れている俺と木山と御坂の間でネットワークが構築されてるんだ」

その証拠に、とでもいうように頭の中に次々と映像がフラッシュバックしてくる。

(木山せんせいっ)



※

はじめは、研究の一環だった。

上司から統括理事会肝いりの実験と聞かされ、たまたま大学時代に取得した教員免許から、教師になれと言われた。

チャイルドエラー。

様々な事情で学園都市に捨てられた子供たち。被験者である彼らの成長データや調整をするために「教師」という役割を負うことになった。

(厄介なことになった)

はじめて彼ら彼女らの前に教師として立ち、自己紹介をした直後の感想だ。屈託のない笑顔をこちらに向けてくる、数十人の子供たち。

(子供は嫌いだ)

悪戯によって水を被り、いつものように服を脱いで乾かそうとしたら女生徒からは怒られ、男子生徒からはペチャパイと言われた。

(デリカシーがない)

廊下で彼氏の有無を聞かれ、あまつさえ付き合ってやるなどと言われた。

(失礼だし)

教科書にムカデのおもちやを仕込まれ、柄にもなく叫んでしまった。

(悪戯するし)

泣いている子供に理由を聞いたらさらに泣かれたこともあった。

(論理的じゃないし)

好き嫌いしちやダメなんだよ、とニンジンを避けていた姿を注意されたりもした。

(馴れ馴れしいし、すぐに懐いてくる)

子供は、嫌いだ。

ある雨の日だった。帰宅しようとしたら校門前で女子生徒が倒れていた。滑って転んだ、と言って笑っていた。

—入っていいの?—

—ああ—

放置するわけにもいかず、成り行きで自宅に通し、風呂に入れた。汚れてしまった服を洗濯機にかけ、壁にもたれかかっていると声が聞こえた。

—せんせい？—

—ん？—

—がんばったら私でもレベル4とか5になれるかな—

—今の段階では何とも言えないな。∴高レベルの能力者に憧れがあるのか？—

—んー、勿論それもあるけど—

—はにかむような声で彼女は言った。

—私たちは、学園都市に育てられているから、この街の役に立てるようにになりたいな—って

—その言葉に、何も返せなかった。

風呂にから上がるとその少女は眠ってしまった。今日やろうとしていた研究の時間が無くなった。いい迷惑だ。

少女は安心しきった寝顔で横たわっていた。

—何故か、口元が少しほころんだ。

—やっぱり、子どもは嫌い、だ—

—騒がしいし、デリカシーがない。

—凝りもせず悪戯する生徒たちとそれを諷める生徒たち—

—失礼だし、悪戯するし、

—白衣を持ち出して逃げ回る生徒—

—論理的じゃないし、

—ぐちゃぐちゃな自画像を渡してくれた生徒—

—自分の誕生日に花束を贈ってくれた—

—好き嫌いは駄目、と言ってはしゃいだ—

—子どもは—

—その日はいつものように晴れていた。

冷たい金属性の機械が並び、実験着を着た生徒たちが投棄され、実

験用の機器を取り付けられている。

―怖くないか?―

いつかの少女に問う。

―ぜんぜん!だって木山せんせいの実験なんですよ?―

いつかと同じような笑顔で、少女は言う。

―木山せんせいのこと、信じてるもん!―

その言葉に苦笑する。実験が成功すれば、もうこの子たちと関わることもない。

これで、先生ごっこもおしまいか。

そう思っていた。

結果は。

鳴り響く赤い警報、子どもたちの意識が奪われ、昏睡状態に。周りのスタッフが対応しようと走り回る中、最初に実験を命じた上司は興味深そうにモニタを見、いつもと同じ穏やかな声色で指示を飛ばす。

―浮足立っていないでデータを取りなさい―

―今回の実験に関しては緘口令が敷かれる―

―実験はつつがなく行われ、君たちは何も見なかった―

―いいね?―

怯えるように震える私の肩をつかみ、その男は言った。

「木山君。よくやってくれた。彼らには気の毒だが―」

「科学の発展には付き物だよ」

「今回の事故は気にしなくていい。君には今後も期待しているからね」

その表情は、科学者にも、悪魔にも似た酷薄な笑みだった。

教え子たちの意識が途絶えた。それを知らせる無機質な電子音が、響いていた。

※

「…今の…」

ドサツ。

思わず腕の力を抜いてしまった美琴の腕に支えられていた木山の

体重が戦兔にのしかかる。咄嗟に支えようとするが戦兔もまた、今しがた自分が見た映像のショックから抜けだせず、木山の身体は地面に倒れた。

「…見られた、のか？くそッ…」

衝撃で目覚めたのか、木山はふらつきながらも立ち上がる。頭を押さえつつ、自分に起こったことを思考していた。

「ぐっ…!!」

「…なんで、なんであんなことを…」

「…あれは表向きは、A I M 拡散力場を制御するための実験だった…」  
美琴の問いに背を向けながらも木山は答える。

「が、実際は…暴走能力の解析用誘爆実験だ…!」

「なっ…」

「暴走能力…?」

「ああ…A I M 拡散力場を刺激し、能力の暴走に必要な条件を観測するのが目的だったというわけさ」

その言葉に美琴は反応する。

「待ってよ!じゃあ…!!」

「…最初から暴走するように仕組まれていた、ってことか」

戦兔の言葉に木山は頷く。

「ああ…もつとも気付いたのは後になってからだがね」

「それって…」

美琴の言葉に戦兔は頷く。

「ああ、人体実験だ。それも被験者の生死なんて考えちゃいない。…犠牲ありきのマッドサイエンスだ」

「…あの子たちは一度も目覚めることもなく、今もなお眠り続けている。…私たちはあの子たちを使い捨てのモルモットにしたんだ

!!!

木山は目に涙を浮かべ、激しく言葉を放つ。

「でも…そんなことがあったなら警備員に通報すれば!!」

「23回」

「えっ?」

「23回…あの子どもたちの回復の方法と事故原因の究明に関するシミュレーションのためにツリーダイアグラムの使用申請をした数だ。あの演算能力があればあの子どもたちを目覚めさせることが、…もう一度太陽の下で走らせてあげることができる。そう思った。」

その言葉に戦兎は反応した。

「まさか、全部却下されたのか!？」

「そうだ!!それでわかったんだ、統括理事会がグルになった実験だった!!そんな案件に警備員が動くわけがない!!」

木山の叫びに美琴はたじろぐが、それでも反論した。

「でも…だからって、こんなやり方!!」

「君に何がわかる!!?」

「っ…!」

容赦のない叫びに美琴が、戦兎までもが黙る。

「あの子どもたちを救うためなら私はなんだってする…!!この街のすべてを敵に回してもやめるわけにはいかないんだ!!」

感情のままに叫ぶ木山、しかし、次の瞬間、

「ぐっ!!ああっ—!」

突如頭を押さえて木山が苦しみだした。

「ちよつと!？」

「様子が変だ!!すぐに病院へ…」

戦兎が駆け寄ろうとするも木山はうめき声をあげ、頭と片目を押さえ、えて呟く。

「…ネットワーク、の、…暴走…!!これ、は…」

そこで唐突に倒れる木山。しかし、そこから異変は続いた。

ぐちゆり

倒れた木山の背中から半透明の何かが漏れ出した。それらはやがて青とも緑ともつかない色の塊となり、やがて形を成していく。

「な…なにこれ…」

戦兎も自分の理解が追い付かない中、かろうじて言葉を絞り出す。

「胎児…?」

胎児、としか表現しようのないそれは、天使のような輪を頭上に浮

かべ、目を見開く。

それは先ほどまでの木山と同じ、充血したような眼だった。

瞬間、形容しがたい叫びが轟いた。

## 第二十三話 AIMバースト

「これで終わりだア!!」

「グレートドラゴニックファイニッシュ!!」

クローズの拳から放たれた龍がアイススマッシュを撃破する。ビルドフォンから取り出したエンプロティボトルを向けて成分を回収すると、赤い見た目の消防車フルボトルへと変化した。

「こっちは片付いたぞ、って、なにしてんだ?」

変身解除した万丈は先に戦線を離れた黒子に向けて言う。黒子は万丈が乗ってきたマシンビルダーのシートの上に小型の端末を置いて何やら操作していた。

「どういうわけか、このあたりの監視カメラが軒並みダウンしておりますの……。それにお姉様や桐生さんとも連絡が付きませんわ」

「防犯カメラって、そこら中についてるやつだろ? 一斉にダメになったのか?」

「ええ……。しかもポイント的にお姉様たちのいる付近のカメラからとまっていますわ……」

「ってことは…戦兎達に何かあったってことか?」

「その可能性は高いと思いますの…ひとまずお姉様たちの元へ向かいますわ。」

そう言っただけ黒子は万丈の手を掴みテレポートを発動させる。しかし、

（能力が発動しない!?!）

「どうした?」

「能力を使いすぎましたの…長距離の瞬間移動はできませんわ。」

「ならバイクだ。もう一つヘルメットあるから…ほら、乗れ!!」

「わかりましたわ。飛ばしてくださいですの!!」

ヘルメットを被った二人を乗せ、マシンビルダーは戦場へと駆ける。

※

「胎児…か?」

突如木山から発生した青白い物体に向け、戦兔がつぶやく。

「変形…？でもこんな能力見たことない…」

「能力の一種って感じじゃないな…生物なのか？」

その瞬間だった。

「!!!」

再び耳を貫くような音が辺りを支配する。それは口を開いて叫んでいるようだが、果たしてその口から音が出ているのかさえ分からない、不快感の塊のような咆哮。

そして、それと共に襲い掛かる衝撃波。

「くっ!!」

美琴は咄嗟に地面を磁力で隆起させ即席のバリケードを作るものの、衝撃波によって全て破壊される。

「こんにやろ!!」

反撃とばかりにドリルクラッシャー、ガンモードを構えた戦兔が打ち返し、遅れて美琴も電撃で反撃するが効いている感じはしない。さらに

(なんだよアレ、再生している!?)

着弾した部分は抉れ、赤紫の面が現れたと思ったら、次の瞬間には千切れた触手諸共元に戻り、

「しかも大きくなってる!?!」

先ほどより明らかに一回り大きくなっている。

「御坂!!来るぞ!!」

「はっ!?!」

異様な形状に気を取られ、その周囲に冷気が発生していることにまで注目していなかった美琴に向け、巨大な氷塊が射出された。

「えええー!?!?!」

木山も使用していた能力をあの化け物が使えろ? パニツクになりそんな頭を必死に回転させ、化け物との距離を取る美琴。

「なんなのよあれ!?!」

「わかんねえけど、木山が使えた能力は全部使えるって想定の方がいいだろうなっ!!」



振り向きざまにドリルクラツシャーを振るい氷塊をはじく戦兎に負けじと電撃で攻撃をはじく美琴の耳に、よく知っている声が届いた。

「御坂さん！戦兎先生！」

「初春！（さん！）」

木山に誘拐されたはずの初春が高速道路待避所にある階段を使って二人の元に向かっていた

「危ないでしょ!!なんでこんなところに来たの!？」

「ごめんなさい、でも…」

「とりあえず初春はそこを動くな。ドラゴン！」

戦兎の掛け声で待機していたクローズドラゴンが現れる。

「護衛変わりだ。さつきくらの攻撃なら迎撃できる。初春を守ってくれ」

返事の代わりに尻尾を振るクローズドラゴン。そのやり取りを見ていた美琴はふと気づいた。

「追つてこない…?」

見ると胎児の化け物は美琴達の方を見向きもせず、少しずつ上昇している。さらに。

「!!——!!」

「なにか…苦しんでいるみたい…」

初春の言葉のとおり、悲痛とも聞こえる悲鳴を上げていた。

※

「な、なんだよこれは!!」

高速道路上でも怪物は目撃されており、警備員たちは生物兵器の可能性を呟いていた。

その一人、鉄装はその異様な見た目に思わず後ずさりしそうになる。が、

「…動ける者だけでもやるしかないじゃんよ!!」

リーダーである黄泉川の檄によりなんとか銃を構える警備員たち。

「実弾の使用を許可する。撃て!!」

ダダダダと最新式のマシンガンから大量の弾が発射され、その多くが怪物へと着弾する。が、

「ぐあ!？」

怪物の振るった触手によって前方の隊員が薙ぎ払われ、さらには、「な、なんか…大きくなってる?。」

先ほどの戦兎達の時と同じく、攻撃されるたびに大きくなっていく怪物を前に、しかし警備員達は攻撃の手を緩めるわけにもいかず、撃ち続けるのであった。

その様子を、木山春生はふらつきながら見ていた。

「まさかあんなものが生まれるとは…学会で発表したら表彰ものだな…」

破れた白衣を脱ぎすて、壁にもたれつつ諦めたような表情でつぶやく。

「最早ネットワークは私の手を離れ、あの子たちを取りもどすことも回復させることも叶わなくなった…おしまいだな…」

誰に言うでもない呟きに、しかし返答はあった。

「諦めないでください!!」

見ると、自分が攫った少女と自分を倒した二人が立っていた。

その眼は、何も諦めていなかった。

※

「A I M拡散力場の集合体?。」

「ああ、仮にそう…A I Mバーストとでも名付けようか。レベルアップによって生まれた潜在意識の怪物…それがあれの正体だろう。」

「つまり、1万人の学生の思念の集合、というわけか」

「…そうだな」

戦兎の言葉に美琴と初春は怪物―A I Mバーストを見る。警備員の銃弾をもともせず、しかしその叫びは相変わらず悲痛なものだった。

「…おそらくただの思念ではなく、被害者たちの負の側面みたいなも

のをかき集めたものなのかもしれないな。レベルアップを使うつてこと、自分の能力にコンプレックスを持つてる奴も多かったんだろ。」

『夢は夢でしかなかった』

『この街では才能という高い壁が邪魔をする』

『みじめな日常。踏みつけにされ、見て見ぬふりをされる』

『だったら、どんなことをしても能力を手に入れるしかないじゃないか』

「!!」

「なんか、可愛いそう…」

一人もの学生の負の思念の塊、それを前にしても初春は恐れよ  
り、哀れみの感情を抱いた。

「…どうすれば止められるの?」

美琴は木山に聞く。木山は苦笑しつつ目を閉じて言った。

「私にそれを聞くのかい?今の私が何を言っても、君たちは信じ…」

と言いかけたところで初春が左手を木山に突き出した。

「私の手錠、木山先生が外してくれたんですよね?」

「ええ?」

驚く美琴をよそに木山は首を振る

「ただの気まぐれさ。そんなことで私を信用するとは…」

「それに」

まっすぐ木山に向けて初春は言う。

「子どもたち助けるのに、木山先生が嘘を吐くはずがありません」

まっすぐ、子どものような瞳で

「信じます」

「…っ」

一瞬、目の前の少女にかつての教え子が重なる。

『せんせいのこと、信じてるもん』

「…まったく」

だから子どもは、とは言わない。

その時に自分は、もういない。

「AIMバーストは、レベルアップのネットワークが生み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

その言葉に初春はポケットをまさぐり、メモリーカードを取り出す。

「レベルアップの治療プログラム!!」

「試してみる価値はあるはずだ」

それを聞いた美琴はAIMバーストを見る。

「あいつは私が何とかするから、初春さんはそれを持ってここか避難して」

「いや待て、警備員の車輛には通信機があるはずだ。そこから治療プログラムを使った方が早い」

「じゃあ私が警備員のところへ運びます。戦兔先生は—」

「初春の護衛と、多分上で苦戦している警備員の助太刀だな。」

言いつつ、ボトルを振り変身の用意をする。

「よし、じゃあいくわよー」

そう言つて美琴は駆け出した。

【ゴリラ】 【ダイヤモンド】

【バストマッチ】 【Are you ready?】

【変身!!】

【輝きのデストロイヤー ゴリラモンド!】

ビルド、ゴリラモンドフォームに変身した戦兔と共に初春も駆け出す。

その様子を見届けた木山は、どこか毒気が抜けたような表情で、空に向け呟いた。

「まったく…根拠もなく他人を信じる人間ばかりで困る」

※

「ぐあッ!!」

防戦一方の警備員に向け触手が薙ぎ払われ、そのうちの 하나가黄泉川にヒットする。

「隊長!! ひっ!!」

吹き飛ばされた上司をよそに、触手は鉄装にじりじりと近づく。

「いやっ、こないで!!」

触手に向けてひたすら鉛弾を打ち込む。着弾しているもののゆっくりとこちらに向かつてくるのは変わりなく、さらには、

「弾切れ!」

トリガーを引いても弾が出る素振りもなく、さらには触手の先が再生したと思ったら、赤い目玉が現れて、鉄装は思わず目をつぶってしまふ。

が、

グイ、つと前から後ろへすごい力で押され、と思ったら数瞬前に自分がいた場所が謎の衝撃波で抉られる。

「ちよつと!!何ぼさつとしてるのよ!!死んでも知らないわよ!」

どうやら横にいるこの少女が自分の胴体を鉄骨で吹き飛ばしたのだとわかる、が混乱しても鉄装は警備員。明らかに一般人の少女に向かって声を荒げる。

「あなた誰!?なんで一般人がこんな危険なところにいるの!」

ともすれば自身の命の恩人を叱るという言葉に少女、美琴は溜息を吐く。

「どいつもこいつも一般人一般人って…」

「と、とにかく!!すぐにここから逃げなさい!!」

と鉄装が言い終わる前に美琴は彼女を引き釣り移動。目の前に迫っていた触手の衝撃波を回避し、先端の目玉を電撃で焼き落とす。

「逃げるのはそつち!!あいつはこつちから攻撃しなきや寄ってこないんだから!!」

その言葉に口をつぐむ鉄装。

と、先刻吹き飛ばされた黄泉川が口を開く。

「攻撃しなきや寄ってこないのは分かってる。それでも放っておくわけにはいかないじゃん…。あれを見る」

黄泉川はAIMバーストの背後にある建物を指さす。そこには万国共通のあるマークが記されていて。

「原子力実験場じゃん。あの怪物がなにかはわからないが、あそこだ

けは守らないといけないんだよ」

「なんつー面倒な立地してるのよ…!!」

「おい！あれは!？」

黄泉川が示す方向に目を向けると、そこには階段を必死に駆けあがっている初春の姿。

「何やってるじゃんあいつ!？」

「あ、危ないっ!!」

鉄装の悲鳴じみた声と共にAIMバーストが放つ衝撃波が初春を襲い――

「やらせるわけがないでしょうがッ!!」

ビルドゴリラモンドフォームが発生させたシールドがそれをはじき返す。しかし、衝撃は殺しきれず、瓦礫と共に初春は転倒してしまった。

「初春！大丈夫か!？」

「…はい!!いけます!!」

痛みに顔をしかめつつ、初春はまた駆け始める。

(私だって…風紀委員なんだから…)

一歩一歩、確実に上る。

(みんなを…佐天さんを…!!)

※

「御坂!!あんまり挑発しすぎんな!!攻撃が広がってきてる!!」

戦兎の言葉通り、美琴の攻撃に呼応するかのように威力と効果範囲が大きくなっていく。

(このままだとらちが明かないな。早いとこ初春の持つてるワクチンソフトを使わねえと!!)

思考しつつ戦兎はなるべく初春から離れた場所でAIMバーストの攻撃をいなす。こうでもしなければ攻撃の余波で初春が吹き飛んでしまうからだ。

しかし、離れるということとは当然隙も生まれるわけで。

「しまった!？」

受け損ねた光弾が初春のすぐそこへと着弾してしまう。

「初春!!」

しかし、果たして初春は無事だった。

「大丈夫!？」

「まったく、最近の若いのは無茶するじゃん!!」

警備員の二人が強化シールドを持って初春の前の壁となっていた。

「治療プログラムは!？」

「無事です!!」

「よし! 援護するじゃん!!」

そう言った黄泉川は警備員とは別の回線―戦兎と万丈のライダーシステムに組み込まれた通信回線に切り替え、口早に告げた。

「治療プログラムはこっちでなんとかするじゃん。お前はあのおてんば娘を援護しろ」

『了解だ!!』

言うが早いビルドはボトルを切り替え、ボルテックレバーを回す。

【天空の暴れん坊 ホークガトリング!】

ビルド、ホークガトリングフォームはAIMバーストに立ち向かう美琴に加勢するべく、怪物の背後へ飛翔した。

※

バチイ!!

電撃を走らせた美琴はゆっくりと、だがか確実にAIMバーストに迫る。

「シカトしてんじゃないわよ」

こちらを見ているAIMバーストに一言、

「アンタの相手はこの私・・・みつともなく泣きわめいてないで、まっすぐ私に向かってきなさい!!」

その言葉に呼応するかのよう美琴に向かって衝撃波、光弾、ありとあらゆる能力を放ち、着実に進むAIMバースト、しかし、

「てーんーさーいーをー、忘れるんじゃないよ!!」

【ワンハンドレッド】

巨大な鷹を模したエネルギー弾がAIMバーストの腕をもぎ取る。ビルドホークガトリングフォームが旋回しつつ確実に攻撃を叩きこむ。しかし、

「!!!」

とまらない。

少しずつではあるが美琴は後退し、戦兎も消耗してきている。

「つたく、本当にきりがないわね」

もう何発目かの光弾を砂鉄の剣で防ぎ、相手を切り返し、その切り口から瞬く間に再生する様を見ながら美琴がぼやく。

「なんで原子力施設なんかに向かってくるのよ!! 怪獣映画かつつーの!!」

「それって結構古めの映画じゃね? あ、この世界だとそゆのが流行ってる感じ?」

「こんな時に何言ってるのよ!!」

言いつつ襲ってきた氷塊を避ける。

会話に気を取られたからか、避けた矢先に襲ってきた触手に吹き飛ばされる。

「御坂!!」

「あつぶなかった・・・ってやばっ!!」

足に磁力を発生させ何とか着地したのもつかの間、AIMバーストがその身体ごと突進を仕掛けてきた。

「このっ!!」

戦兎が必死の声と共に美琴を抱え上げ、避難する。と同時に轟音が鳴り響き・・・

「しまった!!」

原子力施設の壁が崩落した。

※

「ああそうじゃん!!」

同時刻。黄泉川は無線機に向かって怒鳴りっぱなしだった。



「いいから今から送る音声データをあらゆる方法を使って学園都市に流せ!!」

肩を貸している鉄装は目の前で作業をしている初春を見つめている。やがて、

「転送完了しました!!」

解凍した治療プログラムを警備員の本部や各学区の風紀委員詰所に転送したことを聞いた黄泉川は再度、無線機に向けて怒鳴る。

「責任は私がとる!!いいから流せ!!」

※

その瞬間。

学園都市に存在するありとあらゆるスピーカー、放送機器から、謎の音声 flowed。

時報を不協和音にしたようないびつな音に、街中の学生は訝しんだが、一部の施設では劇的な変化が見られた。

「先生!!患者さんたちが!!」

「収まった・・・?」

先ほどまで苦しみにあえいでいたレベルアップ被害者たちが全員、元の昏睡状態に戻ったのだった。

※

「これは?」

その音は戦兎と美琴にも届いていた。と同時に。

「——!!」

「しまっ!!」

気を取られていた美琴を触手がつかみ、締め上げ、別の触手が襲い掛かる。

「くそっ!!」

バチイ!と電撃で触手を破壊する。

(でもいくらやってもまた再生したら意味ないし・・・)

と思いつつどうにかしてもがいているとあることに気付く。そこへ。

「はっ!!」

戦兔がドリルクラッシュャーを振るい美琴を捉えていた触手を切断し、言う。

「おい、この音って」

「うん。初春さんやったんだ!!みて!!」

美琴の示す先、戦兔の斬撃と美琴の電撃で傷つけられた触手は先ほどのようにすぐには再生せず、その中身をボタボタと流していた。

「今がチャンスだ!一気に決めるぞ」

「言われなくても!!これでゲームオーバーよ!」

【ワンハンドレッド】

【Ready Go】

【ボルテックファイニッシュ】

限界まで装弾したホークガトリンガーを向けつつ、ボルテックレバーを回す。

美琴もAIMバーストに向けて電撃を走らせる。

「!!!!!!」

オレンジの鷹と紫電によってAIMバーストはその身体を赤茶色に焦がし、悲鳴と共に転倒した。

「ふう、間一髪ってやつ?」

「気を抜くな!!」

一息つき無傷の原子力施設を見ていた美琴に、別の声が叱咤する。

「木山!?!なんでこんなところに!?!」

「ネットワークの破壊には成功したが・・・」

ズズズと、巨大なものがゆっくり起き上がるような音。

美琴と戦兔の大技を食らったはずのAIMバーストが起き上がったのだ。

木山が続ける。

「あれは一人の子供たちのAIM拡散力場が生み出した思念の塊!!既存の生物の常識は通じない!!」

「は、話が違うじゃない!!そんなのどうやって倒せばいいのよ!!」

「核が!力場を固定している核のようなものがあるはずだ!それを破

壊できれば・・・」

「この巨体からそれを探すのか・・・？」

戦兎の言葉通り、先ほどよりも二回りほど大きくなったAIMバーストからあるかもわからない核を探せというのは、雲をつかむような話に見える。

そう思っていた時だった。

《・・・なのかな・・・》

「今のつて・・・？」

「佐天か・・・？」

今は昏睡状態の涙子の声が出たのだ。

《レベル0つて、欠陥品？》

《だったら俺たちは必要ない・・・》

《毎日が、どれだけ苦痛か》

《あなたにはわからない・・・》

「これは・・・レベルアップー被害者の思念がアレを通じて漏れているのか？」

戦兎の言葉通り、一万人もの子供たちの、きっとその多くはレベル0の心の声が聞こえてくる。

《頑張ったところでレベルは上がらない》

《所詮俺たちはいらぬ存在なんだ》

《レベル0の気持ちなんて能力者にはわからない・・・》

《その期待が》

美琴と戦兎の脳裏に、無理しているような少女の笑顔がよぎる。

《重いこともあるんですよ》

「・・・離れてて。巻き込まれるわよ」

「ああ、そこにいると邪魔になる」

「・・・かまうものか」

2人の警告に木山は毅然と答える。

「私にはあれを生み出した責任がある!!」

「アンタがよくても、アンタの教え子はどうすんの。回復した時、あの子たちが見たいのはアンタの笑顔じゃないの？」

「それは・・・」

「こんなやり方しないなら、天才物理学者の俺が協力してやるよ。だから」

だから、

「簡単に諦めんな」

その言葉に反応したのか、AIMバーストの触手がうごめき、轟

という風と共に襲い掛かる。

「あとね、」

が、

バチイ!!

その一撃はすさまじい雷撃と共に弾かれた。

「アイツに巻き込まれるんじゃない。あたしが巻き込んだじゃうって言うってんの」

そうやって美琴は前に進む。

「御坂、電撃でアイツの動きを止められるか？そしたら俺が核を探す。」

「できるけど、アンタも巻き添えくらうわよ?」

「ご安心を。天っ才に抜かりはないんだよ」

そうやって取り出すのはフルボトルではなく、缶状の物体。

「なにそれ、サイダー?」

「まあ間違っちゃいない」

そうやって戦兎はその缶ーラビットタンクスパークリングフルボトルーを振る

【f i z z      f i z z】

炭酸が弾ける音を聞き、天面にあるシールドディングタブを引き起こし、RT-SPコネクタと呼ばれるパーツを起動。ビルドドライバーに差し込む。

【ラビットタンクスパークリング】

同時にボルテックレバーを回すといつもよりも大きめのスナップライドビルダーが展開され、

【are you ready?】

「ビルドアップ!!」

【シュワっど弾ける!!ラビットタンクスパークリング!!】

ベースのラビットタンクフォームのアーマーに、発泡増強剤「ベストマッチリキッド」によってその形状をより強化した。かつてパンドラボックスの力を利用して作られた、ビルドラビットタンクスパークリング。

「それがこそこそ直してたやつね。役に立つんでしょね」

「まっかせなさい。ーさあ、実験をはじめようか」

仮面ライダーと学園都市第三位。

はじめて並び立ち、戦う瞬間であった。

## 第二十五話 「おかえり」

※

常盤台の超電磁砲。

ビルドラビットトタンクスパークリングフォーム。

学園都市に7人しかいないレベル5の第三位と、ラブアンドピースを胸に戦う仮面ライダーは、巨大な怪物―AIMバーストを見上げる。

「いくわよ」

言って美琴は電撃をAIMバーストに放つ、が。

「あれは私が使った誘電力場・・・先ほどの戦闘から学んだのか!？」

少し離れた場所で戦いを見守っていた木山の言葉通り、美琴の電撃は空中で見えない壁に阻まれているかのように散らされていた。

「ーッ!!」

しかし

「電撃が直撃していないのにダメージを負っている・・・?」

「電気抵抗による熱だな」

「なっ!？」

いつの間近づいていた戦兎が言う。

「もうちょい離れてないと巻き込まれるぞ。あいつ、強引に電撃の出力を上げて抵抗熱で体の表面を焼きに行ってる」

木山を抱え上げ、先ほどAIMバーストが破壊した壁面の陰に運びつつ戦兎が言う。

「私との戦いのおきのあれは、全力ではなかった?」

「そうらしいな。っと、」

言って戦兎は軽くジャンプしたと思ったらもう泣き叫ぶAIMバーストの懐に潜りこんでいた。

「速い!？」

スパークリングのアーマーにはラビットバルブという小粒の泡を発生させ、それを弾けさせた衝撃によってラビットタンクを超える超高速移動が可能になる。

「ハッ!!」

残像すら発生させる超スピードでA I Mバーストが放とうとする氷塊、衝撃波を発生させている触手ごと破壊していく。

美琴の電撃、そして戦兔の超スピード攻撃に呼応するかのようA I Mバーストもまた、触手同士をまとめ上げて二人に打撃を振るおうとする。が、

「ごめんね」

斬、と。

美琴の一言と共に砂鉄の剣が襲い掛かる触手を切り裂く。

《誰だって》《能力者に》《なりたかった》

「・・・」

戦兔はただ黙って右腕部のRスパークリンググブレードを振るい同じように触手を切断する。

誰のものともわからない声が聞こえてくる。戦兔の、美琴の攻撃が当たる度、傷つけられていく度に。

「気付いてあげられなくて」

《しようがないよね》《私にはなにも》《ぶっ壊して》

先ほどよりもはるかに多い数の氷塊が、光弾が二人を襲うが、砂鉄の剣が、強化された蹴りや拳が、それらを薙ぎ払う。

「頑張りたかったんだよね」

美琴はやはり静かに呟く。

いまやA I Mバーストは何倍にも巨大になり、ひたすら叫び続け、しきりに戦兔と美琴に力を使い続けている。

《なんの力もない自分がいやで》

《でも・・・どうしても憧れは捨てられなくて》

ふり絞るような声。二人の知っている少女の声。

それと同時にA I Mバーストは美琴に突撃をかける。が、

「諦めないことを知っているなら、勝利の法則はもう決まってるんだろ」  
残像を残す超高速移動で突撃を仕掛けるA I Mバーストの動きを止める。

そう。

「だったら、もう一度頑張ってみよ」

ポケットからコインを取り出し、まっすぐ向き合う。

「こんなところでよくよしないぞ」

「自分で自分に嘘つかないで・・・もう一度!!」

【Ready Go!】

美琴の声と共に戦兎はボルテックレバーを回し、胸部カルボニックチェストアーマーから「デイメンションバルブ」を発生させて歪ませた空間にAIMバーストを閉じ込め、必殺技を放つ。狙いは。

「明らかに不自然な頭のわか!!どうみてもそこが核だろ!」

【スパークリングフィニッシュ!!】

果たして戦兎の読みは正しく、渾身のライダーキックによって四散したAIMバーストの頭部に、鈍く輝く六角柱が存在していた。

「御坂!!」

反動を利用して離れる戦兎の呼びかけに、美琴はコインをはじく音で応え、

轟!!

次の瞬間、オレンジ色の破壊の光がAIMバーストを、そしてその核を貫いた。

「!!!」

「・・・これが」

断末魔のような声と共に消滅していくAIMバーストの残骸と、14歳の少女の背中を見ながら木山はつぶやいた。

「これが・・・レベル5」

※

「なんとかあったな」

「これで昏睡してた人達も元に戻るのよね」

変身を解除した戦兎が土煙を払いながら言う。美琴は木山が逃げないよう、彼女の背後についているが。

「ああ、おそらくは今頃病院で覚醒が始まっているだろう。・・・安心してなくても逃げないさ。おとなしく警備員に投降する」

「その前に、だ」



少し安心した美琴に代わり戦兎は木山に聞く。

「アンタの車に空のフルボトルがあった。あれをどこで手に入れた？」

「・・・その質問ではつきりしたよ。やはりあれは君のテクノロジーと  
いうことか」

「俺が作ったものだ。だが、この街にあるわけではない技術でもある。  
誰からもらったんだ」

「・・・3日前くらいのことだ。私のラボに頼んだ覚えのない包みが届  
いた。中には5つの容器とメモリーカードが入っていた」

「メモリーカード？」

美琴の問いに木山は頷く。

「ああ。中には同封されていた容器―フルボトルと呼ばれるものの詳  
細と、スマッシュに関する記述があった。」

「スマッシュに関する記述だ?!」

戦兎は驚愕する。なにせそれは、今は失われたはずの旧世界にしか  
ないもののはずで、しかもスマッシュの研究を行っていたのは、

「なんでファウストの研究データがこの街にあるんだ・・・？」

「ファウスト、というのかね。あれを作ったのは」

「・・・そうだ。だがそんなことはあり得ない。だってもう」

世界は創りかえられているから、とは言えなかった。

「・・・そう言えば、その資料の最後に署名があったな」

「?!それは誰だ!」

「たしか―」

木山が口を開いた、その時だった。

「戦兎!!」

名前を呼ばれた、と思ったら赤い装甲のグレートクローズが戦兎達  
を押し倒した。

「万丈!?!どうした!?!」

「なんかへんなもんがお前らを狙って―って、おい、あれ・・・」

言われて背後を見ると、かすかに青白い何かが襲い掛かって来てい  
るのが見えた。それは蛇のように地を這い、こちらを狙っている。

「がっ!？」

「万丈!？」

一瞬の隙を吐いたそいつは万丈の装甲に突き刺した。

「な、なんなのよこれっ!!」

咄嗟に美琴が電撃で応戦するも、それは瞬時に万丈から離れ見えなくなつた。

否。

本体に戻っていった。

「そんな・・・お前は・・・!!」

戦兎はかつて、これと同じような攻撃を受けたことがある。

地球外の毒を注入され、死の淵まで追い詰められた。

緑色のバイザー。

赤いボディ。

武器であり変身に必要な銃。

かつて戦兎を利用し、戦兎達の世界を滅ぼしかけた張本人。

「ブラッドスターク!!!」

※

気付いたときには戦兎は走り出していた。

【鋼のムーンサルト!・ラビットタンク!】

目にも止まらぬ速さで変身し、その拳を振るう。

「・・・」

対し赤い影―スタークはその拳を避け、立ち去ろうとするが。

「逃がすか!!」

召喚したドリルクラッシュヤーガンモードで退路を塞ぎ、攻撃を仕掛ける。

「・・・」

逃げることをあきらめたのか、スチームブレードで応戦するスタークに対し戦兎も四コマ忍法刀を使ってつばぜり合いに持ち込み、

「お前・・・エボルトなのか!!?」

「・・・」

戦兎の問いに応えず、スタークはスチームブレードを押し返し離

れ、

「待て!!」

戦兔の制止も叶わず全身から煙を出して姿を消したのだった。

「・・・なんなんだよ、あれ・・・」

眩く戦兔だったが不意に万丈のことを思い出し、振り返る。

「ちよつと万丈!!大丈夫!」

「どこか痛むんですの!」

「・・・っ痛え」

変身解除された万丈は呻きつつもゆっくり体を起こす。

「なんだったの、あれ・・・」

「あれは・・・」

万丈が口を開きかけるが戦兔がかぶせて言う。

「ブラッドスターク。かつて俺たちと戦った敵で、多分、木山にフルボトルを渡した奴だ。」

「・・・ああ、さっき言いかけた名前はそれで間違いない。」

2人の言葉に美琴が反応する。

「待ってよ。アンタたちの敵ってことは並行せー」

「お姉様!!」

言いかけて口をつぐむ。戦兔と万丈の出自は明かせないのだ。

「・・・ひとまず木山を警備員に引き渡そう。白井、レポートで呼んできてもらえるか?あと万丈も一応医者に診てもらった方がいい。」

「わかりましたわ」

「・・・おう」

先ほどとは打って変わって静かな戦兔の言葉に、万丈でさえ素直にうなずいた。

その表情は、美琴からは見る事ができなかった。

※

夕焼けが、街を染め上げている。

「・・・」

とある病院の屋上で、病院着を着た佐天涙子は静かに街を眺めていた。ゆっくりと自分の手を見て、小さく息を吐く。

「佐天さん!!」

と、先ほど自分が閉めた扉を開け、親友である初春飾利が転がる勢いで入ってきた。

「はあ、はあ、はあ」

「・・・よっ、初春」

「よ、よっ、じゃないですよ！病室にいないから捜したじゃないですか!!起き上がって大丈夫なんですか!?まだどっか具合悪いんじゃない?」  
肩で息をしながら矢継ぎ早にまくし立てる初春に思わず笑みがこぼれる。

「ちよつと眠ってたただけだもん。すっかり元どおり!・・・能力が使えないところまでもね」

少し間を空けて、言わないでおこうとしたことも言った。

「あつ・・・」

その一言に初春は目をそらす。もとはと言えば親友の苦悩を、もつと早く初春が気付いていれば結果は違っていたかもしれない。そんな思いがどうしても脳裏をよぎる。

そんな初春の様子を見て、涙子は気付く。足や腕に巻かれた包帯。ボロボロの制服。

「っ!」

思わず初春に抱き着いた。

「・・・佐天さん?」

「ごめん。つまらないことにこだわって、内緒でズルして」

声は微かに震えていて。

「初春を、こんな目に遭わせて」

「・・・そんなこと」

「わたし、もう少しで能力なんかよりずっと大切なものをなくすところだった」

「・・・」

ああ、よかった。と初春は思う。

親友が元に戻ってくれて、なにより、自分をこんなにも大切に思ってくれて。

「・・・あ、そうだ。忘れてた」

「?佐天さん?」

抱き着いていた涙子の重さが少し消え、頭が下の方に下がり―

「たっだいま――!!」

勢いよくスカートをめくられた。

「ひゃー!!?」

それは涙子のあいさつ代わりにあり、帰ってきた証でもあった。

「何するんですか病み上がりの癖に!!」

「ハハハ!!快気祝い快気祝い!!」

いつものように騒ぐ二人。その二人を美琴と黒子は静かに見ていた。

「これで一見落着、ですわね」

「・・・うん」

問題は解決した。レベルアップによって昏睡状態になった学生たちは皆、意識を取り戻し、主犯である木山は警備員に引き渡された。

『あのっ』

『うん?』

手錠に繋がれる木山が振り向いた。

『その・・・どうするの?子どもたちのこと』

『・・・勿論、諦めるつもりはない。もう一度やり直ささ』

目を伏せていた美琴はその言葉にハツとなる。

そうだ。自分が言ったのだ。もう一度頑張れ、諦めるな、と。

『刑務所だろうと世界の果てだろうと』

『―私の頭脳はここにあるのだから』

その言葉に、初春ともども苦笑する。

『ただし―』

前を向きながら木山は続ける。

『今後も手段を選ぶつもりはない。―気に入らなければ、そのときはまた邪魔しに来たまえ。彼らと共に』

そう言い残し、ただの先生に戻った木山春生は警備員に連れられて行った。

『……やれやれ、懲りない先生だわ』

その後、木山が確保していた子供たちは警備員で保護、また、負傷した万丈は黄泉川に引つ張られつつ現在治療中だ。

全てが終息したにもかかわらず、美琴の表情はすぐれない。

「どうかなさいまして?」

「え?…ううん、なんでも」

なんでもなくはない表情をした美琴を見て、黒子はすべて察したように苦笑して言う。

『レベルアップを使った人たちって、本当に間違っていたのかな? 結局、あの人たちの気持ちに気付いてあげられなかった私たち能力者が今回の事件を招いた張本人なんじゃないかな?』…おおかた、そんなことをお考えではありませんの?」

「マ…真似しないでよ、気持ち悪い…」

「…お姉様らしい優しさですわ」

レベル5という絶対的な力を持ちながら、その力に溺れない強さを持つ少女。それ故に自分がもつとなにかできたのでは、と思ってしまう。

あまりに優しい、憧れのお姉様。

「やさしさついでに、もう一つ気付いてほしいことがありますの…」

「ん?なによ」

「そ…れ…は、黒子の愛ですの…」

言いつつ唇を奪いに来る黒子。

パシつ、と。

その口をふさぐ手はどこかビリビリしていて。

「…ありがとう黒子。アンタの相変わらずの変態っぷりを見て私もようやく調子が戻ったわ!!」

ビリビリ、といつものように黒子に電流を流す美琴。

「御坂さーん!相変わらずですね!!」

「白井さん、大丈夫ですかー?」

そのやり取りに気付き、駆け寄っていく涙子と初春。

ようやく日常がかえってきた。こう思い出させてくれるかのよう

に、いつもと変わらない夕陽が四人の姿を染めて

## 第二十六話 プールサイドのひと時

「プール行きませんか？」

「プール？」

夏休みも中盤に差し掛かろうとしていた晴れた日のこと。行きつけのファミレスで待ち合わせをしていた美琴達は、遅れてやってきた涙子を持ってきたものを眺めていた。

「これって、去年くらいにできたプールの優待券？」

「はい。なんか今、水着の試着モデルを引き受ける代わりに入園料がタダになるんですって！水泳部の友達がもらったらしいんですけど練習でいけないからってもらったんですよ！」

「水着の試着って？」

美琴が聞くと初春がパンフレットらしきものを見ながら答えた。

「水泳競技用の最新モデルから、デザイン重視のものまであって、最初に試着してモデル写真を撮ってからフリーで、最後にアンケートに答えるだけらしいです」

「写真かあ・・・」

その一言に美琴はそつと目をそらす。この手の話になると苦手だし、黒子が騒ぐからだ。

「アハハ、白井さんがいなくてよかったですね・・・」

苦笑いを浮かべながら涙子が言う。そう、黒子は固法と共に2週間前に起きたレベルアップ事件の報告をしに警備員の事務所に外向しているのだ。

「私も行くって言ったんですけど、しばらくは休暇扱いでいいって言われちゃいました。」

「でも初春さんが事件についての報告書をまとめたんでしょ？あまりに気に病まなくていいんじゃない？」

「そーそー、気に病むべきなのは私たちレベルアップ使用者の方だよ。」

そう何気なく言って涙子はコップに残っていたアイスティーを飲む。美琴はそんな涙子に言う。



「この間レベルアップ使った人たちが補習を受けたんでしょ？それでチャラだつてば。」

「御坂さん……」

「それよりも、夏休みも半分過ぎたことだし、プールに行つて息抜きするくらいいいんじゃない？」

「そうですね！どうせならみんなで行きましょう！」

初春がそう言うのと涙子がみんなと言う言葉に反応して、

「あ、じゃあ戦兎先生と万丈さんも呼びますか？」

「いいですね！保護者代わりでいてくれればなにかあつても安心ですもんね」

「いや学園都市で保護者代わりつて……」

盛り上がる二人に突つ込みながら美琴はふと気づいた。

※ そういえば事件以来あのナルシストの顔を見ていない、と。

「はあ……」

第七学区の繁華街。セブンスミストや万丈が学園都市で初めて倒したスマッシュが現れた店が立ち並ぶ一角で戦兎は溜息をついていた。

「なんだよ戦兎。溜息ばつかついていると食欲が逃げるぞ」

「それはお前だけだよ筋肉馬鹿……。逃げるのは幸せだ」

言いながら周囲の様子を見ると、街頭モニターや端末の通知欄には同じような文言が並んでいた。

【正体不明生物が発生する場合があります。最終下校時刻を過ぎたら速やかに寮に帰宅しましょう。】

【正体不明生物に対し、警備員の巡回を強化】

【謎の戦士や怪物を目撃したら警備員・風紀委員まで】

【学園都市統括理事会、原因究明のための特殊班を結成か？】  
「……最悪だ」

「滅茶苦茶騒ぎになってきてるな」

「そりやそうだろ。レベルアップ事件が解決してもスマッシュは現れてるし、警備員にも軽微だが怪我人が出てるらしいしな。……死

人が出ていないのが奇跡みたいなものだ」

言って戦兎はビルドフォンを起動しメモアプリを立ち上げる。中には現在戦兎と万丈が所持しているボトルの一覧があった。

【有機物】

ラビット、ゴリラ、タカ、ハリネズミ、ライオン、オクトパス、忍者、フェニックス、パンダ、海賊、ドラゴン、スパイダー、クマ、ウルフ、タートル

【無機物】

タンク、ダイヤモンド、ライト、ガトリング、消防車、掃除機、ロケット、コミック、電車、冷蔵庫、スマホ、ヘリコプター、お化け

【その他】

ラビットタンクスパークリング

「スマホとヘリコプター何となく勝てたけど、お化けのスマッシュは苦戦したな」

「ああ・・・まさかライトの光が弱点とはさすがに思わなかったな」

というかお化けの成分とはいったい。と思いつつも気分は晴れない。スマッシュの話が大きな問題になりつつあるのも懸念材料ではあるが、それよりも、何よりも考えるべきなのは――

「スタークか」

ぼそつと、いつになく真剣な面持ちで万丈はつぶやく。かつて旧世界で幾度も戦った相手。二人の人生を狂わせ、世界を滅ぼそうとした諸悪の根源。

「あのスタークがエボルトかは、正直今の段階では判断できない。エボルトにしては手ごたえがなかったし、そもそもフルボトルやスマッシュ・・・というかファウストの技術や知識を持っていればトランスチームシステムの復活くらいは容易だろう、この街ならな。」

「でも、もしエボルトだったら・・・」

その先の言葉は万丈に言われるまでもなく分かっていた。

「ああ・・・俺たちの新世界プランは失敗したか、完璧に成功していないってことになる」

新世界プラン。つまり元あったA世界とパンドラボックスのない

B世界の融合が失敗、もしくは未完成という可能性。

「そもそもこの世界が新世界として俺たちが創造しようとしたものなのか、またはエグゼイドの世界のようにまったく違う世界なのかも保留のままだしな。」

「よくわかんねえけど、エボルトがいるなら新世界じゃねえのか？アイツが邪魔したから超能力ってよくわかんねえものが混ざった世界になったとか」

筋肉馬鹿にしては鋭い考察だ、と感じたが戦兎は首を横に振る。

「いや、その場合俺とお前以外の旧世界の仲間がいないのはおかしい。恐らく前の世界の記憶を引き継げるのはホワイトパネルを使った俺と、あとはエボルトの遺伝子を持ったお前くらいだろうが、記憶をなくしている状態なら皆、少なくともあの時点から10年前までに生きていた人間は全員いないとおかしい」

「学園都市の外にいるんじゃないか？砂羽さんとか美空とか」

「幻さんと氷室首相の名前が政府の政治家リストに載ってないんだよ」

幻徳とその父、氷室泰山はスカイウォールの惨劇以前から日本の政治に関わっていた。新世界がスカイウォールの惨劇以降の10年間で、スカイウォールがなかった歴史に書き換えることで成立させる以上、2人の名前がないと話がつながらない。

「とにかく、確率的にはエグゼイドの世界のパターン。つまり俺たちがまだ知らない世界である可能性が高いってことだ。まああのスタークがエボルトにしろそうじゃないにしろ——」

「旧世界のことを知ってる奴に間違いない、ってことか」

「ああ。だからこそ今後はよりビルドに変身する頻度は増えていくだろうし、戦闘も増えていくと思うが・・・その矢先に街がこんな感じだからなあ・・・」

戦兎のため息の理由はまさにそこだ。つまり、スマッシュの存在だけでなく仮面ライダーの存在までもがいよいよ公になってきた以上、活動の幅は狭まる恐れがある。それだけではない、

「スタークの目的によっては、戦闘の激化もあり得る。まず思いつく

のはフルボトルか」

「でもフルボトル集めたってパンドラボックスもパネルもないなら意味ないんじゃないのか？」

「向こうが持つているかもしれないだろ。ブラッド族のことだ、パンドラパネルの作成方法とか知っててもおかしくないだろうし。」

「でもだったらなんでスタークは木山の手伝いなんかしたんだろうな？」

「そう、そこなんだ」

戦兔のため息のもう一つの原因が、それ。

スタークの行動が意味不明なのだ。

「木山の研究や行動にスタークが興味を持ったのか。あるいはただの気まぐれか……」

「……エボルトならあり得るな。気まぐれ」

「そうなんだよなあ……」

なにせ宇宙人のことである。前の世界でも「人間は面白い」という理由だけで目的だった地球破壊を止めたくらいだ。

「ま、あれこれ考えても埒があかねえだろ、飯食おうぜ飯」

「……時たまお前がうらやましくなるよ。錯覚だろうがな」

と言いつつ苦笑しているあたり、気分も少しは晴れているが。そもそも二人はただ街中をふらふらしていたわけではなく、食事を摂るために街へ繰り出していたのだ。

「しっかしいきなり工事で電気止まるとか、迷惑だよな」

「実験を兼ねた物件だからな、そのおかげで格安の家賃で住まわせてもらってるんだ。文句言うんじゃないよ」

しかも工事と言っても1日で終わる簡単なものらしい。電気が使えない⇨食事も作れない（マンションの設備はすべて電気熱ヒーターなのだ）ので、こうして外出しているということだ。

「さて、何食べるかな」

「ラーメン」

「またかよ。ラーメン以外に飯を知らねえのか」

「じゃあ肉」

「素材じゃねえかよ」

とはいえ戦兎にも取り立てて食べたいものがあるというわけではない。まあこう暑いと食欲自体が減退しているというのものもあるが。

と、その時、

「おい戦兎、電話鳴ってんぞ」

「ん？ああ・・・って佐天か。もしもし？」

『あ、先生ですか？こんにちはは、佐天ですけど』

「おお、夏休み中なのにどうした？」

『はい、これから御坂さん達とプール行くんですけど、一緒にどうですか？』

「プール？」

『はい、知り合いに無料券もらったので。園内の施設全部無料なんですよ！どうですか？』

「んー」

女子中学生とプール。その響きはまあ人によっては少しアレだが、飯とはいえ教員であり、自称正義のヒーローである戦兎にとってはただ教え子からの誘いでしかない。それを踏まえても今戦兎は食事のために出てきており、プールはその目的に適していない。ゆえに、

「あー、今ちようど飯にしようと思ってるな、悪いけどまたの機会に・・・」

『あ、ご飯なら中で食べられますよ？なんでもラーメンが人気なんですって』

「今すぐ行く!!」

言って走り出す影がいた。戦兎ではない。

そう、万丈だ。

「おい！脊髄反射で動くな馬鹿!!場所わかんないでしょうが!!おい!!」

※

学区の外れにあるプール施設は、元々海洋研究の一環で開発していた水中用のワードスーツの実験施設が元になっているらしい。そのため、学校施設のプールよりはるかに広く、後付けのレジャー設備

も充実している。

「広いな・・・」

「この規模のプールは日本でも学園都市だけらしいですね」

　　眩く戦兔の言葉に初春が補足を入れる。走り出した万丈はだれにも止められない。仕方なく戦兔は涙子からプールの場所を聞き出し、馬鹿を追いかけて走ってきたのだった。

「海中用パワードスーツって、いくらでも軍事転用がききそうなものも作ってるんだな」

「実際は海洋研究や深海探索のため、って銘打ってるけどね。それ以外に出るのはまだまだ先の話よ。」

　　と、青い水玉模様があしらわれたセパレートタイプの水着に身を包んだ美琴が言った。他初春、涙子、万丈、もちろん戦兔も水着である。「ああ、学園都市の中と外じゃ技術力に5年だか10年だかの差がある、って話か。まあ超能力なんて実際見ないと、いや、実際見てもオカルトにしか見えないからな。そんなもんをすぐさま外に流してたら混乱は避けられないだろ」

「ま、今日のこれに関して言えば形状記憶繊維とスポーツ競技用の最新素材の実証実験ってわけ。だから遊んでればいいって話らしいわ」

「それだけで食事もタダ、入場料もタダってのは気前のいい話だな」

「あ、それも実験の一環らしいですよ。流通前の保存食や宇宙食関係のメニューを提供していて、アンケートを書くらしいです。」

　　ほら、と初春が示す方見ると、確かに赤いボクサーパンツタイプの水着を纏った万丈と白いセパレートタイプの水着を着た涙子が物珍しい宇宙食メニューを見て騒いでいる。

「宇宙食ねえ・・・、栄養補給がメインのゼリーとかしかイメージないけどな」

「それかなり偏ったイメージですよ・・・。今はラーメンからカレー、サラダ、フルーツやステーキなんかも持ち込めるらしいですよ」

「すげえな科学。」

　　言いつつ戦兔はぼーっと目の前に広がる平和な光景を眺める。

　　楽しそうに遊ぶ学生達、超能力を持つていはいえ、年相応の少

年少女たちは傍から見たらそんなことはわからないくらいの平和な日常。

「プールは好きじゃなかったですか？」

ふと横を見ると一通り泳いできたのか、涙子がラッシュガードを着て隣に座っていた。

「いや、プールで遊ぶって感覚がイマイチわからなくてな。記憶にないというか……」

葛城巧だった頃の記憶の中にはプールで楽しく遊ぶ、というものは存在しなかった。まああいつはそういうキャラじゃないよな、なんて思っている。

「ありがとうございます。ほんとうに」

「なにがだ？」

「レベルアップのことですよ。御坂さんと一緒に解決してくれたんですよね。初春から聞きました」

「ああ……別に俺がやったことじゃない。白井も万丈も初春も黄泉川さんたちもいたから防げたんだよ」

「それはもちろんわかってます。でも、あの時先生と御坂さんの声が聞こえた気がするんです。力強くて、でも優しくして」

『諦めないことを知っているなら、勝利の法則は決まってるんだろ』

「私は、能力への憧れが捨てられないのはよくないことだと思ってました。どこかで手放さないと。レベル0はレベル0の分相応があるんだ、って。」

苦笑しながら涙子は言う。

「でも先生はそれを『諦めない』って言うてくれて、どこか救われた気がしたんです。頑張っつていいんだって。私、この間の補習で特別カリキュラム最後までできたんですよ。いつもなら言い訳付けて適当にやってたのに。」

まあ結果は相変わらずレベル0ですけどね、と笑う。

「それは多分、御坂さんがもう一度って言うてくれて、先生が諦めないことを知っている、って言うてくれたからだと思うんです。」

だからありがとうございます、と涙子は言った。

「前にも言ったろ、それは元々佐天が持ってたものだって。ただまあ、俺だけじゃない。御坂や白井や初春の言葉が、今のお前を創ってる要因でもある。そういう意味じゃあつてるかもな」

そう。それは戦兔自身もかつて経験したことだ。

『筋肉馬鹿に言われたあの言葉が、今の俺を創った』

『あいつだけじゃない。みんなの想いを受けて、俺は『桐生戦兔』として正義のためにライダーシステムを使ってきたんだ』

「そうだよな…」

「はい？」

謎の呟きに涙子は困惑するが戦兔の顔は先ほどより晴れやかだ。

正義のため、愛と平和のために。

それが桐生戦兔の、仮面ライダービルドの掲げる理由。それはスタークが現れても学園都市の警戒が強まっても変わらない。

そして、それを教えてくれた仲間たちが笑える世界を創る。それが戦兔の、いや、戦兔だけではない、命を賭して闘ったみんなの願い。

「ありがとな佐天。忘れるところだったわ」

「え？ えーっと、どういたしまして？」

なんのことかわからないといった顔の涙子を尻目に戦兔は今一度、戦う理由を胸に刻むのだった。

※

「いやー、楽しかったなプール!!ラーメンも美味かったし!!」

「ですねえ。夏らしいことができてよかったです!」

夕焼けが辺りをオレンジ色に染め上げる頃、戦兔達は帰路についていた。

「流れるプールの勢いが強すぎて初春が本当に流されそうだったしね」

「だ、だって本当に流れが速かったですし、そうじゃなくても足がぎりぎりつかなくて怖かったんですから」

「ちよっと深かったよね、あのプール。まあ元が軍事実験用って考えたら妥当なんだろうけど」

笑う涙子に美琴が言う。



「波のプールもサーフィンができるくらいのビックウエーブが来てたもんな。まあ水着に安全対策が施されていたんだし、その辺はさすが学園都市って感じだな。」

水泳後特有の心地よい疲労感が眠気を誘うが、同時に空腹も訴えている。美琴達はもうすぐ完全下校時刻なので寮に向かうが、戦兎達はまだ工事が済んでいないため帰れない。

「とりあえず近くのファミレスで飯食いつつ待機だな。行くぞ万丈」

「おう。またなお前ら」

「はい、また誘いますねー」

言って二人はファミレスがあるモノレール駅の方へ歩き出す。が、ヒュン

と聞き覚えのある音と共に聞き覚えのある声が背後から。

「お二人とも：随分楽しそうですわね：」

静かな怒気を孕んだ声に戦兎は恐る恐る振り向くと、そこには目からハイライトを消した白井黒子が仁王立ちしていた。

「お、赤井、そういうえばお前今日いなかったな」

「おい馬鹿!!どう考えても火に油だろそれ!」

「・・・お姉様とお出かけだけでも御法度ですのに、あまつさえプール。。。わたくしですらまだご一緒したことはありませんのにな」

心なしか空気が揺れる。歴戦の猛者に勝るとも劣らないオーラにさすがの万丈も只事じゃない様子を察したのか、冷や汗を浮かべている。

「お、落ち着けよ白井。今日はたまたまだって。なんなら明日にでもでかければ・・・」

「問答無用、ですの」

ドス！ドス！ドス！

と二人の足元には見慣れた鉄製ピックが撃ち込まれていた。

「ちよっ!!御坂!!佐天!!初春!!何とかしてくー」

と美琴達の方を向くと三人は夕陽に向かって駆けて、もとい全力で逃げていた。

「二お前らああああ!!」

夕日に染まる学園都市に、  
2人の大人の叫び声がかきました。